

京都府遺跡調査概報

第119冊

1. 宮津城跡第12次
2. 田辺城跡第26次
3. 園部城跡第5・6・7次
4. 案察使遺跡第7次
5. 諸畑遺跡第4次
6. 長岡京跡右京第863次・開田遺跡・神足遺跡
7. 史跡名勝笠置山

2006

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

序

京都府埋蔵文化財調査研究センターでは、京都府内の公共事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査を行ってまいりました。この間、当センターの業務の遂行にあたりましては、皆様方のご協力を賜り、厚く御礼申し上げます。

本書は、『京都府遺跡調査概報』として、平成15～17年度に実施した発掘調査のうち、京都府教育委員会、京都府土木建築部、京都府南丹土地改良事務所、舞鶴市、笠置町の依頼を受けて行った、宮津城跡第12次、田辺城跡第26次、園部城跡第5・6・7次、案察使遺跡第7次、諸畑遺跡第4次、長岡京跡右京第863次・開田遺跡・神足遺跡、史跡名勝笠置山に関する発掘調査概要を収めたものであります。本書が学術研究の資料として、また、地域の埋蔵文化財への関心と理解を深める上で、御活用いただければ幸いです。

おわりに、発掘調査を依頼された各機関をはじめ、宮津市教育委員会、舞鶴市教育委員会、南丹市教育委員会、亀岡市教育委員会、長岡京市教育委員会、笠置町教育委員会、(財)長岡京市埋蔵文化財センターなどの各関係諸機関、ならびに調査に参加、協力いただきました多くの方々に厚く御礼申し上げます。

平成18年3月

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター
理事長 上田正昭

凡 例

1. 本書に収めた概要は、下記のとおりである。

1. 宮津城跡第12次
2. 田辺城跡第26次
3. 園部城跡第5・6・7次
4. 案察使遺跡第7次
5. 諸畑遺跡第4次
6. 長岡京跡右京第863次・開田遺跡・神足遺跡
7. 史跡名勝笠置山

2. 遺跡の所在地、調査期間、経費負担者および概要の執筆者は下表のとおりである。

遺跡名	所在地	調査期間	経費負担者	執筆者
1. 宮津城跡第12次	宮津市字鶴賀・馬場先	平17. 7. 5～8. 30	京都府土木建築部	石尾政信
2. 田辺城跡第26次	舞鶴市南田辺字表町	平17. 9. 12～12. 22	舞鶴市	田代 弘
3. 園部城跡第5・6・7次	南丹市園部町小桜	平16. 1. 21～2. 25 平16. 10. 13～11. 29 平17. 6. 27～8. 27	京都府教育委員会	中川和哉
4. 案察使遺跡第7次	亀岡市保津町出井ほか	平17. 10. 18～11. 25 平18. 1. 19～2. 6	京都府土木建築部	中川和哉
5. 諸畑遺跡第4次	南丹市八木町諸畑松本	平17. 5. 13～9. 5	京都府南丹土地改良事務所	福島孝行
6. 長岡京跡右京第863次・開田遺跡・神足遺跡	長岡京市開田2丁目	平17. 11. 6～12. 22	京都府土木建築部	戸原和人
7. 史跡名勝笠置山	相楽郡笠置町笠置字水晶谷・神宮山ほか	平17. 10. 17～平18. 1. 20	笠置町	伊野近富

3. 本書で使用している座標は、世界測地系国土座標第6座標系によっており、方位は座標の北をさす。また、国土地理院発行地形図の方位は経度の真北をさす。

4. 本書の編集は、調査第1課資料係が当たった。なお、遺物の写真撮影は、同資料係主任調査員田中彰が行った。

本文目次

1. 宮津城跡第12次発掘調査概要-----	1
2. 田辺城跡第26次発掘調査概要-----	9
3. 園部城跡第5・6・7次発掘調査概要-----	21
4. 案察使遺跡第7次発掘調査概要-----	41
5. 諸畑遺跡第4次発掘調査概要-----	47
6. 長岡京跡右京第863次・開田遺跡・神足遺跡発掘調査概要-----	85
7. 史跡名勝笠置山発掘調査概要-----	95

付表目次

5. 諸畑遺跡第4次	
付表 南丹波古墳時代竈集成-----	80

挿図目次

1. 宮津城跡第12次	
第1図 調査地位置図および周辺遺跡分布図-----	1
第2図 調査地トレンチ配置図-----	2
第3図 1トレンチ平面図-----	3
第4図 土坑S K01・02実測図-----	4
第5図 1トレンチ遺物出土状況-----	4
第6図 2トレンチ平面図-----	4
第7図 土坑S K03実測図-----	5
第8図 3トレンチ実測図-----	5
第9図 調査トレンチ土層断面図-----	6

第10図	出土遺物実測図	7
第11図	出土銭貨拓影	7
第12図	弘化二年宮津城下絵図	8

2. 田辺城跡第26次

第13図	田辺城と周辺の遺跡	9
第14図	調査地位置図(左)および牧野期の田辺城	10
第15図	トレンチ配置図	11
第16図	第1トレンチ検出遺構平面図	12
第17図	第2トレンチ検出遺構平面図	13
第18図	第3トレンチ検出遺構平面図	14
第19図	第1トレンチ検出遺構実測図(1)	15
第20図	第1トレンチ検出遺構実測図(2)	15
第21図	第2トレンチ検出遺構実測図	16
第22図	各2トレンチ土層断面模式図	16
第23図	出土遺物実測図(1)	18
第24図	出土遺物実測図(2)	19

3. 園部城跡第5・6・7次

第25図	調査地位置図	21
第26図	本丸部分調査トレンチ配置図	22
第27図	第7次調査地断ち割り土層断面図	22
第28図	第5～7次調査検出遺構平面図	23
第29図	第5・6次調査検出遺構平面・断面図	24
第30図	第6次調査検出遺構平面・断面図	25
第31図	第7次調査検出遺構平面・断面図(1)	26
第32図	第7次調査検出遺構平面・断面図(2)	27
第33図	第7次調査検出遺構平面・断面図(3)	28
第34図	第5次調査出土遺物	29
第35図	第6次調査出土遺物実測図(1)	30
第36図	第6次調査出土遺物実測図(2)	31
第37図	第6次調査出土遺物実測図(3)	32
第38図	第6次調査出土遺物実測図(4)	33
第39図	第7次調査土坑状遺構 S X 701出土遺物実測図(1)	34
第40図	第7次調査土坑状遺構 S X 701出土遺物実測図(2)	35
第41図	第7次調査土坑状遺構 S X 701出土遺物実測図(3)	36
第42図	第7次調査土坑状遺構 S X 701出土瓦実測図	37

第43図	第7次調査出土土器実測図-----	37
第44図	石製品・金属器・ガラス製品実測図-----	38
第45図	出土銭貨拓影-----	39
4. 案察使遺跡第7次		
第46図	調査地位置図-----	41
第47図	案察使遺跡第6・7次トレンチ配置図-----	42
第48図	調査地土層図-----	43
第49図	調査トレンチ平面実測図-----	44
第50図	掘立柱建物跡S B 03実測図-----	45
第51図	出土遺物実測図-----	46
5. 諸畑遺跡第4次		
第52図	調査地および周辺遺跡分布図-----	47
第53図	トレンチ配置図-----	48
第54図	第1遺構面遺構配置図-----	49
第55図	各トレンチ南壁土層断面図-----	50
第56図	S H01-a 平面・断面図-----	51
第57図	S H01-a 炭化材・焼土・遺物出土状況図-----	52
第58図	S H01-a 竈平面・断面・立面図-----	53
第59図	S H01-b 平面図-----	54
第60図	S H02-a 平面・断面図-----	55
第61図	S H02-a 竈平面・断面図-----	56
第62図	S H02-b 平面図および勾玉出土状況図-----	57
第63図	S H03平面・断面図-----	58
第64図	S H04平面・断面図-----	59
第65図	S H05-a・06平面・断面図-----	60
第66図	S H05-b 平面・断面図-----	61
第67図	S H07-a 平面図-----	62
第68図	S H07-b 平面・断面図-----	63
第69図	S H08平面・断面図-----	64
第70図	S H09-a・b 平面・断面図-----	65
第71図	S H09遺物出土状況図-----	66
第72図	第2遺構面遺構配置図-----	67
第73図	A-6 トレンチ第2遺構面各遺構平面・断面図-----	68
第74図	A-7 トレンチ第2遺構面各遺構平面・断面図-----	69
第75図	出土遺物実測図(1)-----	71

第76図	出土遺物実測図(2)	72
第77図	出土遺物実測図(3)	73
第78図	出土遺物実測図(4)	74
第79図	諸畑遺跡胎土分析三角ダイアグラム	77
6. 長岡京跡右京第863次・開田遺跡・神足遺跡		
第80図	調査地位置図	85
第81図	周辺調査状況図	86
第82図	調査地周辺検出遺構図	87
第83図	調査地平面図	88
第84図	調査地断面図	89
第85図	検出遺構平面図	90
第86図	遺物出土状況図	91
第87図	出土遺物実測図	92
7. 史跡名勝笠置山		
第88図	調査地位置図	95
第89図	笠置城縄張り図	96
第90図	トレンチ配置図	97
第91図	第1～6トレンチ平面図	98
第92図	第7～15トレンチ平面図	100
第93図	各トレンチ土層断面図	101
第94図	出土遺物実測図	103

図 版 目 次

1. 宮津城跡第12次

図版第1	(1) 1トレンチ配置図(東から)	(2) 1トレンチ全景(南から)
	(3) 1トレンチ南壁断面(北から)	
図版第2	(1) 1トレンチ北部遺物出土状況(東から)	
	(2) 1トレンチ土坑S K01(東から)	
	(3) 1トレンチ東壁断面(西から)	
図版第3	(1) 1・2トレンチ近景(南東から)	(2) 2トレンチ全景(南から)
	(3) 2トレンチ土坑S K03検出状況(南から)	

図版第4 (1) 2 トレンチ土坑 S K03(南から) (2) 2 トレンチ北壁断面(南から)
(3) 2 トレンチ西壁断面(東から)

図版第5 (1) 3 トレンチ調査前(南から) (2) 3 トレンチ全景(北から)
(3) 3 トレンチ東壁断面(西から)

図版第6 出土遺物

2. 田辺城跡第26次

図版第7 (1) 調査地遠景(南東から) (2) 調査地全景(右が北)

図版第8 (1) 第1 トレンチ全景(南から) (2) 第1 トレンチ全景(上が南)
(3) 第2 トレンチ全景(東から) (4) 第2 トレンチ全景(上が東)
(5) 第3 トレンチ全景(南から) (6) 第3 トレンチ全景(上が北)

図版第9 (1) 第1 トレンチ遺構検出状況(南東から)
(2) 第1 トレンチ遺構検出状況(北から)
(3) 第1 トレンチ遺構検出状況(南東から)

図版第10 (1) 第1 トレンチ S D03木組遺構検出状況(南東から)
(2) 第1 トレンチ S D03木組遺構検出状況(東から)
(3) 第1 トレンチ石組遺構 S X01検出状況(北から)

図版第11 (1) 第1 トレンチ石組遺構 S X02検出状況(北東から)
(2) 第1 トレンチ石組遺構 S X02と周辺遺構検出状況(東から)
(3) 第1 トレンチ石組遺構 S X02と周辺遺構検出状況(南から)

図版第12 (1) 第1 トレンチ礎石検出状況1(上が西)
(2) 第1 トレンチ礎石検出状況2(上が東)
(3) 第1 トレンチ礎石検出状況3(上が西)

図版第13 (1) 第2 トレンチ全景(西から) (2) 第2 トレンチ全景(東から)
(3) 第2 トレンチ調査風景(北西から)

図版第14 (1) 第2 トレンチ石組遺構 S X13検出状況(北東から)
(2) 第2 トレンチ溝 S D04検出状況(東から)
(3) 第2 トレンチ礎石検出状況(西から)

図版第15 (1) 第2 トレンチ桶底板検出状況(上が北)
(2) 第2 トレンチ土坑 S K09(南西から)
(3) 第2 トレンチ礎石検出状況(上が東)

図版第16 (1) 第3 トレンチ全景(南から) (2) 第3 トレンチ全景(北から)
(3) 第3 トレンチ土坑 S K09桶底板検出状況(上が西)

図版第17 (1) 第3 トレンチ杭検出状況(南東から)
(2) 第3 トレンチ土坑 S K05検出状況(上が北)
(3) 第3 トレンチ西壁断面(東から)

- 図版第18 (1)第1トレンチ掘削風景(西から) (2)第3トレンチ掘削風景(西から)
(3)遺物整理風景
- 図版第19 出土遺物(1)
- 図版第20 出土遺物(2)
- 図版第21 出土遺物(3)
- 図版第22 出土遺物(4)

3. 園部城跡第5・6・7次

- 図版第23 (1)園部城現存建物(南から) (2)第5次調査トレンチ(南から)
(3)第5次調査(北東から)
- 図版第24 (1)第5次調査トレンチ全景(上が南) (2)第5次調査トレンチ全景(北東から)
(3)土坑S K 501(北から)
- 図版第25 (1)土坑S K 517遺物出土状況(東から)
(2)土坑S K 512(西から)
(3)第6次調査トレンチ全景(北東から)
- 図版第26 (1)第6次調査トレンチ全景(上が北) (2)土坑S K 601(東から)
(3)土坑S K 602(東から)
- 図版第27 (1)土坑S K 605(東から) (2)土坑S K 612遺物出土状況(北から)
(3)第7次調査トレンチ全景(南から)
- 図版第28 (1)第7次調査全景(上が北) (2)土坑状遺構S X 701石組(東から)
(3)土坑状遺構S X 701(東から)
- 図版第29 (1)土坑状遺構S X 701(北から) (2)土坑状遺構S X 702(北から)
(3)土坑S K 734(南から)
- 図版第30 (1)第7次調査深堀トレンチ(南から) (2)第6次調査出土遺物
- 図版第31 (1)第5次調査出土遺物 (2)第5次調査出土土師皿
- 図版第32 (1)第6次調査出土陶磁器(1)(上面) (2)第6次調査出土陶磁器(2)(下面)
- 図版第33 (1)第6次調査出土陶磁器(3) (2)土坑状遺構S X 701出土土師皿
- 図版第34 (1)土坑状遺構S X 701出土陶磁器(1)(上面)
(2)土坑状遺構S X 701出土陶磁器(2)(下面)
- 図版第35 (1)土坑状遺構S X 701出土陶磁器(3) (2)第6・7次調査出土陶磁器
- 図版第36 (1)土坑状遺構S X 701出土瓦 (2)第5～7次調査出土遺物

4. 案察使遺跡第7次

- 図版第37 (1)調査トレンチ遠景(南から) (2)調査トレンチ全景(北西から)
- 図版第38 (1)調査トレンチ断面(西から) (2)調査トレンチ(南東から)
- 図版第39 (1)調査トレンチ(北西から) (2)掘立柱建物跡S B 03全景(南東から)
- 図版第40 (1)溝状遺構S X 01(南東から) (2)溝状遺構S X 01断面(南西から)

- 図版第41 (1) 試掘調査地(西から) (2) 試掘トレンチ(東から)
- 図版第42 (1) 発掘調査風景(南から) (2) 出土遺物

5. 諸畑遺跡第4次

- 図版第43 (1) 諸畑遺跡空中写真(北から) (2) 諸畑遺跡空中写真(東から)
(3) A-6 トレンチ全景(東から)
- 図版第44 (1) 竪穴式住居跡 S H01-a 炭化材出土状況(南東から)
(2) 高杯内焼土出土状況(東から) (3) 初期須恵器出土状況(北東から)
- 図版第45 (1) 竪穴式住居跡 S H01-a 土器 8 出土状況(北から)
(2) 竪穴式住居跡 S H01-a 完掘状況(南東から)
(3) 竪穴式住居跡 S H01-a 簀の子痕跡(南東から)
- 図版第46 (1) 竪穴式住居跡 S H01-a 竈(南東から)
(2) 竪穴式住居跡 S H01-b 初期須恵器出土状況(東から)
(3) 竪穴式住居跡 S H02-a 完掘状況(北東から)
- 図版第47 (1) 竪穴式住居跡 S H02-a 竈(東から)
(2) 竪穴式住居跡 S H02-b 完掘状況(南から)
(3) 竪穴式住居跡 S H02-b 勾玉出土状況(南から)
- 図版第48 (1) 竪穴式住居跡 S H03完掘状況(南から)
(2) 竪穴式住居跡 S H04完掘状況(西から)
(3) A-7 トレンチ全景(東から)
- 図版第49 (1) 竪穴式住居跡 S H05-a・S H06完掘状況(西から)
(2) 竪穴式住居跡 S H05-a 鉢出土状況(南から)
(3) 竪穴式住居跡 S H05-b 板状チャート出土状況(西から)
- 図版第50 (1) 竪穴式住居跡 S H07-b 完掘状況(南から)
(2) 竪穴式住居跡 S H07-b 弥生土器出土状況(南から)
(3) 竪穴式住居跡 S H07-b 完掘状況(南から)
- 図版第51 (1) 竪穴式住居跡 S H08完掘状況(北から)
(2) 竪穴式住居跡 S H09-b 遺物出土状況(北西から)
(3) 竪穴式住居跡 S H09-a・b 完掘状況(北東から)
- 図版第52 (1) 竪穴式住居跡 S H01-b 南半遺物出土状況(南東から)
(2) 土坑 S K08完掘状況(北から) (3) 土坑 S K09完掘状況(北から)
- 図版第53 (1) 竪穴式住居跡 S H01-a 出土土器 (2) 竪穴式住居跡 S H02出土土器
- 図版第54 (1) 竪穴式住居跡 S H05-a 出土土器 (2) 竪穴式住居跡 S H07-b 出土土器
- 図版第55 (1) 竪穴式住居跡 S H09: 2・3層出土土器
(2) 竪穴式住居跡 S H09: 1層出土土器
- 図版第56 出土遺物

図版第57 竪穴式住居跡 S H01出土遺物

図版第58 (1) 第3次 S H03ap08、310顕微鏡写真

(2) 第3次 S H03粘土塊、315顕微鏡写真

(3) 第3次 S H03粘土塊、315、650℃ 1時間焼成資料顕微鏡写真

6. 長岡京跡右京第863次・開田遺跡・神足遺跡

図版第59 (1) フェンス工事(北から) (2) 重機掘削(南から)

(3) 重機掘削(南から)

図版第60 (1) 調査地全景(東から) (2) 調査地全景(南から)

(3) 調査地全景(南から)

図版第61 (1) 溝 S D86303出土状況(西から) (2) 溝 S D86303出土状況(上が北)

(3) 溝 S D86303出土状況(上が北)

図版第62 (1) 調査地全景(北から) (2) P 86325(南から)

(3) P 86335(南から)

図版第63 (1) 溝 S D86302東半(東から) (2) 溝 S D86302西拡張区(東から)

(3) 溝 S D86302西拡張区(東から)

図版第64 (1) 溝 S D86301西拡張区(東から) (2) 溝 S D86301西拡張区(東から)

(3) 溝 S D86302東半(西から)

図版第65 (1) 調査地全景(南から) (2) 溝 S D86303(西から)

(3) 溝 S D86303出土状況(西から)

図版第66 (1) 溝 S D86303西拡張区(北から) (2) 溝 S D86303西拡張区(西から)

(3) 溝 S D86303西拡張区(東から)

図版第67 (1) 溝 S D86303西拡張区(西から) (2) 出土遺物(1)

図版第68 (1) 出土遺物(2) (2) 出土遺物(3)

7. 史跡名勝笠置山

図版第69 (1) 調査地遠景(南から) (2) 第1トレンチ全景(北から)

(3) 第2・3トレンチ全景(上が北)

図版第70 (1) 第2・3トレンチ全景(東から) (2) 第2トレンチ土塁(北から)

(3) 第2トレンチ断ち割り(南西から)

図版第71 (1) 第3トレンチ調査前風景(南東から)

(2) 第3トレンチ堀土層断面(南西から)

(3) 第3トレンチ堀完掘状況(南東から)

図版第72 (1) 第4トレンチ完掘状況(南から)

(2) 第4トレンチ五輪塔(火輪)出土状況(南から)

(3) 第4トレンチ東隣五輪塔(水輪)(北から)

(4) 第4トレンチ土師器皿出土状況(東から)

- | | | |
|-------|---------------------------|------------------------|
| | (5) 第5トレンチ完掘状況(北から) | (6) 第5トレンチ集石土坑(西から) |
| | (7) 第6トレンチ焼土層(北から) | (8) 第6トレンチ敷石状遺構(北東から) |
| 図版第73 | (1) 第6トレンチ全景(東から) | (2) 第7トレンチ全景(南から) |
| | (3) 第7トレンチ土層断面(東から) | |
| 図版第74 | (1) 第8トレンチ宝篋印塔出土状況(西から) | |
| | (2) 第9トレンチ土塁検出状況(南東から) | |
| | (3) 第9トレンチ空堀検出状況(北東から) | |
| 図版第75 | (1) 第11トレンチ完掘状況(北東から) | (2) 第11トレンチ全景(北東から) |
| | (3) 第11トレンチ全景(西から) | |
| 図版第76 | (1) 第11トレンチ建物柱穴検出状況(南西から) | |
| | (2) 第11トレンチ溝検出状況(北東から) | |
| | (3) 第10トレンチ完掘状況(西から) | |
| | (4) 第12トレンチ西部完掘状況(東から) | |
| | (5) 第12トレンチ東部完掘状況(北東から) | |
| | (6) 第13トレンチ完掘状況(東から) | (7) 第13トレンチ東部完掘状況(西から) |
| | (8) 第14トレンチ完掘状況(北から) | |
| 図版第77 | (1) 第15トレンチ完掘状況(東から) | (2) 第15トレンチ柱穴検出状況(南から) |
| | (3) 第15トレンチ全景(南から) | |
| 図版第78 | (1) 出土遺物(外面) | (2) 出土遺物(内面) |

1. 宮津城跡第12次発掘調査概要

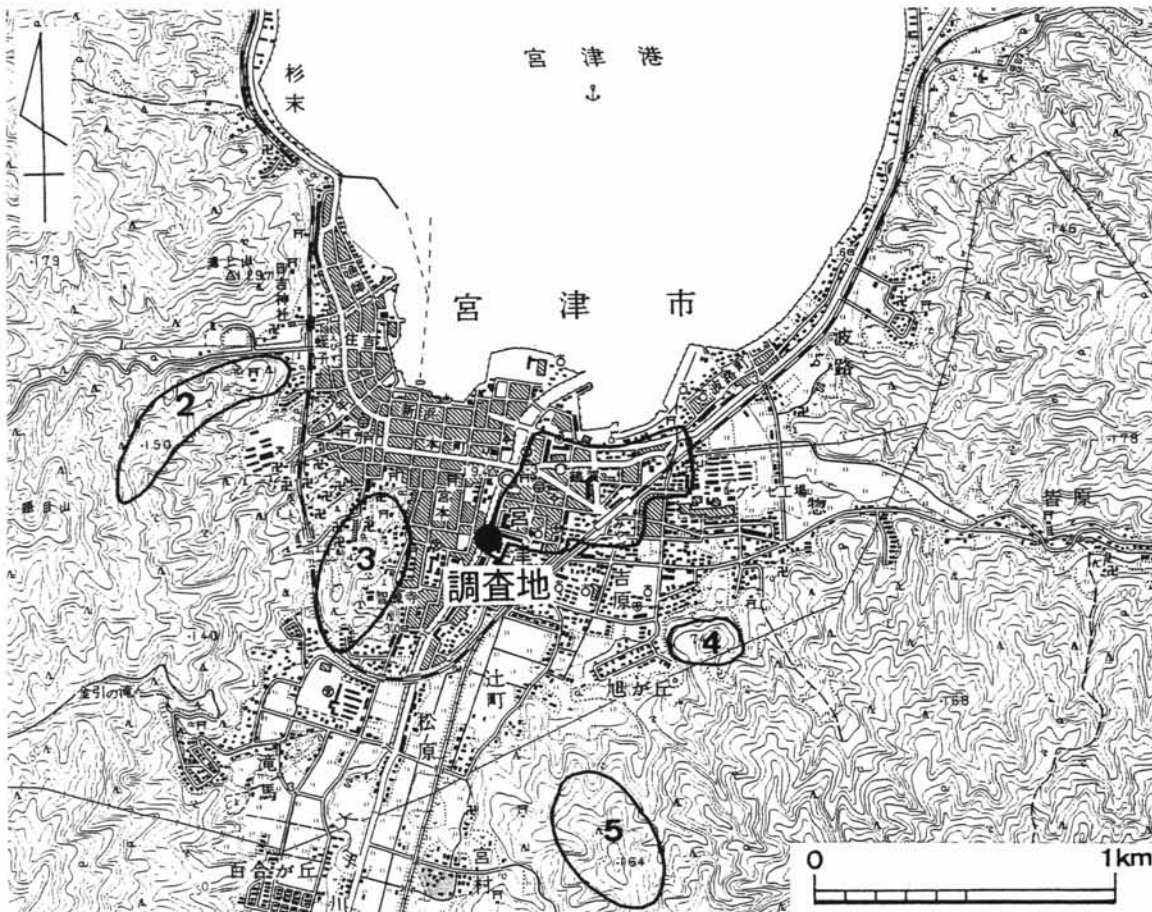
1. はじめに

この調査は、河川激甚災害対策特別緊急事業(大手川改修工事)に伴うもので、京都府土木建築部の依頼を受けて実施した。調査は、当調査研究センター調査第2課課長補佐兼調査第2係長奥村清一郎、調査第2係専門調査員石尾政信が担当した。

現地調査は平成17年7月5日に着手し、重機掘削を開始した。重機掘削の終了後に人力掘削を行い、遺構・遺物の有無を確認するとともに、基本的な層位の把握を行い、記録を作成した。現地調査は8月30日に終了した。調査面積は480㎡である。

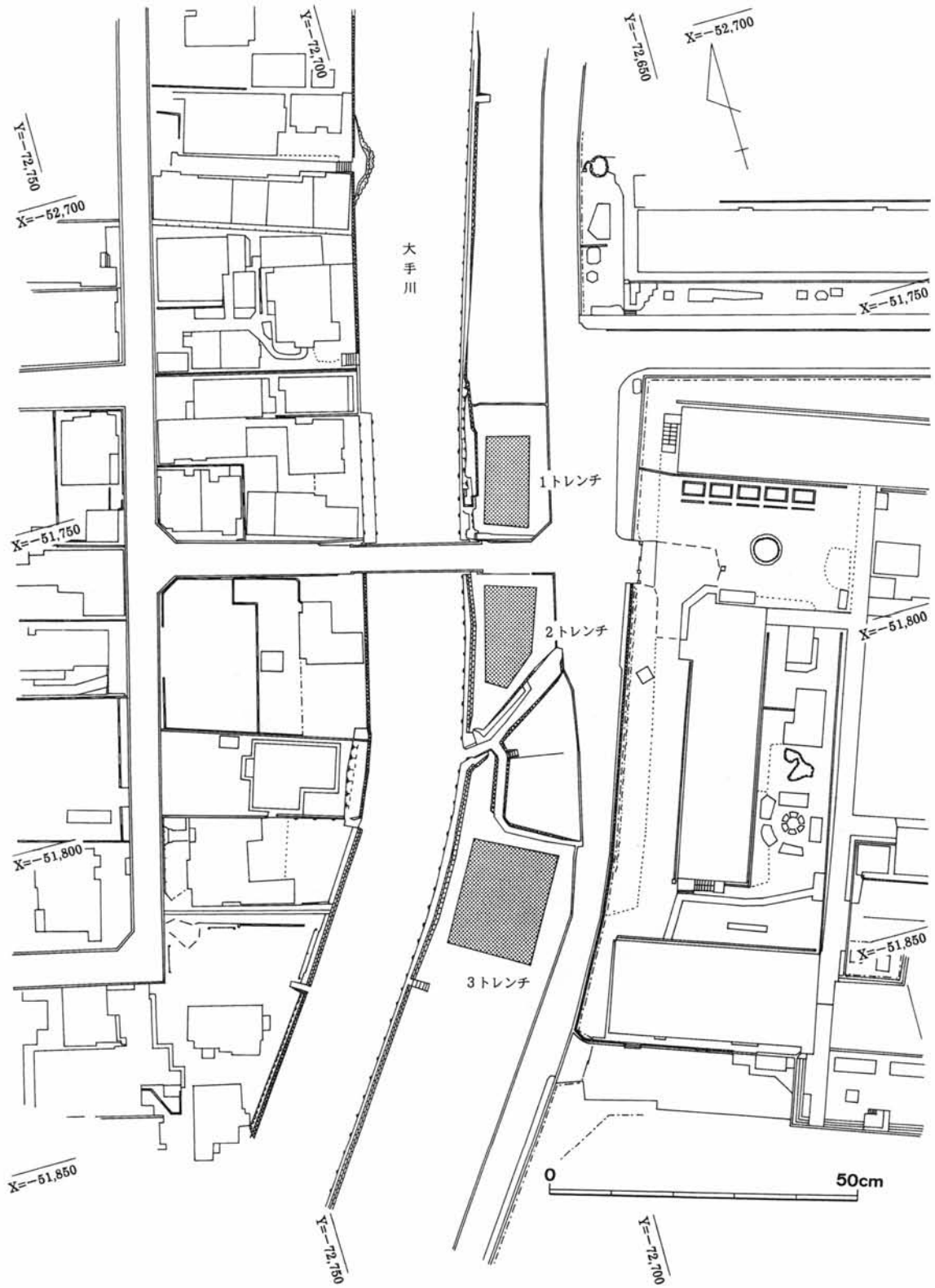
調査にあたって、関係諸機関・地元自治会・個人などの御指導・御協力があった。また、現地調査・整理作業には地元住民の方々などの参加があった。記して感謝したい。^(注1)

なお、今回の調査に係る経費は、全額、京都府土木建築部が負担した。



第1図 調査地位置図および周辺遺跡分布図(国土地理院1/25,000宮津、京都府遺跡地図を転載)

1. 宮津城跡 2. 宮津山城跡 3. 大久保山城跡 4. 惣村城跡 5. 八幡山城跡



第2図 調査地トレンチ配置図

2. 位置と環境

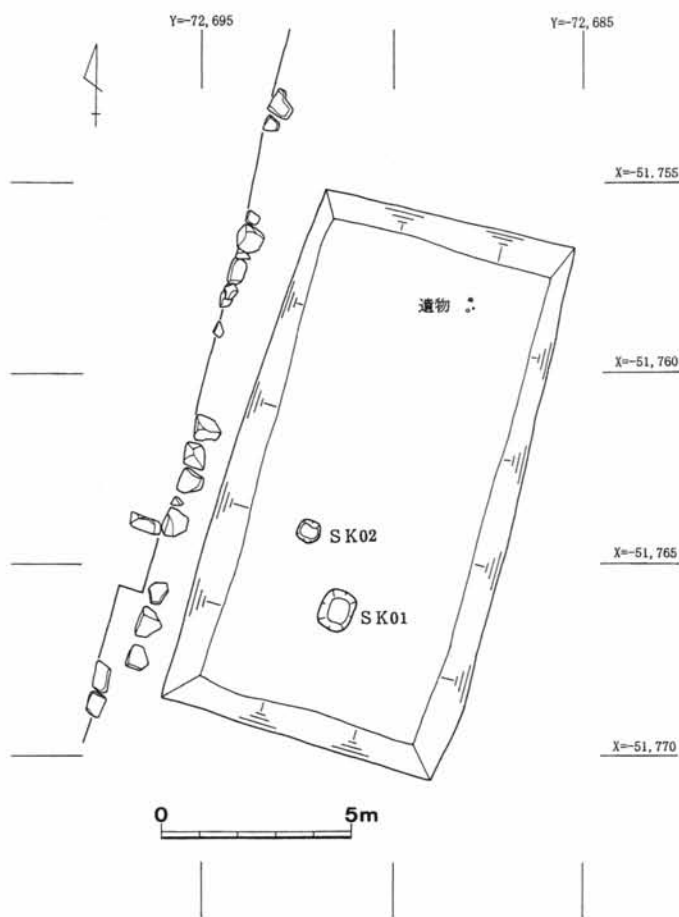
宮津城は、宮津市中心部を南から北に貫流し、宮津湾に注ぐ大手川河口部の東側、標高2m前後の低地に築かれた近世城郭である。天正8(1580)年、細川藤孝により築城されたが、慶長5(1600)年の関ヶ原合戦の際に、西軍(大坂方)の丹後攻めにあい、田辺城(舞鶴市)に籠城した藤孝が城を焼き払ったため、一旦廃城となった。その後、丹後に京極高知が入封したが、その子、京極高広により宮津城が再建されたと推定されている。現存する^(註2)絵図から、江戸時代前期(京極氏時代)から幕末(本庄氏時代)を通して、宮津城の縄張りはほとんど変化がないことが判明している。これまで、宮津城跡の調査は、宮津市教育委員会、京都府教育委員会、当調査研究センターにより計11回の調査が実施されている。今回が宮津城跡第12次調査となる。宮津城跡の周辺には、西側の丘陵に宮津山城跡(中世)・大久保山城跡が、南東の丘陵に惣村城跡(中世)・八幡山城跡がある。

3. 調査概要

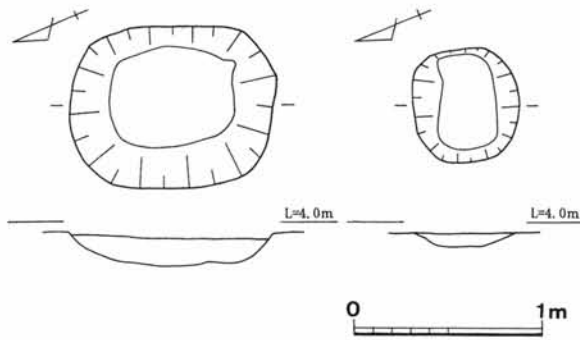
調査地点は、宮津小学校校門の西側、大手川に架かる中橋付近である。現存する絵図などによると、宮津城の中でも南西隅から御馬場に相当すると考えられる。民家跡地(1・2トレンチ)が宮津市字鶴賀で、宮津城跡に範囲に含まれる場所である。大手川に斜行する水路より南が宮津市字馬場先で、御馬場の跡と推定される(3トレンチ)。

中橋たもとの南北に2か所のトレンチ、水路の南側に1か所のトレンチを設定した。中橋の北側に設定したものが1トレンチ、南側に設定したものが2トレンチである。水路の南側のものが3トレンチである。

1トレンチの北部で約0.8mの範囲から江戸時代前期の土師皿と陶器が出土した。1トレンチ南部で円形土坑2か所を検出した。土坑SK01は0.85m×1.1mの隅丸方形で、深さ15cm前後を測る。土師器細片が出土したのみで時期のわかる遺物はなかった。土坑SK02は径約0.6mの円形で、深さ10cm前後を測り、遺物はなかった。2トレンチの北端で、隅丸方形の土坑1か所(SK03)を検出し



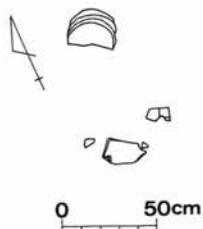
第3図 1トレンチ平面図



第4図 土坑SK01・02実測図

た。SK03は幅約1.2m、長さ1.5m以上で、深さ約10cmを測る。植物繊維質に混じり江戸時代前期の土師皿が出土した。南端の砂層上面で古銭が出土した。1・2トレンチでは、標高1~0.6m付近まで後世の客土(真砂土および混合土)があり、江戸時代の遺物包含層がほとんどみられない。また、大手川沿いに石垣が築かれており、宮津城のものと推定される矢痕が残る花崗岩があるが、

周辺にコンクリートで固定された場所が多くみられ、後世の改築と推定される。石垣の裏側の調査も、安全対策がとれないため断念した。



第5図 1トレンチ遺物出土状況

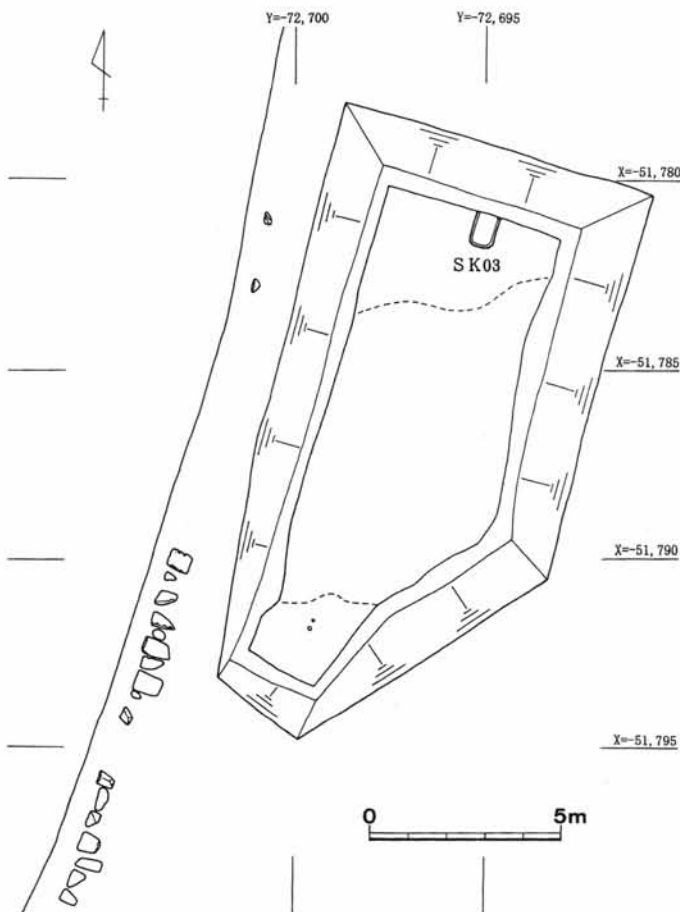
3トレンチでは、客土・砂質土などの下層に、暗灰色粘質土・濁暗灰色粘質土が堆積し、その下が砂層となる。顕著な遺構は検出していない。灰褐色砂質土・暗灰色粘質土から天目茶碗・青磁碗・播鉢・鉄砲玉・古銭などが出土した。いずれも16世紀代かそれ以前のものである。京極氏以降の時期には、生活した痕跡がほとんど認められない。

3か所のトレンチとも、大手川の水面と同等か水面より低い地点から遺物が出土した。砂層は調査地点で検出高に差異があり、湧水の激しい場所がみられた。

4. 出土遺物

今回の調査で包含層および土坑から少量の遺物が出土した。主な遺物について、以下に簡単に記述する。

1・2・4は1トレンチの遺物包含層から出土した。1はロクロ使用で底部糸切りの土師皿である。口径9.8cm、器高1.7cmを測り、胎土が良好で色調は淡灰褐色を呈す。2もロクロ使用で底部未調整の土師皿である。口径11.8cm、器高2.8cmを測り、胎土が良好で色調は淡黄褐色を呈す。口縁端部に油煙が付着するので灯明

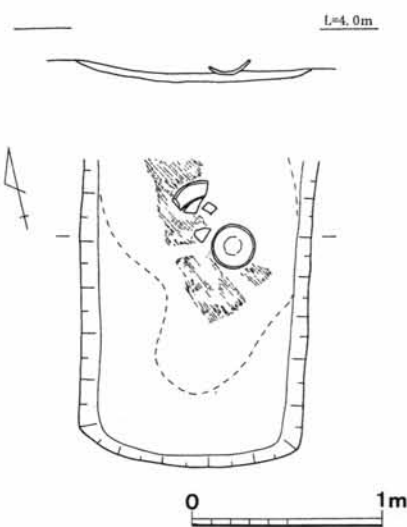


第6図 2トレンチ平面図

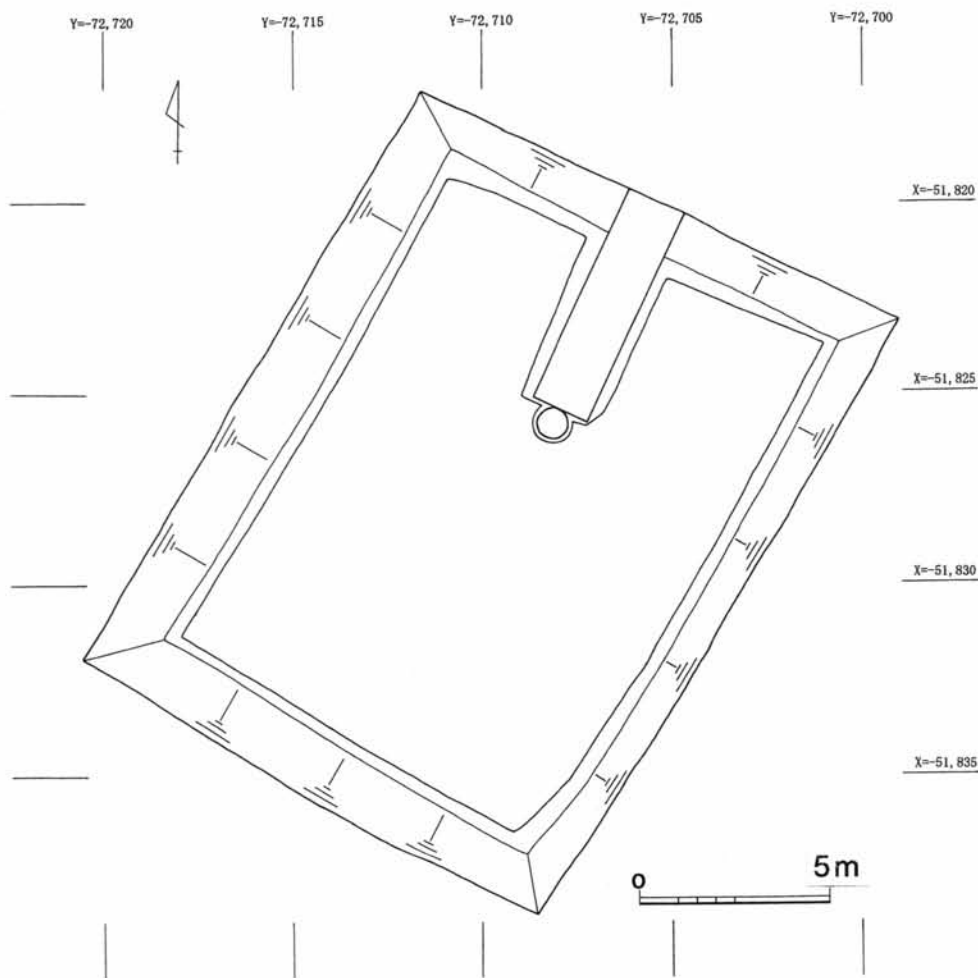
皿として使用されたと思われる。4はやや窪んだ底部から開き気味に立ち上がる口縁部をもつ土師皿である。口径9.8cm、器高1.7cmを測り、胎土が良好で色調は淡茶褐色を呈す。

3・9は1トレンチの灰褐色砂質土から検出した。3はロクロ使用で底部糸切りの土師皿である。口径13.0cm・器高2.9cmを測り、胎土が良好で色調は外面が淡灰色、断面が黒灰色を呈す。口縁端部に油煙が付着するので灯明皿として使用されたと思われる。9は体部にロクロ挽きによる凹凸が目立つ、壺または花器の体部下半部で、備前焼と推定される。

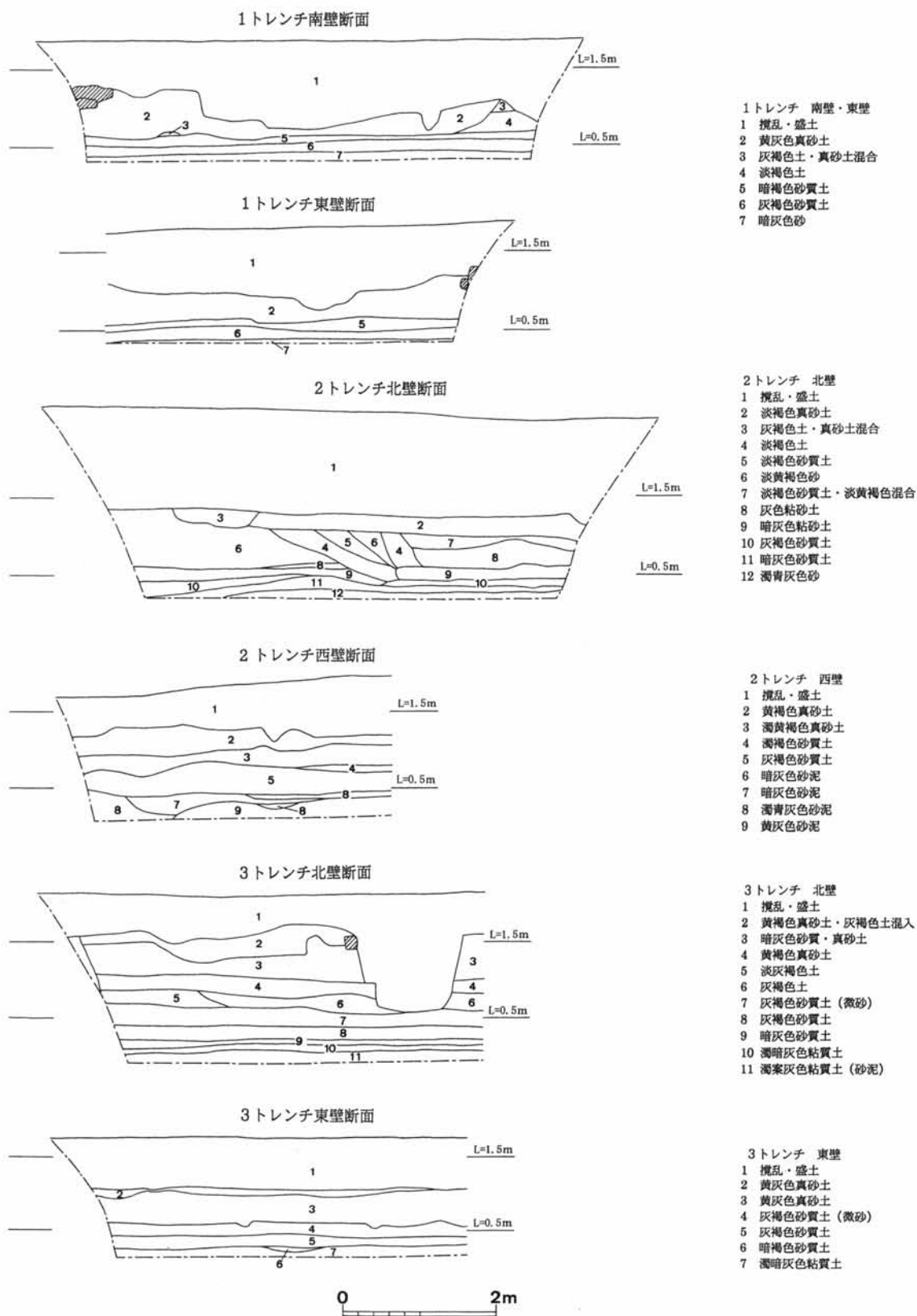
5・6は2トレンチの土坑S K03から出土した。5はロクロ使用で底部糸切りの土師皿である。口径11.0cm・器高2.8cmを測り、胎土が良好で色調は外面が淡灰褐色、断面が黒灰色を呈す。6は器壁がやや厚く底部内面と口縁部の境界がわずかに窪み、内湾ぎみに立ち上がる口縁部をもつ土師皿である。胎



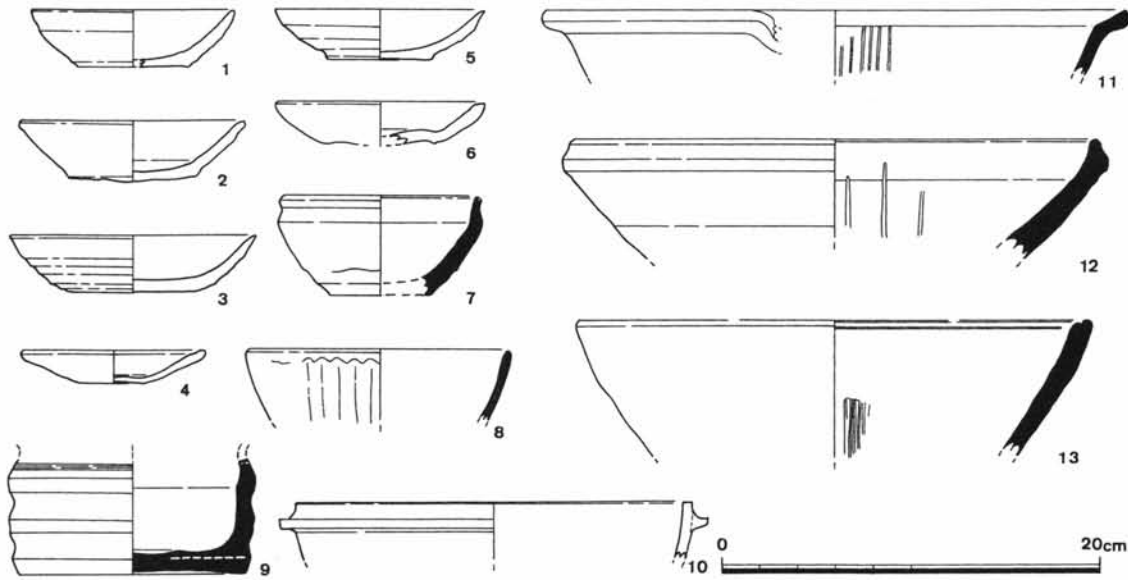
第7図 土坑S K03実測図



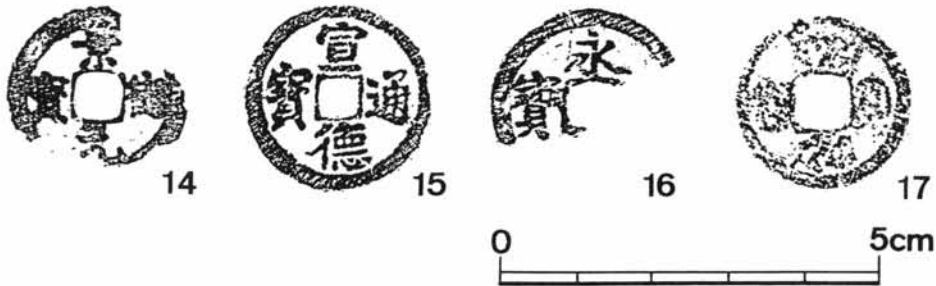
第8図 3トレンチ実測図



第9図 調査トレンチ土層断面図



第10図 出土遺物実測図



第11図 出土銭貨拓影

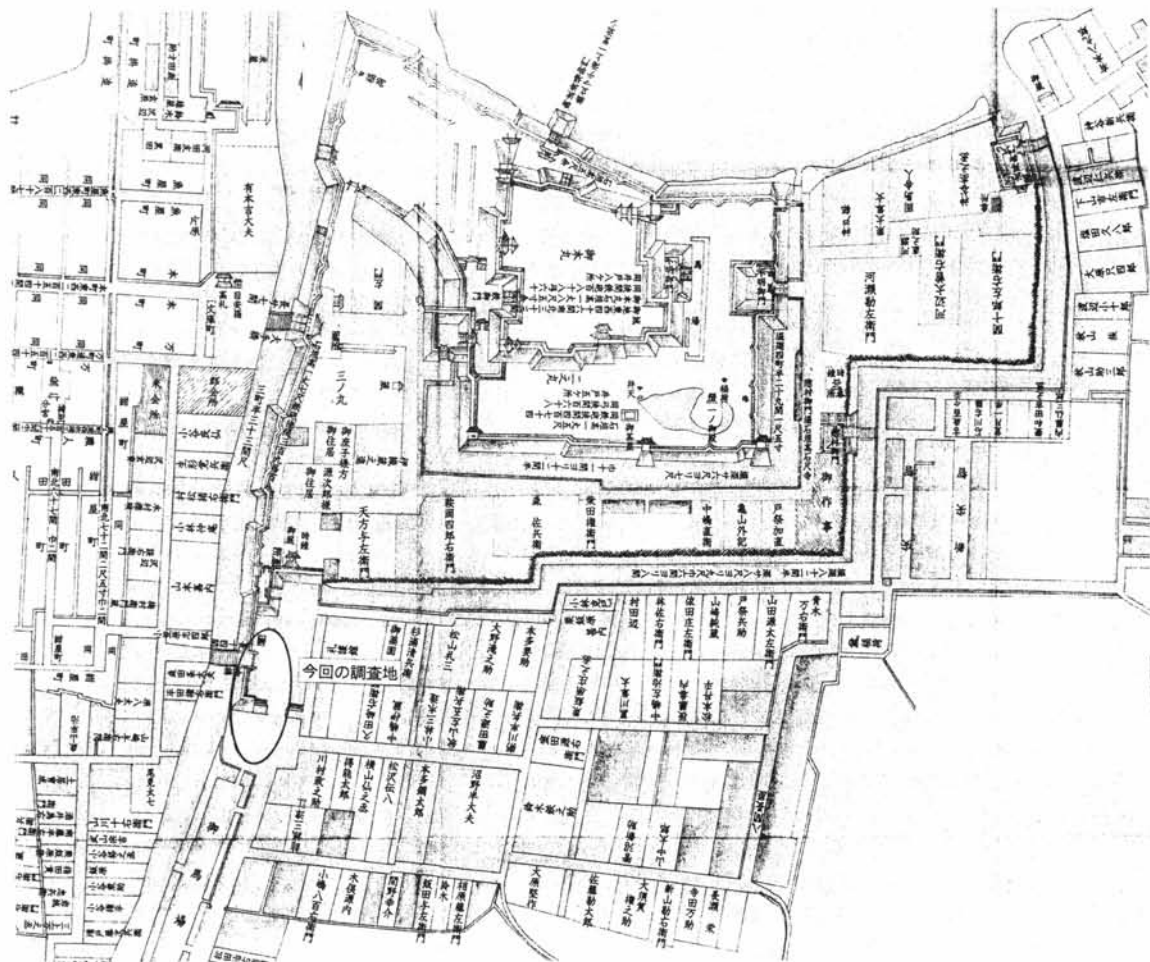
土は良好で色調は淡灰褐色を呈す。

7・8・10～13は、3トレンチの灰褐色砂質土・暗灰色粘質土などの包含層から出土した。7は天目茶碗の口縁部である。口径11.8cmを測る。口縁部に黒褐色の釉薬がかかる。瀬戸・美濃焼と思われる。8は細く退化した鍋の青磁碗である。口径14.0cmを測る。口縁部に緑灰色の釉薬がかかる。10は瓦質の羽釜である。口径20.8cmを測り、胎土が良好で色調は淡茶褐色を呈す。11は播り鉢の片口部分である。胎土に1～3mmの白色粒子を含み、色調が淡灰色を呈す。12は内面が一本引きの播鉢の口縁部である。口径27.6cmを測り、胎土に1mm前後の白色粒子を含み、色調が淡橙褐色を呈す。13は播鉢の口縁部である。口径27.2cmを測り、胎土に1mm前後の白色粒子を含み、色調が灰色を呈す。12は丹波焼、11・13は越前焼と思われる。これらの土器は、1～3・5・6が江戸時代前期(京極氏時代)のもの、4・7～13が細川氏時代のものである。

14は3トレンチから灰褐色砂質土から出土した景德元寶(1004年)である。15も3トレンチ灰褐色砂質土から出土した宣徳通寶(1443年)である。15は2トレンチ砂層上面から出土した永「楽通」寶(1408年)と推定される。16も2トレンチ砂層上面から出土した。銭文が不明である。

5. まとめ

今回調査地の北方約200mの第10・11次調査では、標高1.2～1.0mで遺構が検出されているが、



第12図 弘化二年宮津城下絵図(宮津市史史料編第三巻付図を転載・加筆)

今回調査地は上記のとおり客土され江戸時代の遺物包含層もほとんどなく、わずかに残った土坑と遺物が宮津城跡に関連するものである。現在の中橋が宮津城絵図に描かれた位置と変わらないとして、今回の調査地を弘化二(1845)年宮津城下絵図(宮津市史史料編第三巻付図)に当てはめてみた。そこには中橋北詰に番屋が描かれているが、その痕跡は見つかっていない。削られて消滅したものと思われる。3トレンチでは、細川氏以前の遺物が若干出土するが、江戸時代のものはなく生活の痕跡が乏しい。

安全上の理由から石垣の調査はできなかったが、宮津城跡の石垣(矢痕が残る石)を使用して、改築された現在の石垣の下層に宮津城跡の石垣が依存している可能性があるので、周辺での今後の調査が期待される。

(石尾政信)

注1 調査参加者は以下のとおりである(順不同・敬称略) 奥谷英夫・小田芳子・斉藤義明・島本良太・直田正美・直田加奈子・田中洋一・山本麻津子・小笠原順子・藤村文美・春日満子。また、次の関係諸機関、個人から御協力・御教示を得た。京都府文化財保護課・京都府丹後郷土資料館・宮津市教育委員会・中尾陽太郎・東高志・辰巳幸司。

注2 「弘化二年宮津城下絵図」(『宮津市史史料編第三巻 付図』 宮津市役所) 1999

2. 田辺城跡第26次発掘調査概要

1. はじめに

今回の調査は、舞鶴市教育委員会の依頼を受けて実施したものである。調査地は、舞鶴市字南田辺小字表町ほかに所在し、田辺城三ノ丸武家屋敷跡と推定される地点である。田辺城跡の調査としては26回目となる。

今回の調査は、当調査研究センター調査第2課課長補佐兼調査第2係長奥村清一郎、同調査第2係主任調査員田代弘が担当した。調査面積は600㎡である。調査期間は、平成17年9月12日～12月22日である。現地調査および発掘調査の整理報告を実施するにあたり、京都府教育委員会・舞鶴市教育委員会・舞鶴市文化財保護委員会など、多くの方々から御指導、御助言いただいた。また、現地作業・整理作業には、地元の方々を中心に参加、協力していただいた^(注1)。

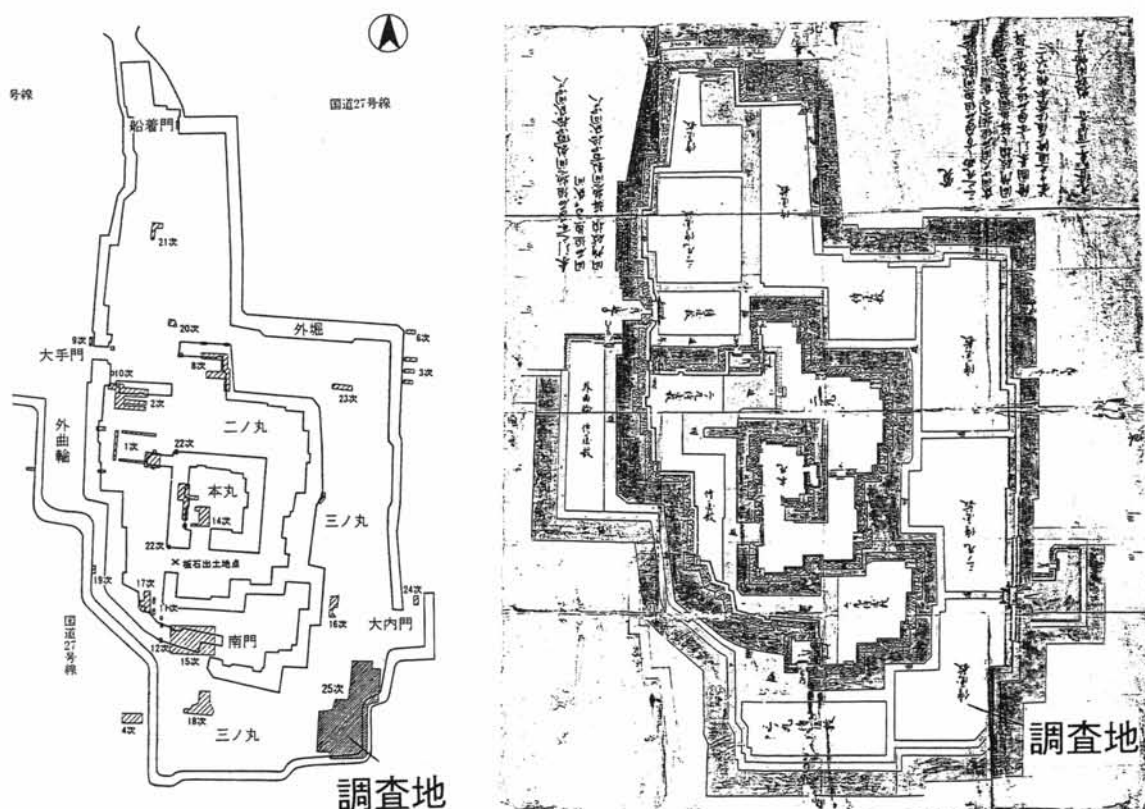
なお、調査に係わる経費は、全額、舞鶴市が負担した。



第13図 田辺城と周辺の遺跡

(京都府教育委員会『京都府遺跡地図第2版第1分冊』2001、から転載)

- | | | | | |
|------------|------------|-------------|------------|-------------|
| 151. 上安久城跡 | 150. 上安遺跡 | 155. 高迫城跡 | 144. 匂ヶ崎城跡 | 164. 田辺城跡 |
| 154. 上安城跡 | 147. 五老岳城跡 | 202. 佐武ヶ嶽城跡 | 205. 万願寺城跡 | 176. 愛宕山北城跡 |

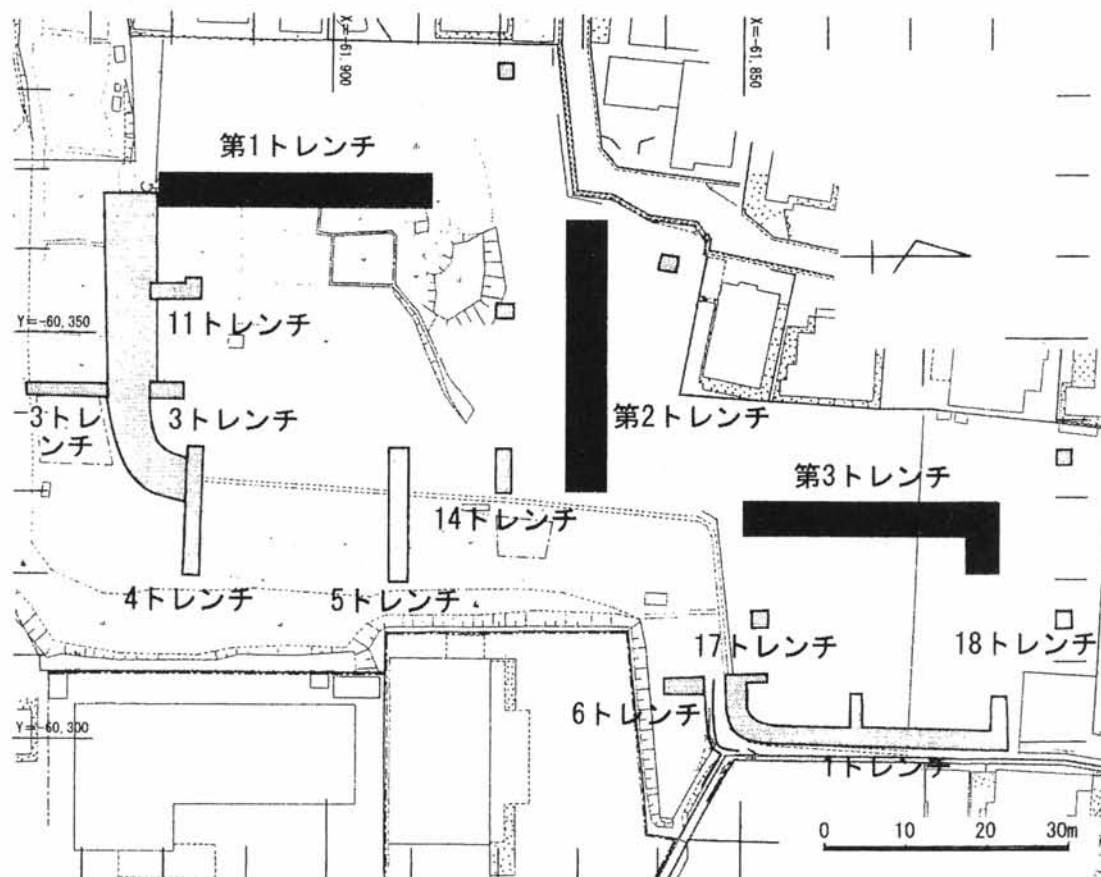


第14図 調査地位置図(左)および牧野期の田辺城(右：舞鶴市西図書館蔵)

2. 位置と環境

舞鶴市は、京都府の北東部にあり、現市域は、旧丹後国加佐郡の大半を占める。リアス式海岸の発達する若狭湾西端、丹後半島東側基部に当たる場所に位置し、日本海交通の要衝として発達した港湾都市である。明治34(1901)年海軍鎮守府が置かれ、軍港として著しい発達をみた。戦後は、貿易港として、港湾を中心とした町づくりが進められている。田辺城下として発達した西舞鶴と、近代に軍港として発達した東舞鶴の2つの市街地は、それぞれ特色ある発展をみせている。田辺城跡は、西舞鶴市街地の東を北流する伊佐津川左岸の河口部に近い沖積地に立地する。南側には天然の良港がひかえ、城下には丹後と若狭を結ぶ街道が通る交通の要衝に位置する。城跡の周辺は大半が宅地や道路となり、地上で見ることのできる遺構が少なくなってきたが、発掘調査の結果、城は南北約800m、東西約400mの広範囲範囲にわたり、この範囲には、屋敷跡や道路跡、堀跡、石垣などさまざまな遺構が予想以上に良好な状態で遺存していることがわかってきた

田辺城跡は、本丸を中心に二ノ丸、三ノ丸を設け、これらを堀で囲う輪郭式平城である。天正六年(1578年)、細川藤孝、明智光秀らは織田信長より丹後平定の命を受け、翌年、建部山城の丹後守一色義道を攻め、中山城に逃れた義道を自刃させた。細川藤孝・忠興父子は、天正7年明智光秀とともに丹後国を平定し、翌年、丹後国に入国した。入国した細川藤孝らは、まず、宮津城跡を築き、続いて田辺城を築城した。天正19(1591)年頃の築城と伝えられる。細川氏は、慶長5(1600)年、関ヶ原の戦いに東軍として参加して勝利に貢献し、終戦後、軍功として拝領した豊前国に移転した。丹後国は、慶長6(1601)年より、京極高知の領地となった。主城である宮津城跡



第15図 トレンチ配置図

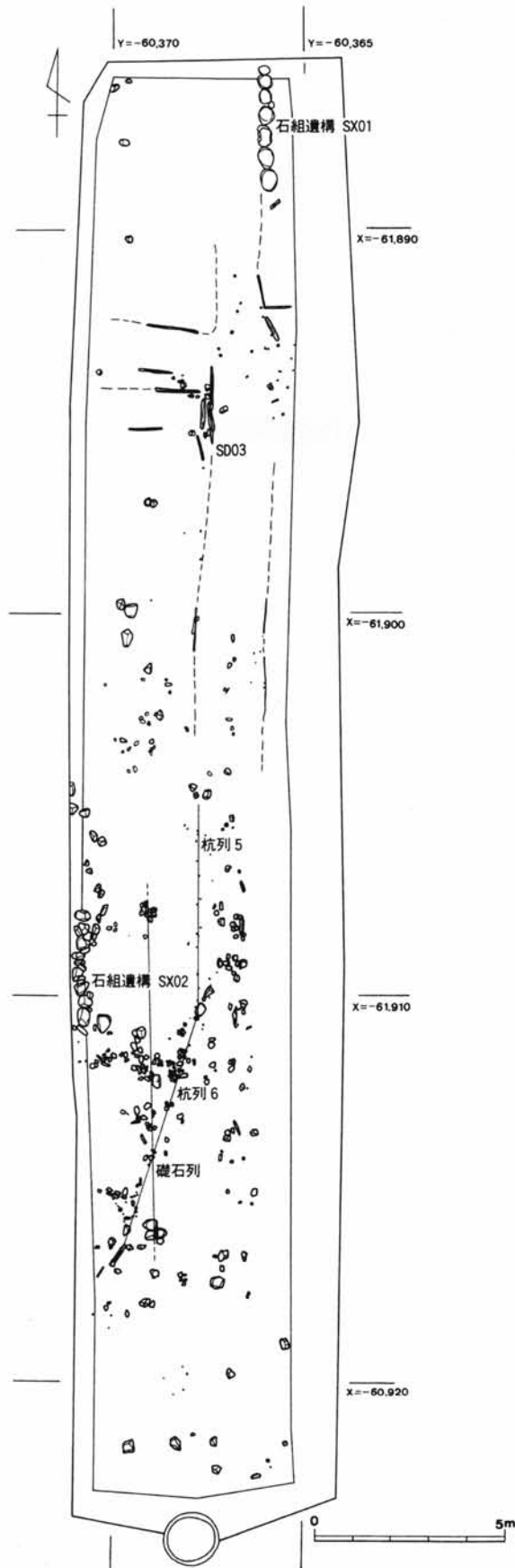
は関ヶ原の戦いの前哨戦として行われた田辺城跡籠城戦の際に焼き払われたので、田辺城跡へ入城した。高知は、入国とともに城の東と南側に三の丸の拡張工事を行い、家臣団を居住させた。この時の縄張りが明治6年の廃城まで維持された。牧野期の田辺城絵図に、田辺城縄張りが記録されている。これによると、今回の調査地は、城跡の南東隅、三ノ丸武家屋敷跡の一角にあたる。^(注2)

3. 調査の経過と概要

調査対象地は宅地として開発が予定される場所である。平成16年度に、舞鶴市教育委員会が、今回の調査対象地について試掘調査を実施した結果、建物跡や道路遺構、土坑など江戸時代の遺構が確認された。^(注3) 対象地内に田辺城に関連する遺構が良く残っている可能性が高まったので、開発対象地の中で道路敷きとなる3地点を対象として調査を実施した。

調査にあたっては、まず、重機による表土掘削を行った。舞鶴市教育委員会の試掘結果に基づいて、遺構を検出することができる深さまで上土の除去を行った。この後、各トレンチについて人力による掘削を進め、遺構検出に努めた。作業の進み具合に応じて、随時、写真撮影、図面作成などの記録作業を行った。

調査トレンチの配置状況は、第15図に示すとおりである。第1トレンチ、第3トレンチは南北方向、第2トレンチは東西方向に主軸がある。



第16図 第1トレンチ検出遺構平面図

(1)第1トレンチ

第22図は、第1トレンチ堆積土層模式図である。この付近には、瓦礫を含む現代整地層が厚く堆積していた。遺物の包含状況から、江戸時代整地土層は、水田土壌である4層以下であると考えた。第7層が江戸時代整地土層の最下層であり、これ以下に、築城以前の自然堆積土層である暗青灰色粘土層が堆積している。

調査は、第7層上面まで表土を除去した後、暗青灰色粘土層直上にかけて人力で掘削し、精査した。精査の結果、建物礎石(礎石列)、石組遺構(SX01・02)、流路跡(SD03)と杭列(杭列5・6)などを検出した。これらの遺構は、暗青灰色粘土層上面で検出した。

建物の礎石とみられる礎石列は、トレンチの南側で検出した。平らな石と円礫を配置したものである。一部分を検出しただけなので、建物の規模や形状は不明である。礎石は、一列が並ぶが、大半は、原位地を保っておらず、散在した状況がみられる。

SX01は、トレンチ北東端で検出した。人頭大の円礫を並べたものである。流路跡に伴う杭列の延長線上に位置しているので、流路の護岸として築かれたと考えられる。

流路跡SD03は、南北に流れる本流があり、いくつかの支流が合流するものである。はっきりした掘形がないので流路幅がよくわからないが、杭列と、矢板を支えたとみられる胴木などが遺存する状況から見て、流路跡と判断した。この流路には暗渠とみられる溝、分水路とみら

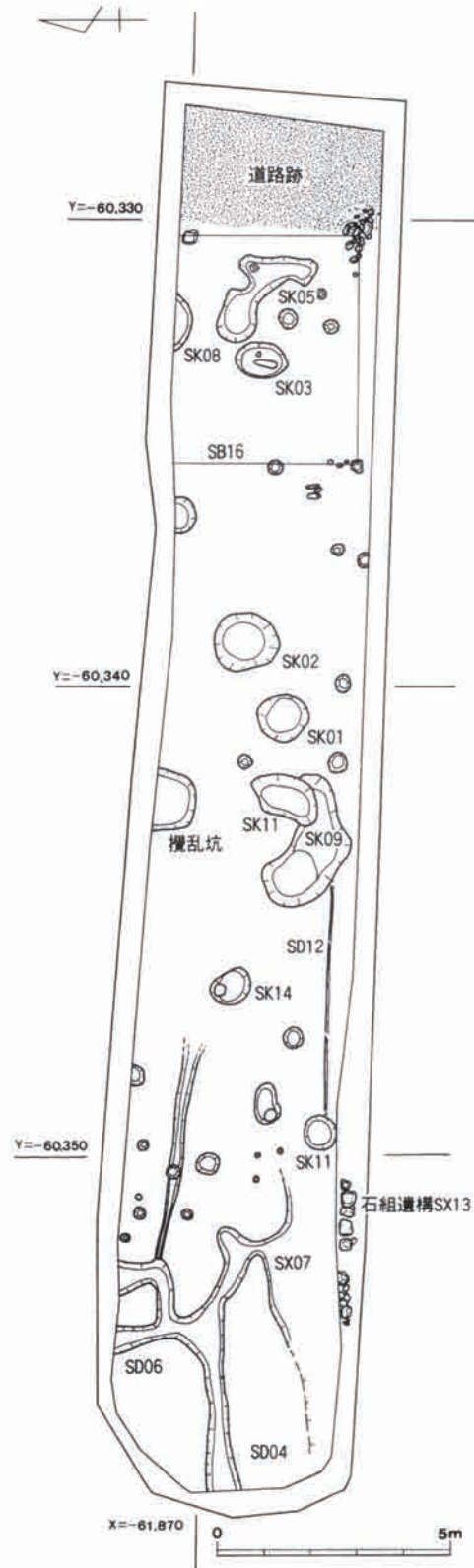
れる溝などが付加されている。流路跡は江戸時代後期に整備されたものらしく、埋土に、この時代の陶磁器破片が多数含まれていた。石組遺構SX02は、建物礎石とみられる集石群の付近で検出した。人頭大の角礫を組み合わせた遺構である。蔵などの礎石の一部が遺存したものであろう。

(2) 第2トレンチ

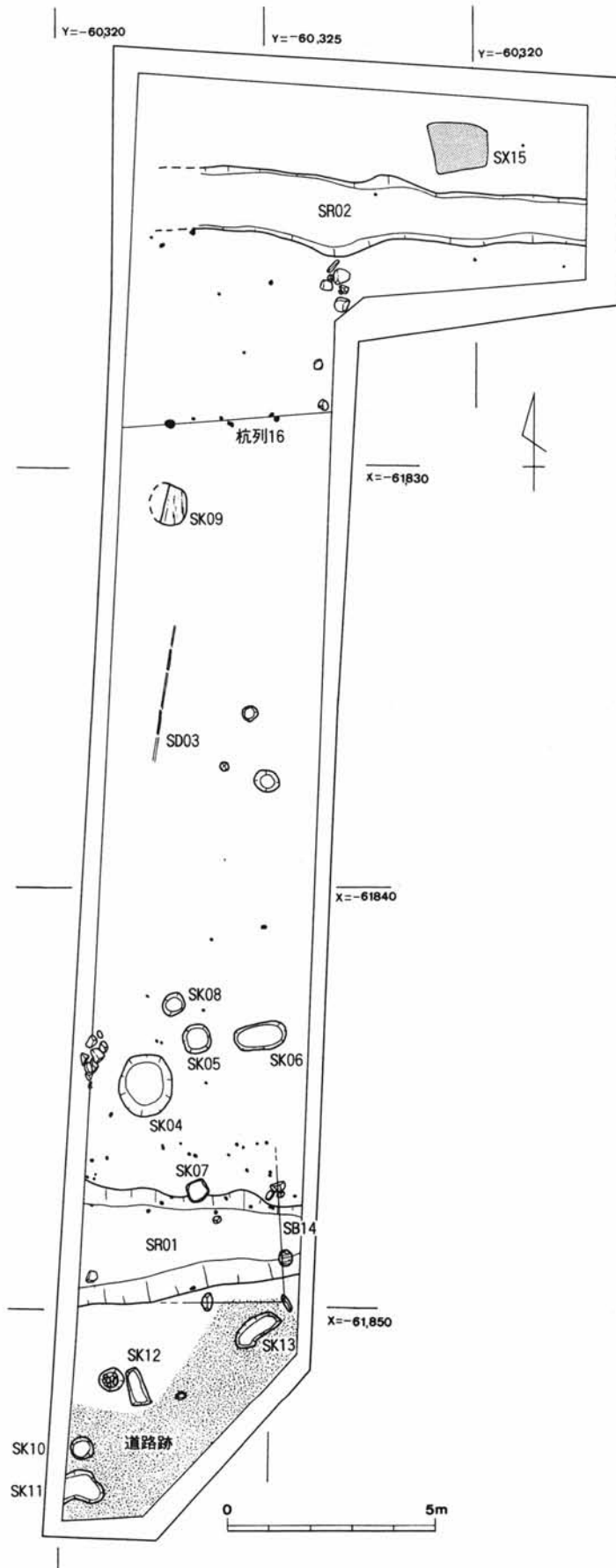
建物跡(SB16)、道路跡、上水道施設(SK11・SD12)、石組遺構(SX13)、流路跡(SD04・06)、土坑(SK02・03・05・08・09・14)などを検出した。道路跡は御水道跡である石組水路に並行して作られていることを確認した。鉄分の多い砂利を敷き詰めて整地し、道路としたものである。建物跡SB16は、道路整地層より下位で検出した。上水道施設は、竹を地中に埋めて水源から邸内に導水する施設である。導水管の先に漆喰で強化された桶が設けられているもので、これまでの田辺城跡の調査で確認されたものと同様の構造のものを一基検出した。本例は遺存状態があまりよくないが、導水管(SD12)と漆喰を伴う桶の一部(SK11)を確認することができた。石組遺構SX13は、建物基礎の一部と考えられる。流路跡SD04・06は、蛇行する細い溝が集合したものである。トレンチ西端は、湿地状(SX07)になっておりしがらみのような杭列が認められた。溝は、この湿地に向かって流れ込んでいる。土坑は円形・楕円形のものがあり、江戸時代後期の陶磁器細片を少量含む。

(3) 第3トレンチ

建物跡(SB04)、道路跡、上水道施設(SD03・SK09)、流路跡(SR01・02)、土坑(SK04~08・10~13)、杭列(杭列16)、不明遺構(SX15)などを検出した。建物礎石と道路跡は、第2トレンチと同じように、一部だけを確認した。桶底板SK09と、導水管として用いたとみられる竹(SD12)を確認している。流路SR01・02は東西に流れをもつ。流路SR



第17図 第2トレンチ検出遺構平面図



第18図 第3トレンチ検出遺構平面図

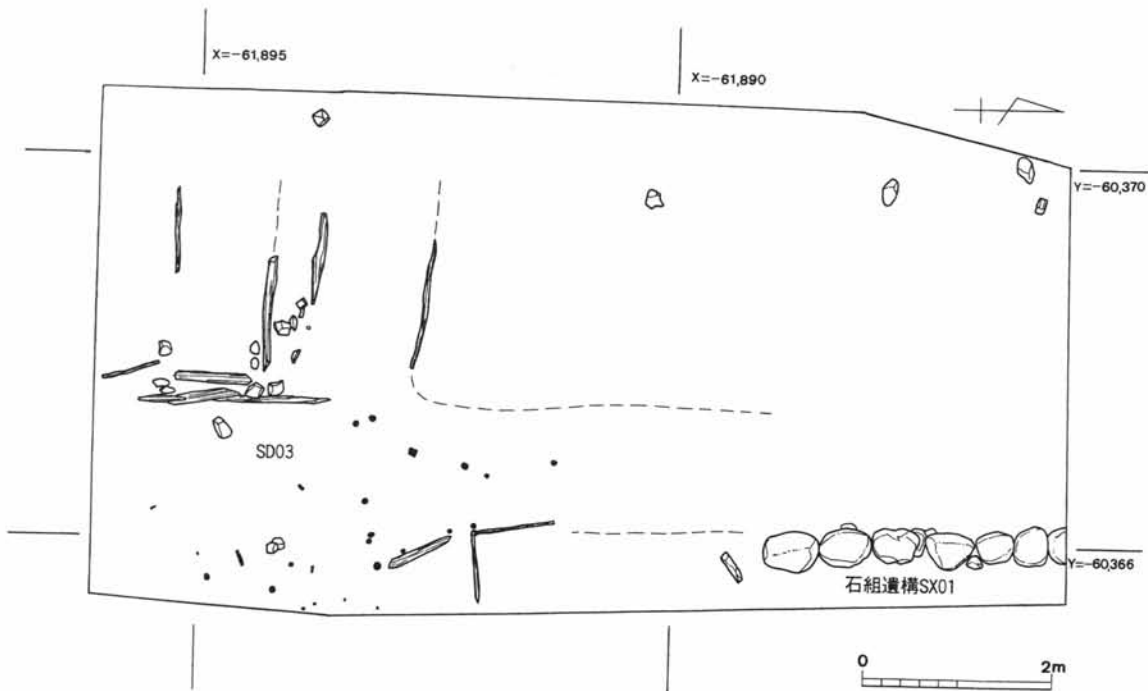
01は整地され埋め戻され、宅地となった。後に、この上に、建物跡SB04が建てられている。流路SR02は、この地点が三ノ丸として整地される以前の水路と考えられる。杭列16などととも灌漑施設として機能した遺構であろう。SX15は、砂礫を混合した粘土が叩き締められたような遺構である。建物跡の土間の一部であろうか。

4. 出土遺物

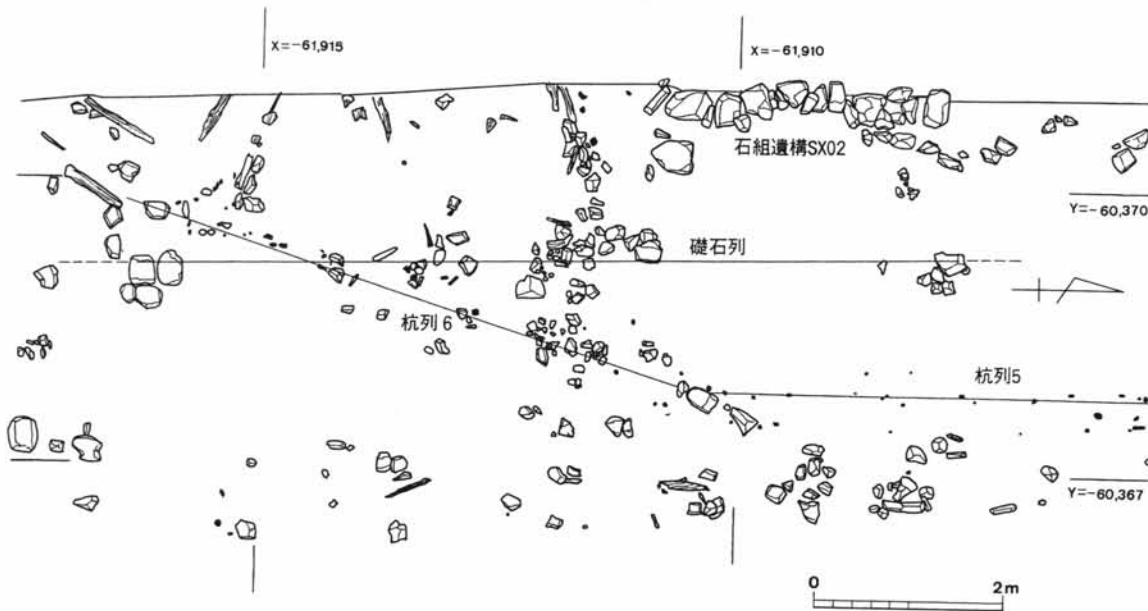
今回の調査では、土器・陶磁器類などのやきものをはじめ、金属器、木製品類が出土している。これらの遺物は、そのほとんどが整地土層から出土したものであり、溝や土坑など、遺構に伴うものは極めて限られている。ここでは、主に、整地土層から出土した遺物の中から遺存状態の良好な出土遺物を取り上げて図示し、報告する。

(1)土器・陶磁器類(第23・24図1～59)

やきものには、土器・炆器・陶器・磁器があり、食器、酒器、調理具、文房具、化粧品、暖房具など、さまざまな生活用品として用いられた。主なものを第23・24図、図版第19～22に掲げた。



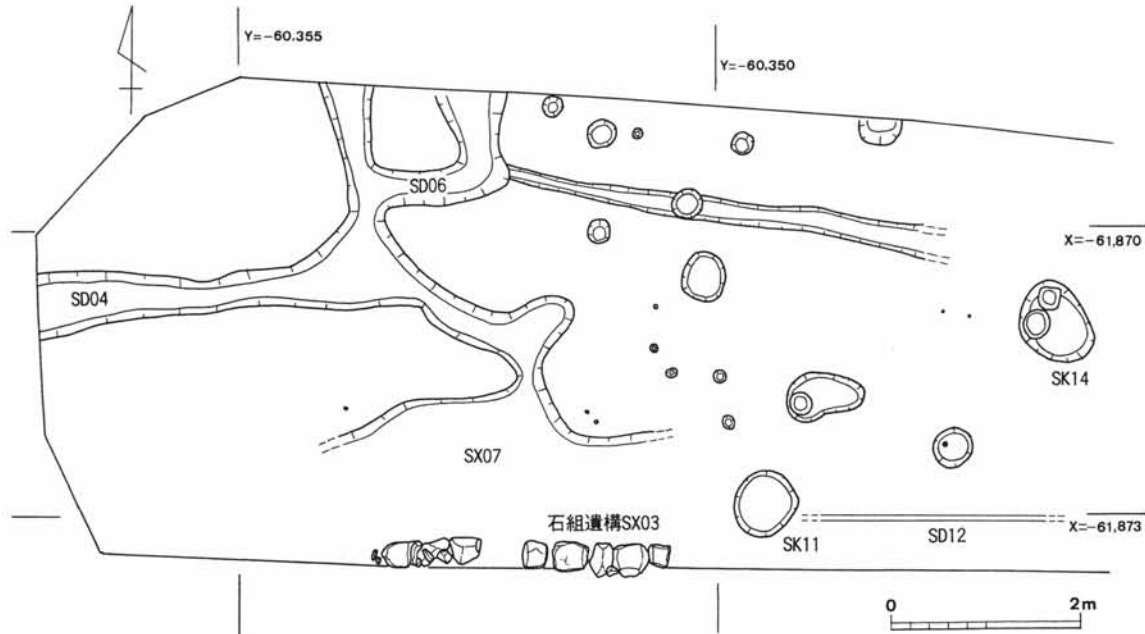
第19図 第1トレンチ検出遺構実測図(1)



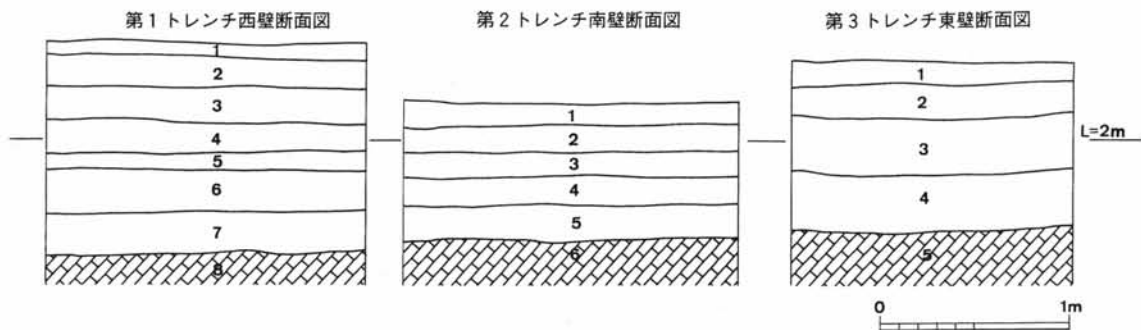
第20図 第1トレンチ検出遺構実測図(2)

杯(1~8) 1・2・5~7は磁器である。2は染付笹文、5は染付剣先つなぎ文、7・8には色絵が施されている。1・2は肥前系、5・6は瀬戸系であろう。7・8は器体が薄く、軽量である。京都系であろう。3・4は陶器である。3は美濃系で、褐色の鉄釉が掛けられている。4は色絵の笹文が施された京都系陶器である。

碗(9~13・15~23) 碗には、口縁が内湾するもの(10・11・15・16・20・22・23)、端反りのもの(12)、直線的に立ち上がるもの(13)、屈曲するもの(18・19)などがある。10~13・15~17は、磁器である。10には矢羽根文、11・16には草花文、12には渦文、13には菊文と斜格子文、15には蛸唐草文の染付がある。17は、砂目高台である。10・11・13・15・16・17は、肥前系、12は瀬戸



第21図 第2トレンチ検出遺構実測図



第22図 各トレンチ土層断面模式図

系とみられる。9・18～23は陶器の椀である。9は、草花文が描かれた京都系の半球碗である。19は鉄絵笹文のある腰折碗である。23には楼閣山水文が施されている。23の胎土は、磁土に近いが、粗い。いわゆる陶胎染付である。いずれも肥前系であろう。18は肌色の器体に褐色の釉薬が掛けられた天目茶碗である。美濃産である。20・21は、無文で、透明な灰釉がかけられている。信楽系か。21は杉形碗と呼ばれるものである。22は、色絵笹文が施されている。京都系である。

猪口(14) 14は山水楼閣文が染付された猪口である。蛇の目高台。焼接ぎによる補修跡がある。

向付(24) 志野角向付である。鉄絵による草文がある。

皿(25～29・32～35・37) 25・29・34は陶器、31～35は磁器である。25・26は褐釉が掛かる砂目高台の皿である。27は、灰色の灰釉が掛かる。口縁部は、押圧により、波状にこしらえられている。28・29は、灰釉が掛けられた皿である。内底面に砂目が3か所に残る。29は削り出し高台があるが、28は底部中央を削り取って高台としており、明瞭な高台を持たない。34は、陶胎染付である。型打ちによる六角形の皿である。梅と松文がある。

32・33・35は染付磁器である。見込みに、梅と雪輪が描かれている。外底面中央に、葦に似た文字が描かれている。33は、亀甲文、網干文に縁取られ、内底面に風景文が描かれている。蛇の

目高台である。35は、見込みに、花文と斜格子文、中央にコンニャク印判による五弁花が施されている。外底面には、大明成化年製が記号化した文字がみられる。

37は、陶器である。唐津刷毛目文大皿である。

鉢(30・58) 30は、染付磁器の鉢である。器体外面に、精緻な牡丹唐草文を染付、見込みに七宝繋ぎ文と赤絵の格子文を組み合わせて、四方襷文風の文様を回らせている。肥前系であろう。58は、透明釉が掛かった無文の鉢である。内面にハリ跡がある。信楽系か。

蓋(31・36) 染付磁器の蓋である。31は、多数の丸文が描かれている。丸文は、斜格子など幾何学的文様と、蝶や草花文など具象的文様との組み合わせから成る。段重の蓋であろう。焼接ぎの跡がある。36は、壺の蓋であろう。蛸唐草文が施されている。いずれも肥前系である。

灯明皿(38~43) 38・40~42は土師器である。3840は、口縁が内湾して立ち上がる。ロクロ作りで、底部に糸切りの跡がある。4142は手づくねである。口縁部にナデを施す。39・43は施釉陶器である。39は土師質で、内面にのみ施釉されている。

仏花器(44) 肥前系の青磁瓶の底部である。仏花器であろう。

香炉(45~47) 45・47は青磁である。45は、口縁部が直線的に立ち上がる。47は底部に輪高台がありその周囲に三つの突起をつけてある。内面に重ね焼きをした砂目の跡がみられる。46は、風景文と花唐草文が染付された磁器である。

髪油壺(48) 唐津産陶器の小瓶である。器体全面に褐釉を掛けた後、口縁部に緑釉を掛ける。髪油壺であろうか。

神酒徳利(49) 菖蒲文を染め付けし、白濁した長石釉を掛けたものである。伊万里系磁器である。

仏飯器(50) 菊花散らし文を染め付けした伊万里系磁器である。

紅皿(51) 白磁の小さな杯である。外面は全面に線刻文を施す。紅皿であろう。

鬘だら(52) 蔓文と笹文が施された京都系色絵陶器である。

徳利(53・54) 53は透明な灰釉、54は黄灰色の釉が掛かる。53は美濃系、54は京都系であろう。

水滴(56) 草文と蔓が染め付けされた水滴である。肥前系磁器。

播鉢(59) 片口の播鉢である。信楽系であろう。

(2) 金属器

水滴(55) 銅製の水滴である。方形の小型品である。

ヤス(60) 鍛造の鉄製ヤスである。刺突部は三叉で、それぞれの先端に返りがつく。

火箸(61) 棒状の鉄製品。両端が尖っている。火箸であろうか。

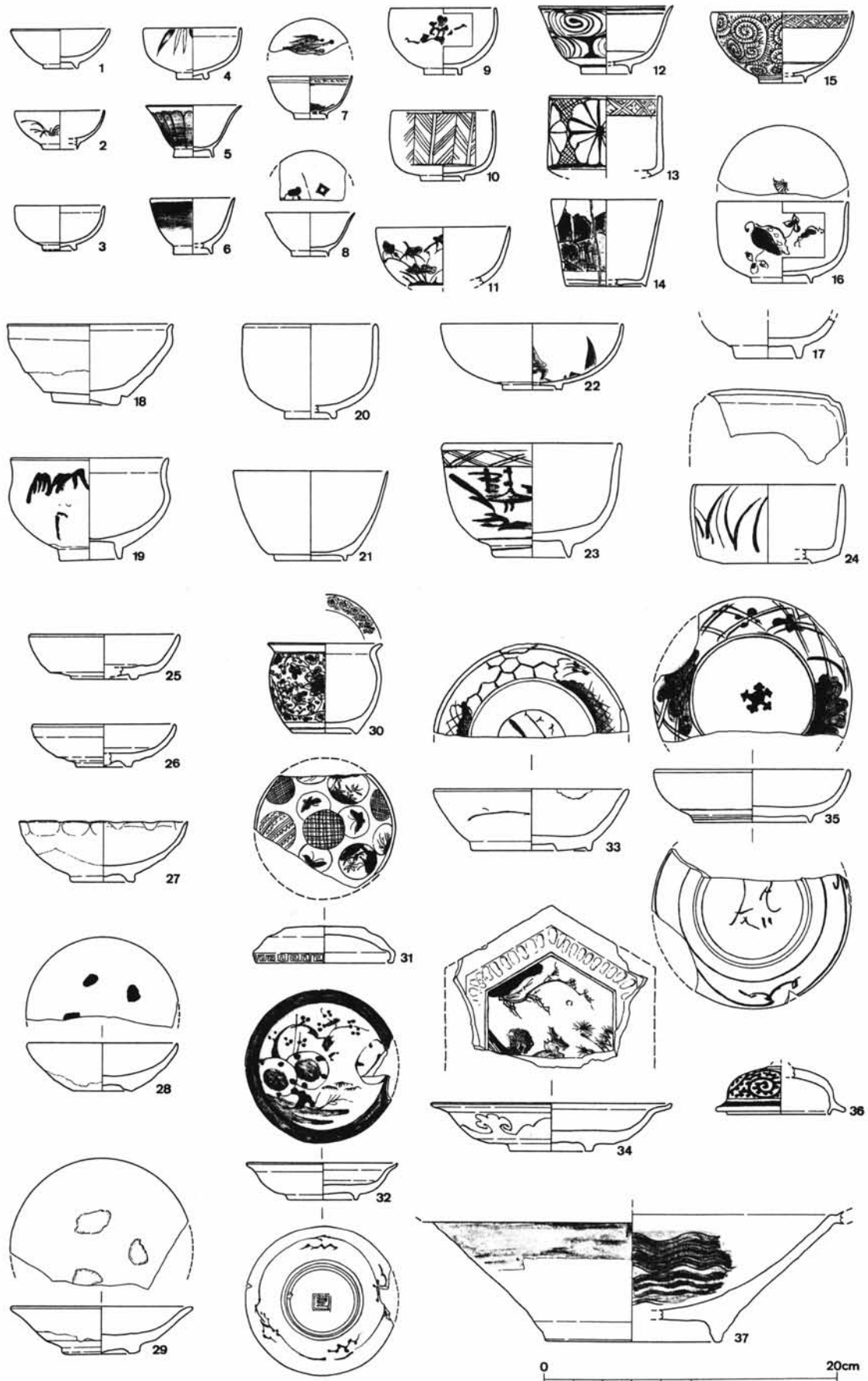
鉄(63) 鉄製の握り鉄である。

煙管(64・65) 銅製の煙管金具である。64は吸口、65は雁首である。

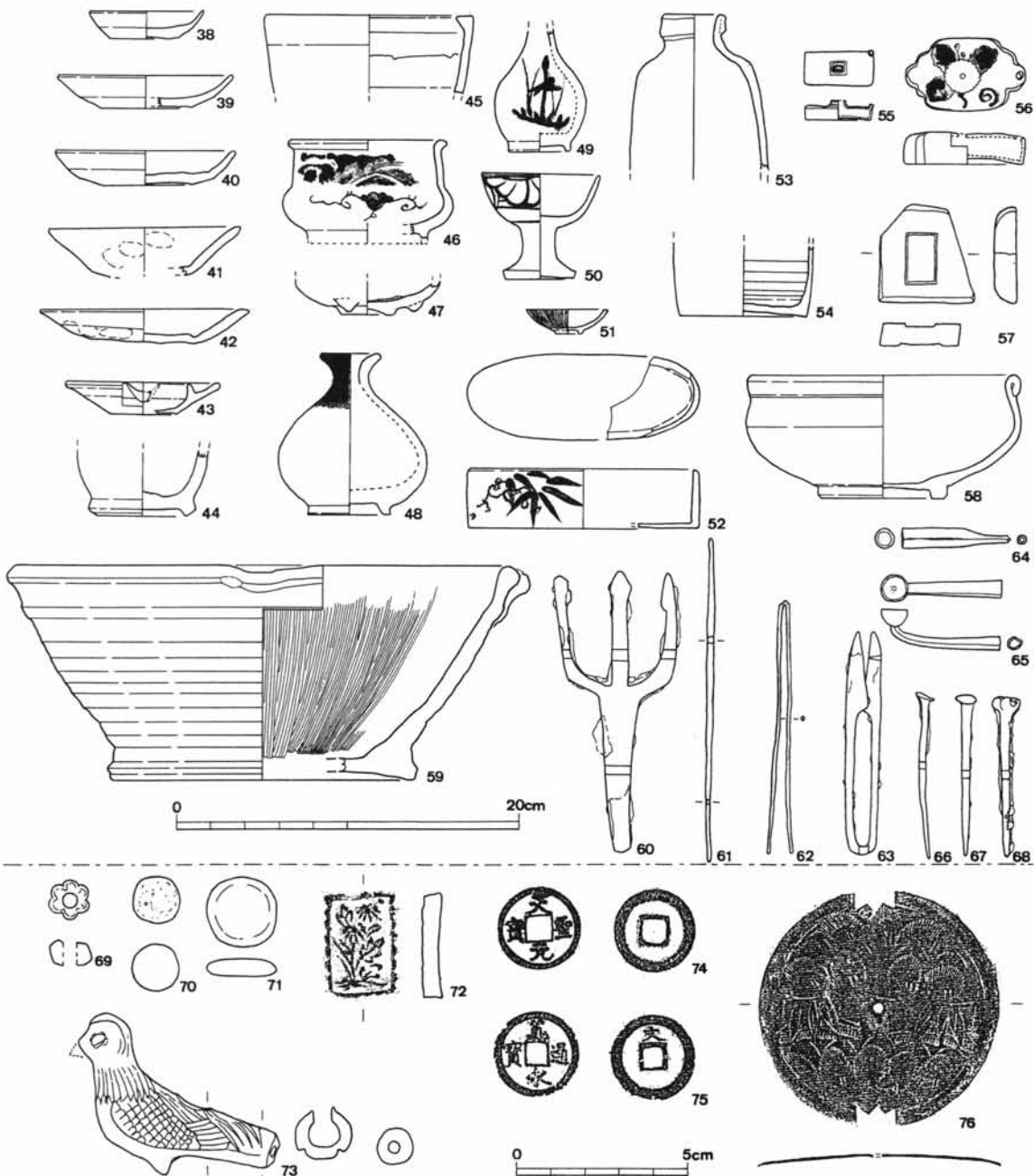
釘(66~68) 鍛造の和釘である。真っ直ぐなもの、折れ曲がったものがある。建築材に打ち込まれていたものであろうか。

簪(62) 銅製の簪である。

座金具(76) 銅製の薄板を加工したもの。上下に切り込み、中央に小孔がある。松文と竹文が



第23図 出土遺物実測図(1)



第24図 出土遺物実測図(2)

毛彫りされている。中央の円孔は釘孔であろう。箆筒などの木製家具に取り付けられた引き手などの座金具であろう。

(3) そのほかの遺物

トンボ玉(69) 青緑色のガラス玉である。器体を凹ませて上面観が花形になるように加工したものである。簪飾りであろうか。

鉛玉(70) 直径14mmの鉛玉。円形である。鉄砲玉であろうか。

碁石(71) 黒色の粘板岩を磨いて円形にこしらえたものである。碁石であろう。

泥面子(72) 方形板状の素焼き土製品である。型打ちにより、草花文が陽刻されている。

銭貨(74・75) 74は、天聖元寶、宋銭である。北宋四代の仁宗皇帝により天聖年間(1023～1032年)に鑄造された貨幣である。75は、寛永通寶である。

硯(57) 粘板岩製の小型硯である。両面に海がある。

5. まとめ

整地跡について 調査地点は、自然堆積土層である暗青灰色土層をベースとしている。暗青灰色土層は帯水層であり、杭やしがらみが多く見られることから、水田であったと考えられる。築城に際しては、排水対策とともに、盛土を行ったとみられる。整地土層は、こうした盛土の痕跡であろう。盛土をした上で整地を行い、宅地化したと推測される。当該調査地点の最初の盛土の年代は、整地土層最下層に含まれる陶磁器の年代観から、江戸時代後半期頃と推測される。それ以前の整地層は見あたらない。このあたりは、江戸時代初期にはあまり盛土がなされておらず、武家屋敷地としては十分に整備されていなかったようだ。整地土層が幾層も重なる様子は、江戸時代後期以降、廃城まで何度も土壌改良が行われたことを示している。

遺構配置について これまでの調査で、外堀の内側に、上水道として整備された御水道跡が設けられ、外堀側に土塁が設けられていたことが判明している。試掘調査と今回の発掘調査により、この御水道跡の内側には道路跡が設けられていたことが新たにわかった。道路跡には明瞭な側溝が無い。円礫を敷き詰めて踏み固めたものであり、鉄分の吸着により褐色の色調を呈するので判別しやすい遺構である。道路跡の内側には、建物礎石とみられる礫が散発的に分布する広い空間が認められた。導水施設とみられる遺構や、塵穴などの土坑が認められるので、屋敷地跡と考えられる。第2トレンチでは、屋敷地の内側部分にあたる場所が湿地化して荒廃した様子がみられた。江戸時代後半期のこのあたりの屋敷地の実情を物語るものであろう。

出土遺物について やきものは、江戸時代初期から末期にかけてのものが多数出土している。江戸時代初期のものから末期にかけての生活雑器である。初期のものには、美濃天目茶碗、志野向付、肥前系の椀・皿類などの陶器がみられるが、細片となったものばかりで出土量が少ない。後半期のものがほとんどであり、肥前、京都、信楽、美濃、丹波、備前など、各地の製品が見られる。磁器は、肥前系が最も多く、末期頃になると瀬戸系が散見するようになる。搦鉢や甕など、調理具や貯蔵容器には信楽系、丹波系の炆器が多く用いられている。土器は、灯明皿、七輪、火鉢などなどがある。出土したやきもの類は、生活雑器で占められている。

(田代 弘)

注1 瀬滝与志雄・中島憲一・竹原英二・渡辺一雄・長井二三江・速水久美・林田清一・谷口博子・佐藤正則・神谷和義・藤本米太郎・宮島哲男・迫田文男・足立伸明・高木光子・竹原幹夫・伊藤裕康・中村ひろみ・工藤信・大石健(順不同)

注2 『京都府舞鶴市田辺城跡第25次発掘調査報告書』 舞鶴市教育委員会 2005

注3 前掲注2

そのべじょう 3. 園部城跡第5・6・7次発掘調査概要

1. はじめに

今回報告する調査は、京都府教育委員会の依頼を受け、平成15年度から3か年にわたり実施した府立園部高等学校の、運動広場建設計画に伴う発掘調査である。遺跡の所在地は、京都府南丹市園部町小桜である。

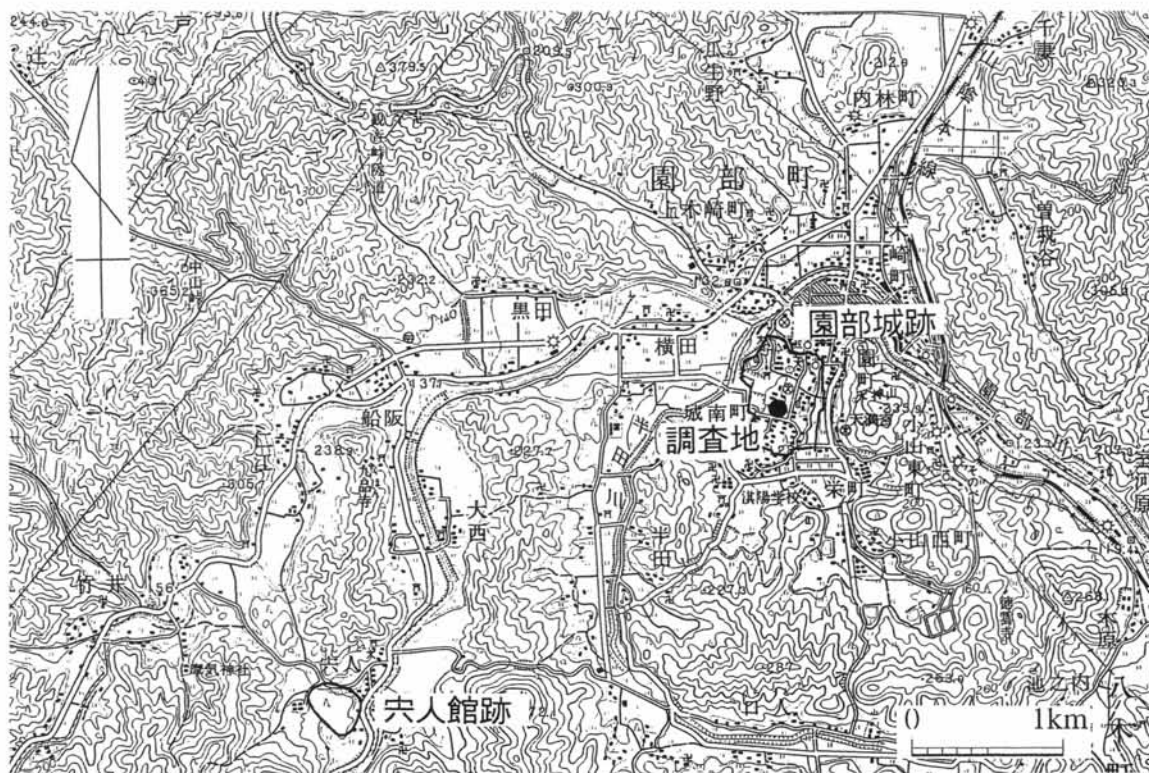
第5次調査は、平成16年1月21日～2月25日まで実施した。現地の調査担当者は、当調査研究センター調査第2課調査第2係主任調査員田代弘で、調査面積は280㎡である。

第6次調査は、平成16年10月13日～11月30日まで実施した。現地の調査担当者は、調査第2課調査第2係主任調査員田代弘で、調査面積は320㎡である。

第7次調査は、平成17年6月27日～8月19日まで実施した。現地の調査担当者は、調査第2課調査第2係主任調査員中川和哉で、調査面積は280㎡である。

調査期間中は、園部町教育委員会・京都府教育委員会・京都府立丹後郷土資料館・地元各自治会の方々に多くの御配慮をいただいた。記してお礼申し上げたい。

なお、本概要で使用した遺構番号は、原図の番号を末尾2桁に用い、3桁目は次数を入れて表記した。第5次調査のSK01の場合、SK501とした。

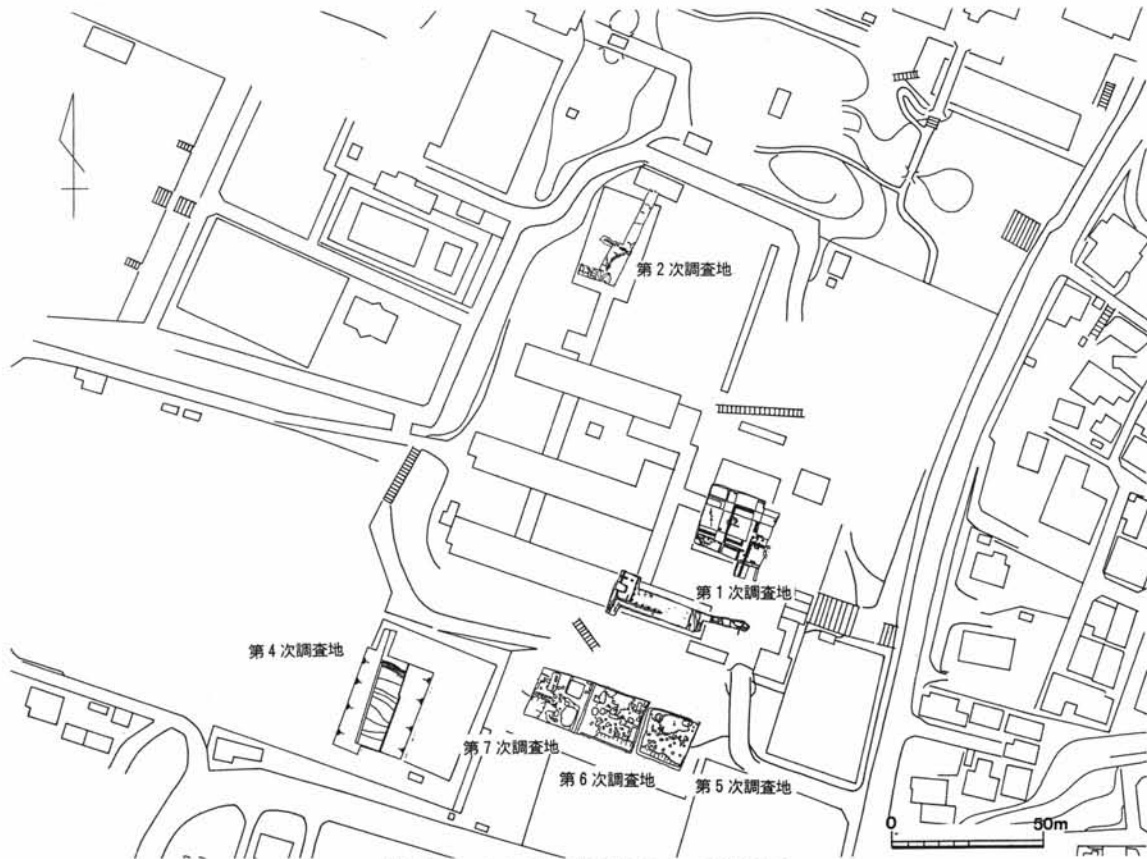


第25図 調査地位置図(国土地理院1/50,000園部)

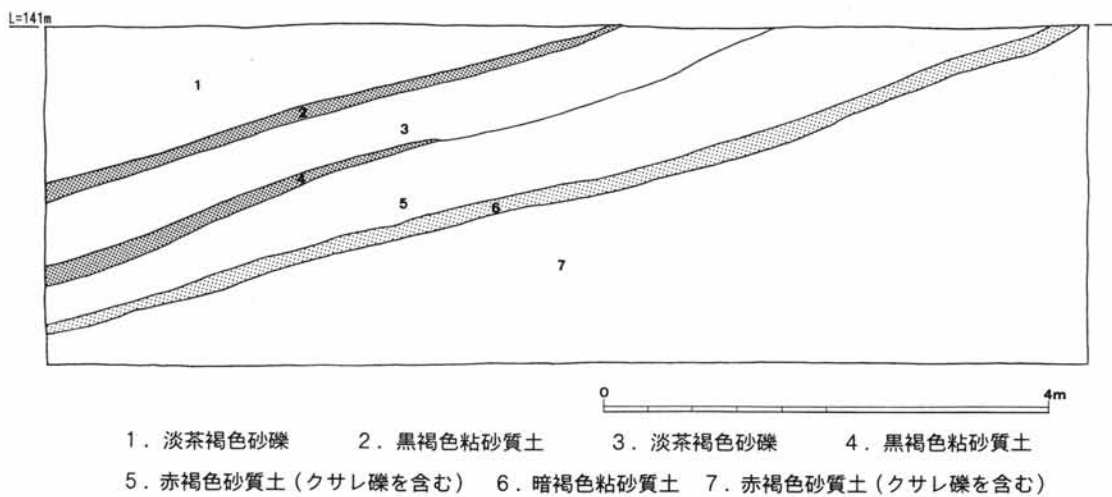
なお、今回の調査に係る経費は、全額、京都府教育委員会が負担した。

2. 歴史的環境

園部城は、小出吉親により元和7(1621)年に建てられた近世城郭である。園部城は吉親時代には前身となる城はなく、足掛け3年の仮住まいの後園部城に入城した。園部城は2重の堀をもち城域が大規模であったが、櫓はなく園部陣屋として位置づけられている。



第26図 本丸部分調査トレンチ配置図



第27図 第7次調査地断ち割り土層断面図

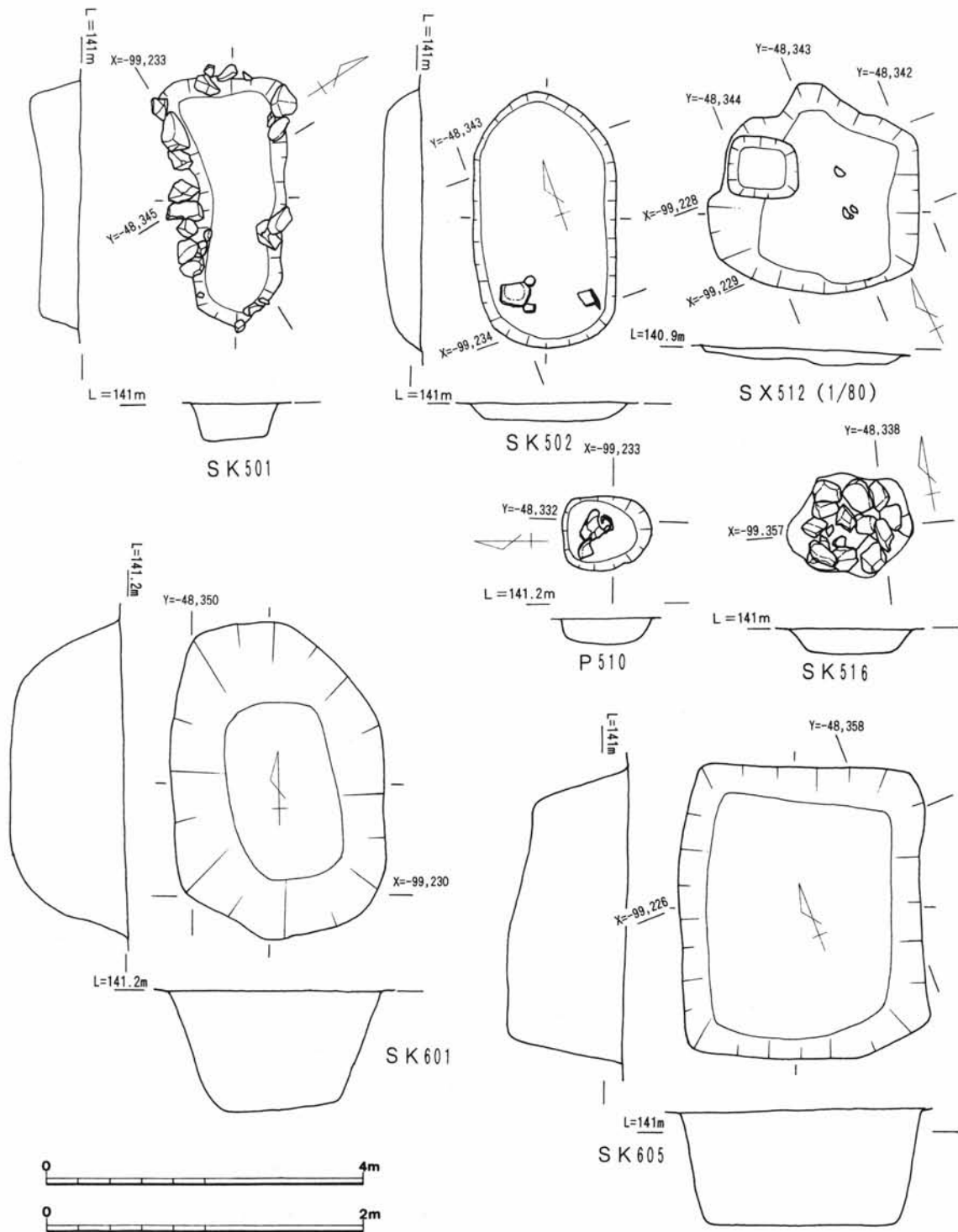
小出氏は、その後寺社奉行や若年寄、京都所司代などの要職を勤めていたが、幕府の体制が危うくなり、京都の治安が悪くなってきた文久3(1863)年から慶応4(1868)年まで大規模な城の改築が行われ念願の櫓を上げ名実ともに城になった。この改築は緊急時に天皇を迎えるためのものとも、宮城守護のためとも言われているが、明治5(1872)年には廃城になった。

城は堀の外に河川をめぐらし、城の防衛線として利用し、その間に城下町が広がる。この城下に山陰道を引き込み交通の要衝となっている。現在、本丸跡は京都府立園部高等学校の敷地になっており、敷地内には幕末に造られた櫓門と巽櫓およびそれに取り付く城壁が残されて高校の施設として利用されている。

園部城の調査は、今回報告分の調査を含めて計7回の発掘調査が実施されている。第1次調査(1981年)は本丸部分の調査で、当調査研究センターが実施した。石組みの溝、塀と埴輪を伴う方墳2基を検出した。第2次調査(1987年)は、当調査研究センターが実施し、石組みの溝と井戸を検出した。第3次調査は、園部町教育委員会の調査である。第4次調査(1996年)は、当調査研究センターが実施した調査で、今回報告の第



第28図 第5～7次調査検出遺構平面図

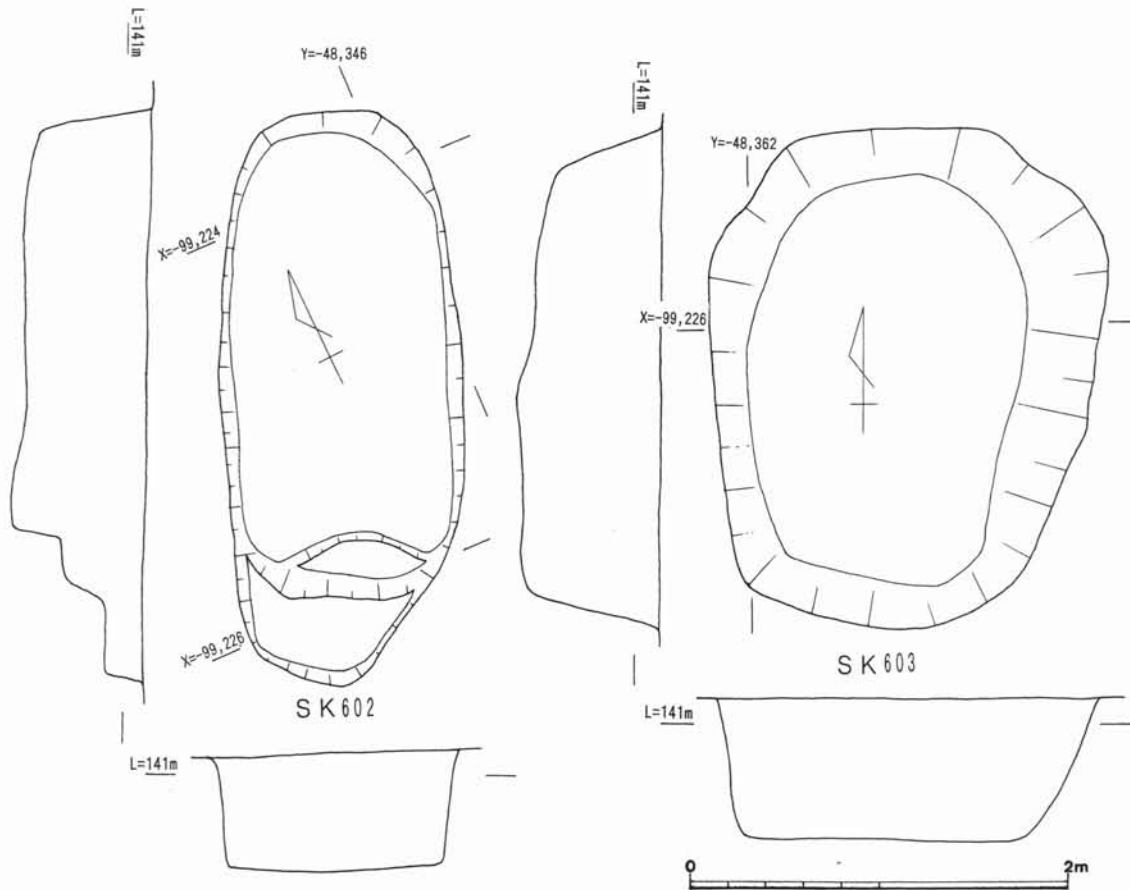


第29図 第5・6次調査検出遺構平面・断面図

5～7次調査の西側にあたる。堀跡にあたる地域で堀の北側ラインを検出することができた。遺物には、鍋島の皿や中国製陶磁器など注目すべき陶磁器類が出土した。

2. 調査概要

今回報告の発掘調査地点は、本丸部分と内堀で仕切られ、反対側を蓮池と呼ばれる堀状の池で仕切られた区画の一部を調査している。



第30図 第6次調査検出遺構平面・断面図

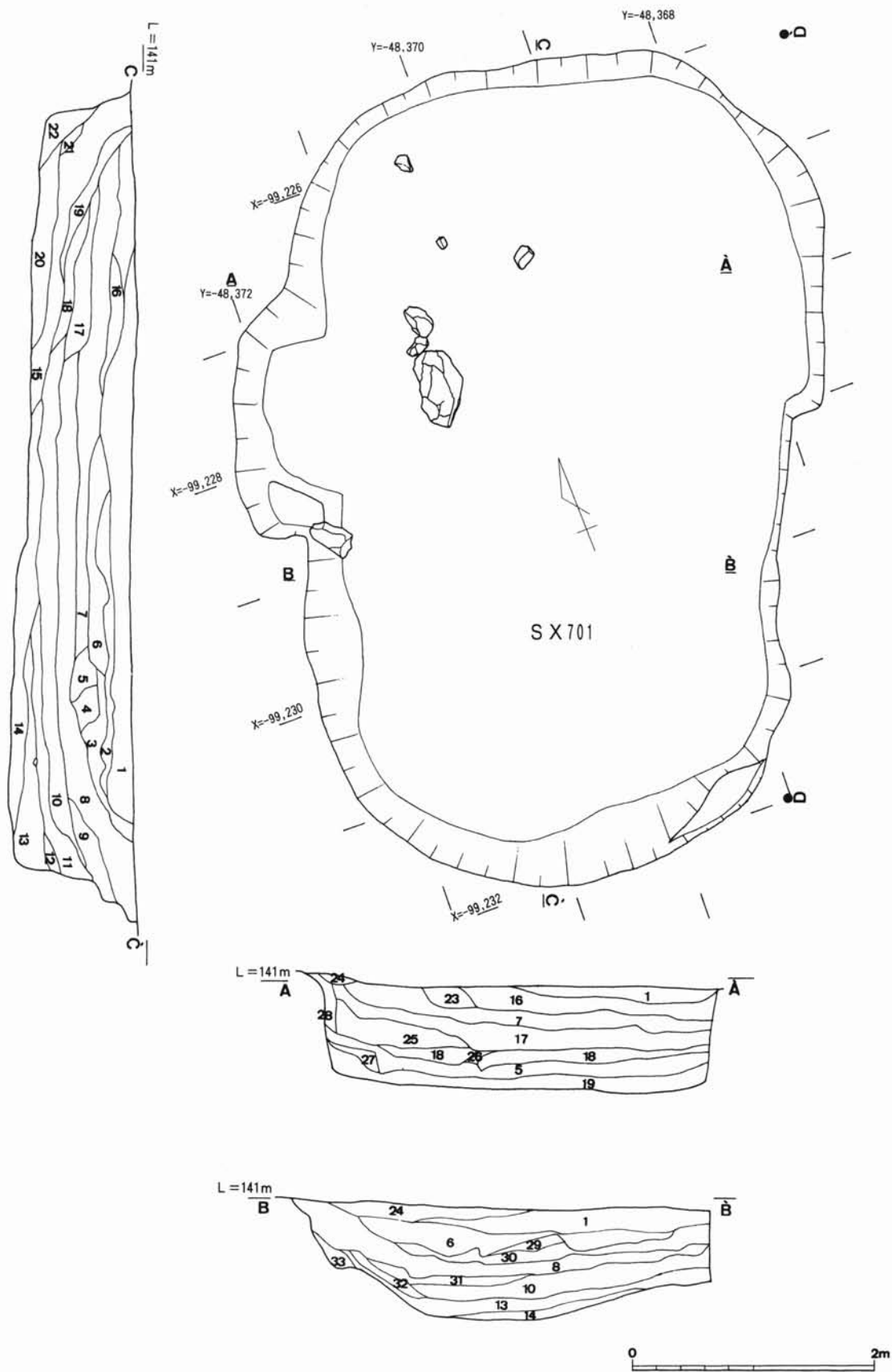
高校の校舎のある本丸部分とは約5mの比高差が認められる平坦地で絵図によると台所跡とされている。断面観察の結果この平坦地は旧地形を削りだし、くぼんだ部分を埋め立てて造り出されている。第7次調査で3mに及ぶ深掘りの結果赤色化したクサレ礫層が基盤となっていることがわかった。礫はその表皮からかなりの部分が粘土化しており堆積の古さを示している。また、この赤褐色の礫層は本丸部分の断面にも認められる。通常このような赤色化した礫層は高位段丘と考えられる。本丸部分で古墳が検出されていることからこの平坦地が大きな改作によって形成されたものでないことがわかる。園部城築城以前から、この地域は平坦な段丘地形を示しており、その縁辺を整形することによって城域が形成されていると考えられる。このことから、三万石に満たない陣屋大名が園部城のような広大な敷地をもつ城を造ることができたと考えられる。以下、調査回数ごとに遺物が比較的多く出土した遺構について説明を加えたい。

(1) 第5次調査(第29図)

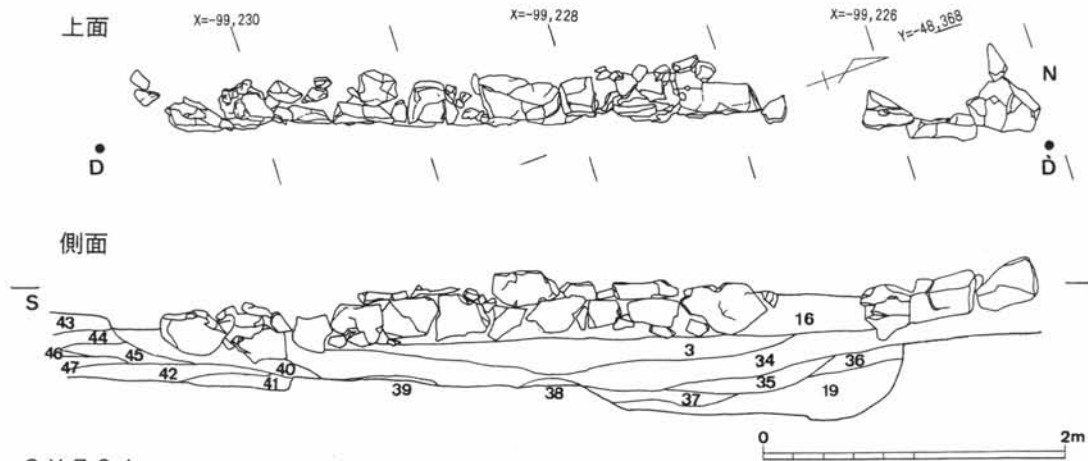
土坑SK 501 土坑周辺に石組みをもつ18世紀の遺構である。長さ1.6m、最大幅0.9m、検出面からの深さ0.3mを測る。

土坑SK 502 平面形が楕円形を呈する土坑で、長さ1.6m、最大幅0.9m、検出面からの深さ0.25mを測る。

P 510 礫の入った小型の柱穴あるいは土坑である。長軸0.6m、短軸0.45m、検出面からの深さ0.18mを測る。



第31図 第7次調査検出遺構平面・断面図(1)



S X 7 0 1

- | | | | |
|--------------|----------------|----------------|---------------|
| 1. 黄灰褐色礫混砂質土 | 2. 暗褐色礫混砂質土 | 3. 橙褐色礫混砂質土 | 4. 褐色礫混砂質土 |
| 5. 黄褐色礫混砂質土 | 6. 暗緑灰褐色礫混砂質土 | 7. 黄色土混灰色礫混砂質土 | 8. 炭混淡緑黄灰色砂質土 |
| 9. 淡緑灰褐色砂質土 | 10. 炭混淡緑灰色砂質土 | 11. 暗黄灰褐色砂質土 | |
| 12. 暗黄灰褐色砂質土 | 13. 暗緑黄灰色砂質土 | 14. 黒灰色炭層 | 15. 炭混暗緑灰色砂質土 |
| 16. 暗灰色礫混砂質土 | 17. 黒灰色炭層 | 18. 炭混暗灰色砂質土 | 19. 暗黄灰褐色砂質土 |
| 20. 暗灰色砂質土 | 21. 黄灰色砂質土 | 22. 灰色砂質土 | 23. 黄灰色砂質土 |
| 24. 黄褐色礫混砂質土 | 25. 炭混暗灰色砂質土 | 26. 暗灰色砂質土 | 27. 暗褐色粘質土 |
| 28. 暗灰褐色砂質土 | 29. 暗褐色礫混じり砂質土 | 30. 緑褐色粘砂質土 | 31. 緑黄色砂質土 |
| 32. 黄褐色粘砂質土 | 33. 黄灰褐色砂質土 | 34. 緑灰色砂質土 | 35. 黒緑色炭混砂質土 |
| 36. 暗緑灰褐色砂質土 | 37. 黄褐色砂質土 | 38. 黄褐色礫混砂質土 | 39. 暗褐色粘質土 |
| 40. 暗褐色粘質土 | 41. 黄色土混暗褐色砂質土 | 42. 褐色粘質土 | 43. 暗褐色粘質土 |
| 44. 黄褐色礫混砂質土 | 45. 黄褐色礫混砂質土 | 46. 暗褐色粘質土 | |

第32図 第7次調査検出遺構平面・断面図(2)

S X 512 不定形の土坑状の遺構である。最大幅2.7m、検出面からの深さ0.2mを測る。

S X 519 土坑内一杯に礫の詰まった遺構である。礎石の下部構造の可能性が指摘できる。長径0.8m、短径0.6m、検出面からの深さは約0.16mを測る。

(2)第6次調査(第29・30図)

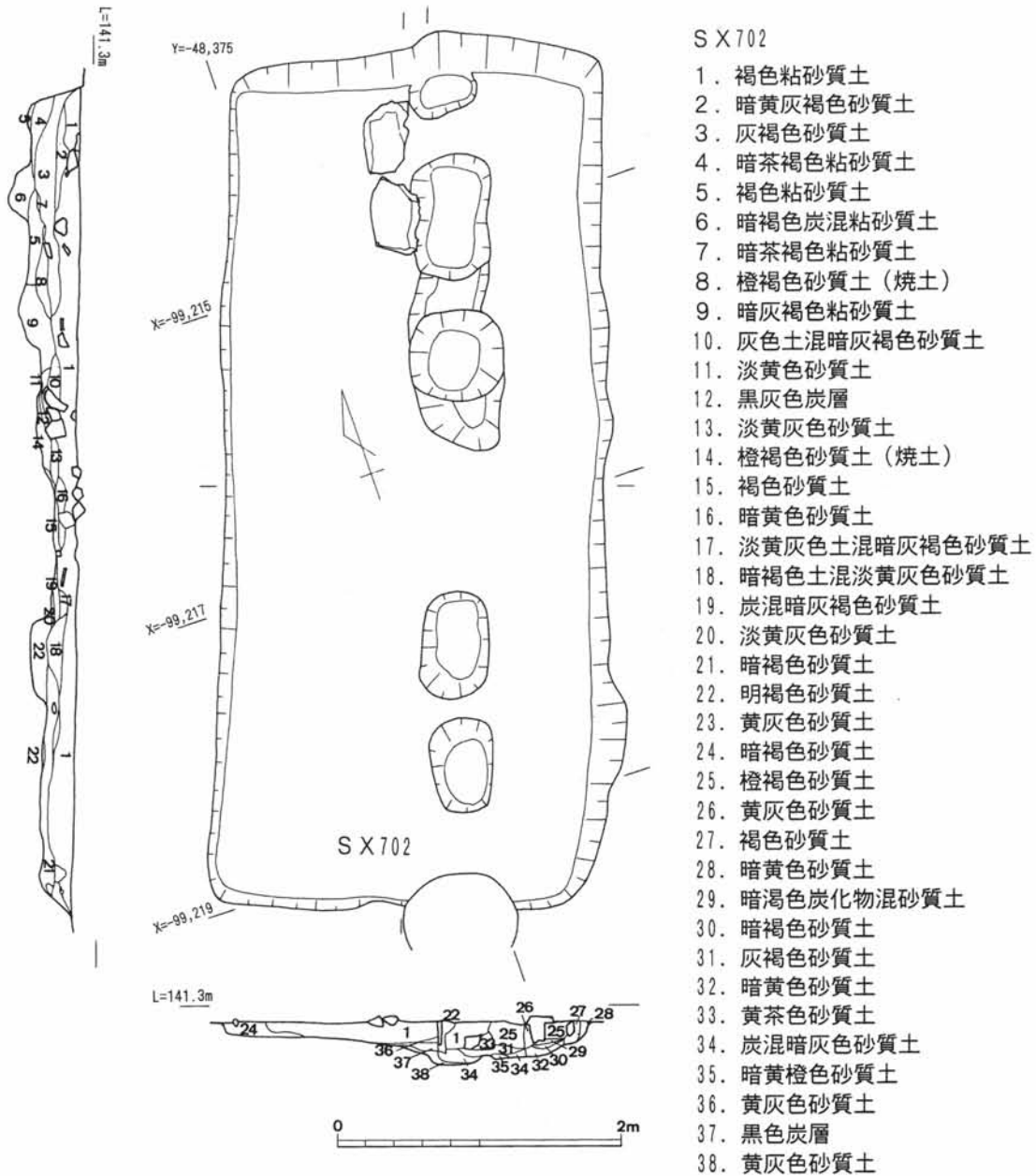
土坑 S K 601 長楕円形の平面形をもつ土坑で、長径2m、短径1.4m、検出面からの深さは約0.75mを測る。

土坑 S K 602 長楕円形の平面形をもつ土坑で、長径3m、短径1.3m、検出面からの深さは約0.7mを測る。

土坑 S K 603 隅丸方形の平面形をもつ土坑で、長径2.7m、短径2.2m、検出面からの深さは約0.75mを測る。

土坑 S K 605 長方形の平面形をもつ土坑で、長辺1.8m、短辺1.5m、検出面からの深さは約0.7mを測る。

S X 610 多くの土坑が検出できた整地層の下位から検出した遺構で、広範囲に炭が混じって



第33図 第7次調査検出遺構平面・断面図(3)

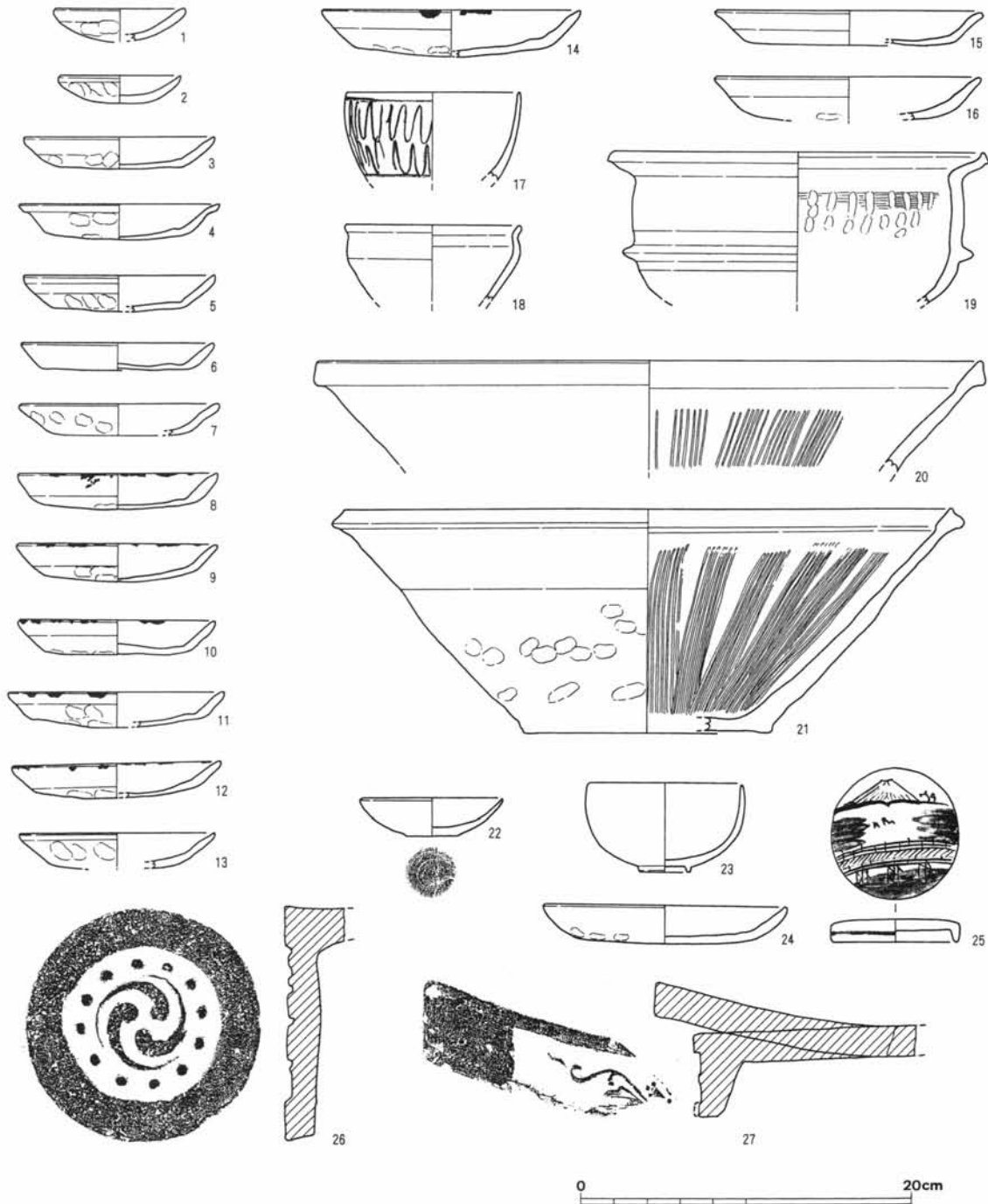
おり同時に瓦や陶磁器も認められることから建物を崩したのち処理したものと考えられる。

(3)第7次調査

調査区内からは大小の土坑が検出できた。建物にまとまるような柱穴などはなかったが、大型の土坑である土坑1からは2段に積まれた石垣が検出できた。

土坑状遺構 S X 701(第31・32図) 南北7m、東西4m、深さ1.2mの規模をもつ大型の土坑である。埋土は検出面では非常に硬い堆積層があったが、その下部はしまりの悪い土が炭層を交え層状に堆積している。底部付近にはまとまって瓦が棄てられている。火災によるごみを処分したと考えられる。出土遺物には17世紀の伊万里・唐津・丹波・京都・美濃などの陶磁器がある。出土遺物からこの土坑の時期は、築城時に近い時期のものと考えらる。

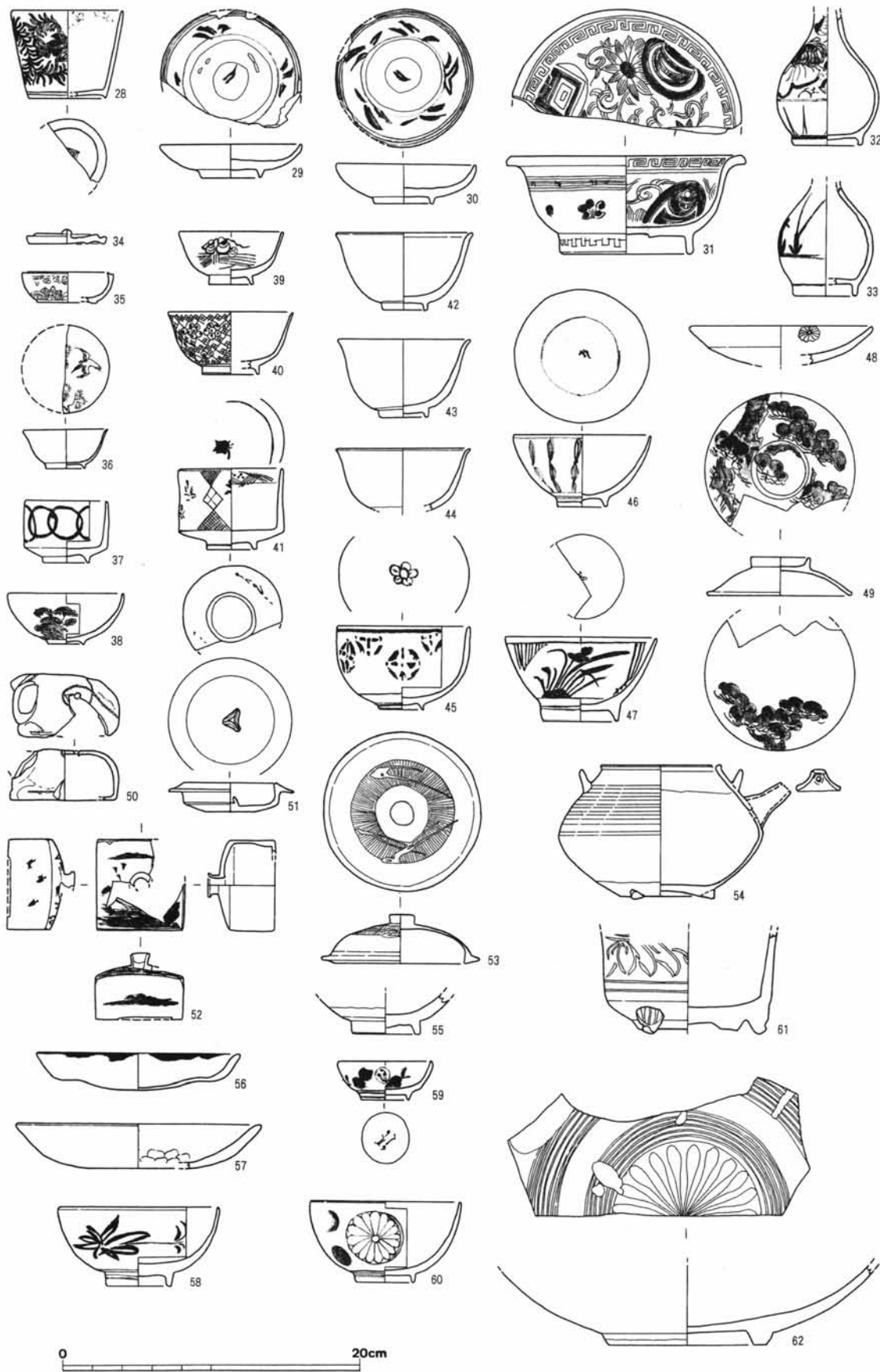
土坑状遺構 S X 702(第33図) 平面形が長方形を呈する土坑で、焼土層を含む。出土遺物には



第34図 第5次調査出土遺物

大形の瓦や陶磁器類があるが、19世紀の遺物が大半で幕末の改築時、あるいは廃城時の廃棄土坑と考えられる。大形の礫が入っていた。

土坑状遺構 S K 710(第7・8図) 平面形が直径1.5mの円形の土坑で、大形の礫が入る。土坑からは19世紀の陶磁器類が比較的多く出土した。土坑の中には土坑1の石垣の大きさと同じ程度の石が19世紀の遺構の中に含まれていることから、19世紀まで石垣をもつ建物などが存在していたことがわかる。このほか、包含層からであるが、形象埴輪と考えられる破片が出土している。



第35図 第6次調査出土遺物実測図(1)

3. 出土遺物

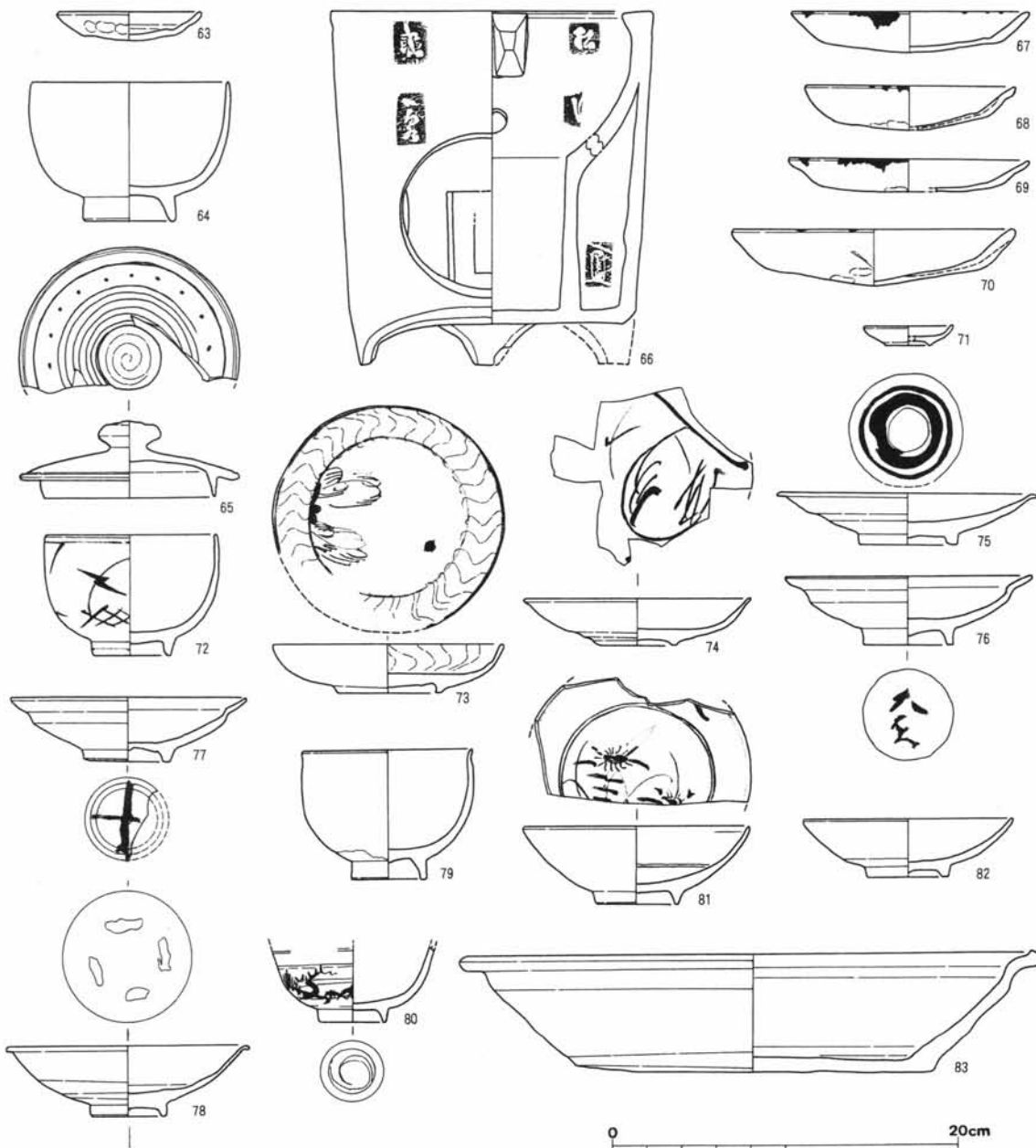
(1) 土器・瓦

1) 第5次調査(第34図)

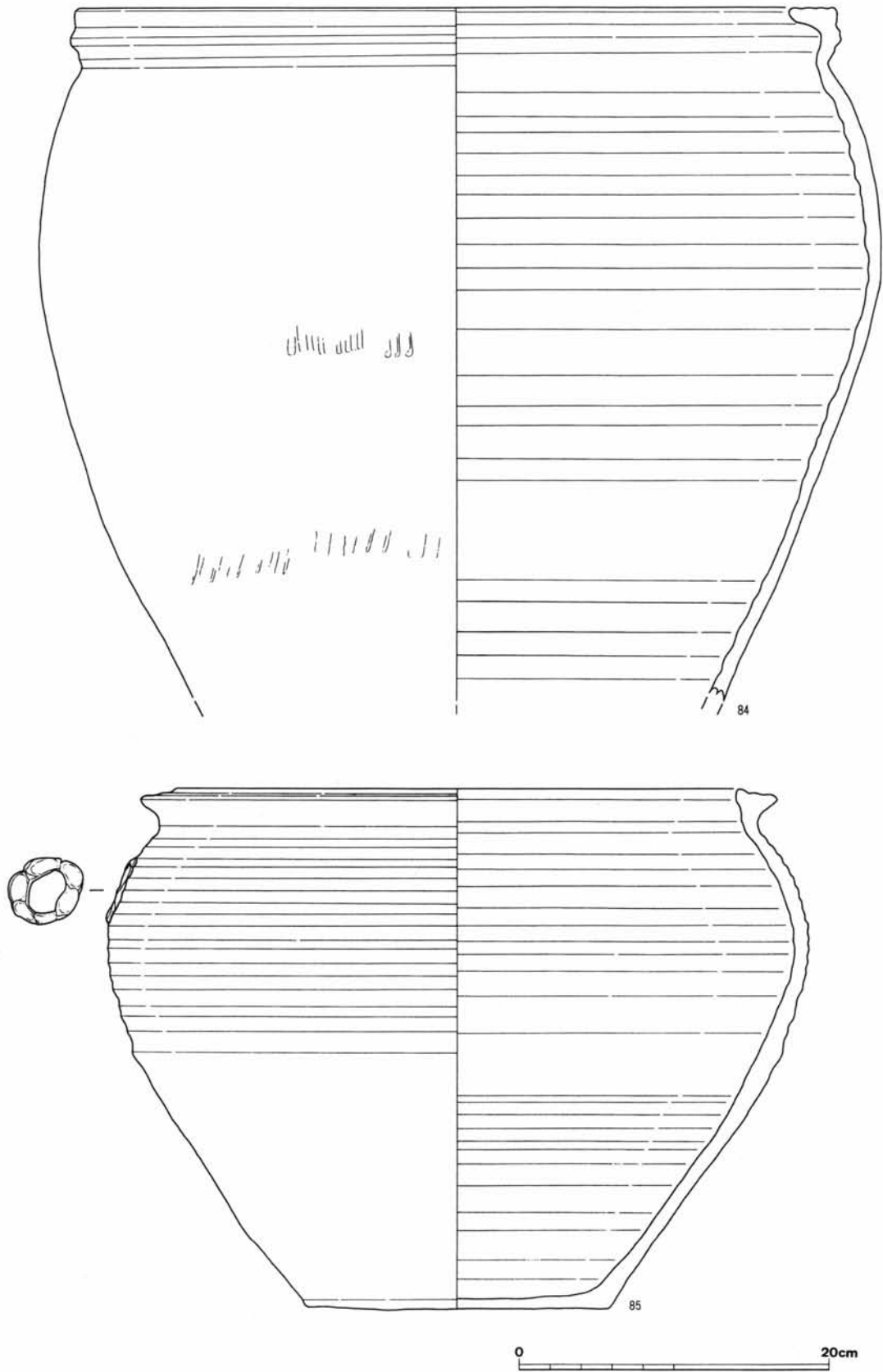
土坑S K 501 23は京都系の碗である。

土坑S K 512 7・24は土師器の皿である。

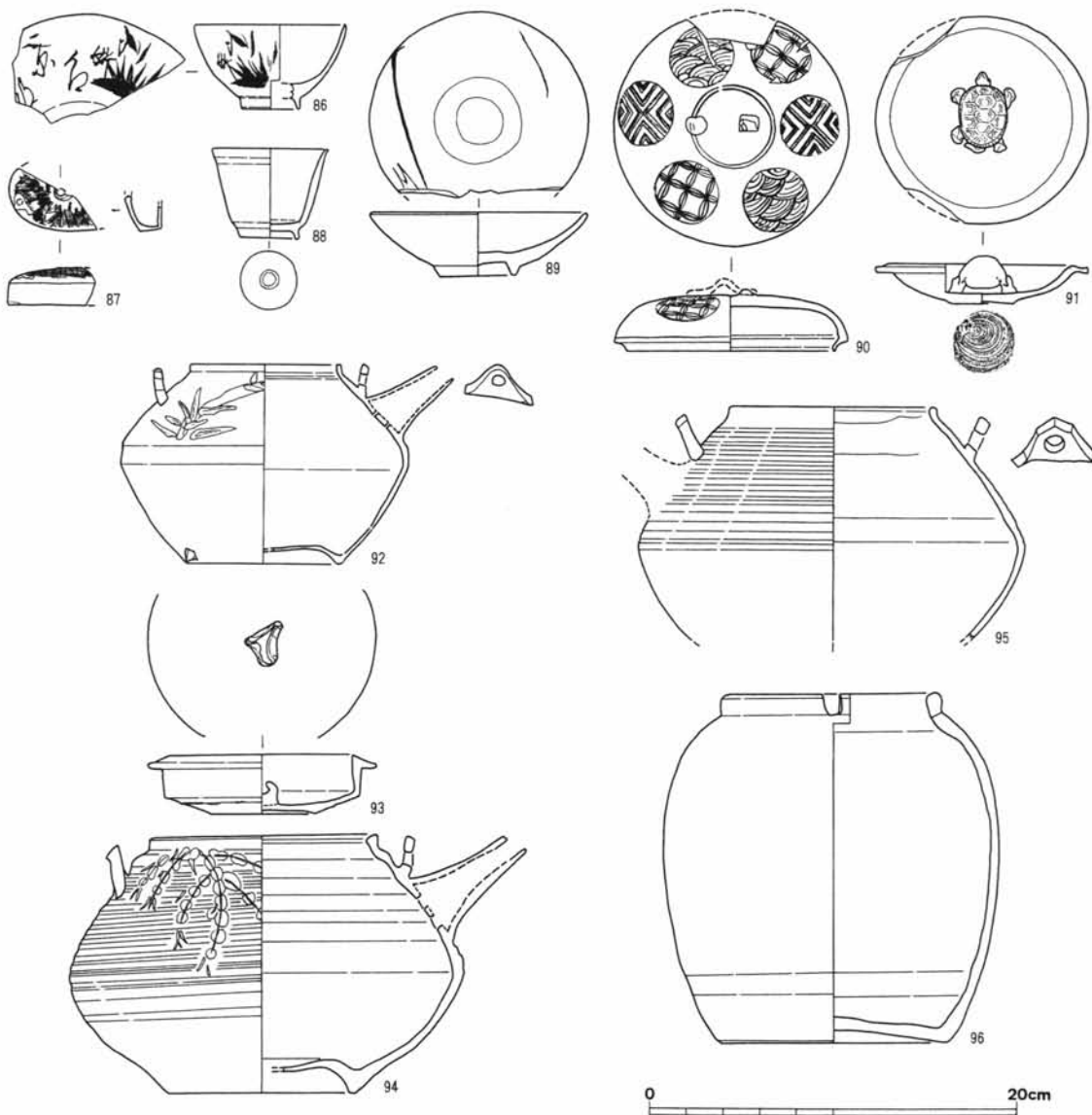
土坑S K 517(1~6・8~21・26・27) 1~6・8~16は土師器の皿で、小型・中型・大型と3つの法量があり、中型のものの内面屈曲部には強いナデが認められる。口唇部内外面にススの痕跡がある個体があり灯明に利用されたと考えられる。17世紀後半のものと考えられる。17は肥前系の碗で外面には網目文が施される。18は天目碗である。19は土師質の羽釜である。20は焼があまり須恵質の摺鉢である。21は焼き締め陶器の摺鉢である。すり目は7本を一単位に施されている。



第36図 第6次調査出土遺物実測図(2)



第37図 第6次調査出土遺物実測図(3)



第38図 第6次調査出土遺物実測図(4)

る。丹波産の可能性があるが、胎土には長石・石英類の岩片が目立つ。26は巴文の周りに連珠文が施された軒丸瓦である。27は軒平瓦である。

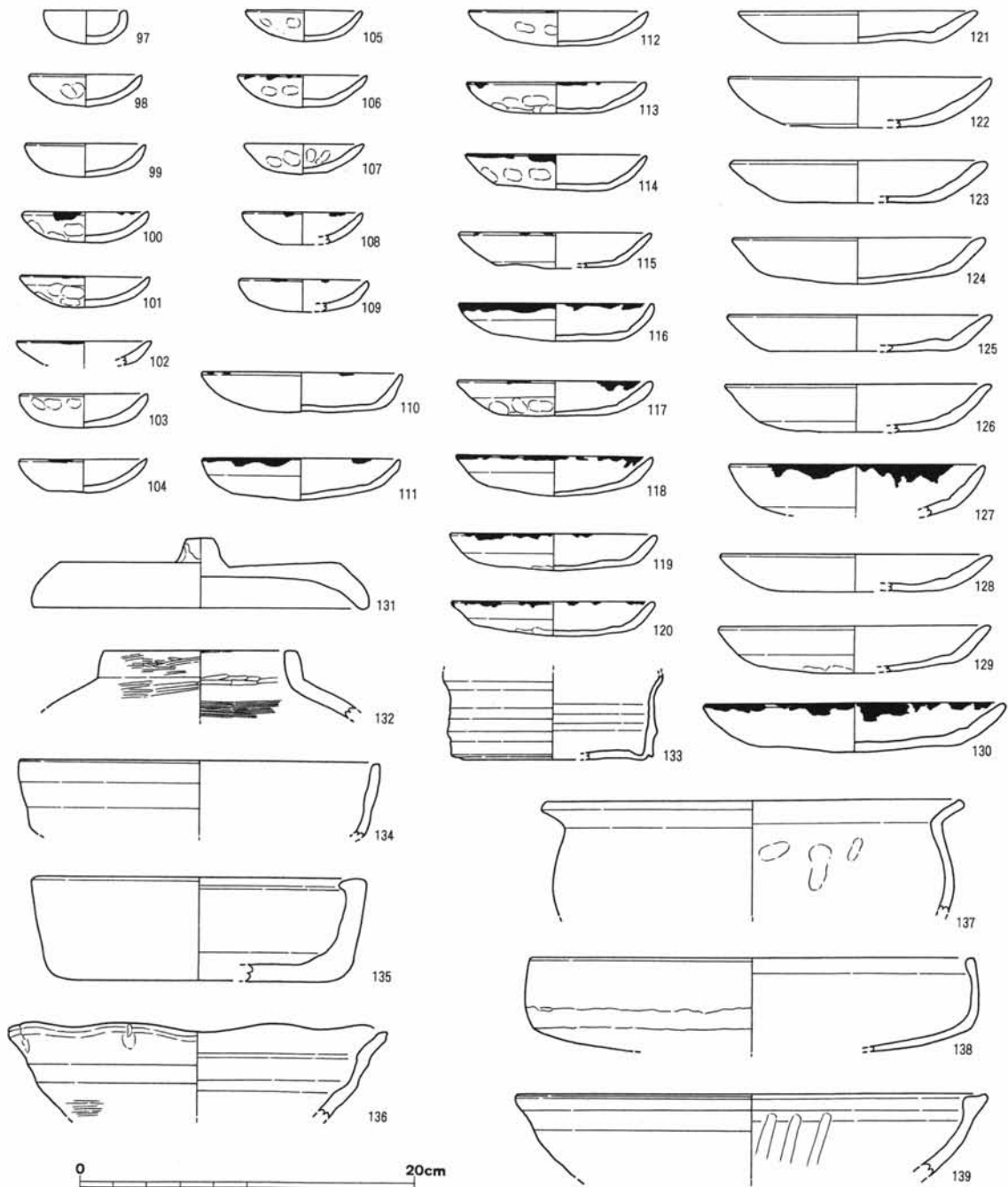
P 507 22は土師器の皿で底部は糸切りである。25は蓋で上面に呉須で富士や橋が描かれる。

2) 第6次調査(第35～38図)

土坑 S K 601(29～33) 29・30は同形の肥前陶器の皿で内面は蛇目釉剥ぎが認められる。31は線描で描かれた磁器の鉢である。32・33は呉須で絵付けされた御神酒徳利である。

土坑 S K 602(34～54) 34は小型の蓋である。35は白磁の合子の身部分である。35は小杯で内面には赤絵が描かれる。破損部断面には焼継ぎの痕跡が認められる。42～44は信楽系灰釉端反碗である。45はコンニャク印判の碗である。46は砥草文碗である。47は広東碗である。49は広東碗の蓋である。50・52は白磁の水差しである。50はウシを模したものと考えられる。51・53は土瓶の蓋である。54は土瓶で底部に脚が3か所認められる。

土坑 S K 603 53は天目碗の底部である。

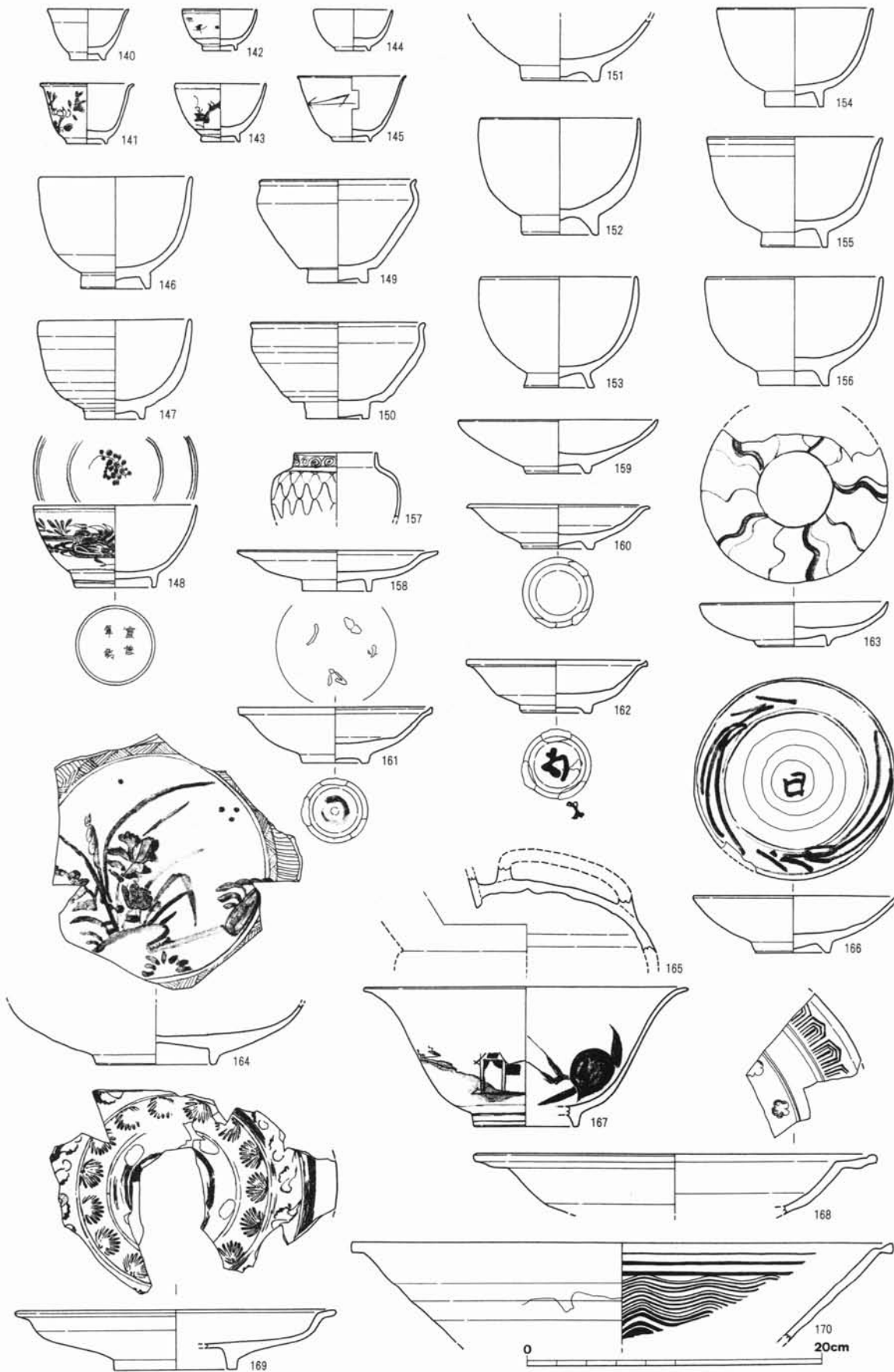


第39図 第7次調査土坑状遺構 S X 701出土遺物実測図(1)

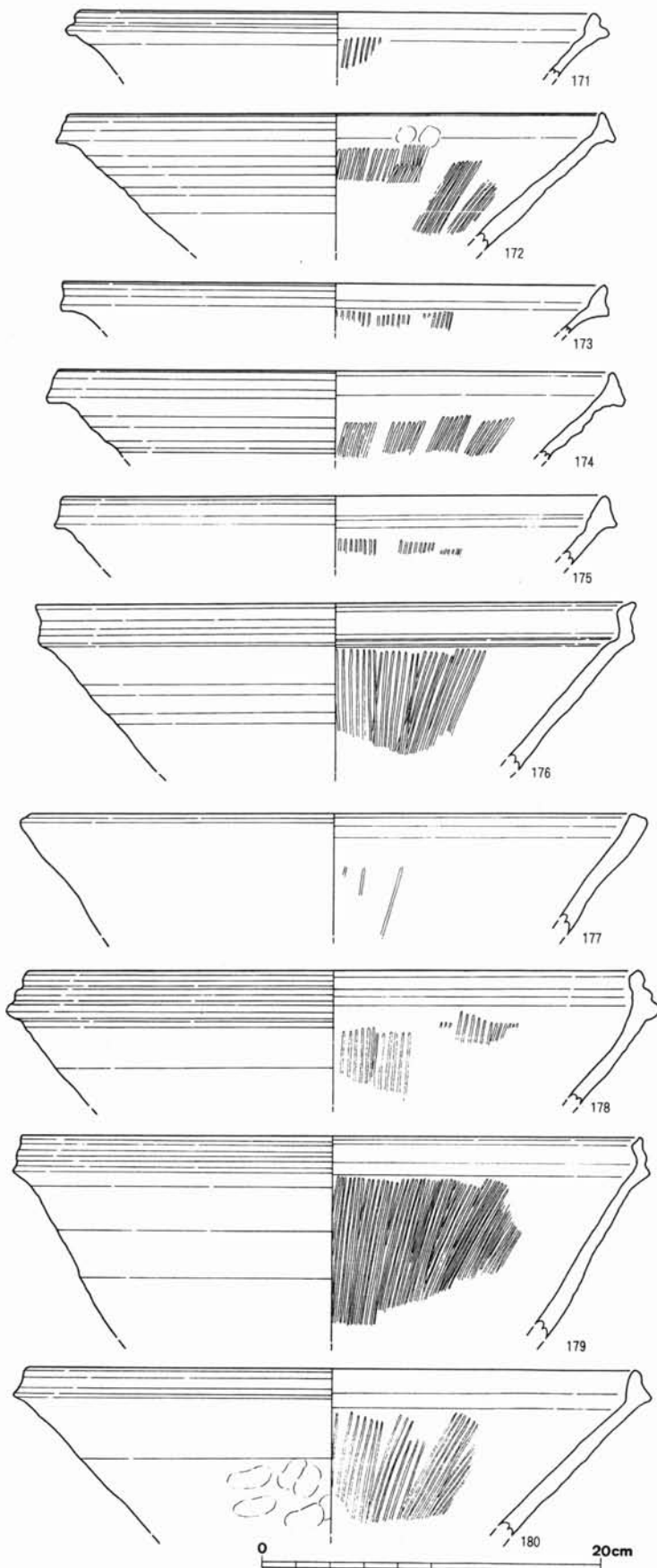
土坑 S K 604 (56~62) 56・57は土師器の皿で、56には口唇部内外面にススが付着している。58は砂目蛇ノ目釉ハギのくらわんか椀である。59コンニャク印判の小杯で底部には中国年号の崩れたものが施文される。61は印刻の青磁香炉で底部には3か所の獣脚が認められる。62は鉄釉刷毛目文大皿である。

土坑 S K 606 (63~66) 63は土師皿である。64は唐津系灰釉椀。高台内面にも施釉。65は土瓶の蓋である。67は土師質の涼炉である。外面には判による文字が押印される。

土坑 S K 609 (67~76) 67~70は土師器皿である。71は白磁の小杯である。72は染付の椀である。73は形打ち皿で砂目が認められる。74は肥前系絵皿である。75は唐津の皿である。蛇ノ目釉



第40図 第7次調査土坑状遺構S X701出土遺物実測図(2)



第41図 第7次調査土坑状遺構S X701出土遺物実測図(3)

ハギで釉薬の無い部分には鉄釉で同心円状に施文される。76は砂目蛇ノ目釉ハギの青磁皿である。高台見込み部分に墨書が認められる。

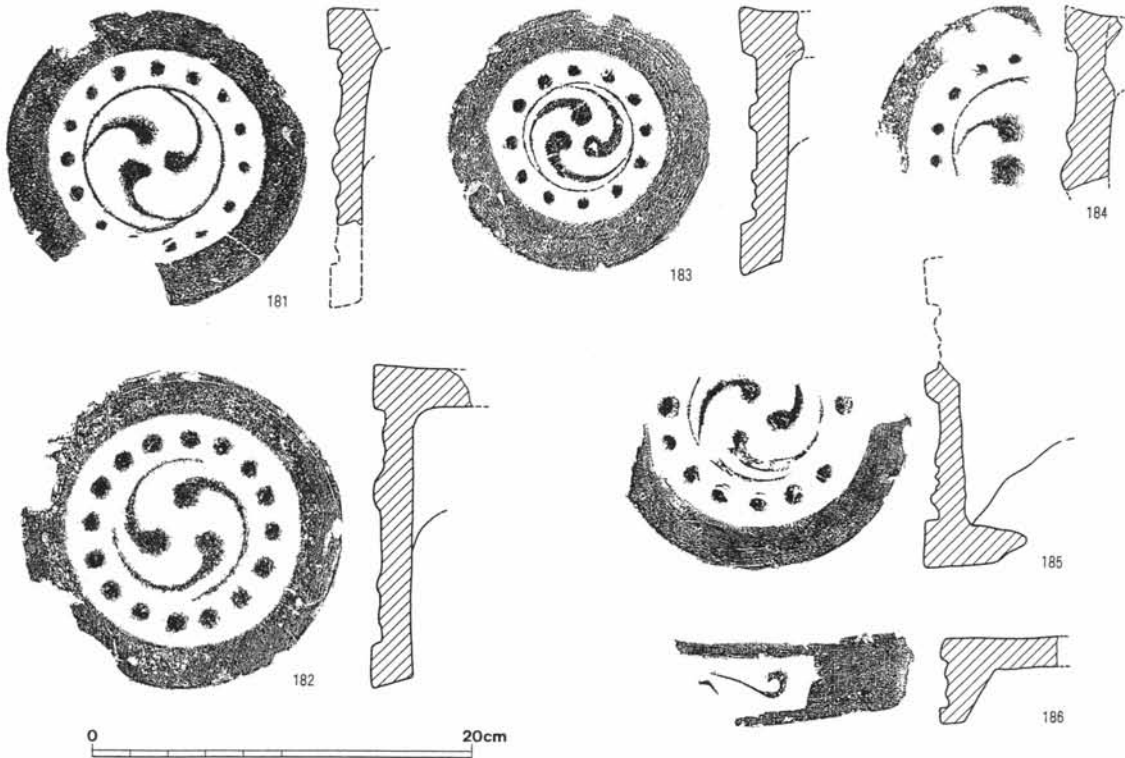
土坑S K612(77・78) 77は見込み蛇ノ目釉ハギの灰釉皿である。高台見込み部分に墨書が認められる。78は灰釉皿で砂目が認められる。

土坑状遺構S X613(79~85) 79は天目茶碗である。80は唐津鉄絵碗である。81は伊万里灰釉染付皿である。82は見込み蛇ノ目釉ハギの唐津緑釉皿である。83は丹波焼の盤である。84・85は信楽系の甕である。

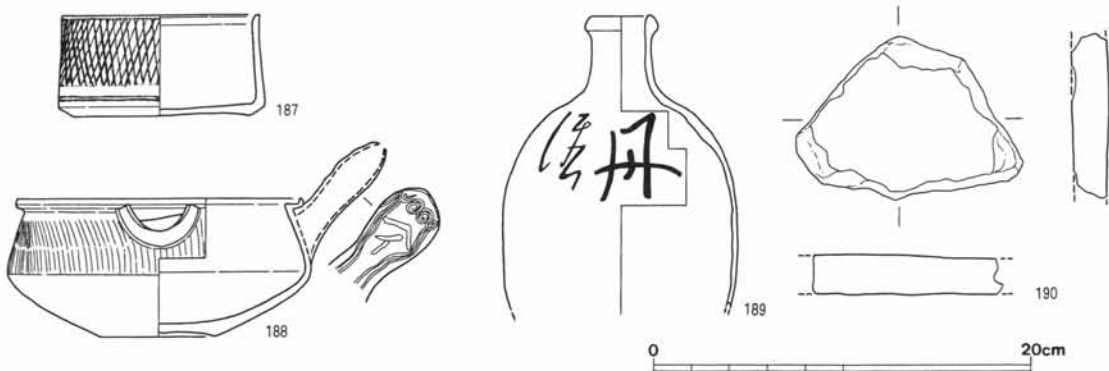
包含層(87~96) 86は京焼の小杯である。87は染付の水差しである。88は白磁の小杯である。89は見込み蛇ノ目釉ハギの伊万里皿である。90は染付蓋である。91は摘みに亀をあしらった土瓶の蓋である。92・94・95は土瓶である。93は土瓶の蓋である。96は鉄釉甕で、口縁部に方形の削り込みが認められる。

3) 第7次調査(第39~43図)

土坑状遺構S X701(97~186) 97~130は土師皿である。直径7.2cm前後の小型、直径12cm前後の中型、直径15.5cm前後の大型の3種があり、それぞれの大きさに口唇部にススの付着したものがあ

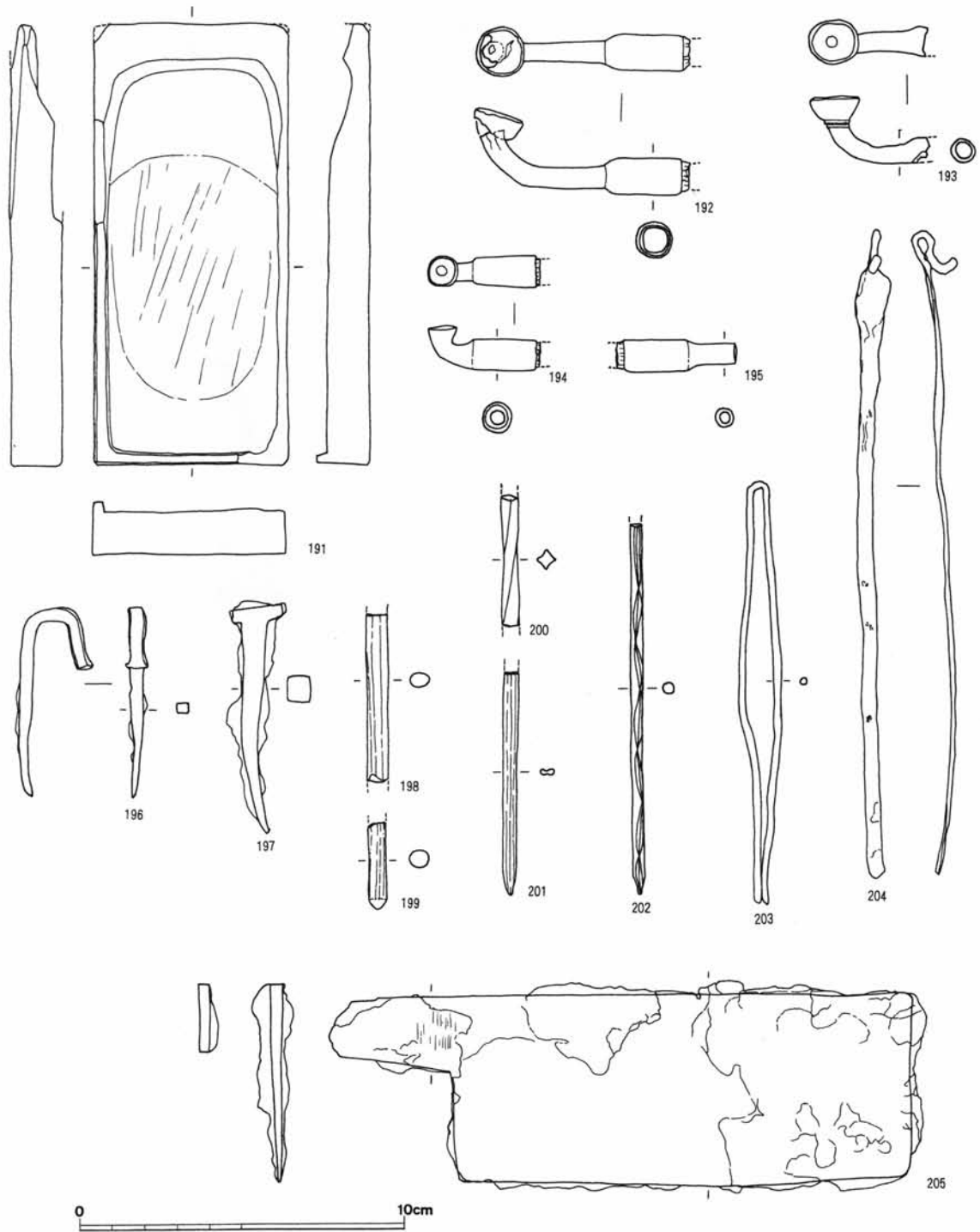


第42図 第7次調査土坑状遺構S X701出土瓦実測図



第43図 第7次調査出土土器実測図

は内面屈曲部に強いナデが認められる。131は土師質の火消し壺の蓋である。132・137は土師質の羽釜の口縁部と考えられる。133は丹波の火入れである。134・138は土師質の焙烙である。135は瓦質の火鉢である。136は波状の口縁をもつ丹波の鉢である。139丹波の鉢である。140・144は白磁の小杯である。141～143・145は染付の小杯である。146・147・149・150は天目の碗である。148は染付碗で高台見込み部分に崩れ名がある。151は唐津碗で高台施釉である。154は緑釉碗である。152・153・156は唐津碗である。157は染付壺である。158は砂目青磁皿である。159は蛇ノ目釉ハギ青磁皿である。160・162は灰釉の唐津皿で砂目が認められる。163は伊万里染付皿で砂目が認められる。164は伊万里染付大皿である。165は鉄釉の澁瓶である。摘みは橋状を呈する。166は伊万里染付皿で砂目が認められる。見込み部分は蛇ノ目釉ハギである。167は伊万里染付鉢



第44図 石製品・金属器・ガラス製品実測図

である。168は唐津三島手鉢である。169は唐津三島手皿である。170は唐津刷毛目大鉢である。171～180は丹波の播鉢である。181～185は巴文の周りに連珠文が施された軒丸瓦である。182は巴が逆方向に巻くが、こうしたものは極めて少ない。185は頸の部分の下端内面に突起のある軒丸瓦である。186は唐草文の施された軒平瓦である。

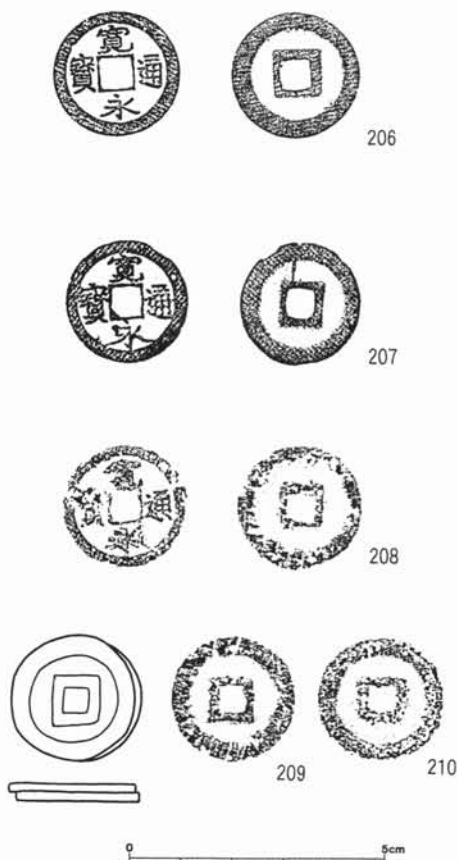
土坑状遺構 S X 702 189は釉薬を欠くことによって文字が書かれた丹波系の貧乏徳利である。

土坑 S K 710(187・188) 187は染付陶重の1段目である。188は行平で外面にススが付着する。

包含層 190は形象埴輪の破片であり、赤色顔料の痕跡が表面に認められる。家形あるいは蓋形と考えられる。同様の埴輪は、第1次調査でも出土している。同調査では小型の方墳が検出されているが、近くの徳雲寺古墳群において小型の方墳が埴輪を伴う事例がある。

(2)石製品・金属製品・ガラス製品(第44・45図)

191は土坑状遺構S X 701出土の黒色粘板岩製の硯である。硯縁は部分的に破損している。192・193は同じくS X 701出土の銅製キセルの雁首である。194・195は土坑状遺構S X 702出土の銅製キセルの雁首と吸口である。196・197は土坑S K 602出土の断面四角形の鉄釘である。198・199は白色の石製筭と考えられる遺物である。研磨による面取り加工により断面を円形に整える。198は包含層、199は土坑S K 702から出土した。200は土坑S K 602出土の4つの稜をもちそれを螺旋状にねじったガラス製筭である。201は土坑S K 602出土の断面がひょうたん型になるガラス製筭である。202は土坑S K 602出土の透明のガラスの中に3本の紺色のガラスを封入した筭である。203は土坑S K 602出土の銅製の簪である。飾り部分は欠損している。204は土坑状遺構S X 701出土の銅製の筭である。205はS X 701出土の鉄製菜切り庖丁である。206・207は土坑S K 602出土の寛永通寶である。208は土坑状遺構S X 701出土の寛永通寶で、209・210も出土している。209・210は銭名が確認できないが寛永通寶と想定できる。寛永通寶は、いずれも1656年以前の铸造とされる古寛永である。



第45図 出土銭貨拓影

4. まとめ

今回報告の発掘調査では、17～19世紀の園部城関連遺物が多く出土している。遺構については、建物跡などが復原できるものは無かったが、土坑状遺構S X 701に代表される17世紀半ばから後半の遺物群を検出した。陶磁器はほぼ肥前系に限られ、大型のものに丹波と考えられるものが含まれる。この遺物の組み合わせから丹波地域における陶磁器の利用状況が明らかになった。江戸時代後期には、涼炉や底部にすす痕のある土瓶が出土しており、煎茶の流行を窺わせる。

また、本丸部分ではかつて埴輪をもつ方墳が検出されたが、今回の調査でも形象埴輪片や古墳時代と考えられる須恵器片が出土している。冒頭で述べたように園部城は高位段丘の平坦面を利用して築城されており、古墳の周濠が残っていることから土地の改変はそれほど大規模でなかったことがわかる。高位段丘の比高差のある平坦面と独立丘陵を利用した城に、同じく穴人城がある。小出吉親は、穴人城に園部城ができるまでとどまったとされていることから、穴人城を普請

の参考にしたものと考えられる。

(中川和哉)

参考文献

園部町教育委員会編『社会科副読本 園部の歴史』 1998

引原茂治他「園部城跡」『京都府遺跡調査概報』第4冊 1982

鶴島三壽他「園部城跡第2次」(『京都府遺跡調査概報』第28冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1988

黒坪一樹「園部城跡第2次」(『京都府遺跡調査概報』第70冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1996

田代弘「園部城跡第5次」(『京都府埋蔵文化財情報』第92号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2004

田代弘「園部城跡第6次」(『京都府埋蔵文化財情報』第95号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2005

辻健二郎『園部町小山東町土地区画整理事業に伴う発掘調査報告書(徳雲寺谷遺跡群)』 園部町教育委員会 1997

4. 案察使遺跡第7次発掘調査概要

1. はじめに

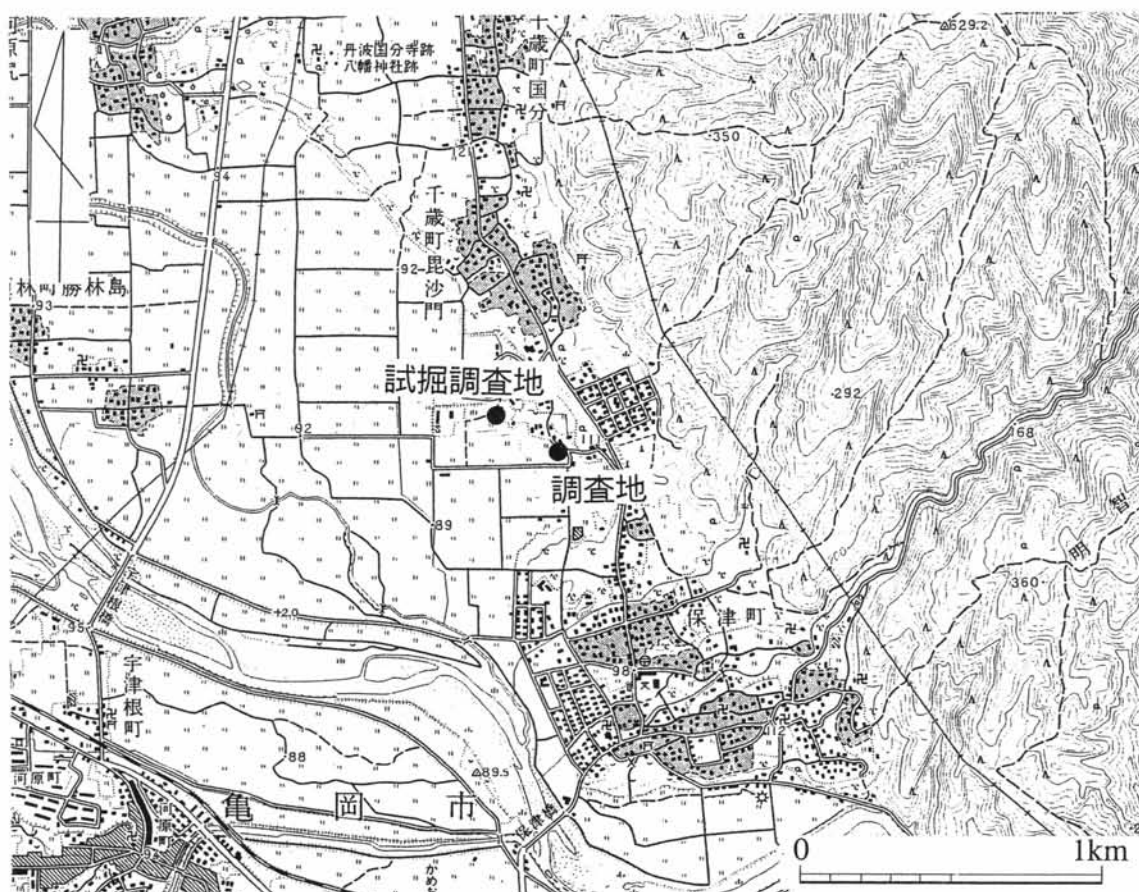
平成17年度の案察使遺跡第7次発掘調査は、京都府土木建築部の依頼により主要地方道亀岡園部線地方道路交付金事業に先立つ調査として実施した。遺跡の所在地は、亀岡市保津町出井ほかである。

今回の調査対象地は、本調査を行う地点と試掘調査を行う2地点があり、本調査部分は平成17年10月18日～11月25日、試掘調査は平成18年1月19日～2月6日までそれぞれ実施した。調査面積は本調査部分が400m²、試掘調査が60m²の計460m²である。

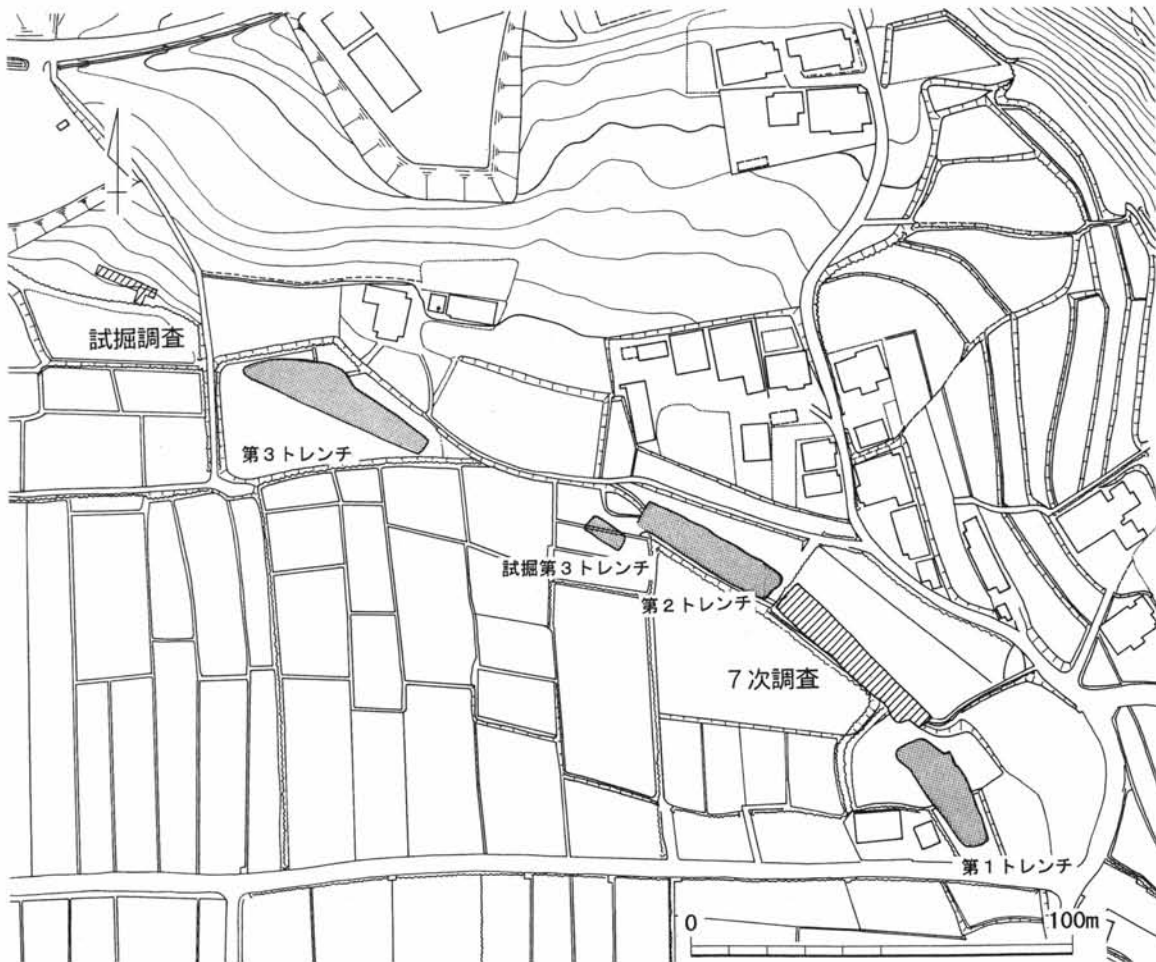
調査は、当調査研究センター調査第2課課長補佐兼調査第2係長奥村清一郎、同主任調査員中川和哉(本調査)、同主任調査員松井忠春(試掘調査)がそれぞれ担当した。

調査期間中は、亀岡市教育委員会・京都府教育委員会・京都府立丹後郷土資料館・地元各自治会・保津地区の方々に多くの御配慮をいただいた。記してお礼申し上げたい。

なお、今回の調査に係る経費は、全額、京都府土木建築部が負担した。



第46図 調査地位置図(国土地理院1/25,000亀岡)



第47図 案察使遺跡第6・7次トレンチ配置図(ほ場整備前地形図)

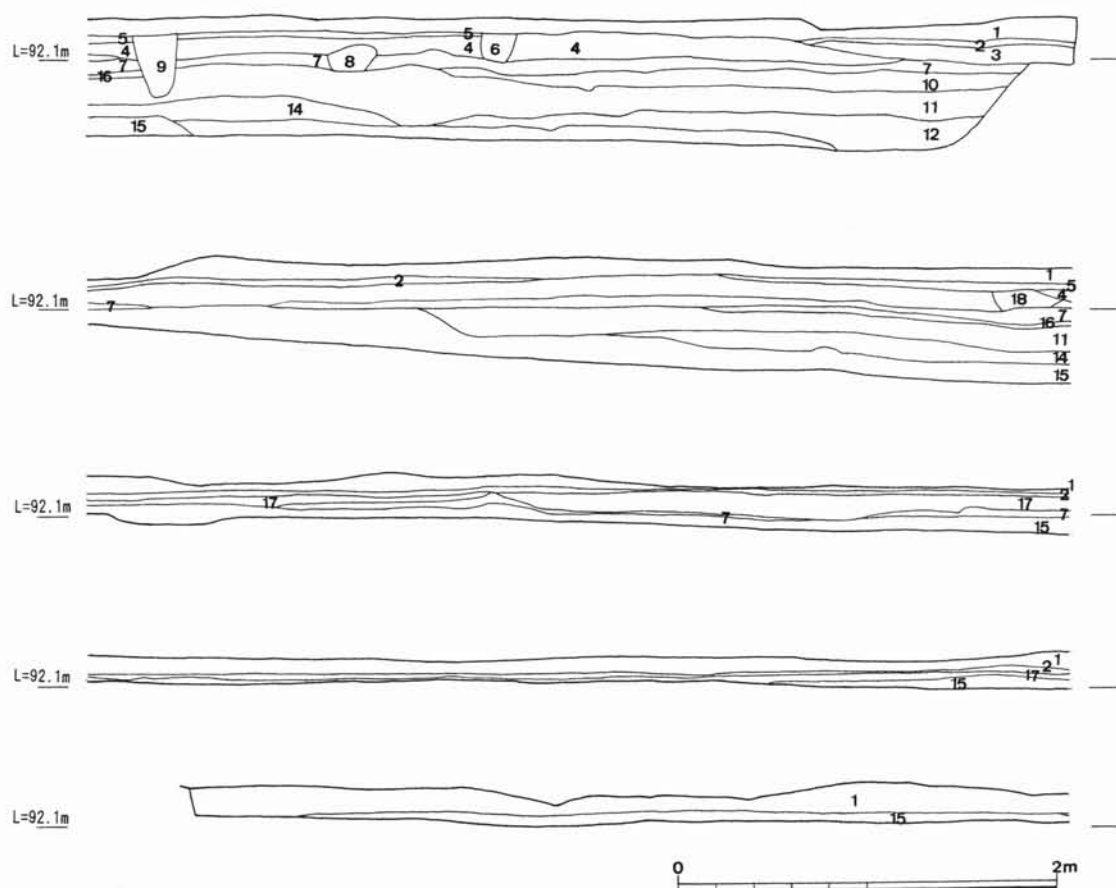
2. 位置と環境

今回報告する遺跡の所在する亀岡市は、旧国名で言う丹波国の地域にある。この丹波地域は山が多く京都府内の分水嶺にあたる。丹波山地では鮮新・更新世の後半から褶曲や段層運動が起こり、盆地地形が随所に認められる。遺跡はその盆地の1つである亀岡盆地に位置する。亀岡盆地は、京都市の所在する京都盆地に隣接する盆地で、その中央部分を北西から南東に桂川が貫いて流れる。盆地周辺の山地からは桂川に向かって小河川が流れ込み、それらの河川によって浸食され段丘地形が形成されている。

調査対象地のある、桂川の左岸地域では、案察使遺跡の縄文時代早期の土器が最も古い遺跡である亀岡市馬路町の三日市遺跡で縄文時代中期末の土器片が採集されている。発掘調査では、大淵遺跡(戸原2003)において縄文時代晩期の突帯文土器を2個体用いた甕棺墓が検出されている。

弥生時代に入ると大淵遺跡・池尻遺跡・河原尻遺跡・蔵垣内遺跡において前期の遺物が出土している。中期には亀岡市の時塚遺跡、里遺跡で住居跡や方形周溝墓が検出されている。左岸では弥生時代後期のものとして案察使遺跡、蔵垣内遺跡、里遺跡で遺構・遺物が検出されている。

古墳時代に入ると亀岡盆地にも古墳が営まれるが、保津山古墳(案察使2号墳)は埴輪をもつ中期末の円墳で、主体部は箱式石棺で乳文鏡や管玉、鉄器が出土している。古墳群の中で唯一の前

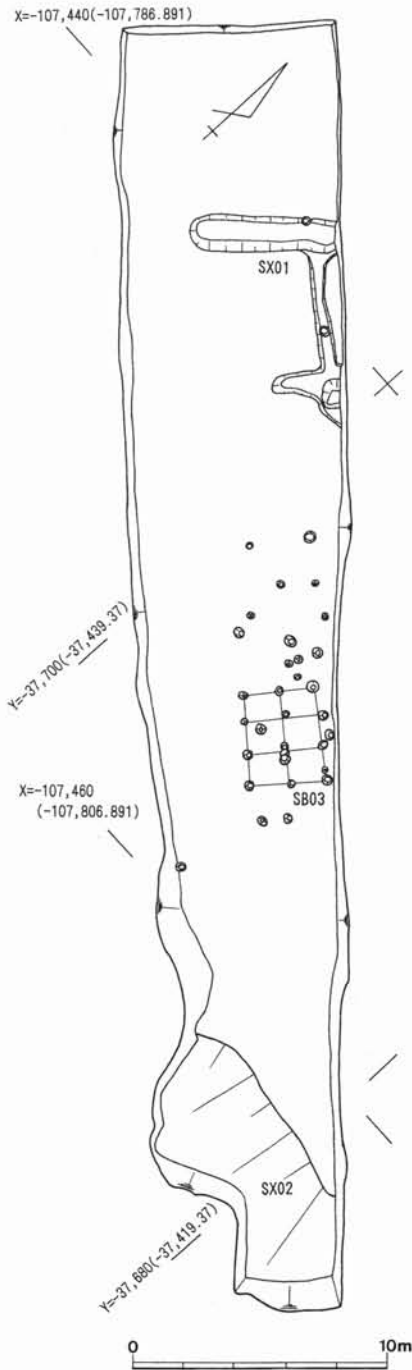


1. 耕作土 2. 暗黄褐色礫混砂質土 3. 暗黄褐色混灰色礫混砂質土 4. 淡灰色砂礫
 5. 暗黄褐色礫混砂質土 6. 暗渠埋土 7. 灰色礫混砂質土 8. 暗渠埋土 9. 暗渠埋土
 10. 淡灰色砂礫 11. 暗灰色礫混粘砂質土 12. 暗灰色砂礫 13. 淡灰色粘砂質土
 14. 黄灰褐色粘砂質土 15. 暗黄灰色砂礫 16. 暗黄褐色礫混砂質土
 17. 暗褐色ブロック混黄灰色粘砂質土 18. 暗褐色ブロック混黄灰色礫混粘砂質土

第48図 調査地土層図

方後円墳である保津車塚古墳(案察使1号墳)は当調査研究センターが発掘調査を行い、2重の周溝をもつ前方後円墳であることがわかった。坊主塚、榊塚に代表されるように古墳時代中期から後期初めに方墳が採用される地域においては、貴重な存在である。同じ左岸の千歳車塚古墳(国史跡)は全長82mの規模をもち、盾形周濠を備えた前方後円墳である。墳丘は三段築成で、葺石と埴輪を伴う。埴輪から6世紀前半の古墳と考えられる。この時期の古墳としては丹波最大であることはもちろん全国的に見ても大規模なものと位置づけられる。この古墳の東には丹波一宮である出雲神社が鎮座している。

律令期に入ると全国に国府が置かれ、亀岡市域が含まれる丹波国にも設置された。丹波国は和銅6(713)年に丹後国と分国されたが、旧来の丹波の中心は丹波郡のある丹後国側とされている。したがって、分国以前の国府の所在は定かではない。国分寺・国分尼寺・一宮が亀岡市内に存在することから奈良時代から亀岡市内に国府があったものと想定される。10世紀の「和名類聚抄」



第49図 調査トレンチ平面実測図

丘陵の縁に沿って湾曲しており、段丘崖と考えられる比高差が認められる。段丘下は面積が狭く、湧水が激しく既存の水路を壊す可能性があったため水路から、控えて調査地を設定した。

今回の調査区では西側で段丘崖と考えられる地形、南側では第1トレンチで検出した土坑群の検出面へと続く谷状地形の落ち込みを検出することができた。段丘崖側には石垣があり、近世に旧地形が拡張され、農地が作られたものと考えられる。

溝状遺構 S X01 調査地の最も高い部分で「コ」の字状の溝が検出できた。平行する溝は比較的深くその溝をつなぐ溝は浅い構造をもつ。昨年の第2トレンチに隣接する北側でも「コ」の字状を呈する溝が確認されており、弥生時代中期の土器棺墓が検出されていることから、弥生時代

には亀岡市のある桑田郡に所在することが記されているが、国府の位置については、諸説があり決着を見ていない。

天平13(741)年の詔によって造られた国分寺・国分尼寺も前述したように桂川左岸にあり、近年の三日市遺跡の調査では、国分寺創建時の瓦窯の灰原が調査されている。

現在は、JR山陰線、国道9号線、近世の城下町がある桂川右岸が開けているが、古代においては亀岡盆地の中心地が左岸地域にあったことが上記のような状況からうかがい知ることができる。

案察使遺跡では、平成14年度の調査において土器作りのための粘土を採掘したと考えられる多くの土坑が検出され、その内部からは弥生時代末の土器が出土している。同時に木製品なども出土している。平成16年度の調査では、平成14年度調査地と近接する調査トレンチから弥生時代中期と後期末の粘土採掘坑が検出された。また、丘陵上にある第2トレンチからは、弥生時代中期の土器棺墓や平安時代末の柱穴が検出できた。出土遺物には中世や平安時代、奈良時代、古墳時代の遺物が含まれていた。湧水点直下にトレンチを設定した第3トレンチでは、縄文時代早期の押型文土器などと伴に^{あいら}隠岐鬱稜火山灰が検出でき、土器がその下層から検出できたことから、年代決定の重要な資料を提出した。

3. 調査概要

平成16年度の第1トレンチと第2トレンチの間に新たに調査トレンチを設けて発掘調査を実施した。調査対象地は

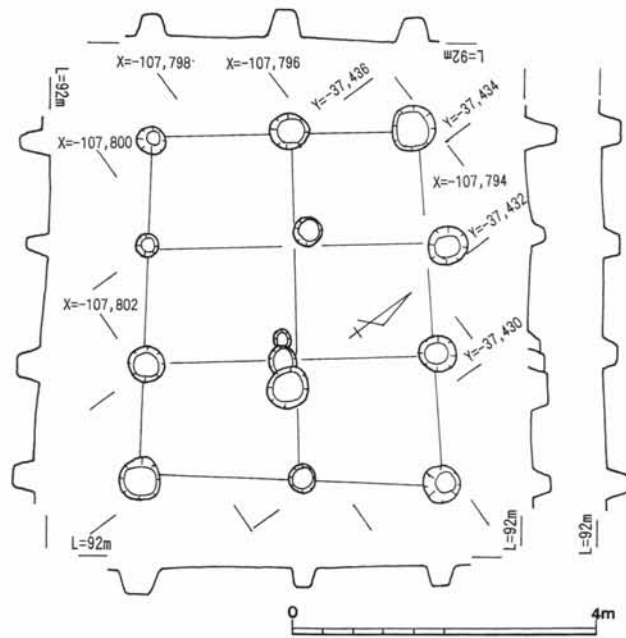
丘陵の縁に沿って湾曲しており、段丘崖と考えられる比高

中期の方形周溝墓の可能性が指摘できたが、遺構内からは古墳時代の須恵器が検出されている。

掘立柱建物跡 S B03 2間×3間と考えられる総柱の掘立柱建物跡である。その特徴から中世のものと考えられる。この建物の周りにはまよりの確認できない柱穴群が認められるが、出土遺物は検出できなかった。

西部の段丘崖斜面部では、古墳時代・奈良時代・中世の土器が出土している。また、谷部に向かう南部の落ち込み S X02からは弥生時代末の土器が出土しているが、上層では奈良時代のものも含ま

れている。この谷を埋めている礫層は、角のある礫で、谷奥からの土石流堆積物であると考えられる。なおこの谷部では粘土採掘坑と考えられる土坑が、近接する第6次調査第1トレンチで検出されていたが、今回の調査区内では、素掘りの用水路を壊す可能性があることや、湧水が激しく礫層が厚く堆積しており、掘削に危険が伴ったため底部は検出しなかった。



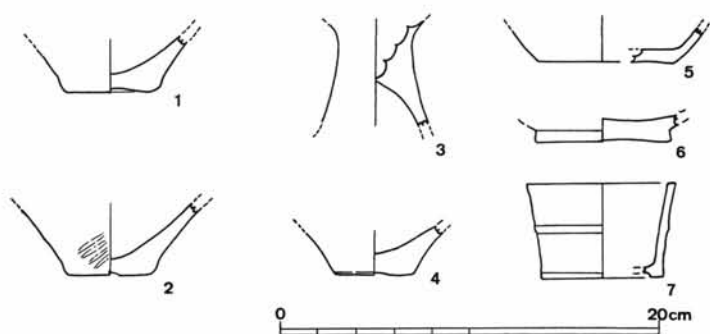
第50図 掘立柱建物跡 S B03実測図

4. 試掘トレンチ

試掘として平成16年度トレンチの東側の上火無地区に広がる竹藪に、60㎡のトレンチを設定した。調査の結果、しまりの悪い礫層や旧地表などが検出できたが、碎片の土師器片以外の時期を決める出土遺物はなかった。堆積物は、これまでの調査区では段丘礫と考えられる締まった礫層がベースになっていたが、この地域では礫層のあり方が異なっており、本来の遺構検出面が発見できなかった。これらの礫層は土石流や洪水層の可能性があり、この堆積物が局所的なものか検討していく必要がある。

5. 出土遺物

1～4は S X02出土の弥生時代終末期の土器片である。全体的に磨滅が激しく調整などは、2を除きほとんどわからない。2は器表面にタタキの痕跡が認められる。5・6は須恵器である。5は杯Aで、6は全体的に磨滅が激しいが、緑釉あるいは緑釉の生地 of 碗の底部である。7は万古焼の猪口で、調査区西側に石垣を築き耕作地を拡張した時期を示している。このときに丘陵頂部が平坦化されたものと考えられる。



第51図 出土遺物実測図

6. まとめ

調査対象地内では、旧地形の変換点を検出した。調査前の平坦な水田面は、江戸時代以降の拡張によって作られたものであることがわかった。調査トレンチの平坦部は包含層が削られ、地山に至っており、削平されず

に残された深い遺構のみが検出された。また、段丘斜面部には若干の包含層が残されており古墳時代、奈良時代、中世の遺物が出土している。旧地形から見ると今回の調査地は段丘と谷の縁部に回り、遺構が本来まばらな地域であったことが推測できる。

試掘調査では、近接する第6次調査の第3トレンチで縄文時代早期の土器が出土していることから同時期の遺構が確認されることが期待されたが、堆積状況から見て本来の意向面は存在していなかった。丘陵地を形成する基盤層と異なることから、局所的な状況の可能性もあり周辺地域においては慎重に調査していく必要がある。

(中川和哉)

参考文献

- 戸原和人「国営農地再編整事業(亀岡地区)関係遺跡」(『京都府遺跡調査概報』第103冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2002
- 戸原和人・福島孝行「国営農地再編整事業(亀岡地区)関係遺跡」(『京都府遺跡調査概報』第108冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2003
- 中川和哉「案察使遺跡第5・6次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第116冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2005

5. ^{もろはた}諸畑遺跡第4次発掘調査概要

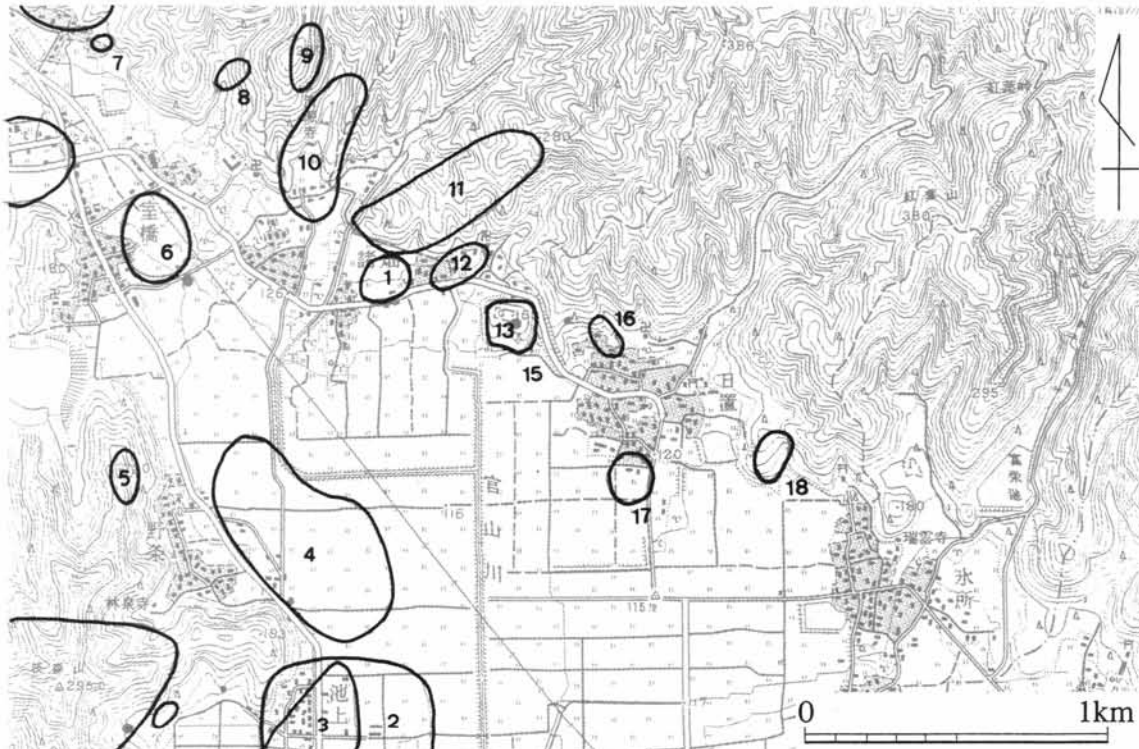
1. はじめに

諸畑遺跡は、京都府南丹市八木町諸畑松本に所在する。

諸畑遺跡第4次発掘調査は、府営経営体育成基盤整備事業川東地区に伴い、京都府南丹土地改良事務所の依頼を受けて実施したものである。本調査は平成16年度に京都府教育委員会が実施した試掘調査の成果に基づき実施した。調査期間は平成17年5月13日～9月5日、調査面積は、750㎡である。発掘調査は、当調査研究センター調査第2課調査第1係長小池寛、同調査員福島孝行が担当した。

既往の発掘調査成果としては、平成10年度に八木町教育委員会が実施した試掘調査(第1次調査^(注1))、平成16年度に京都府教育委員会が実施した試掘調査(第2次調査^(注2))、同年に当調査研究センターが実施した第3次発掘調査^(注3)によって、弥生時代後期～古墳時代前期の竪穴式住居跡のほか、弥生時代中期・奈良時代・平安時代・鎌倉時代の柱穴・土坑・溝などが検出され、各時代の集落が広汎に広がっていることが確認された。

諸畑遺跡は亀岡盆地の北端に位置し、その北側に横たわる諸木山から流れ下る官山川が形成す



第52図 調査地および周辺遺跡分布図(国土地理院1/25,000殿田)

- | | | | | | |
|----------|-----------|-----------|------------|-----------|-----------|
| 1. 諸畑遺跡 | 2. 池上遺跡 | 3. 狐塚遺跡 | 4. 野条遺跡 | 5. 野条砦跡 | 6. 室橋遺跡 |
| 7. 舟枝館跡 | 8. 美津谷古墳群 | 9. 畑中城跡 | 10. 大谷口古墳群 | 11. 松本古墳群 | 12. 福本古墳群 |
| 13. 鎧塚古墳 | 14. 天王古墳 | 15. 八木田遺跡 | 16. 西上里古墳群 | 17. 日置遺跡 | 18. 東山古墳群 |

る扇状地上に立地する。諸畑遺跡の南西約1kmには弥生時代後期を中心とする野条遺跡、さらにその南約1kmには弥生時代中期を中心とする池上遺跡が存在し、弥生時代の集落が山塊の裾部に展開する扇状地や低位段丘上に存在することが明らかとなってきている。

なお、調査中・整理中には関係各機関・個人の方にさまざまな形で御協力頂きました。記して感謝致します。^(注4)

今回の調査に係る費用は、全額、京都府南丹土地改良事務所が負担した。

2. 調査概要

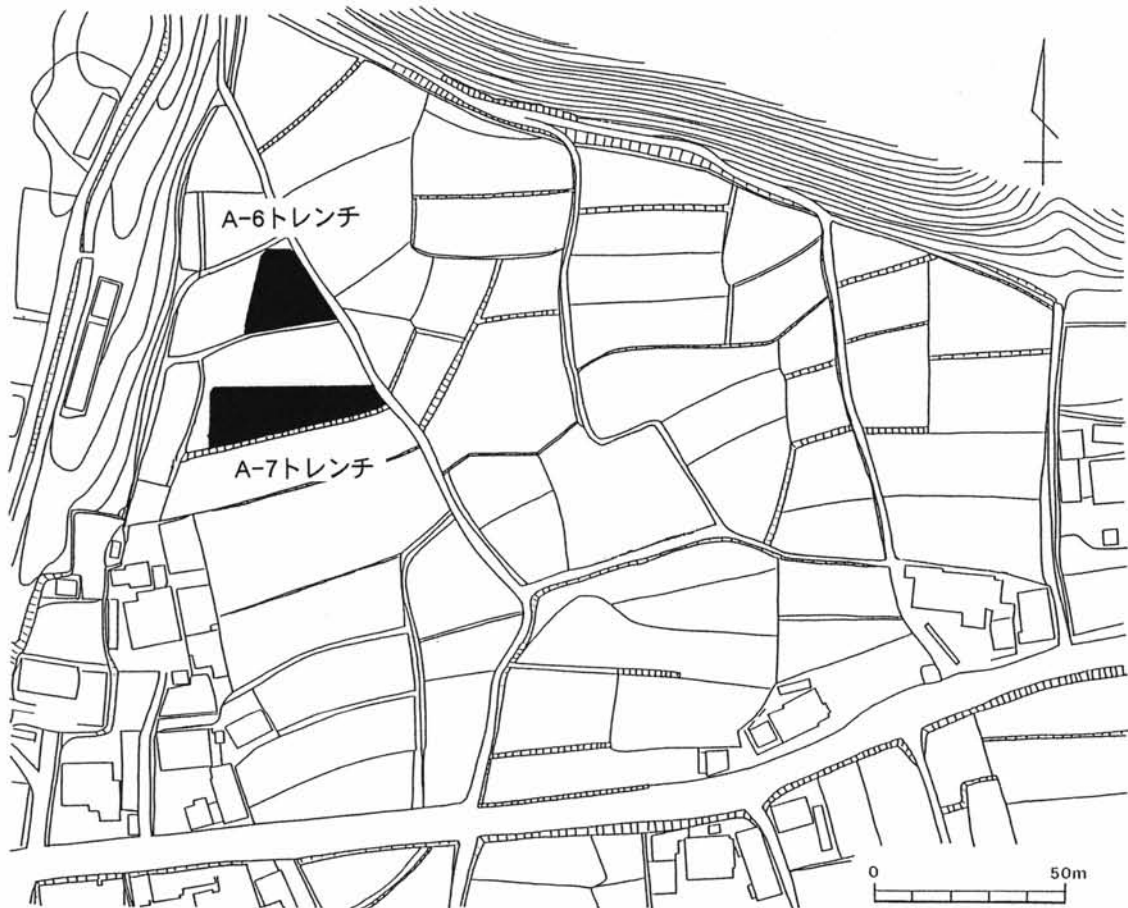
発掘調査は昨年度設定したA地区で実施した。3次調査の調査区をA-5トレンチまで設定したので、今年度は北側からA-6トレンチ、A-7トレンチとした。また、各トレンチとも2面の遺構面を検出したため、上層の遺構面を第1遺構面、下層の遺構面を第2遺構面とした。

(1) 第1遺構面

① A-6トレンチ

A-6トレンチでは、竪穴式住居跡6基と溝1条を検出した。

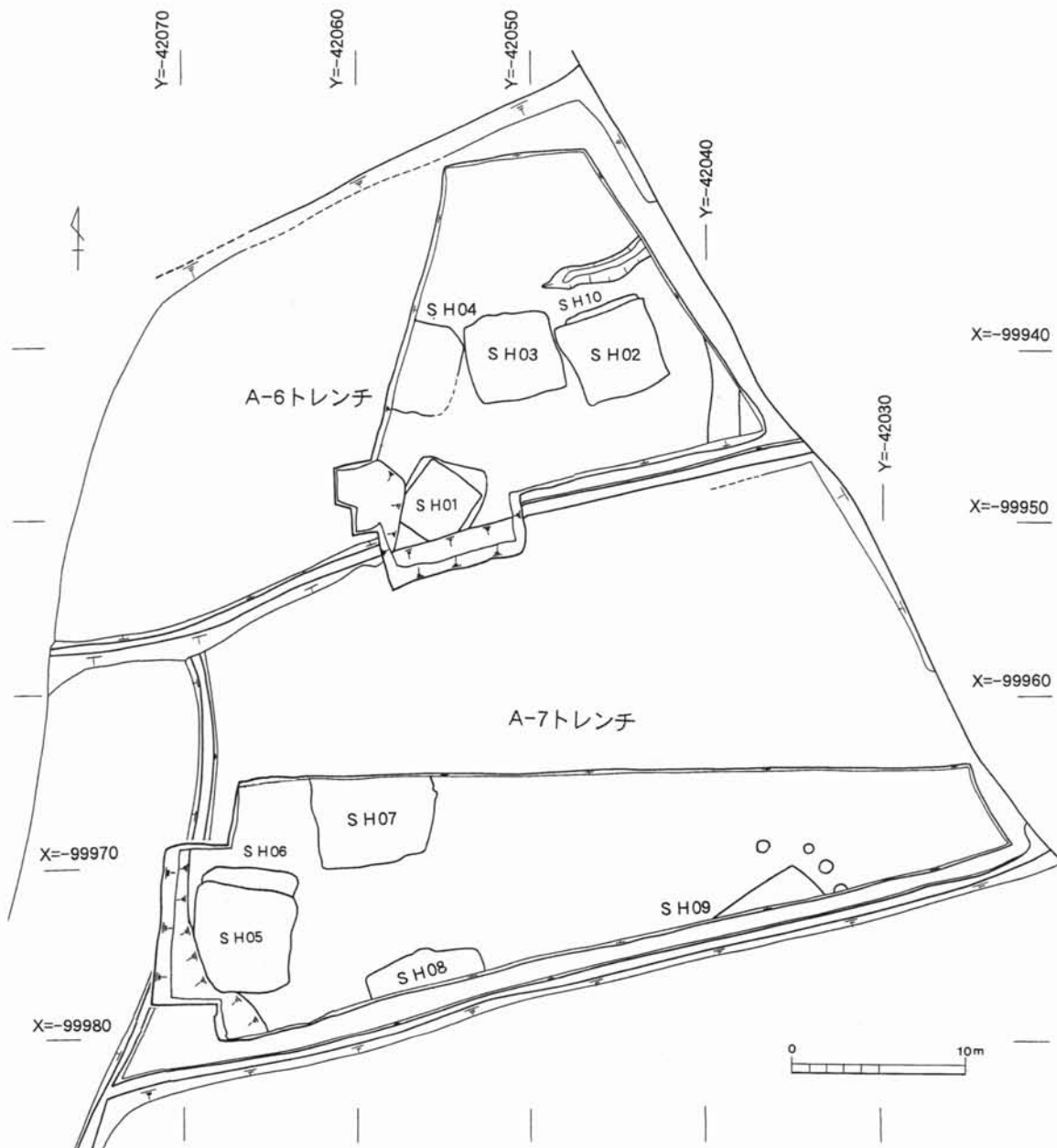
竪穴式住居跡S H01(第56・57・59図) トレンチ南西隅で検出した長軸4.1m、短軸3.7mを測る方形竪穴式住居跡である。当初この住居跡はトレンチ南壁に半分がかかっているため残り半分は調査不能であったが、関係各機関と調整した結果、一部トレンチを拡張して全面的に発掘調査



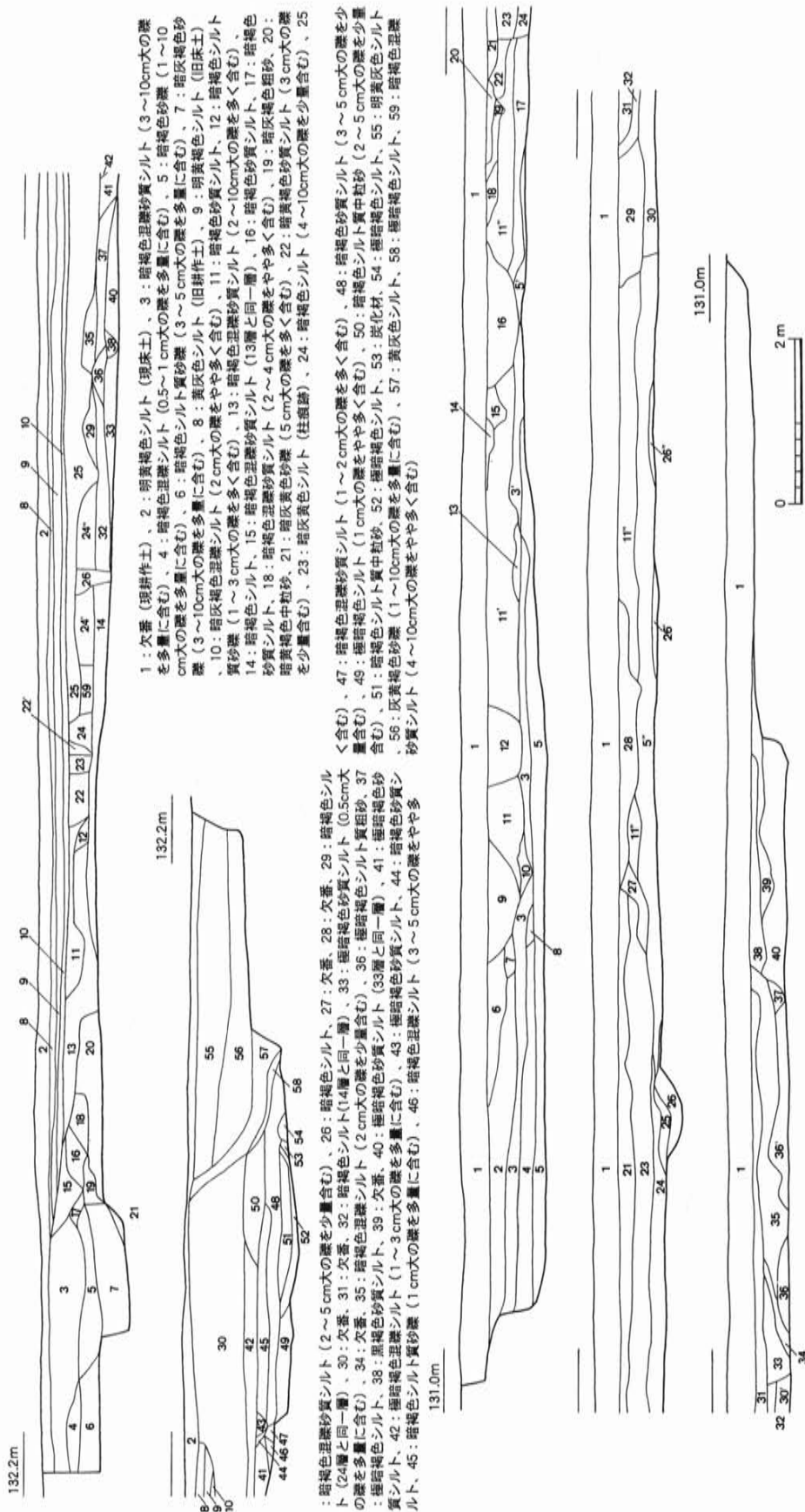
第53図 トレンチ配置図

することが可能となった。このため、結果として土層観察用セクションを住居跡の対角線に設定せざるを得なくなってしまった。SH01は土層観察と遺構輪郭の検討の結果、当初に築造された住居跡と、後に築造されたものがあることが分かり、前者をSH01-a、後者をSH01-bとした。

SH01-aは上層から炭化材が出土し始め、下層は炭灰層および焼土で構成され、住居壁も被熱して赤変していたため、焼失住居であることが判明した(第57図上)。炭化材は放射状に横たわる棒状のものと面的に広がる粉末状のものがあり、また床面に貼り付いている板状のものもあった。出土レベルは床面直上のものが多かったが、床面から10cm以上浮いたものも少なからず認められ、これらは周壁付近が高く、住居の中心付近が低くなる傾斜を持っていた。焼土は炭灰層内に散在していたが、住居跡中心部の高杯(4)の杯部に厚さ4cm程の焼土が堆積しその上に炭化材が落下した状態で検出された。この事実は屋根材が落下する以前に上を向いて床面に置いてあっ



第54図 第1遺構面遺構配置図

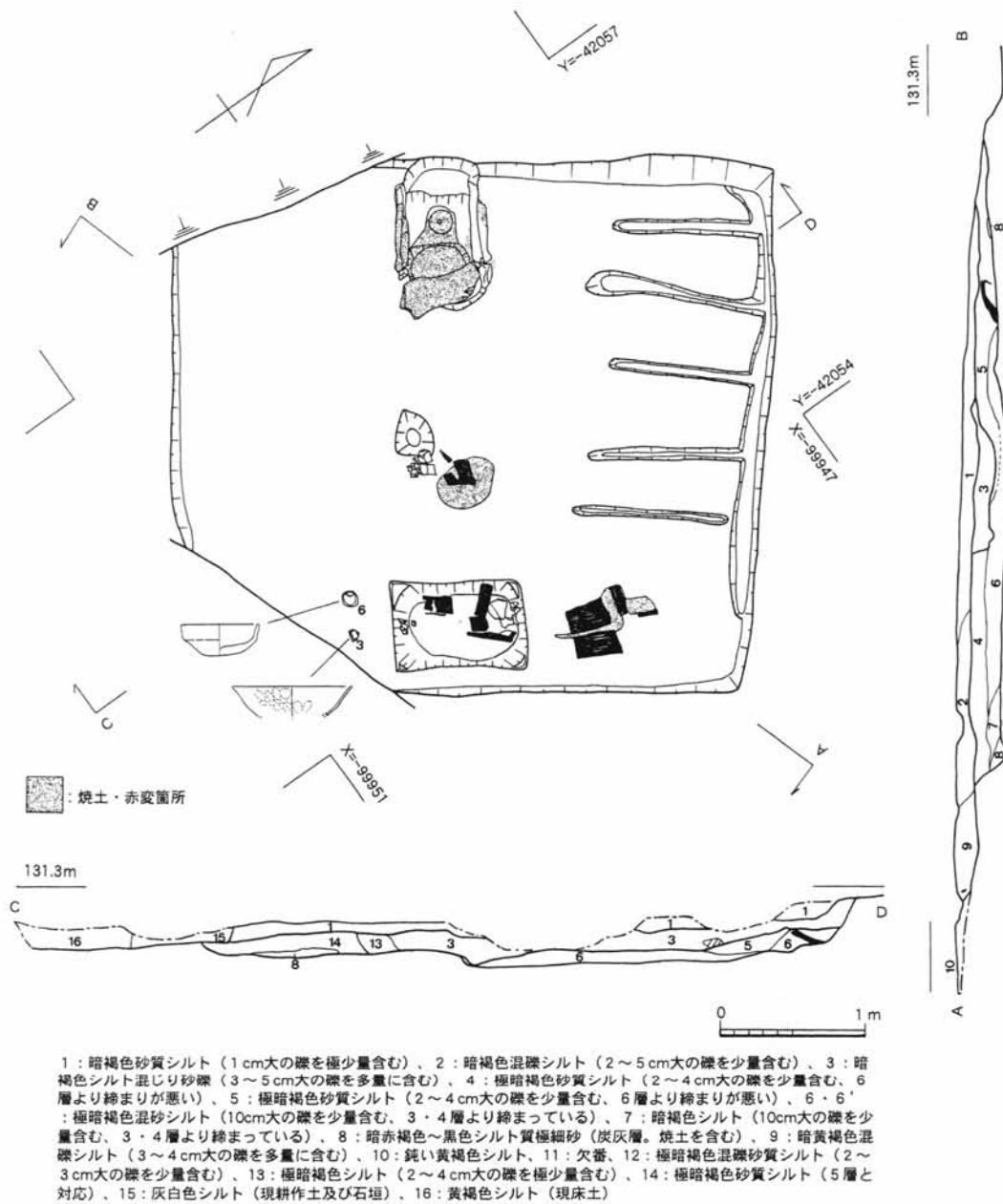


1: 灰番 (現耕作土)、2: 暗黄褐色シルト (現床土)、3: 暗褐色混雑砂質シルト (3~10cm大の礫を多量に含む)、4: 暗褐色混雑シルト (0.5~1cm大の礫を多量に含む)、5: 暗褐色砂礫 (1~10cm大の礫を多量に含む)、6: 暗褐色シルト質砂礫 (3~5cm大の礫を多量に含む)、7: 暗灰褐色砂礫 (3~10cm大の礫を多量に含む)、8: 黄灰色シルト (旧耕作土)、9: 暗黄褐色シルト (旧床土)、10: 暗灰褐色混雑シルト (2cm大の礫をやや多く含む)、11: 暗褐色砂質シルト、12: 暗褐色シルト質砂礫 (1~3cm大の礫を多く含む)、13: 暗褐色混雑砂質シルト (2~10cm大の礫を多く含む)、14: 暗褐色シルト、15: 暗褐色混雑砂質シルト (13層と同一層)、16: 暗褐色砂質シルト、17: 暗褐色砂質シルト、18: 暗褐色混雑砂質シルト (2~4cm大の礫をやや多く含む)、19: 暗灰褐色粗砂、20: 暗黄褐色中粗砂、21: 暗灰黄色砂礫 (5cm大の礫を多く含む)、22: 暗黄褐色砂質シルト (3cm大の礫を少量含む)、23: 暗灰黄色シルト (柱痕跡)、24: 暗褐色シルト (4~10cm大の礫を少量含む)、25: 暗褐色混雑砂質シルト (1~2cm大の礫を多く含む)、47: 暗褐色混雑砂質シルト (3~5cm大の礫を少量含む)、48: 暗褐色混雑砂質シルト (1cm大の礫をやや多く含む)、49: 暗褐色シルト質中粗砂 (2~5cm大の礫を少量含む)、50: 暗褐色シルト質中粗砂 (2~5cm大の礫を少量含む)、51: 暗褐色シルト質中粗砂、52: 暗褐色シルト、53: 炭化材、54: 暗褐色シルト、55: 明灰黄色シルト、56: 灰黄褐色砂礫 (1~10cm大の礫を多量に含む)、57: 黄灰色シルト、58: 暗褐色シルト、59: 暗褐色混雑砂質シルト (4~10cm大の礫を多く含む)

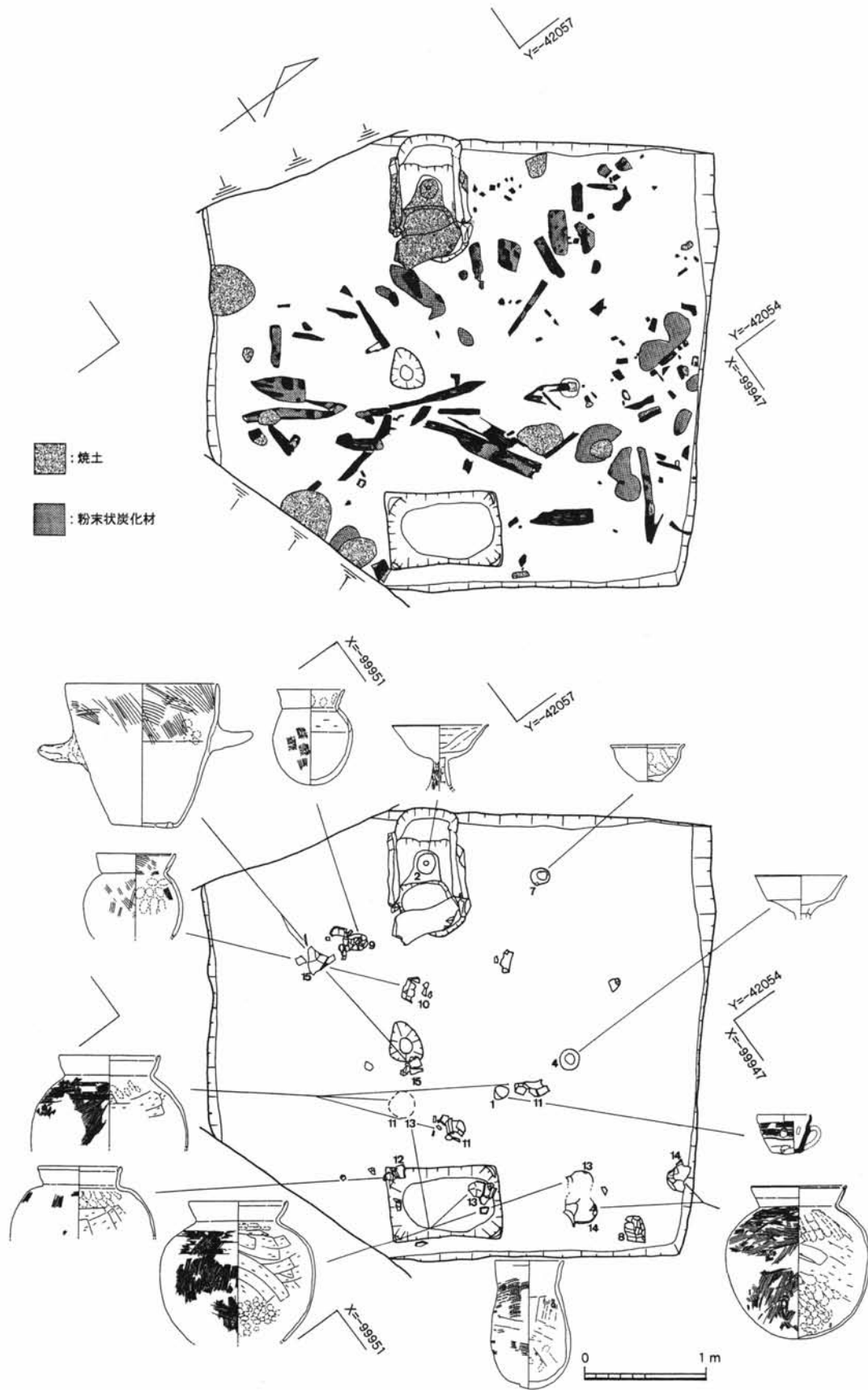
暗褐色混雑砂質シルト (2~5cm大の礫を少量含む)、26: 暗褐色シルト、27: 灰番、28: 灰番、29: 暗褐色シルト (24層と同一層)、30: 灰番、31: 灰番、32: 暗褐色シルト (14層と同一層)、33: 暗褐色砂質シルト (0.5cm大の礫を多量に含む)、34: 灰番、35: 暗褐色混雑シルト (2cm大の礫を少量含む)、36: 暗褐色シルト質粗砂、37: 暗褐色シルト、38: 暗褐色砂質シルト (33層と同一層)、39: 灰番、40: 暗褐色砂質シルト、41: 暗褐色砂質シルト、42: 暗褐色混雑シルト (1~3cm大の礫を多量に含む)、43: 暗褐色砂質シルト、44: 暗褐色砂質シルト、45: 暗褐色シルト質砂礫 (1cm大の礫を多量に含む)、46: 暗褐色混雑シルト (3~5cm大の礫をやや多く含む)、25: 暗褐色混雑砂質シルト (3~5cm大の礫を多量に含む)、22: 暗褐色混雑砂質シルト (3~5cm大の礫を多量に含む)、23: 暗褐色混雑砂質シルト (3~5cm大の礫を多量に含む)、24: 暗褐色混雑砂質シルト (3~5cm大の礫を多量に含む)、25: 暗褐色混雑砂質シルト (3~5cm大の礫を多量に含む)、26: 暗褐色混雑砂質シルト (3~5cm大の礫を多量に含む)、27: 暗褐色混雑砂質シルト (3~5cm大の礫を多量に含む)、28: 暗褐色混雑砂質シルト (3~5cm大の礫を多量に含む)、29: 暗褐色混雑砂質シルト (3~5cm大の礫を多量に含む)、30: 暗褐色混雑砂質シルト (3~5cm大の礫を多量に含む)、31: 暗褐色混雑砂質シルト (3~5cm大の礫を多量に含む)、32: 暗褐色混雑砂質シルト (3~5cm大の礫を多量に含む)、33: 暗褐色混雑砂質シルト (3~5cm大の礫を多量に含む)、34: 暗褐色混雑砂質シルト (3~5cm大の礫を多量に含む)、35: 暗褐色混雑砂質シルト (3~5cm大の礫を多量に含む)、36: 暗褐色混雑砂質シルト (3~5cm大の礫を多量に含む)、37: 暗褐色混雑砂質シルト (3~5cm大の礫を多量に含む)、38: 暗褐色混雑砂質シルト (3~5cm大の礫を多量に含む)、39: 暗褐色混雑砂質シルト (3~5cm大の礫を多量に含む)、40: 暗褐色混雑砂質シルト (3~5cm大の礫を多量に含む)、41: 暗褐色混雑砂質シルト (3~5cm大の礫を多量に含む)、42: 暗褐色混雑砂質シルト (3~5cm大の礫を多量に含む)、43: 暗褐色混雑砂質シルト (3~5cm大の礫を多量に含む)、44: 暗褐色混雑砂質シルト (3~5cm大の礫を多量に含む)、45: 暗褐色混雑砂質シルト (3~5cm大の礫を多量に含む)、46: 暗褐色混雑砂質シルト (3~5cm大の礫を多量に含む)、47: 暗褐色混雑砂質シルト (3~5cm大の礫を多量に含む)、48: 暗褐色混雑砂質シルト (3~5cm大の礫を多量に含む)、49: 暗褐色混雑砂質シルト (3~5cm大の礫を多量に含む)、50: 暗褐色混雑砂質シルト (3~5cm大の礫を多量に含む)、51: 暗褐色混雑砂質シルト (3~5cm大の礫を多量に含む)、52: 暗褐色混雑砂質シルト (3~5cm大の礫を多量に含む)、53: 暗褐色混雑砂質シルト (3~5cm大の礫を多量に含む)、54: 暗褐色混雑砂質シルト (3~5cm大の礫を多量に含む)、55: 暗褐色混雑砂質シルト (3~5cm大の礫を多量に含む)、56: 暗褐色混雑砂質シルト (3~5cm大の礫を多量に含む)、57: 暗褐色混雑砂質シルト (3~5cm大の礫を多量に含む)、58: 暗褐色混雑砂質シルト (3~5cm大の礫を多量に含む)、59: 暗褐色混雑砂質シルト (3~5cm大の礫を多量に含む)

第55図 各トレンチ南壁土層断面図

た高杯に焼土が落下したことを示している。さらにこの高杯の杯部内面は焼土が乗っていた部分が黒斑状に変色しており、火災による二次焼成中にこの現象が起こったことになる。これらの事実から火災中、炭化材が落下する以前に高杯に土が落下する状況が想定され、竪穴式住居跡の焼失実験によって求められた、上屋の倒壊まで10分程度という短時間で想定しうる状況は、茅などの屋根材の上に土をかぶせた土屋根構造か、消火のために周堤帯の土をかぶせた事による可能性が考えられる。諸畑遺跡は扇状地上の遺跡で、遺構面や包含層に礫を含まない土を探すことが困難であるため、高杯内の焼土ような精良な土を得るには意図的に選択して採取しなければならないが、周堤帯にそのような土を集めていた可能性は低いため、土屋根構造である可能性が高いと考えられる。また住居内の甕(13・14)の下部で、床面に貼り付くように出土した炭化材は厚みのない板状を呈しており、床面に何らかの敷物を敷いていた可能性を示唆している。



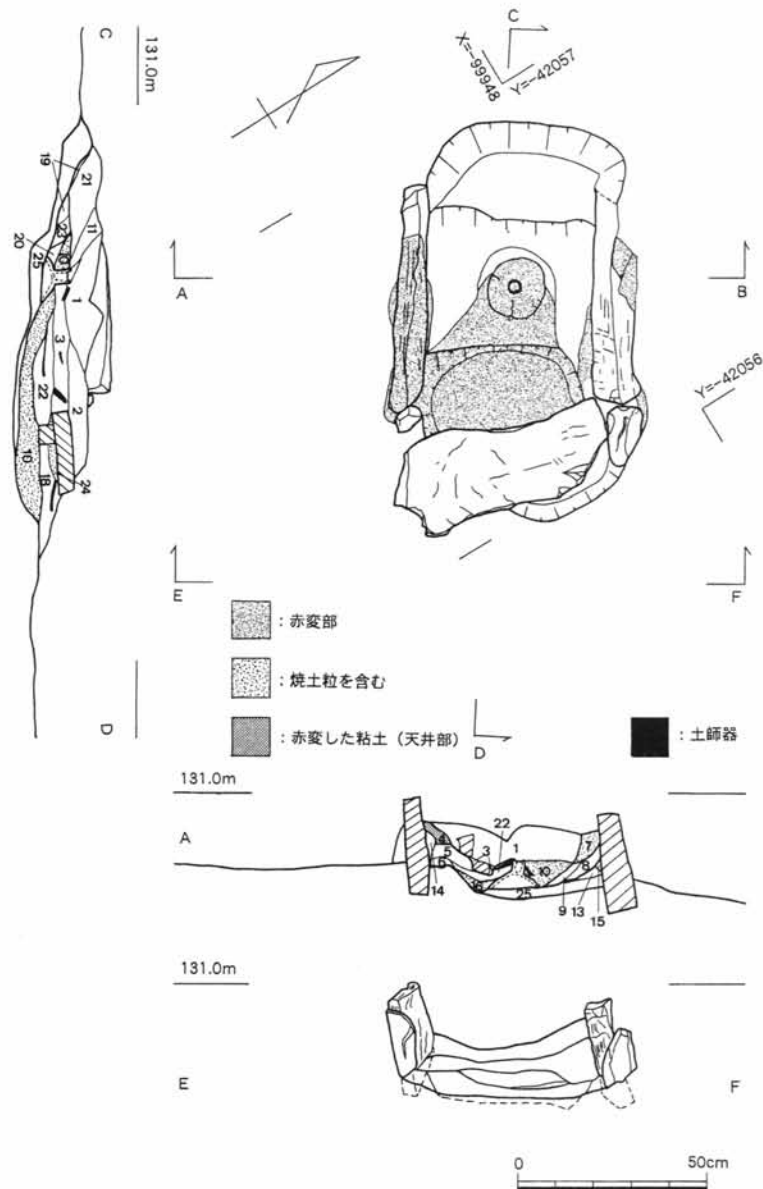
第56図 SH01-a 平面・断面図



第57図 SH01-a 炭化材・焼土・遺物出土状況図

床面で確認された住居内施設としては、竈、中央土坑、屋内土坑、竈の子痕跡がある。この内中央土坑は住居跡床面中央に位置する円形の土坑で、直径25cm、深さ16cmを測る。住居内土坑は住居跡南東壁中央部付近に位置する方形の土坑で、四隅にテラスが掘り残されて、蓋板がかけられる構造となっている。竈の子痕跡は住居跡床面の北東辺から直行する長さ60cm、幅4cm、深さ3cmの溝が30cm毎に等間隔に並んでいた。この溝は、等間隔に棒状の材で固定された板材による竈の子を床面に固定するためのものと推定される。竈は北西辺中央部に位置している(第58図)。竈の構造はまず住居床面の煙道部分を掘り残し、次いで炊口部に直径45cmの土坑を穿ち、また板状チャートの袖石を据える土坑を穿つ。袖石を据えた後、掛口の下部に土師器高杯の脚裾部を除去したものを天地逆転

して置いて、この口縁部を半円形に取り巻くように、また、掛口から煙出し部に向けて高くなるように傾斜をつけて粘土を貼って構築する。袖石に残された被熱痕跡から推測すると、掛口より後部には、粘土で天井部と袖石の固定を兼ねて構築されていた。燃焼部には袖石および門柱石の前面で検出した板石が架けられていたらしい。この板石の下部には住居が焼失した際の炭灰層と焼土が竈の焼土粒層の上に堆積しており、住居の焼失直後にこの位置に落下したとみられる。各袖石の前面には門柱石とみられる石材を立て、袖石を固定している粘土と一連の粘土で固定している。



- 1: 暗褐色混礫シルト (2~8cm大の礫を多く含む)、2: 暗褐色シルト、3: 暗黄灰色混礫砂質シルト (2~6cm大の礫をやや多く含む、土器片を含む)、4: 赤黒色粘土、5: 極暗褐色シルト、6: 暗赤褐色粘土、7: 暗褐色砂質シルト (焼土粒少量含む)、8: 極暗褐色粘土、9: 暗黄灰色砂質シルト、10: 極暗赤灰色シルト (焼土粒・炭化物粒含む)、11: 暗黄褐色砂質シルト、12: 極暗赤褐色シルト、13: 暗灰色シルト、14: 暗灰色シルト、15: 暗灰色シルト、16: 極暗褐色粘質シルト、17: 暗褐色粘質シルト (焼土粒を多量に含む、16層と同一層)、18: 暗赤褐色シルト、19: 極暗褐色シルト、20: 極暗褐色シルト、21: 暗褐色混礫シルト、22: 極暗褐色シルト、23: 暗灰黄色シルト、24: 暗赤褐色シルト、25: 極暗褐色砂質シルト

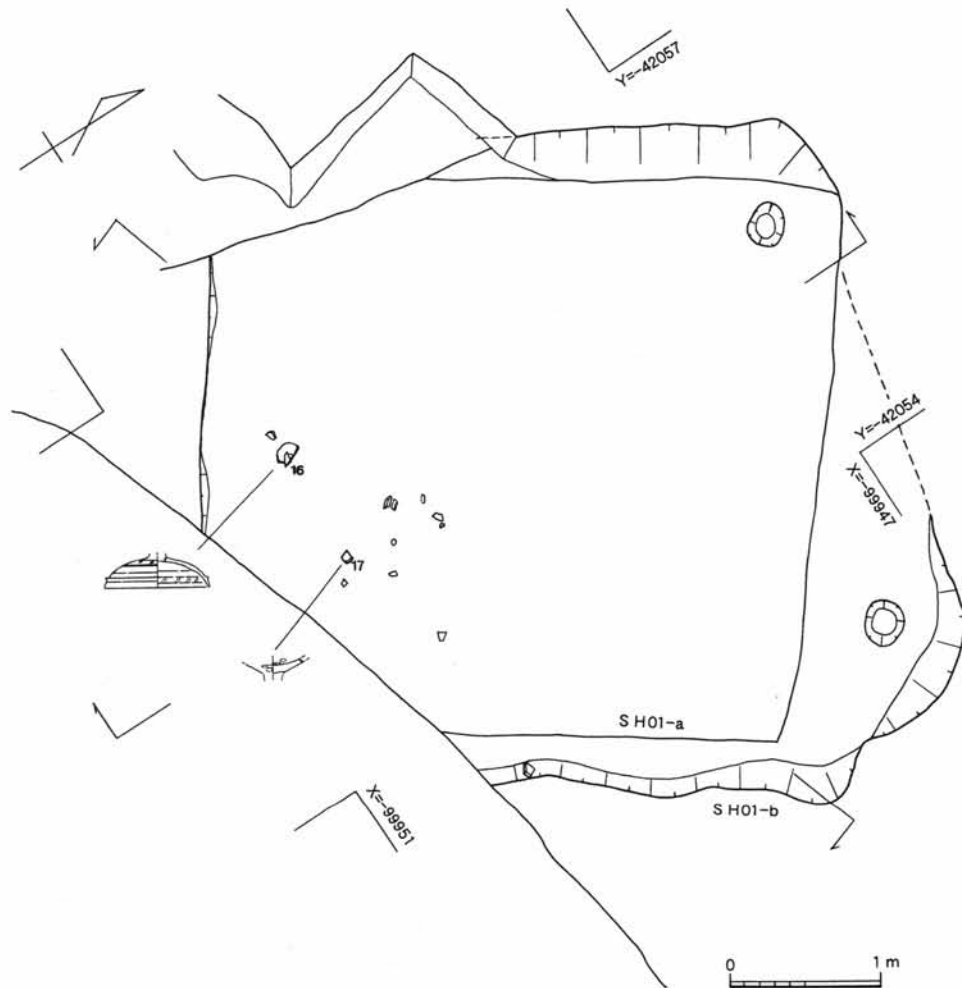
第58図 SH01-a 竈平面・断面・立面図

主柱穴とみられる柱穴は床面にはみられなかった。可能性として礎板などを使った構造も考えられる。

遺物の出土状況は、いずれも床面にほぼ完形を保って出土したか、復原すると完形となる状況で出土した。ところが、土師器高杯(4)は脚部が存在しなかった。脚部がはずれた高杯を、そのまま杯として利用し続けた可能性が考えられる。S H01-aの時期は初期須恵器の椀が大庭寺遺跡 T G232と併行することや、土師器の様相から古墳時代中期前葉であると考えられる。^(注6)

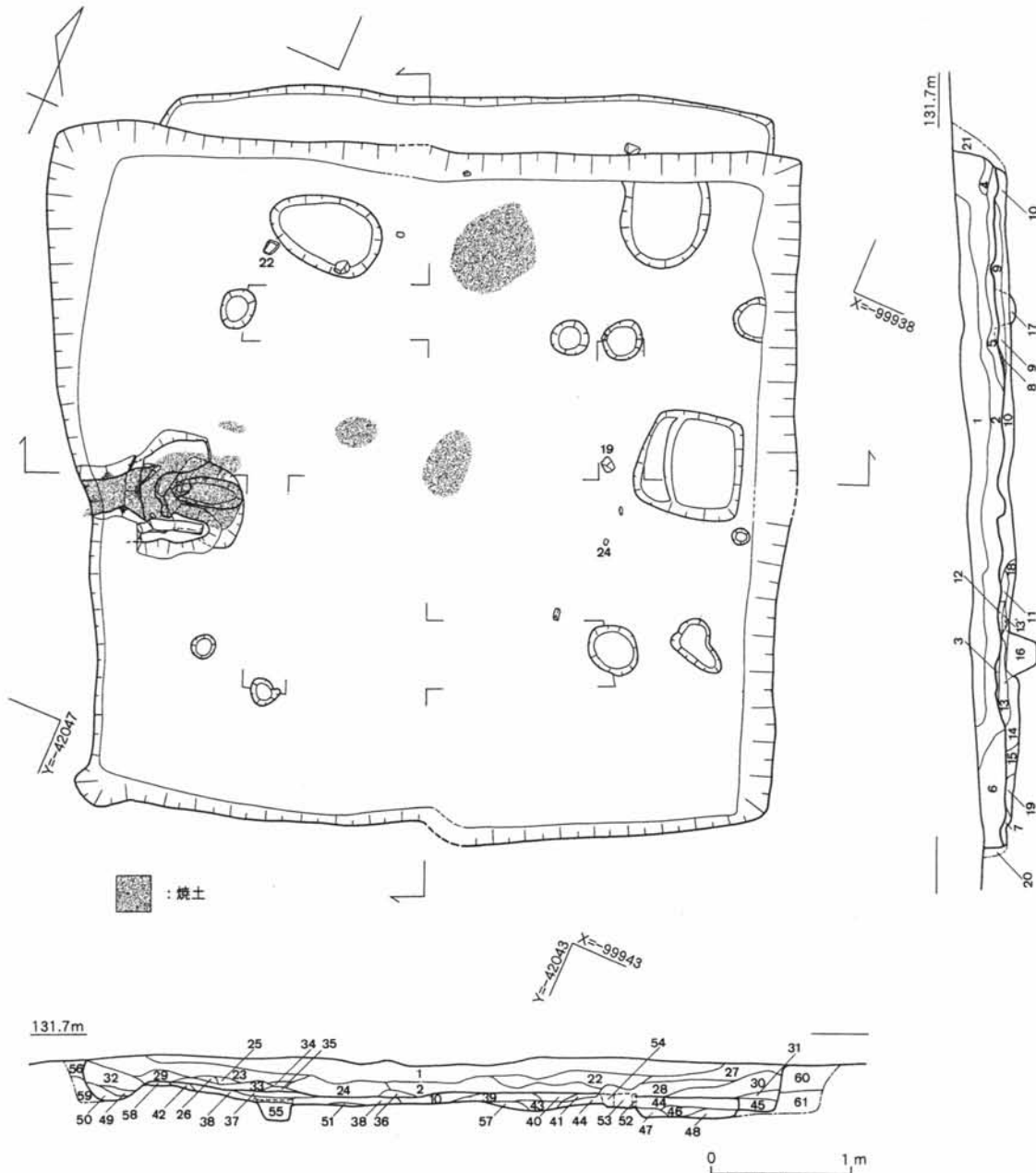
S H01-b(第59図)は、S H01-aが焼失した後、やや住居の主軸を変えて再建された竪穴式住居跡である。一辺の長さは4.5m、屋内施設としては主柱穴の可能性のある柱穴を北西と北東の隅で検出したが、南側は現代の石垣や官山川の旧流路で削平されており、住居そのものがほとんど残っていなかった。また、住居埋土も土石流によって破壊を受けており僅かに残った床面の土器にも当該期以前の弥生土器が混入していた。ただ、初期須恵器とみられる杯蓋と僅かな土師器が出土したのみであり、これにより、T K73併行期であると考えられる。

竪穴式住居跡 S H02(第60・62図) この住居跡も建て替えが行われており、当初に築造された方をS H02-a、建て替え後の住居跡をS H02-bとする。S H02-aはトレンチの西よりで検出した方形の住居跡で、一辺の長さが5.3mを測る。主軸が方位とほぼ平行で、地形の影響を受け、北



第59図 S H01-b 平面図

側の床面が高くなっている。床面の中央に炉跡の焼土がみられ、北辺中央部には取り壊された竈跡を検出した。これは燃焼部の焼土のみを検出したもので、袖部など立体的な構造を検出したも



- 1: 暗褐色シルト混じり砂礫 (2~5cm大の礫を多量に含む)、2: 暗黄褐色極細砂 (0.5~2cm大の礫をやや多く含む)、3: 鈍い黄褐色シルト、4: 鈍い黄褐色混砂シルト、5: 黄灰色砂質シルト、6: 暗黄褐色シルト質砂礫 (2~4cm大の礫を多量に含む)、7: 暗黄灰色極細砂 (2mm大の小礫をやや多く含む)、8: 極暗褐色シルト、9: 暗褐色シルト質砂礫、10: 暗褐色砂質シルト、11: 黄灰色シルト、12: 暗褐色シルト、13: 暗黄褐色シルト質砂礫 (2~4cm大の礫を多量に含む)、14: 極暗褐色混砂質シルト (1cm大の礫を少量含む)、15: 極暗褐色砂質シルト、16: 暗褐色混砂シルト、17: 暗褐色砂質シルト、18: 黄褐色砂礫 (遺構ベース層)、19: 黄褐色砂礫 (遺構ベース層)、20: 黄褐色砂礫 (遺構ベース層)、21: 暗褐色砂礫 (遺構ベース層)、22: 暗褐色砂礫 (1~2cm大の礫を多量に含む)、23: 暗褐色砂礫 (シルトがやや多い)、24: 暗褐色砂礫 (1~10cm大の礫を多量に含む)、25: 暗黄褐色砂質シルト、26: 暗黄褐色砂質シルト (25層と同一層)、27: 暗黄褐色砂質シルト、28: 暗黄褐色砂質シルト (27層と同一層)、29: 暗黄褐色混砂シルト (3cm大の礫を少量含む)、30: 暗褐色シルト質砂礫 (0.5~1cm大の礫を多量に含む)、31: 暗黄褐色混砂シルト (3cm大の礫を少量含む)、32: 暗黄褐色シルト混じり砂礫 (1~5cm大の礫を多量に含む)、33: 暗黄褐色混砂シルト (3cm大の礫を少量含む)、34: 暗黄褐色シルト、35: 極暗褐色シルト、36: 極暗褐色混砂シルト (3~5cm大の礫を少量含む)、37: 極暗褐色シルト混じり砂礫 (3~5cm大の礫を少量含む)、38: 極暗褐色極細砂 (2~5mm大の小礫を多く含む)、39: 極暗褐色シルト質砂礫 (1~3cm大の礫を多量に含む)、40: 極暗褐色砂質シルト、41: 暗黄褐色混砂シルト (2cm大の礫を多量に含む)、42: 暗黄褐色シルト、43: 極暗褐色シルト、44: 極暗褐色砂礫 (炭化物粒を少量含む)、45: 暗黄褐色混砂シルト (3~5cm大の礫をやや多く含む)、46: 極暗褐色混砂シルト (3cm大の礫を少量含む)、47: 極暗褐色シルト、48: 極暗褐色シルト、49: 極暗褐色混砂シルト (1~2cm大の礫を少量含む)、50: 極暗黄褐色砂礫 (2~4cm大の礫を少量含む)、51: 黄褐色砂礫 (遺構ベース層)、52: 暗褐色砂質シルト、53: 極暗褐色砂質シルト、54: 暗褐色砂質シルト、55: 極暗褐色砂質シルト、56: 暗黄褐色砂礫 (遺構ベース層)、57: 黄褐色砂礫、58: 暗赤褐色粘質シルト (竈壁体)、59: 極暗褐色シルト (遺構ベース層)、60: 暗黄褐色混砂シルト (遺構ベース層)、61: 暗黄褐色混砂粗砂 (遺構ベース層)

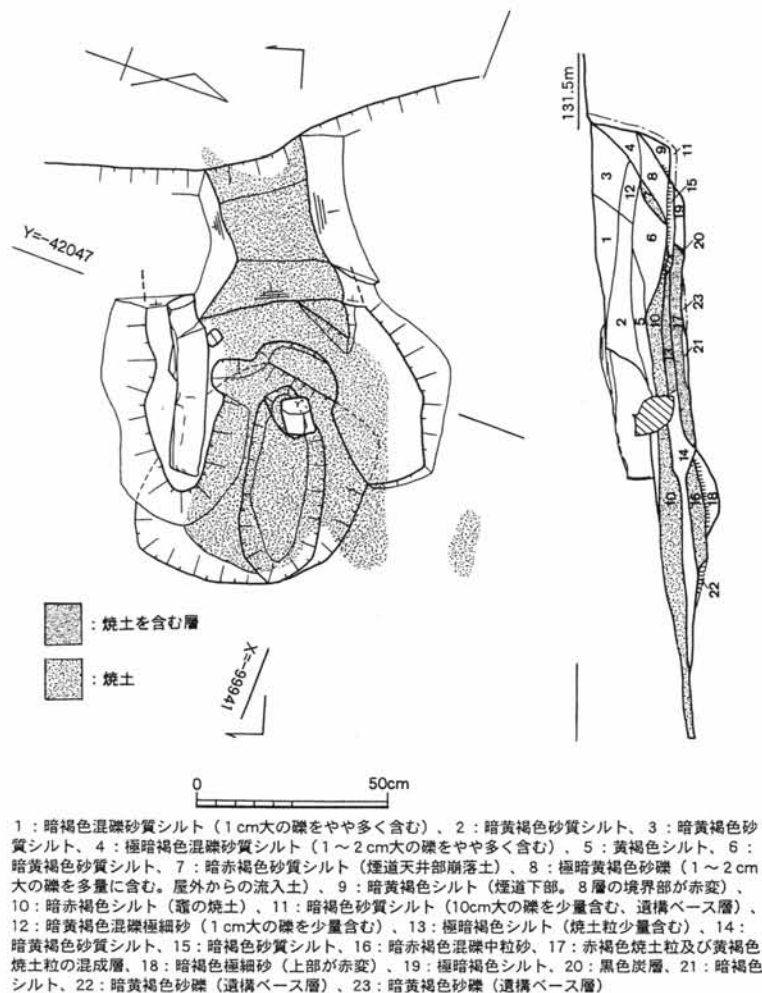
第60図 SH02-a 平面・断面図

のではない。また、西辺中央部では南側の袖に板状チャートを用いた竈を検出した。(第61図)こちらは炊口～燃焼部に長円形の土坑を穿ち、南側の袖部のみ袖石を据えるための土坑を掘る。袖石を据えた後に馬蹄形に粘土を積み、掛口から後部には天井部を構築していた。掛口下部には方柱状の石材を埋めて支柱としていた。SH02-bの貼り床と思われる黄褐色シルトが竈の焼土を覆い、その上にさらに焼土が広がっている状況が確認されたため、この竈はSH02-bでも利用されていた可能性がある。煙出し部には高温によって赤変した部分があり、この上に住居外から土石流の堆積が流れ込んでいる状況が観察された。さらに赤変した天井部が落ち込んでいる状況も確認されたが、SH02-bの周壁溝によって破壊されており、平面的に観察できたのは一部に留まった。床面の遺構としては主柱穴が4基検出できた。直径20～35cmである。また、東辺中央部に方形の屋内土坑を検出した。遺物は床面から出土した土師器のみで、高杯、甕がある。これらの特徴からSH02-aの時期はTK208併行の古墳時代中期後葉であると考えられる。

SH02-bはSH02-aを数cm埋めた後、貼床を施したものである。主柱穴はSH02-aを踏襲している。また、周壁に沿って周壁溝が約40cmの幅で巡っている。ただし西壁の竈の背後で周壁溝が途絶えているため、SH02-bでもSH02-aの竈を再利用している可能性を裏付ける。

この床面から滑石製の勾玉が出土した。このほか土師器の高杯、甕が出土した。SH02-bの時期は、甕の口縁部は未だ肥厚する布留式の影響がみられるものの、肩部にヨコハケがみられないこと、供膳具に土師器の高杯を用いていることから、TK208～23併行の古墳時代中期後葉であると考えられる。

竪穴式住居跡SH03(第63図) この住居跡はトレンチ中央部にSH02と隣接して検出した。また西側にSH04が隣接しているが、周堤帯と上屋の存在を想定すると、このSH02・04の両者と共存したとは考えられない。また第1遺構面を覆う土石流の本流がこの上部を通っており、埋土お



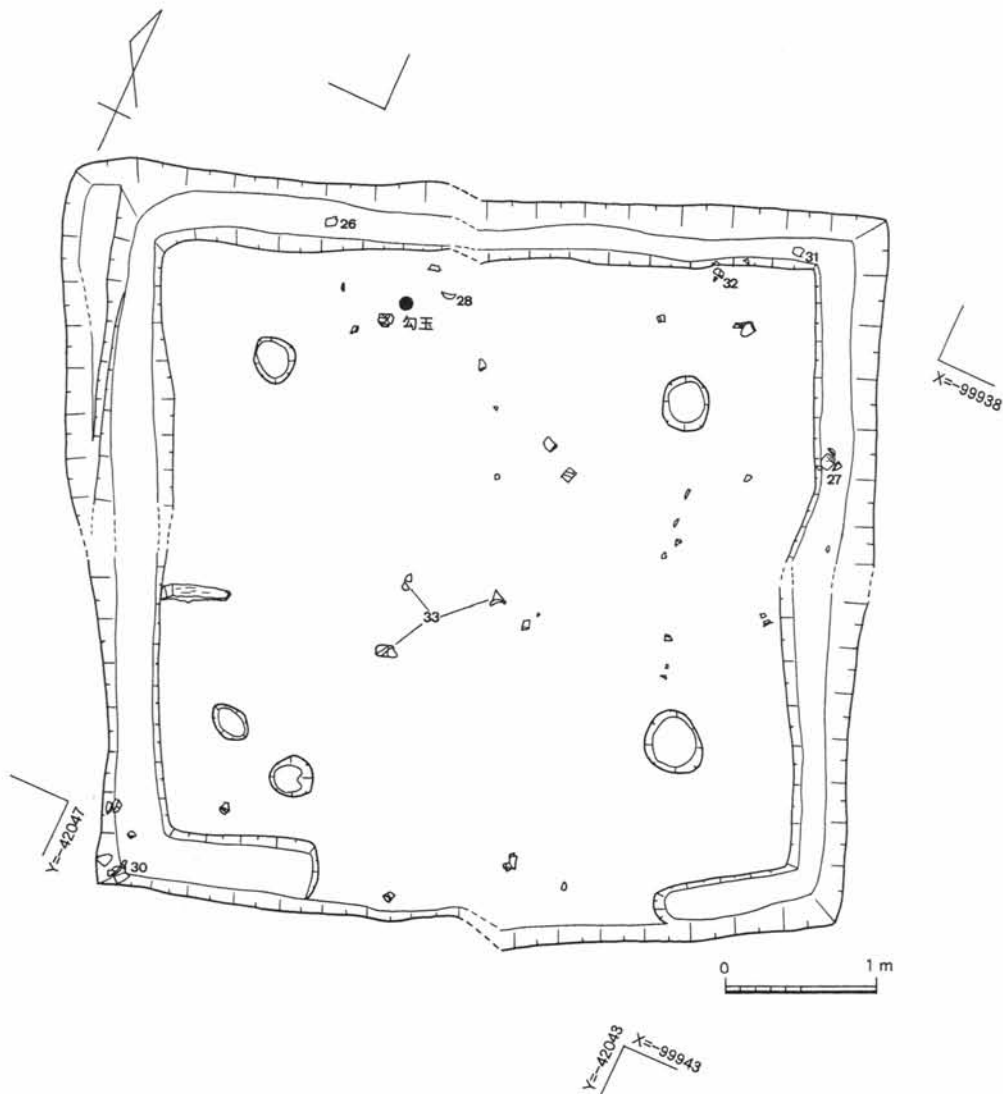
第61図 SH02-a 竈平面・断面図

よび床面は損傷を被っている。

S H03は一辺5.1mの方形を呈する竪穴式住居跡であり、床面には支柱穴が4基、方形に配されている。支柱穴の直径は約30~40cm前後である。また、周壁に沿って幅50cm前後の周壁溝が巡らされ、この溝内に直径10cm前後の杭孔、もしくは小柱穴を多数検出した。住居跡内埋土のほとんどは土石流の堆積であり、住居跡本来のものではない。また、土石流が床面にまで及んでいたため、この住居跡に伴う遺物は皆無であった。従ってこの住居跡の時期を限定することはできないが、方形の住居で、やや幅の広い周壁溝が巡り、主軸が方位に平行であることから、S H02-bの廃絶後、あまり時を置かずに築造された可能性がある。

竪穴式住居跡 S H04(第64図) この住居跡はトレンチ西端で、S H03の西に隣接して検出した。住居跡は約西半分が調査地外にあるため、東半のみの調査となった。この住居跡は一辺が5.2mを測る方形の竪穴式住居跡であり、床面に支柱穴2基と周壁溝を検出した。周壁溝内にS H03と同様の小柱穴を検出した。

埋土上層から弥生時代後期後葉~末葉の壺の下半部が出土したが、この住居跡に伴う遺物とは

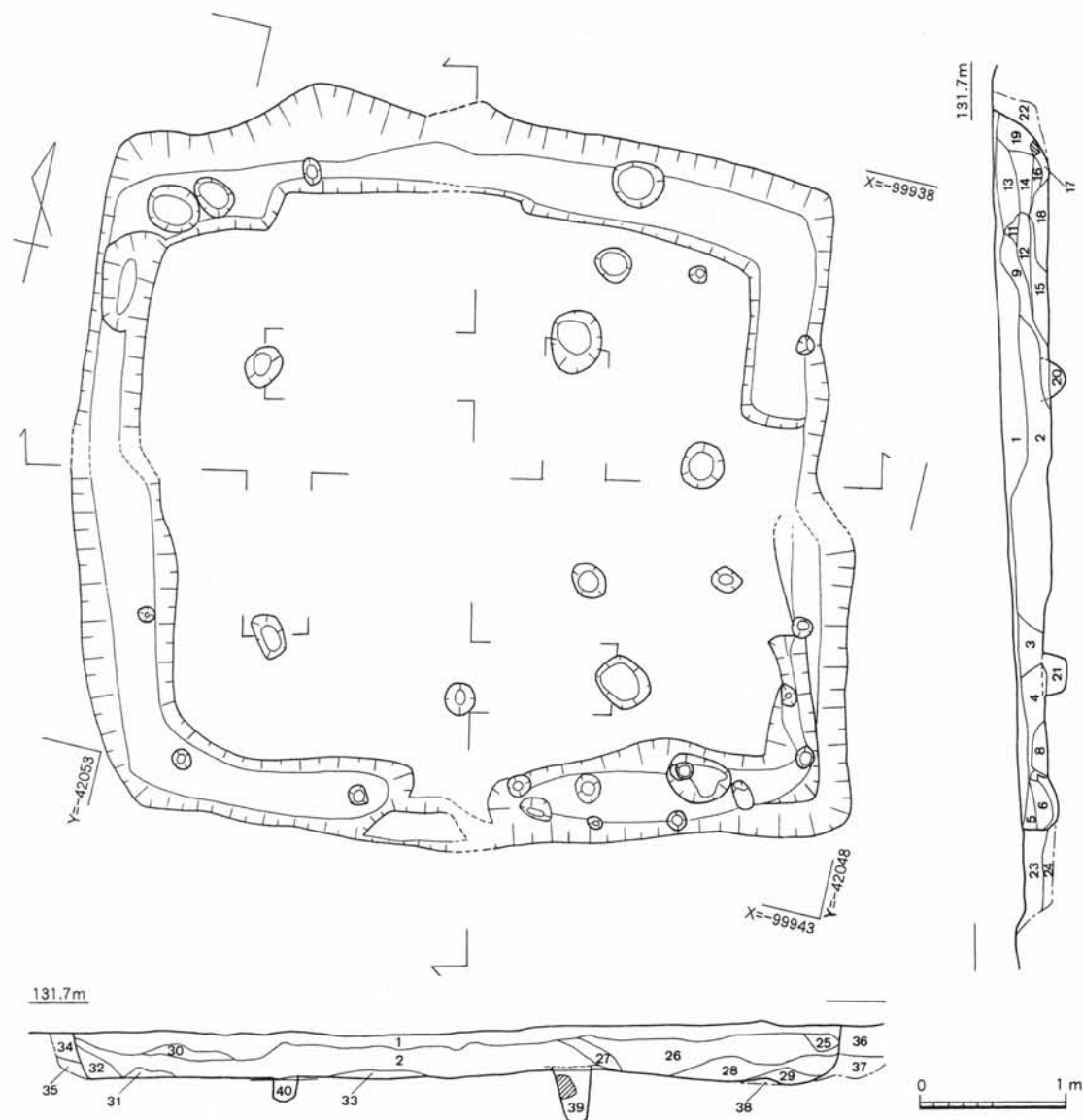


第62図 S H02-b平面図および勾玉出土状況図

考えがたい。住居の時期は弥生時代後期後葉～末葉か古墳時代中期後半のいずれかでないかと考えられるが、断定はできない。

竪穴式住居跡 S H10(第60図) この住居跡は S H02の北側に僅かに検出した一辺4.4mの方形竪穴式住居跡である。土層断面の観察の結果、S H10が土石流によって完全に埋没した後に S H02が掘削されている。床面から土師器片が出土した。古墳時代中期後葉の竪穴式住居跡である。

②A-7トレンチ



- 1: 暗褐色混礫シルト (0.3~3cm大の礫を多量に含む)、2: 極暗黄褐色混礫シルト (1~5cm大の礫を少量含む)、3: 暗黄褐色混礫シルト (0.3~1cm大の礫を多量に含む)、4: 極暗黄褐色混礫シルト (1~5cm大の礫を少量含む)、5: 暗黄褐色混礫極細砂 (1~2cm大の礫を少量含む)、6: 暗黄褐色混礫極細砂 (3~5cm大の礫を少量含む)、7: 暗黄褐色砂礫、8: 黄褐色混礫シルト (3~7cm大の礫を少量含む)、9: 暗黄褐色シルト、10: 欠番、11: 暗褐色砂質シルト、12: 暗褐色シルト質砂礫 (1cm大の礫を多量に含む)、13: 暗黄褐色砂質シルト、14: 暗褐色混礫シルト (5~7cm大の礫を少量含む)、15: 暗黄褐色砂礫 (1~7cm大の礫を多量に含む)、16: 暗黄褐色混礫シルト (3cm大の礫を少量含む)、17: 暗黄褐色砂礫 (0.3~1cm大の礫を多量に含む)、18: 暗褐色混礫シルト (3~5cm大の礫をやや多く含む)、19: 暗黄褐色シルト (10cm大の礫をわずかに含む)、20: 暗褐色混礫砂質シルト (3cm大の礫を少量含む)、21: 暗褐色混礫砂質シルト (3cm大の礫を少量含む)、22: 黄褐色シルト質砂礫 (遺構ベース層)、23: 黄褐色シルト質砂礫 (遺構ベース層)、24: 黄褐色砂礫 (遺構ベース層)、25: 極暗褐色砂質シルト (3~6cm大の礫を少量含む)、26: 暗黄褐色混礫砂質シルト (5~10cm大の礫をやや多く含む)、27: 黄褐色砂質シルト、28: 黄褐色砂質シルト、29: 暗褐色砂質シルト (3~5cm大の礫をやや多く含む)、30: 暗黄褐色砂質シルト、31: 暗黄褐色砂礫 (3~6cm大の礫を多量に含む)、32: 暗黄褐色砂礫 (3~6cm大の礫を多量に含む)、33: 暗黄褐色混礫砂質シルト (3~5cm大の礫をやや多く含む)、34: 暗黄褐色砂質シルト、35: 極暗褐色砂質シルト (下層遺構埋土)、36: 暗黄褐色混礫砂質シルト (1~6cm大の礫をやや多く含む)、37: 極暗黄褐色砂礫 (1~3cm大の礫を多量に含む)、38: 暗褐色混礫砂質シルト (2cm大の礫をやや多く含む)、39: 暗褐色砂質シルト (炭化物粒を少量含む)、40: 暗黄褐色砂質シルト

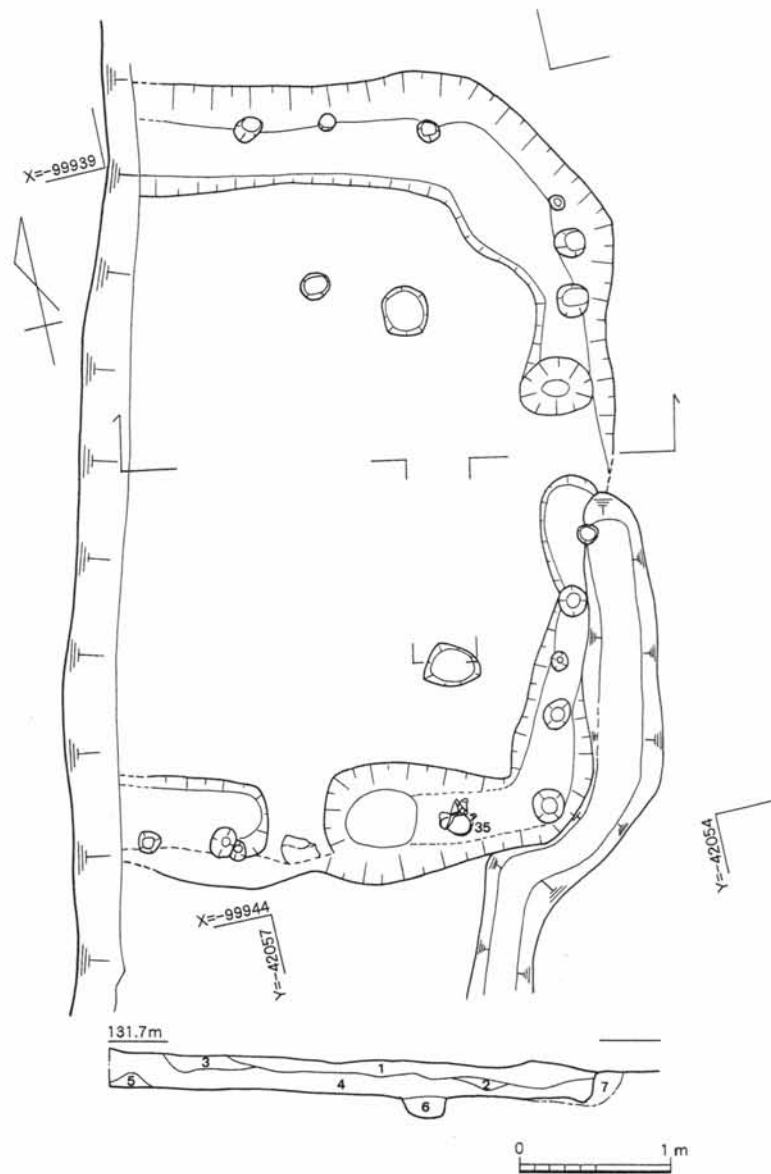
第63図 S H03平面・断面図

このトレンチでは竪穴式住居跡5基と土坑、自然流路などを検出した。

竪穴式住居跡SH05(第65・66図) この住居跡は第3次調査のA-3トレンチの西端で検出していたものである。後述するSH06が完全に埋没した後に築造されている。SH05は当初の床面上に盛土を施してさらに東側を拡張した事が判明したため、築造当初の住居跡をSH05-a、建て替え後の住居跡をSH05-bとした。SH05-aは東西4.9m、南北6mを測る。住居跡床面には支柱穴の可能性のある柱穴と、屋内土坑、炉跡、竈2基を検出した。竈の内、西辺付近のものは燃焼部下部の土坑と燃焼部の焼土のみが検出され、袖部等は取り壊されていたとみられる。南辺付近の竈は住居の南辺からやや離れており、断ち割りによって西半を破壊してしまったが、北へ向かって粘土で構築した袖部が開く形状であると考えられる。炉跡は住居跡中心部の床面上で検出した。床面が被熱して赤変しただけの簡易なものである。屋内土坑は住居跡東辺付近の床面上で検出した楕円形の土坑である。

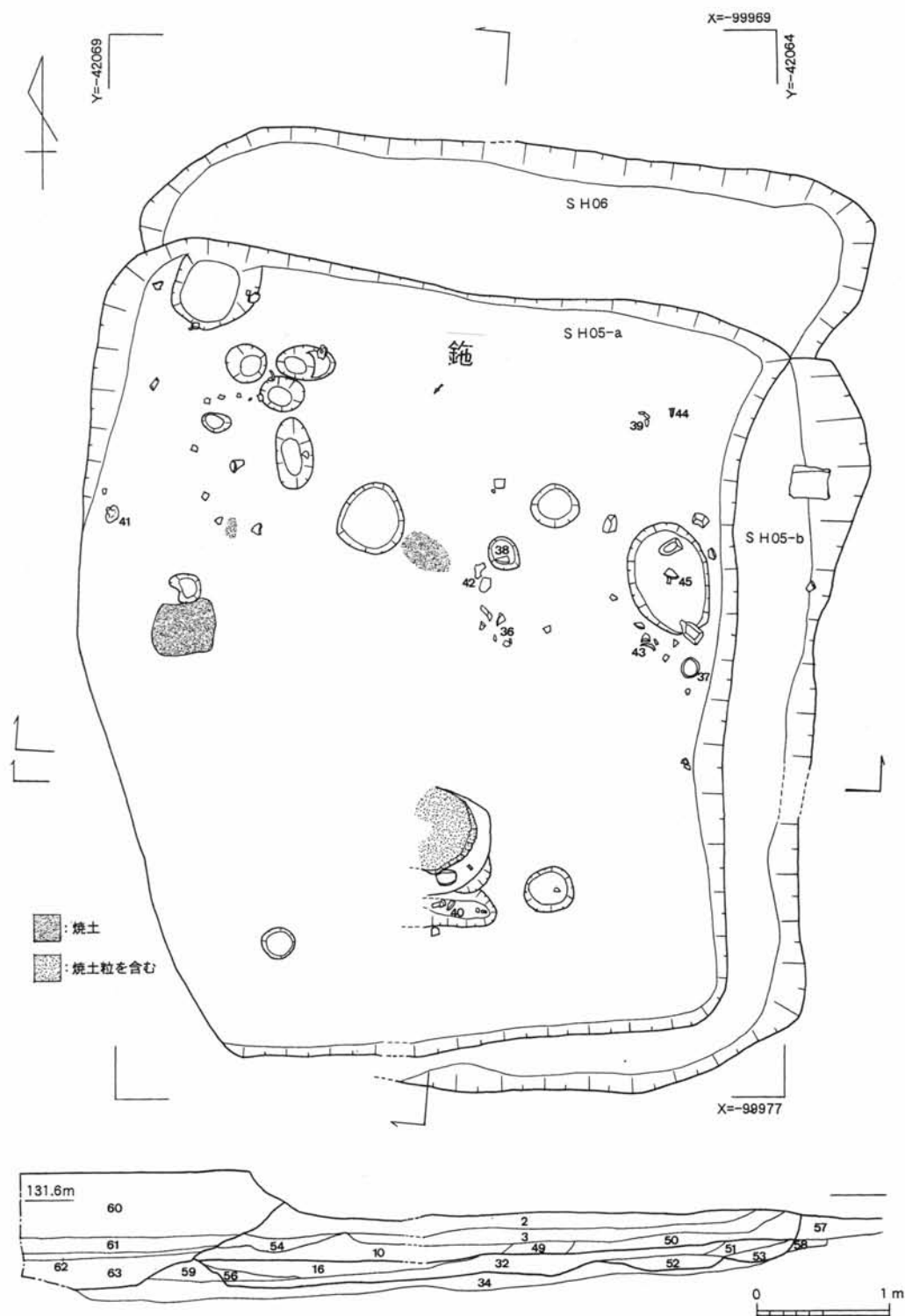
床面上では鉢、土師器の高杯、甕のほか山陰系壺との折衷型の壺が出土した。これらの特徴からSH05-aの時期はTK208併行期の古墳時代中期後葉であると考えられる。

SH05-bは住居輪郭を東へ僅かに拡張し、床面に数cm盛土して構築している。一辺6mを測る。床面は盛土によって構築されているため、支柱穴等の屋内施設を検出することはできなかったが、床面から東壁に立てかけるように板状チャートの板石が置かれていた。また方柱状の板状チャートが床面に置かれていた。床面からは土師器高杯などが出土し、この特徴からSH



1：暗褐色砂質シルト（2～5cm大の礫を少量含む）、2：暗黄褐色シルト、3：暗褐色シルト、4：暗黄褐色シルト質砂礫（0.5～1cm大の礫を多量に含む）、5：暗黄褐色シルト、6：暗黄褐色混雑砂質シルト（0.5～1cm大の礫を多量に含む）、7：暗黄褐色砂礫（遺構ベース層）

第64図 SH04平面・断面図

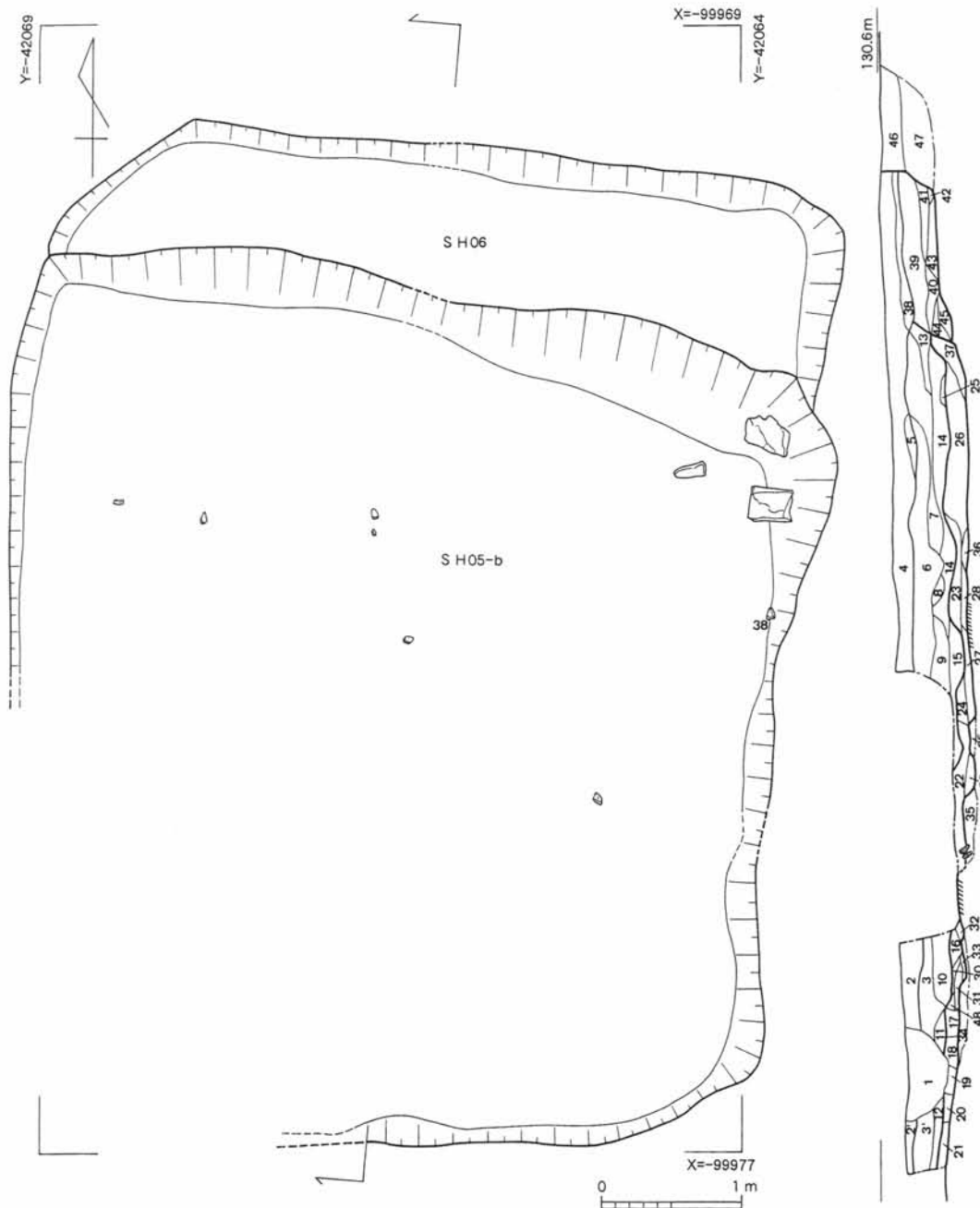


第65図 SH05-a・06平面・断面図

05-bの時期はSH05-aとさほど時間を置かずに築造されたと考えられる。

竪穴式住居跡SH06(第65図) SH05に先行して築造された一辺が5.5mを測る方形竪穴式住居跡である。検出範囲が狭いため、屋内施設など詳しいことは不明である。出土遺物から古墳時代中期の築造であると考えられる。

竪穴式住居跡SH07(第67・68図) SH07はトレンチ北西部で住居跡の南側2/3ほどを検出し

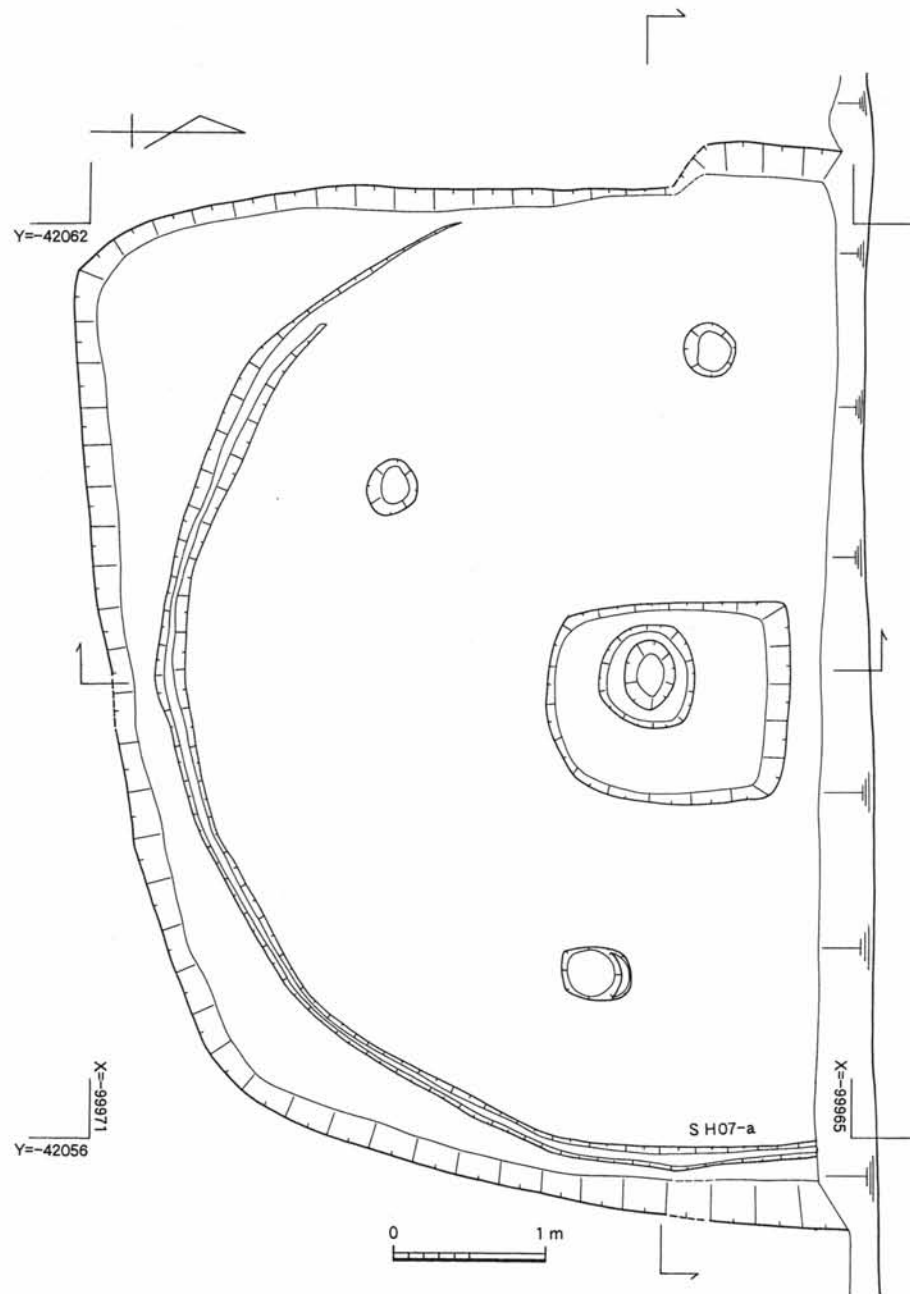


- 1：暗黄褐色混礫シルト（3～6cm大の礫をやや多く含む）、2、2'：暗褐色混礫砂質シルト（1～2cm大の礫を少量含む）、3、3'：暗褐色砂質シルト、4：暗褐色混礫シルト（0.5～1cm大の礫をやや多く含む）、5：暗褐色混礫シルト（1～3cm大の礫をやや多く含む）、6：暗黄褐色シルト、7：暗黄褐色混礫シルト（1～3cm大の礫をやや多く含む）、8：暗黄褐色混礫シルト、9：暗黄褐色混礫シルト、10：暗褐色砂質シルト、11：暗黄褐色シルト質砂礫（1～3cm大の礫をやや多く含む）、12：暗褐色混礫砂質シルト（1～10cm大の礫を少量含む）、13：暗褐色混礫砂質シルト（1cm大の礫を多量に含む）、14：極暗褐色シルト質砂礫（0.5cm大の礫を多量に含む、炭化物を少量含む）、15：極暗褐色シルト質砂礫（3～7cm大の礫をやや多く、0.5cm大の礫を多量に含む）、16：極暗褐色シルト質砂礫（1～3cm大の礫をやや多く含む）、17：暗黄褐色砂礫（3～5cm大の礫をやや多く含む）、18：暗黄褐色砂礫（0.5～1cm大の礫を少量含む）、19：暗褐色混礫砂質シルト（0.5cm大の礫を少量含む）、20：暗褐色シルト質砂礫（1～3cm大の礫を多量に含む）、21：暗褐色砂質シルト、22：極暗褐色混礫砂質シルト（2～3cm大の礫をやや多く含む）、23：極暗褐色砂質シルト、24：極暗褐色砂質シルト、25：極暗褐色混礫砂質シルト（0.5～1cm大の礫を多量に含む）、26：極暗褐色混礫砂質シルト（3～6cm大の礫を多量に含む）、27：極暗褐色砂質シルト（炭化物粒をやや多く含む）、28：極暗褐色シルト、29：極暗褐色混礫砂質シルト（1cm大の礫をやや多く含む）、30：明赤褐色焼土（炭化物粒を多く含む）、31：極暗褐色シルト質砂礫（1cm大の礫を多量に含む）、32：極暗褐色砂質シルト、33：明赤褐色焼土、34：黄褐色砂礫（遺構ベース層）、35：黄褐色砂礫（遺構ベース層）、36：黄褐色砂礫、37：暗褐色シルト、38：暗褐色混礫砂質シルト（1～2cm大の礫をやや多く含む）、39：暗褐色混礫砂質シルト（1～2cm大の礫を少量含む）、40：極暗褐色混礫砂質シルト（1～2cm大の礫を少量含む）、41：極暗褐色砂質シルト（1～2cm大の礫を少量含む）、42：極暗褐色砂質シルト、43：極暗褐色砂質シルト、44：極暗黄褐色砂質シルト、45：黄褐色砂礫（遺構ベース層）、46：暗黄褐色砂礫（遺構ベース層）、47：暗黄褐色シルト質砂礫（遺構ベース層）、48：欠番、49：極暗褐色混礫砂質シルト（3～5cm大の礫を多量に含む）、50：極暗褐色砂質シルト、51：極暗褐色砂質シルト、52：極暗褐色混礫細砂（0.5～10cm大の礫を多量に含む）、53：暗褐色シルト質礫（5cm大の礫を多量に含む）、54：暗黄褐色砂質シルト、55：欠番、56：極暗褐色混礫砂質シルト（1cm大の礫を多く含む）、57：黄褐色混礫シルト（遺構ベース層）、58：暗黄褐色混礫シルト（遺構ベース層）、59：暗黄褐色砂礫（遺構ベース層）、60：淡黄褐色シルト（旧耕作土）、61：灰黄褐色シルト（旧耕作土）、62：黒褐色マンガ、63：暗黄褐色砂質シルト（官山川の旧流路）

第66図 SH05-b 平面・断面図

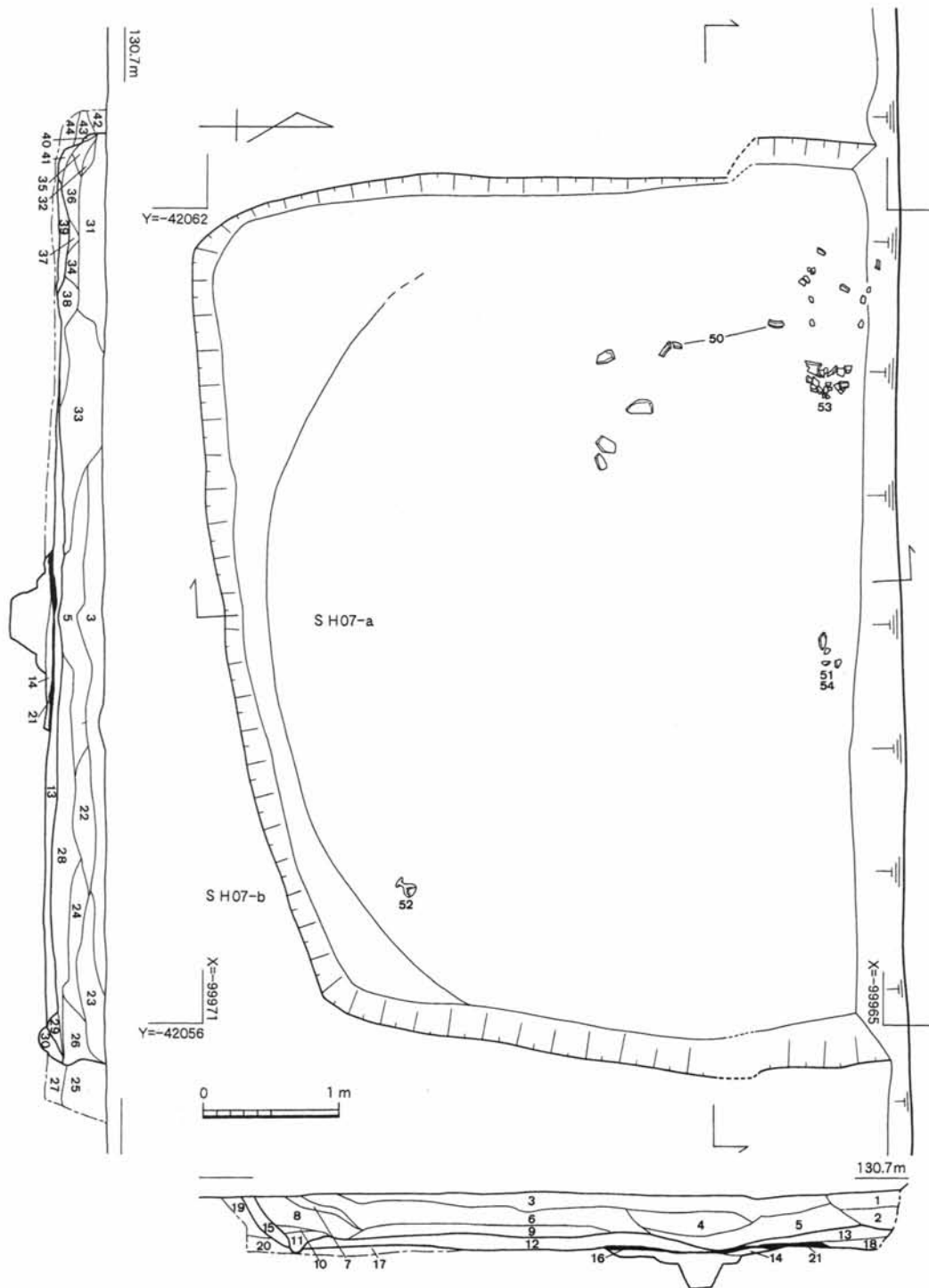
た。この住居跡は当初円形に築造された竪穴式住居跡を方形に建て替えている。当初に築造された方をSH07-a、建て替え後の方をSH07-bとする。

SH07-aは直径6.6mを測る円形竪穴式住居跡で、住居跡中央に中央土坑、これを取り巻くように支柱穴4基を検出した。また、中央土坑の周囲は東西1.3m、南北1.6mで隅丸方形に4cmほど掘りくぼめられており、薄く炭化物が堆積してい



第67図 SH07-a 平面図

た。中央土坑は直径60cmを測る円形で、深さ27cmを測る。周壁に沿って幅12cmの周壁溝が巡っていた。SH07-bの床面からSH07-aの床面までの僅かな埋土にはこの住居の時期を示す遺物は出土しなかった。SH07-bはSH07-aに外接するように拡張され、建て替えられた竪穴式住居跡である。一辺6.6mを測るやや大型の方形竪穴式住居跡である。床面の屋内施設については確認できなかった。しかし床面において弥生時代後期中頃の椀形高杯、壺、把手付鉢の一部が出土した。従ってSH07は弥生時代後期中頃に円形から方形に建て替えられたことが判明した。八木町教育委員会が実施した第5次調査でもほぼ同時期に多角形住居から方形住居に建て替えられた事実が確認されたことから、諸畑遺跡では弥生時代後期中頃に竪穴式住居跡の方形化が進んだことが明らかとなった。



- 1: 極暗褐色混礫砂質シルト(1cm大の礫をやや多く含む)、2: 極暗褐色砂質シルト、3: 褐色混礫シルト(1cm大の礫をやや多く含む)、4: 暗褐色砂礫(1~2cm大の礫を多量に含む)、5: 暗褐色砂礫(3~10cm大の礫を多量に含む)、6: 暗褐色シルト質砂礫(0.5~3cm大の礫を多量に含む)、7: 褐色砂質シルト、8: 暗褐色シルト質砂礫(0.5~1cm大の礫を多量に含む)、9: 極暗褐色混礫中粒砂(0.5cm大の礫を少量含む)、10: 暗褐色混礫極細砂(0.5cm大の礫を少量含む)、11: 極暗褐色混礫シルト質極細砂(0.5~1cm大の礫を少量含む)、12: 極暗褐色シルト質極細砂、13: 暗褐色中粒砂、14: 暗褐色砂礫(0.5~1cm大の礫を多量に含む)、15: 暗褐色混礫砂質シルト(1~2cm大の礫をやや多く含む)、16: 黄褐色細砂(遺構ベース層)、17: 黄褐色細砂(遺構ベース層)、18: 暗褐色砂礫(14層と同一層)、19: 黄褐色砂礫(3~5cm大の礫をやや多く含む)、20: 黄褐色細砂(遺構ベース層)、21: 黒灰色炭層、22: 暗褐色シルト質砂礫(0.5~2cm大の礫を多量に含む)、23: 暗褐色混礫砂質シルト(0.5~2cm大の礫をやや多く含む)、24: 極暗褐色砂礫(1~4cm大の礫を多量に含む)、25: 暗褐色混礫砂質シルト(遺構ベース層)、26: 極暗褐色砂質シルト、27: 黄褐色中粒砂(遺構ベース層)、28: 極暗褐色混礫シルト(0.5~1cm大の礫を少量含む、炭化物粒を少量含む)、29: 極暗褐色砂礫(1~6cm大の礫を多量に含む)、30: 極暗褐色シルト質細砂、31: 暗褐色シルト質砂礫(0.5~1cm大の礫をやや多く含む)、32: 暗褐色砂質シルト、33: 極暗褐色混礫砂質シルト(2~4cm大の礫を少量含む)、34: 極暗褐色シルト、35: 極暗褐色シルト、36: 極暗褐色混礫砂質シルト(2~4cm大の礫を少量含む)、37: 暗褐色砂質シルト、38: 極暗褐色砂質シルト、39: 極暗褐色シルト、40: 暗黄褐色混礫砂質シルト(0.5~1cm大の礫をやや多く含む)、41: 暗黄褐色極細砂、42: 暗黄褐色砂礫(遺構ベース層)、43: 暗黄褐色混礫粗砂(遺構ベース層)、44: 暗黄褐色細砂(遺構ベース層)

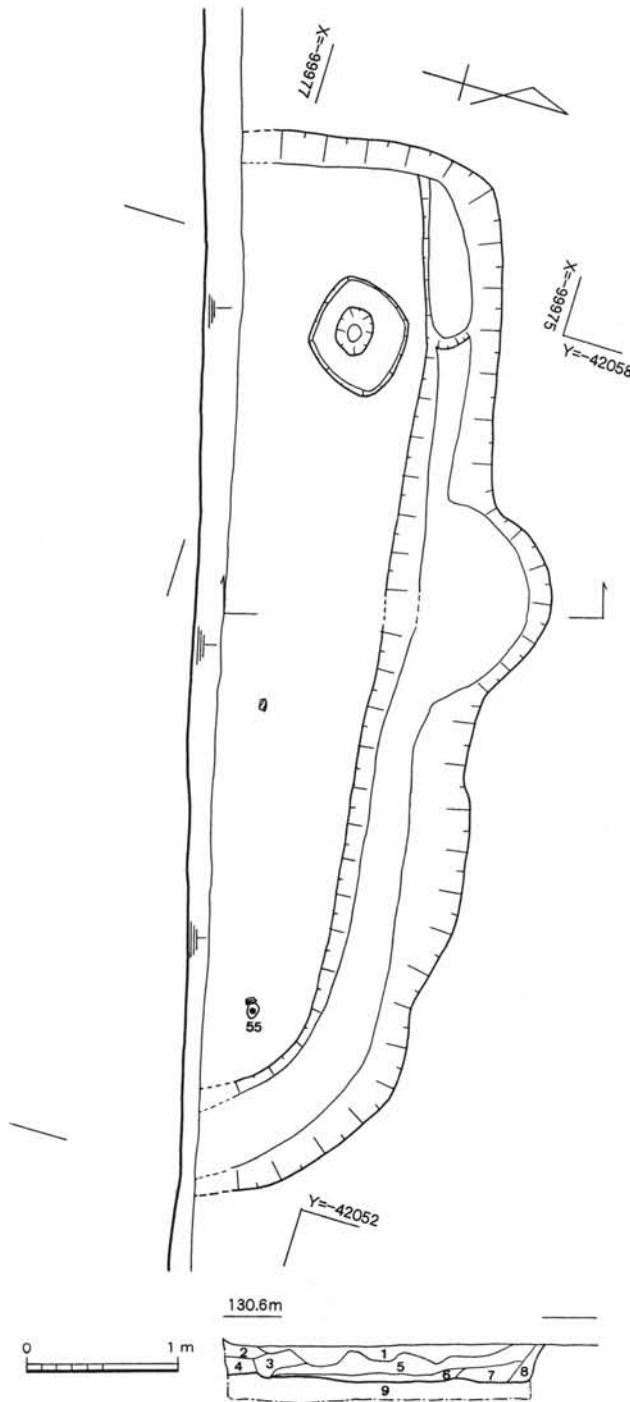
第68図 SH07-b 平面・断面図

竪穴式住居跡 S H08(第69図) この住居跡はトレンチの南西部で、住居の北側の一部を検出した。S H08は一辺7 mを測る方形竪穴式住居跡である。北辺の中央部に半円形に突出する部分があるが、焼土等が無く、竈の可能性は低い。北側周壁に沿って幅60cm前後の周壁溝を検出した。深さは10cm前後である。床面および埋土中から少量の土師器が出土した。これらの特徴から S H

08の時期は古墳時代中期後葉であると考えられる。

竪穴式住居跡 S H09(第70図) この住居跡はトレンチ東寄りのトレンチ南壁付近で北隅部分のみを検出した。この住居跡にも立て替えがみられ、当初の住居跡を S H09-a、建て替え後の住居跡を S H09-bとした。

S H09-aは S H09-bの北東辺の外側に僅かにその一部を検出したのみで、屋内遺構、遺物とも顕著なものはなかった。S H09-bは一辺が5 m以上を測る方形の竪穴式住居跡である。屋内遺構としては直径40cmの主柱穴を1基検出したに過ぎない。住居跡の埋土は大きく3層に分かれ、上層の1層、中層の2層、そして下層の4層との境界付近でも土師器が一定量出土した(第71図)。この内上層の土師器は橙褐色系、他は淡灰色系・褐色系の甕、高杯であり、下層の4層との境界付近の高杯脚部のみが屈曲せず外反するものである。出土した土器の特徴から S H09-bの時期は T K73~216併行期の古墳時代中期中頃に築造され、T K208併行期の古墳時代中期後葉には埋没したと言える。



1：暗褐色混礫シルト（1cm大の礫を少量含む）、2：暗褐色混礫シルト（3~5cm大の礫をやや多く含む）、3：極暗褐色シルト、4：極暗褐色混礫シルト（3cm大の礫をやや多く含む）、5：極暗褐色混礫砂質シルト（1cm大の小礫と3~5cm大の礫を多量に含む）、6：極暗褐色砂礫（3~5cm大の礫を多量に含む）、7：暗黄褐色砂礫（3~5cm大の礫を多量に含む）、8：暗褐色シルト質砂礫（1cm大の礫を多量に含む）、9：暗黄褐色砂礫（遺構ベース層）

第69図 S H08平面・断面図

(2)第2遺構面

①A-6トレンチ(第73図)

A-6トレンチでは土坑、柱穴、自然流路を検出した。以下に主要なもの概要を報告する。

土坑 S K 12 S K 12はトレンチ南東部で検出した楕円形の土坑である。長軸146cm、短軸95cmを測る。埋土には土器は含まれていなかったが炭化物粒が僅かに含まれていた。

土坑 S K 14 S K 14はトレンチ南より中央部で検出した不整四辺形を呈する土坑で、四隅に直径30~40cmの穴を穿っている。土坑の長軸は1.9m、短軸は1.3mを測る。埋土には炭化物粒のほかには遺物を含まない。

土坑 S K 15 S K 15はトレンチ南よりで検出した長方形呈する土坑で、長さ5 m以上、幅3.2mを測る。その形態から竪穴式住居跡ではないかとも考えたが、屋内施設がなく、遺物も含まなかったため、土坑とした。

②A-7 トレンチ(第74図)

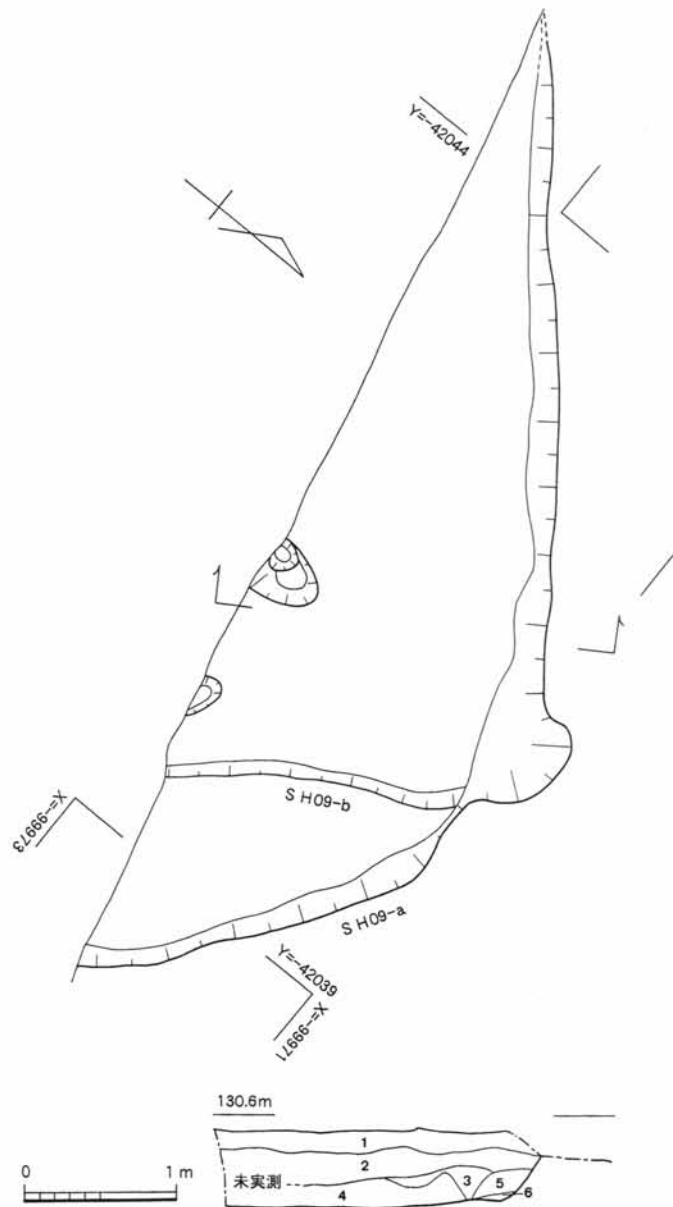
A-7 トレンチでは土坑、溝、自然流路、土石流の跡などを検出した。

土坑 S K 08 トレンチの中央部北寄りで検出した円形の土坑で直径1 m、深さ70cmを測る。出土遺物はない。

土坑 S K 09 トレンチ東部の南寄りで検出した隅丸方形の土坑で、一辺90cmを測る。南側が一段深くなっている。出土遺物はない。

土坑 S K 10 S K 09の東に隣接した方形の土坑で、一辺が1 mを測る。南側が一段深い。出土遺物はない。

土坑 S K 11 トレンチ中央部北寄りで検出した長方形の土坑で、長さ4.1m、幅1.6mを測る。中央に柱穴直径60cmの柱穴1基が存在するが、土坑埋土の下部から掘り込まれているため、あるいは柱穴と土坑は無関係かもしれない。



3. 出土遺物

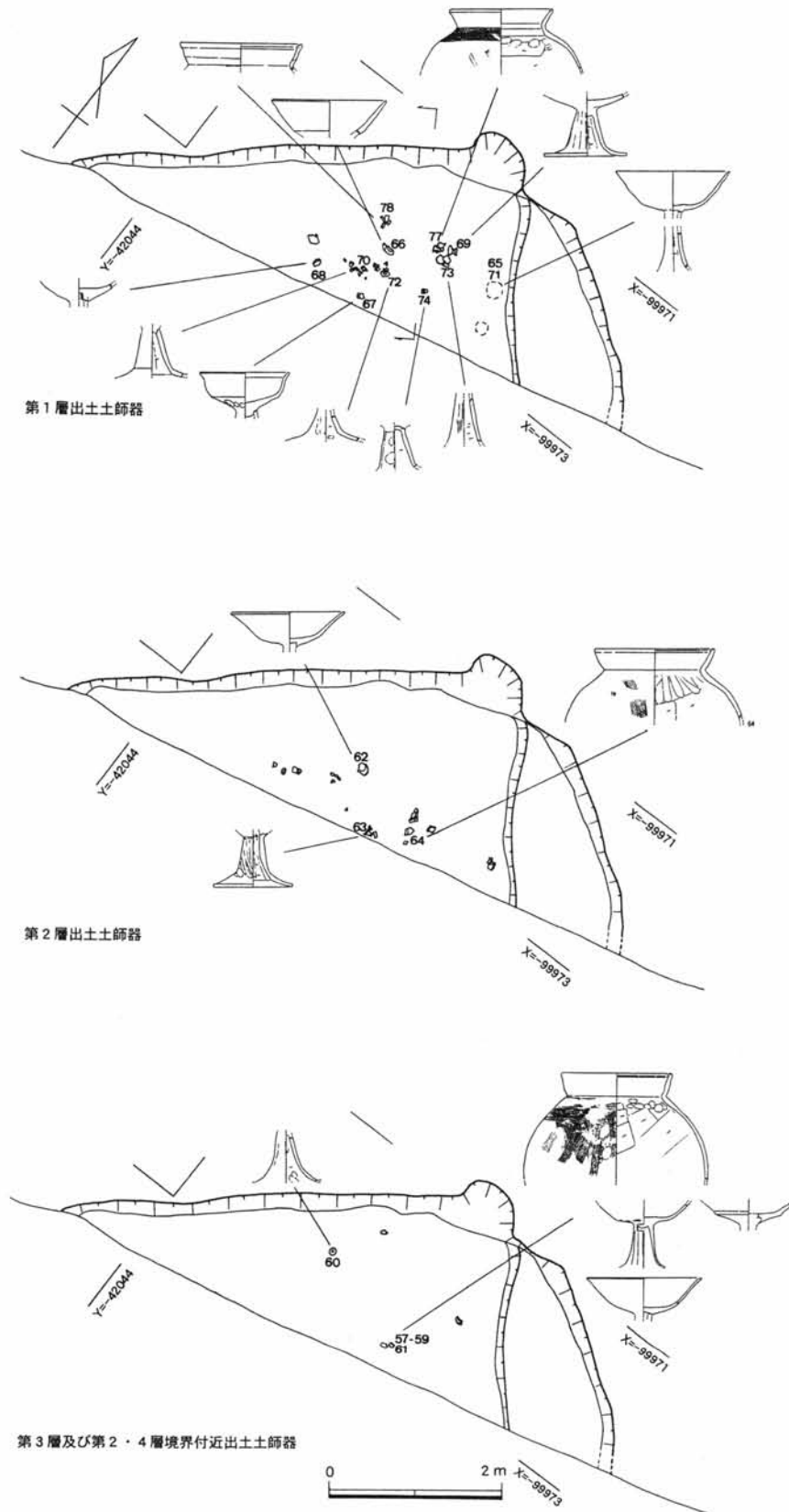
今回の調査で出土した遺物には、弥生土器、土師器、須恵器、瓦器、青磁、滑石製勾玉、鉄製鉈、土錘

1：極暗褐色混礫砂質シルト（2~5 cm大の礫をやや多く含む、土師器を多量に含む）、2：極暗褐色シルト質砂礫（1 cm大の小礫と5~7 cm大の礫を多く含む、土師器・炭化物粒を含む）、3：極暗褐色シルト質砂礫（1 cm大の小礫と5~7 cm大の礫を少量含む、土師器・炭化物粒を含む）、4：暗黄褐色混礫砂質シルト（3~5 cm大の礫をやや多く含む）、5：暗黄褐色砂質シルト、6：黄褐色砂礫（遺構ベース層）

第70図 S H 09- a ・ b 平面・断面図

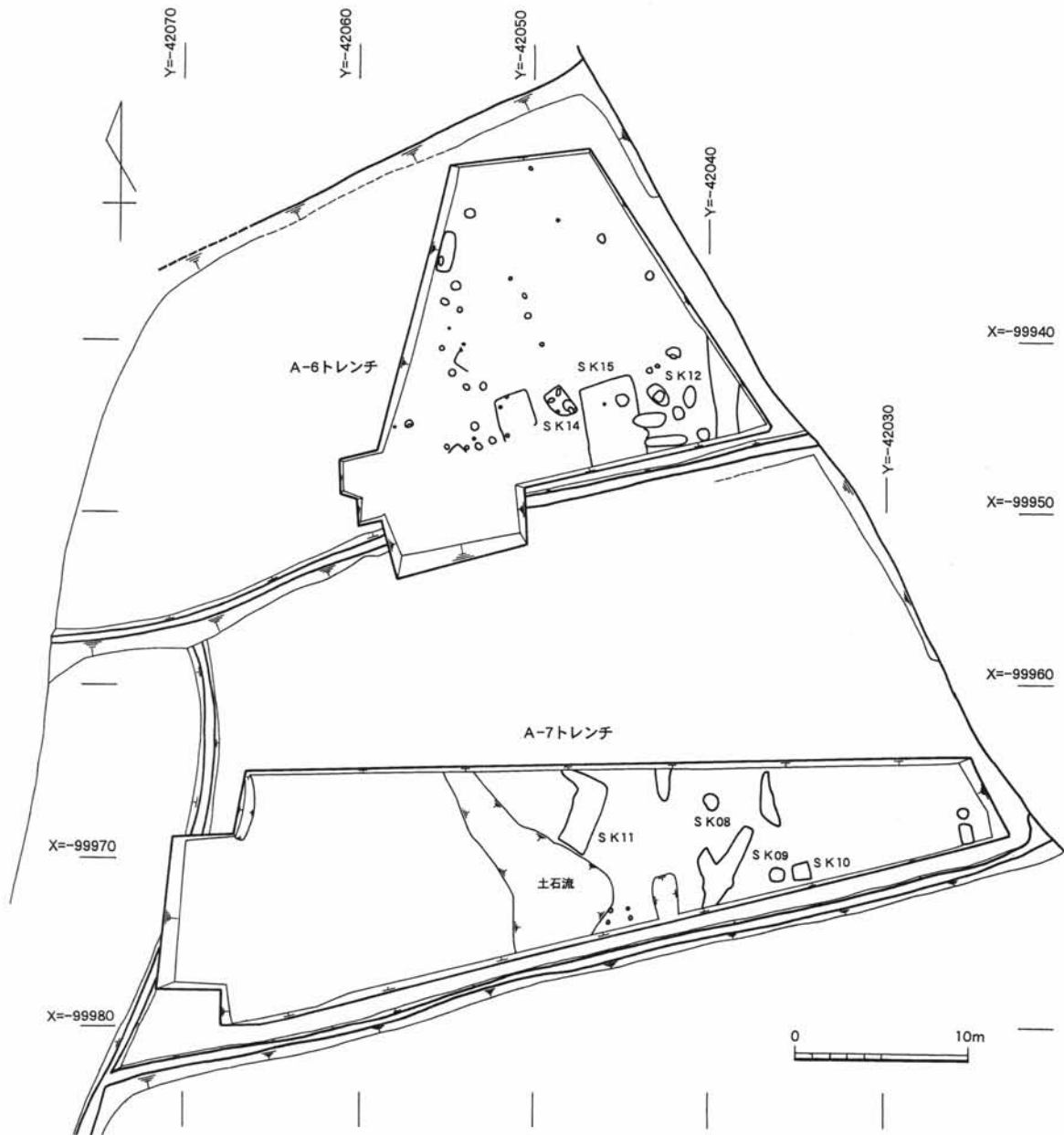
などがある。以下にその概要を述べる。

竪穴式住居跡 S H01出土遺物(第75図) 1~15は S H01-a、16~18は S H01-b から出土した。

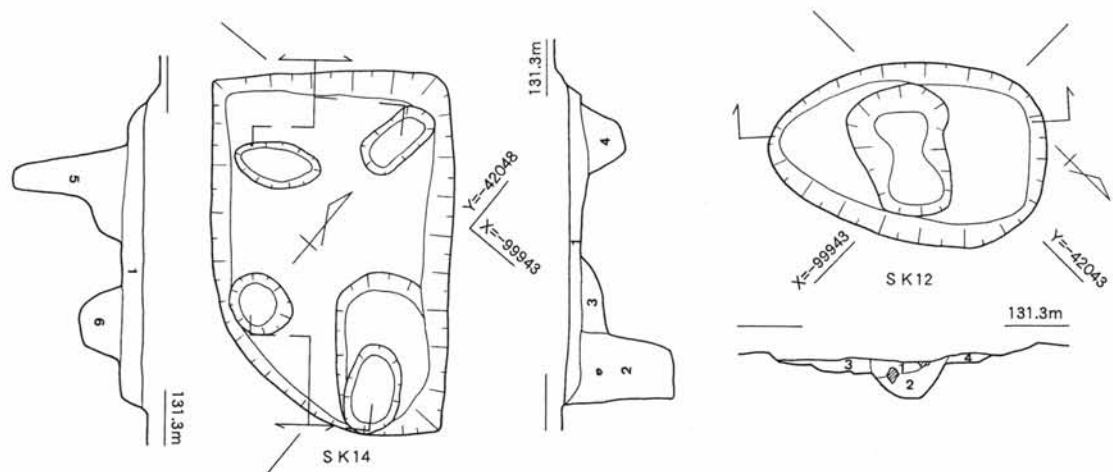


第71図 S H09遺物出土状況図

1は須恵器椀である。底部から直線的に上外方にのび、口縁部は内彎している。把手は破断している。上下2段の文様帯があり、櫛描波状文を施している。手部付近はヘラケズリが見られる。外面は赤みを帯びた青灰色、断面は赤紫色である。大庭寺遺跡TG232型式と見られる。^(注8) 2～5は土師器高杯である。2・3は無稜外反高杯、4は有稜外反高杯である。2は竈の支脚として使用されていた。2は赤褐色、3は橙褐色、4は暗灰色である。3は破片であるため、混入品の可能性もある。6・7は土師器鉢である。平底で6は口縁が直立し、7は外反する。いずれも淡褐色である。8は土師質で長胴で口縁の屈曲が甘く、外面をタタキ調整する煮沸容器である。類例が少なく用途・器種は判然としない。韓式系土器の一種とする説と製塩土器の一種とする説がある。^(注9) 内面の炭化物や外面の被熱痕跡、煤の付き方から、普段横向けで火にかけていたことが看取される。9・10は小型・中型の土師器甕である。9には口縁端部内面の肥厚が見られない。11～

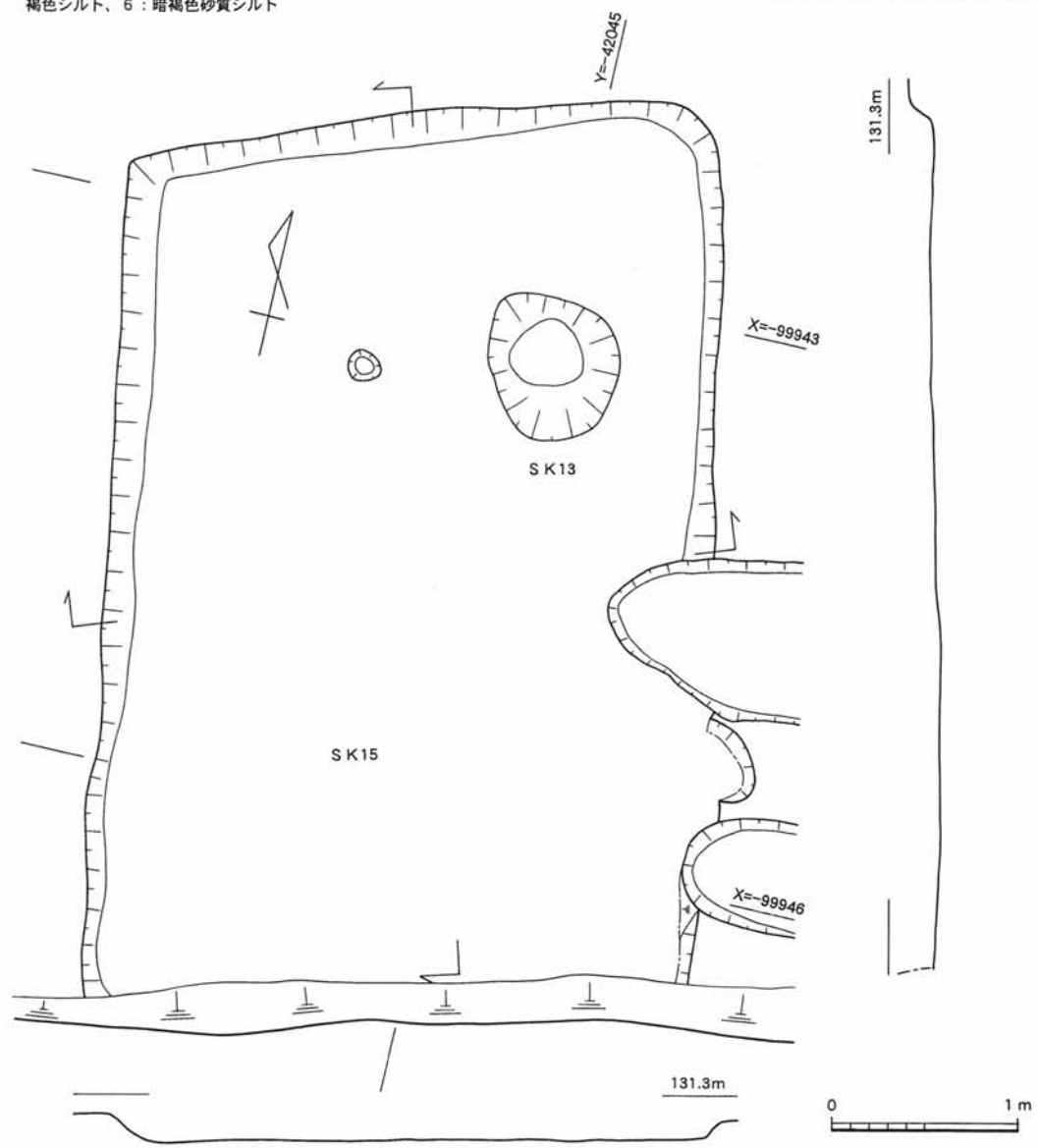


第72図 第2遺構面遺構配置図

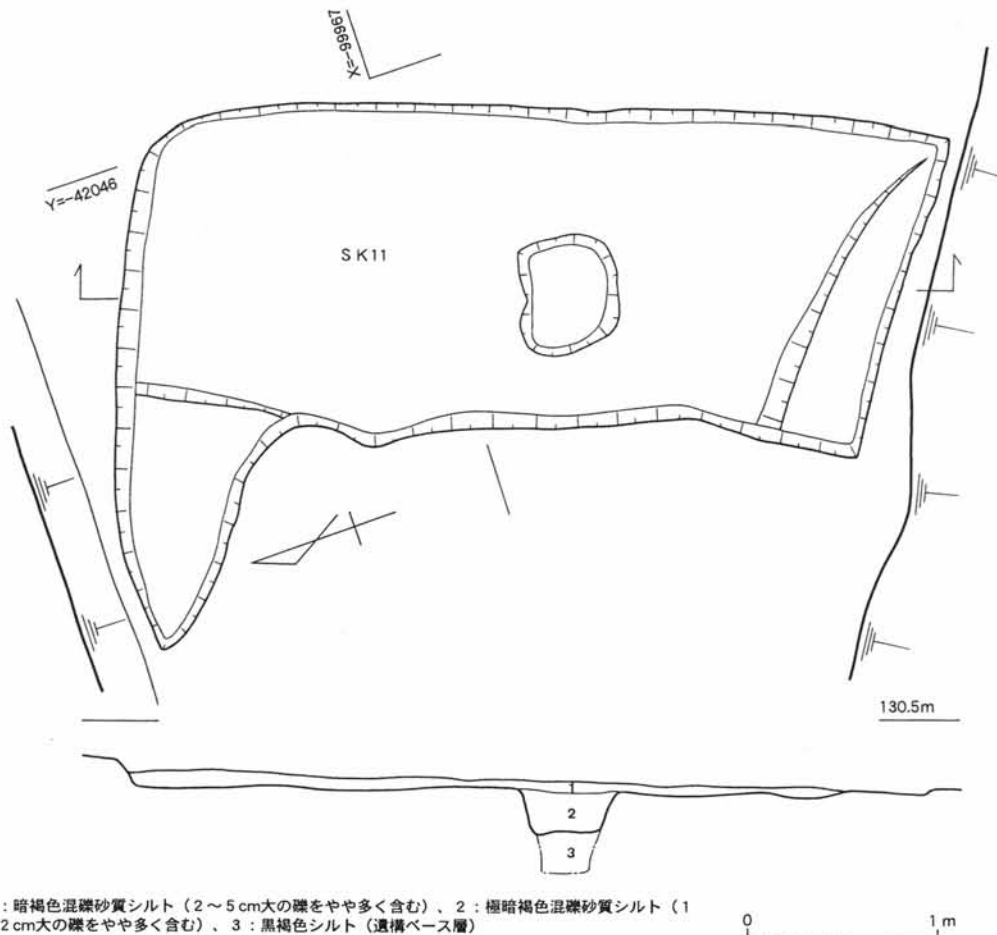
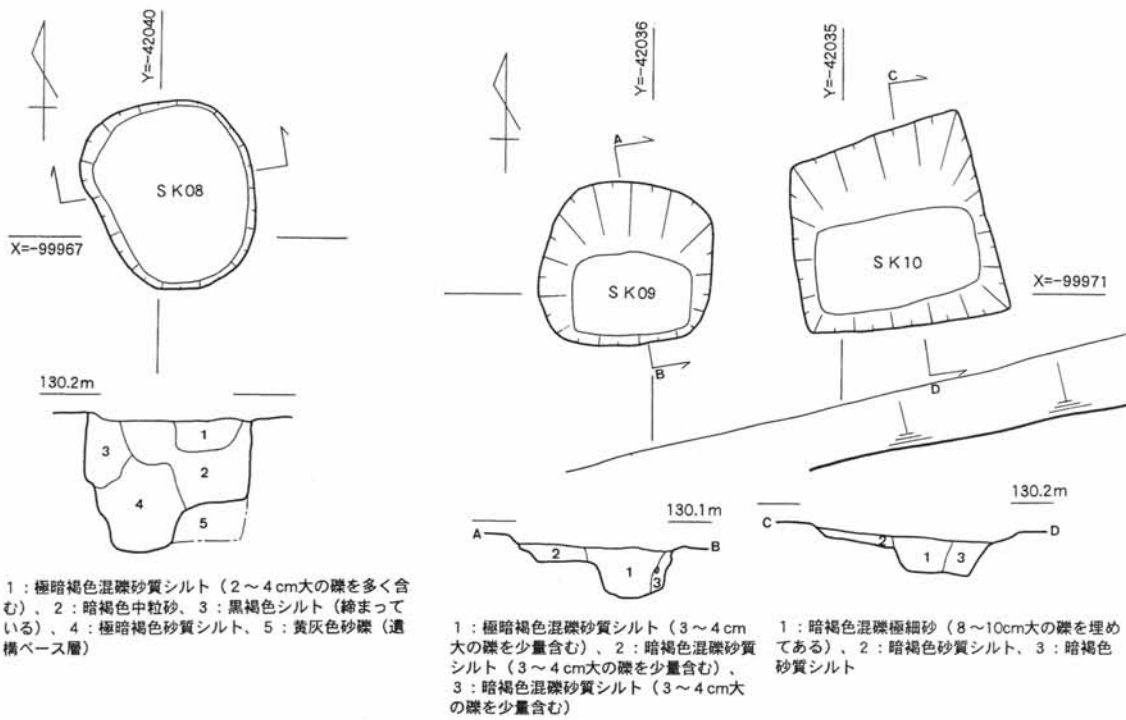


1：黒褐色シルト質極細砂、2：暗褐色混礫シルト質極細砂（3～5cm大の礫をやや多く含む）、3：暗黄褐色混礫シルト（3～5cm大の礫を多く含む）、4：黒褐色シルト、5：黒褐色シルト、6：暗褐色砂質シルト

1：黒褐色混礫砂質シルト、2：黒褐色砂質シルト、3：暗褐色砂質シルト、4：暗褐色砂質シルト



第73図 A-6トレンチ第2遺構面各遺構平面・断面図



第74図 A-7トレンチ第2遺構面各遺構平面・断面図

14は大型の土師器甕である。丸底、くの字口縁で口縁端部内面を肥厚する。胴部下半外面はタテハケ、肩部外面にヨコハケを施し、内面はヘラケズリを行うことは布留甕と同様であるが、肩部内面に強い指ナデ、底部内面に無数の指頭圧痕を有する技法は特徴的である。特に後者は胴部下半を外型作りしている可能性を強く示唆する。また、肩部に2条の線刻による記号文が施されている。色調は灰褐色が多いが、14は火災による二次焼成を受けて橙褐色に変色している。15は土師器の甕である。口縁部が広く、底部が狭く、平底である。底部には中央に1穴、周辺に7穴の円形蒸気孔が穿たれている。把手はやや長い牛角状を呈す。色調は黄灰色である。16は須恵器杯蓋である。つまみが付いていた痕跡がある。非常に高い突帯状の稜が付き、非常にていねいな回転ヘラケズリの後、沈線を2条めぐらせ、その間に櫛状工具で列点文を施している。口縁部内面は回転ナデを施すが、天井部は不整方向ナデである。TG232型式とも考えられるが、TK73～216型式併行の遺物群と共伴することもあり、17・18と共伴することを考えると、その段階まで下げた方が穏当であろう。^(注10)17・18は土師器高杯である。18の脚裾部は脚柱部から屈曲することが看取される。いずれも橙褐色を呈す。

竪穴式住居跡SH02出土遺物(第76・78図) 19・21～25はSH02-a、20・26～34はSH02-bから出土した。20はSH02-bから出土したが、21・22と同一個体と思われる。33が赤褐色である以外は橙褐色を呈する。19～28は土師器高杯である。19～22・26は大型高杯である。27は椀形高杯の杯部である。脚部との接合部にハケ調整を施す。高杯の脚部は外反して裾部へ至る。29～33は土師器甕である。口縁内面には折り返しによる肥厚が残るが、肩部のヨコハケは衰退している。34はSH02-bの埋土中より出土した須恵器の杯蓋である。TK208～23に併行すると思われる。第78図89は滑石または蛇紋岩製勾玉である。「C」字形に作られており、面取りや研磨もていねいに行われている。また穿孔は両面穿孔によって行われている。

竪穴式住居跡SH04出土遺物(第76・78図) 35は弥生時代末葉頃の壺の底部付近である。第78図87は混入の石庖丁である。

竪穴式住居跡SH05出土遺物(第76図) 36・37・39～45はSH05-a、38・46はSH05-bから出土した。36～41は土師器高杯である。40を除いて橙褐色を呈する。36・38は大型高杯である。37は椀形高杯の杯部である。脚部は41は屈曲しているが、40は外反している。42は土師器甕であるが、短黄灰色を呈し、搬入の可能性がある。43は山陰系壺との折衷型壺である。44・45は土師器甕または鍋の把手である。特に44は韓式系土器とされるものである。46はSH05の上面から出土した須恵器の脚台部である。このほか鉦が出土したが、破断していて図化できなかった。

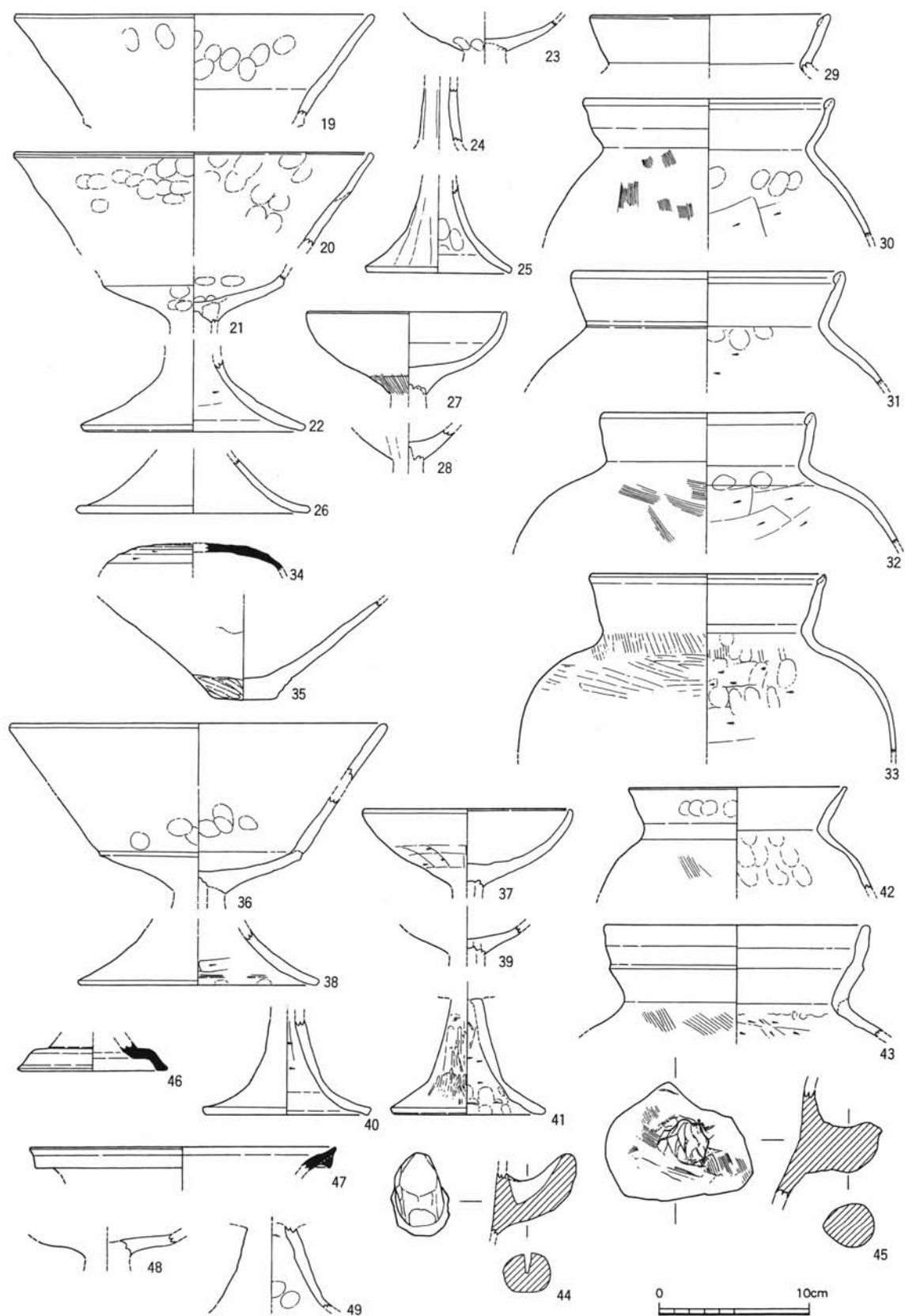
竪穴式住居跡SH06出土遺物(第76図) 47は下層から出土した須恵器甕の口縁部である。シャープな作りであるが、自然釉がかかっている。TK216併行か。48・49は土師器高杯である。

竪穴式住居跡SH07出土遺物(第77図) 50は弥生土器壺、52は同椀形高杯、51は丹後系把手付鉢の一部である。54は甕の底部付近である。いずれも弥生時代後期中頃の遺物である。53は南丹波に特徴的な受口状口縁を呈するハケ甕である。最上層から出土した。

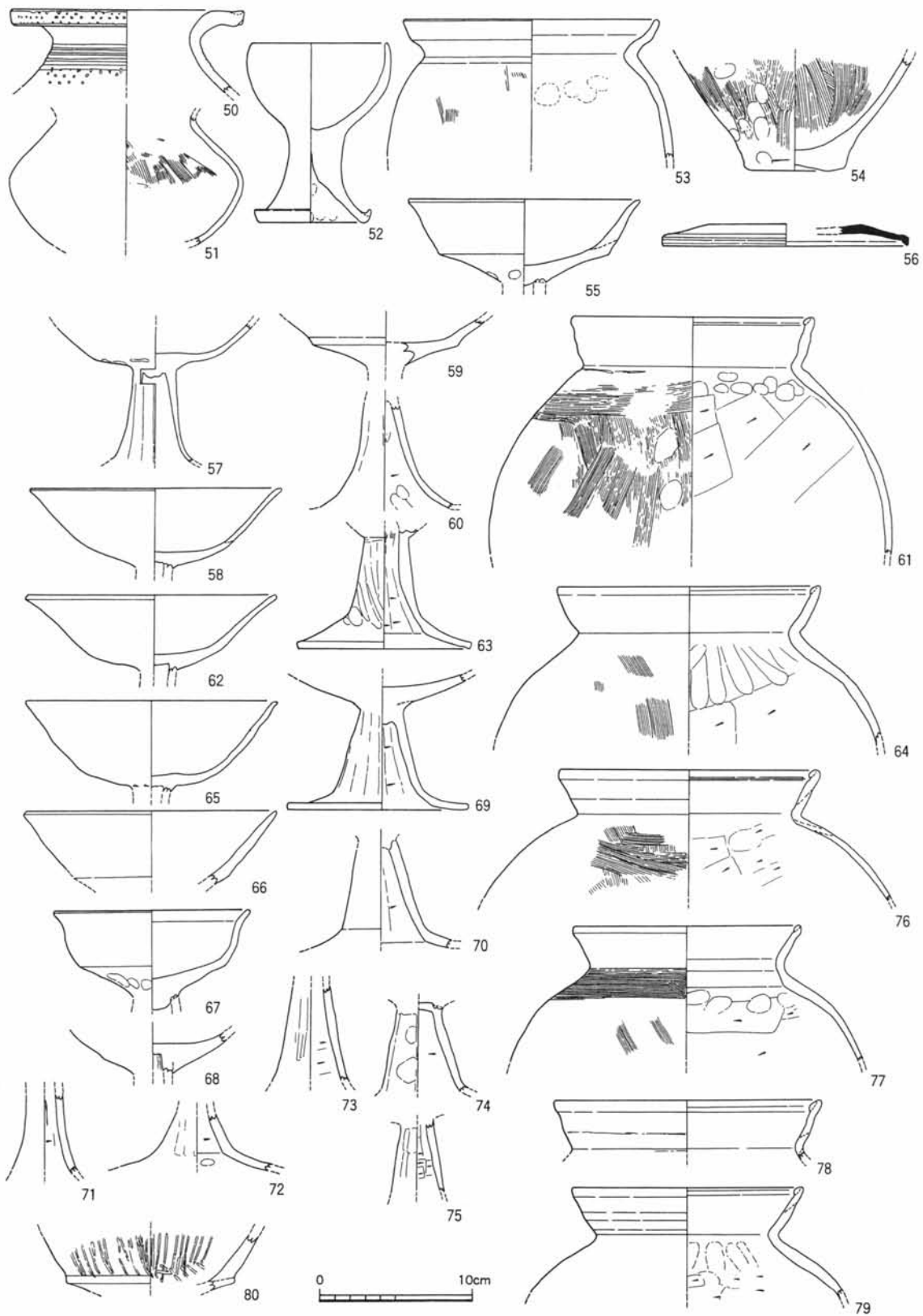
竪穴式住居跡SH08出土遺物(第77図) 55は土師器高杯である。56は上層から出土した須恵器



第75図 出土遺物実測図(1)
SH01-a : 1~15、SH01-b : 16~18



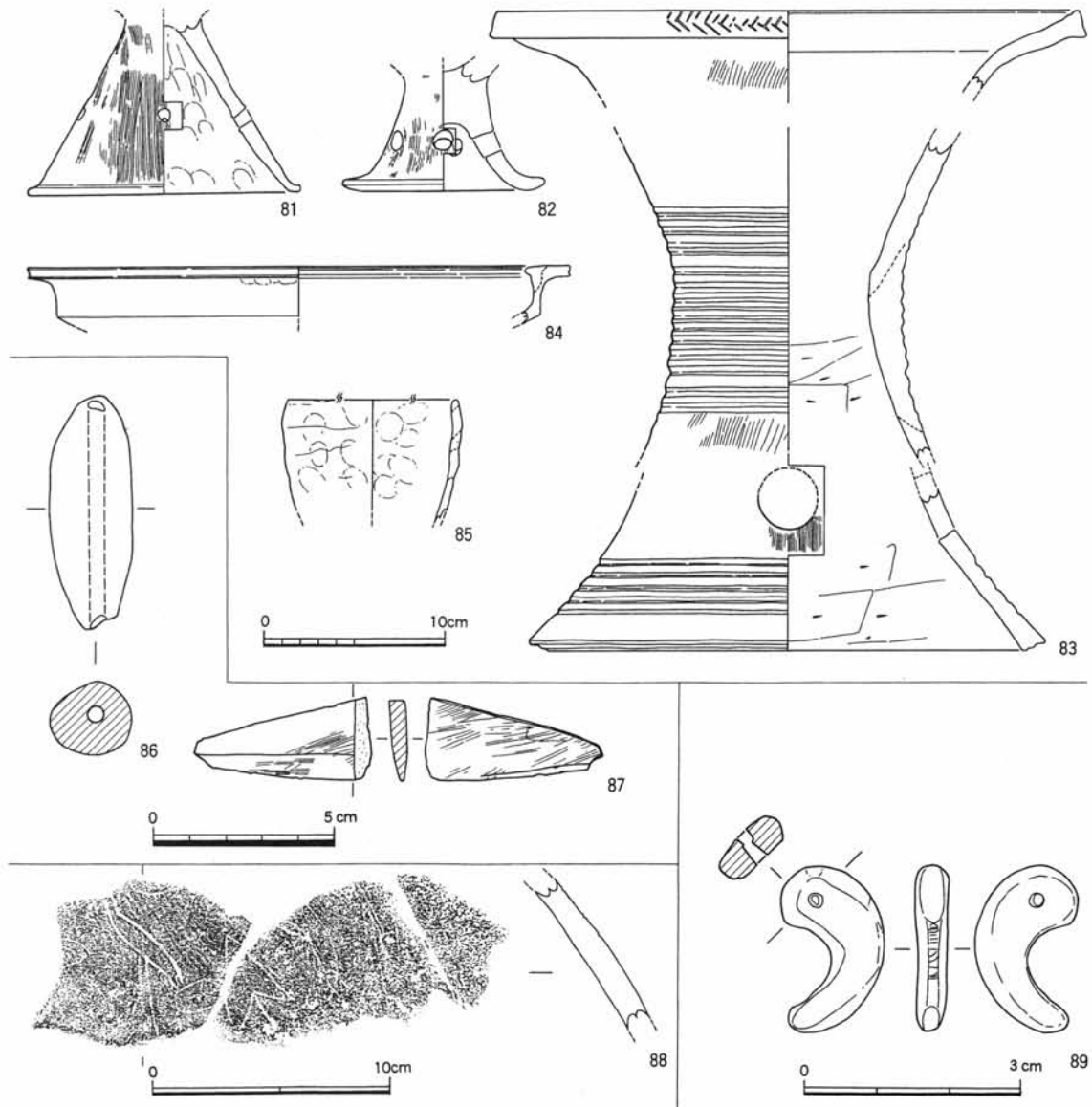
第76図 出土遺物実測図(2) SH02・04~06出土遺物
 SH02-a : 19・21~25、SH02-b : 20・26~34、SH04 : 35、
 SH05-a : 36・37・38~45、SH05-b : 38・46、SH06 : 47~49



第77図 出土遺物実測図(3) S H07~10出土遺物
S H07-b : 50~54、S H08 : 55・56、S H09第3層~4層 : 57~61、
S H09第2層 : 62~64、S H09第1層 : 65~74・76~78

蓋である。57は奈良時代末のものである。第78図86は上層から出土した土錘である。

竪穴式住居跡 S H09出土遺物(第77図) 57~61は第3層または第2層と第4層の境界部付近から出土した。57~60は土師器高杯である。薄手の作りで、脚柱部から脚端部にかけては外反して広がる。脚部内面は杯部との接合部までヘラケズリが施されている。57は褐色を呈し、角栓石を含む。58・60は淡灰色を呈す。57は河内地域からの搬入品の可能性がある。61は同層出土の土師器甕である。S H01出土の甕と特徴は同様である。62・63は第2層から出土した土師器高杯である。杯部は無稜外反の形態で、脚部は屈曲して脚裾部に至る。脚柱部外面にヘラミガキが見られる。脚柱部内面は杯部との接合部までヘラケズリが施されている。いずれも淡灰色を呈す。64は同層出土の大型土師器甕である。肩部内面に指ナデの痕跡が見られる。65~74は第1層から出土した土師器高杯である。65は無稜外反高杯、66・67は有稜外反高杯である。脚柱部内面は杯部との接合部までヘラケズリが施されている。いずれも橙褐色を呈する。76~78は同層出土の大型土師器甕である。S H01出土の甕と特徴は同様である。第1層出土遺物はT K208型式併行、第2



第78図 出土遺物実測図(4)

層以下はTK73～216型式併行である^(注11)。

遺構外出土の遺物(第78図) 81～83はA-7トレンチ出土である。81・82は弥生土器高杯脚部であるが、81は弥生時代後期前葉のものである。83は弥生土器器台である。中期後葉のものである。84・85・88はA-6トレンチ出土である。84は吉備系と見られる弥生土器高杯である。全面に赤色塗彩が見られる。85は製塩土器である。88は弥生土器壺の肩部に線刻で絵が描かれているものである。水鳥など5体以上が描かれているが、モチーフは不詳なものが多い。このほかに手焙形土器、須恵器壺、瓦器、青磁、土師皿なども出土している。

4. 諸畑遺跡出土土器および粘土の胎土分析^(注12)

(1) 試料

本分析に供された試料は、諸畑遺跡第3次発掘調査SH03から出土した土器1点、土壌1点およびこの土壌を用いた焼成試料1点の合計3点であり、焼成試料はこの土壌を650℃で1時間電気炉内で焼いたものである。

(2) 試料の採取

土器および焼成試料は以下の要領で採取・粉碎した。分析試料は、試料の持つ考古学的価値を損なわないように配慮し、ダイヤモンド・カッター削除して採取した。分析に供した試料片は全体に少量で、5.0-5.3g程度であった。また胎土材とみなされる土壌は、土壌の一部を割り取り、そのまま分析にかけるものと焼成用供試体作成用に分け、それぞれ採取した。

(3) 分析方法

1) **土壌(胎土)の焼成実験** 焼成実験に先立ち、胎土とみなされた土壌をよく練り、磁製ルツボに入るサイズの小型板状の供試体を作成した。これを室内で10日間風乾させ、さらに50℃で24時間乾燥させたのち重量を測定し、焼成実験にかけた。供試体の焼成実験は、⑭東洋製作所製の電気マッフル炉(KM-100)で行った。試験前に所定の温度を保った状態で炉内に置かれた磁製ルツボに2個の供試体(1個は粉碎し胎土分析に供し、他の1個は焼成状態を観察するため保存用とした)を入れ焼成した。本電気炉は使用温度範囲が1000～1150℃、温度調整精度は±1.5℃(1150℃の時)であり、温度分布精度は±3℃(1000℃の時)とされる。弊社では精密な3本の熱伝対を炉内に配置し、供試体が正しく所定温度で焼成されていることを確認した。焼成試料はルツボごと炉外に取り出し、室温まで静置急冷させた。その後以下の方法で、胎土分析に供した。

2) 試料の分析

前処理 試料片は50℃で一昼夜乾燥し、秤量後乳鉢で1つずついねいに粉碎した。次に2 l ビーカー中で適宜水替えをしながら水洗し、さらに300mlパイレックスビーカーに移し超音波洗浄を行った。この際、中性のヘキサメタリン酸ナトリウム溶液を微量加え、懸濁がなくなるまで洗浄液の交換を繰り返した。ついで、篩別時の汚染を防ぐため使い捨てのフルイ用メッシュ・クロスを用い3段階の篩別(120、250メッシュ)を行った。こうして得られた120-250メッシュ(1/8-1/16mm)250メッシュ(1/16mm)以下の2つの粒径試料を、比重分別処理を加えることなく封入剤

($nd=1.54$)を用いて岩石薄片を作成した。

火山ガラス・鉍物含有率測定 主として重鉍物・軽鉍物・土粒子の量比の違いが試料ごとに認められるかをチェックする目的で分析するが、試料間の差がそれほどないことから分析項目を増し、火山ガラス・軽鉍物・重鉍物・岩片・焼結粒子の5項目について含有粒子数をランダムに計数した。このうち焼結粒子としたものは、胎土中焼結され多くの微細粒子が集合し塊状となった粒子をさす。作業要領は基本的に後述の重鉍物分析と同じで、1薄片中の各粒子を無作為に200個まで計数した。なお対象粒子は120-250メッシュ(1/8~1/16mm)粒径試料である。

重鉍物分析 火山灰分析などで、通常分析対象とする120-250メッシュ粒径(1/8~1/16mm)篩別試料で検鏡を行った。検鏡作業は、主要鉍物であるカンラン石(Ol)・斜方輝石(Opx)・単斜輝石(Cpx)・褐色普通角閃石(BHb)・緑色角閃石(CHb)・不透明(鉄)鉍物(Opq)・カミングトン閃石(Cum)・黒雲母(Bt)・ジルコン(Zr)・アパタイト(Ap)を鏡下で識別し、ポイント・カウンターを用いて無作為に200個体を計算してその量比を百分率で示した。なおこの作業は封入薄片1枚(封入粒子2000~4000個)を対象に行い、試料により重鉍物含有の少ないものは結果的に総数200個に満たない。また重液処理は行っていない。

顕微鏡写真撮影(図版第58) 前処理で作成された岩石薄片を用い、顕微鏡写真撮影を行った。撮影画面の設定は、分析結果を最もよく反映するように火山ガラス・軽鉍物・重鉍物・岩片・その他の粒子がバランスよく収まるよう配慮した。

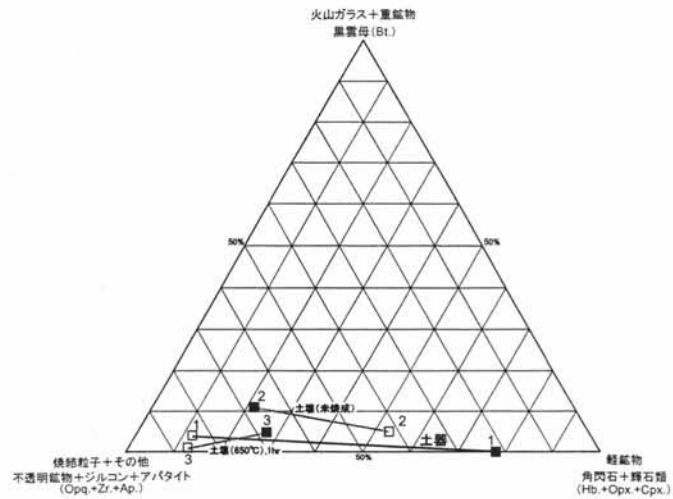
(4)分析結果と考察

今回の分析結果の詳細は、巻末の測定データ一覧表中に示されている(割愛)。しかし比較要素が多いため、分析データだけをみていたのでは分析値間の相互関係を把握することは困難と思われる。そこで、重鉍物分析および火山ガラス・鉍物組成結果を三角ダイアグラム(第79図)上にプロットし表示した。なお、三角ダイアグラムを作成するにあたり、各分析結果の3つの端成分として以下に述べる要素を設定した。まず重鉍物組成分析では、まず黒雲母(Bt)、次に不透明(鉄)鉍物とジルコンの和($Opq+Zr$)、さらに緑色角閃石と斜方輝石および単斜輝石の和($GHb+Opx+Cpx$)を3つの端成分とし、それぞれ頂点・左下・右下を100%として図示した。その理由は、Btは主として花南岩に起源の可能性が高い要素とみなすことができること。 $Opq+Zr$ はともに比重が大きく風化にも強く粘土中に残りやすい鉍物であること。さらにこれらは水簸の過程で沈降しやすく排除されやすい要素であること。最後に $GHb+Opx+Cpx$ はそのほかの成分で火山灰起源の場合が多い可能性があり、相互関係を検討するには有効と判断したからである。一方、火山ガラス・全鉍物含有率分析結果では、三角ダイアグラムの3成分として頂点に重鉍物+火山ガラスを、左下に焼結粒子、右下に軽鉍物をそれぞれ100%になるようにプロットした。その理由は、粘土鉍物を主とし非結晶~微結晶の集合体である焼結粒子は土器材料の主成分であること。最後に重鉍物+火山ガラスは含有量がともに少なく、一括して副成分とみなせると判断したからである。なお軽鉍物はさらにカリ長石・斜長石・石英等に細分されるが、今回の分析では一括して取り扱った。

以下に今回の分析結果について考察を加える。

1) 土器 S H03ap-08, 310 粉碎し

た土器の薄片検鏡の結果、本試料は大部分焼結粒子と軽鉱物(石英・斜長石・アルカリ長石と微量の高温石英)から構成され、少量の珩長質火山ガラスと重鉱物を含むことが判明した。火山ガラスの屈折率測定と形態および色付きガラスの有無の検討を行ったところ、大部分はAT(始良一丹沢)テフラで、その他に微量の大山系およびK-Ah(鬼界アカホヤ)テフラ起源



第79図 諸畑遺跡胎土分析三角ダイヤグラム

ガラスを含むと推定される。重鉱物組成では角閃石(約20%は土器焼成に伴う高温酸化によると推測される褐色角閃石)が主で、他に鉄鉱物と斜方輝石が多い特徴がある。

2) 土壌 S H03粘土01, 315 遺跡内より出土した胎土と想定される土壌である。

前処理の過程で粘土を主とする細粒分の流失が生じ、また一方焼成に伴う焼結粒子は形成されないため、土器あるいは焼成試料の分析結果と基本的な差があるのは当然である。しかし、もし胎土ならば、含有鉱物組成や火山ガラスの構成要因の種類には共通性が保存される可能性が高い。この視点から分析データをみると、含有量の多い軽鉱物は多いものから石英・カリ長石(主としてカコウ岩起源)・アルカリ長石(アルカリ岩質凝灰岩起源の可能性はあるか?)・斜長石の順で構成され、前述の土器310とほぼ一致する。また火山ガラスもAT・K-Ah・大山系の3種類が混在し、前述の土器310と比較するとK-Ahの含有率が高いものの構成種は一致する。さらに重鉱物組成は鉄鉱物が最も多く、次いで角閃石・黒雲母・斜方輝石を含み、その他に少量の鉱物が検出される。対照される土器310と重鉱物構成種で大きく異なる点は褐色角閃石の欠如と黒雲母の存在であるが、土器の焼成時の高温酸化に伴う角閃石の褐色化と黒雲母の脱水熱分解による消失を考慮すると、土器と胎土との対応関係には特に矛盾は認められない。

3) 焼成土壌(650℃、1時間) S H03粘土01, 315土壌を用いた供試体を650℃で1時間焼成し、

分析対象とした。粉碎した供試体の薄片検鏡の結果、本試料は大部分焼結粒子と軽鉱物(石英・カリ長石・アルカリ長石・斜長石)から構成され、少量の珩長質ガラスと重鉱物を含むことが明らかとなった。前述の2試料間に対応上矛盾のないことが示されており、当然ながら本試料と土器試料の分析結果には多くの共通点が認められ、両者の対応関係にも矛盾はない。わずかに異なる点は土器試料に比較して褐色角閃石の含有が低く、一方土器試料には検出されない黒雲母が認められることである。これらの原因は不明であるが、焼成時間の短さがその原因となる可能性を指摘しておきたい。すなわち焼成時間がより長時間となれば高温酸化がさらに継続され、緑色角閃石の褐色化と黒雲母の熱分解が進むものと予想される。

以上の結果、本焼成試料と土器試料の胎土分析結果には、両者の対応関係に矛盾が認められな

いことが結論される。

参考文献

- ①吉川周作(1976)：大阪層群中の火山灰層について。地質学雑誌、82(8)、479-515。
- ②山下透・檀原徹(1995)：火山ガラスのhydratonとsuper hydration—日本の広域テフラについて—、フィッション・トラックニュースレター第8号、41-46。
- ③横山卓雄・檀原徹・山下透(1986)：温度変化型屈折率測定装置による火山ガラスの屈折率測定。第四紀研究、25(1)、21-30。
- ④Danbara T., Yama S Hita T., Iwano H. and Kasuya M. (1992): An improved system for measuring refractive index using the thermal immersion method. Quaternary International. 13/14, 89-91.
- ⑤檀原徹(1993)：温度変化型屈折率測定法、日本第四紀学会編、第四紀試料分析法2、研究対象別分析法、149-157、東京大学出版会。
- ⑥鎌田浩毅・檀原徹・林田明・星住英夫・山下透(1994)：中部九州の今市火砕流堆積物と類似火砕流堆積物の対比および噴出起源の推定、地質学雑誌、100(4)、279-291。
- ⑦Tsuboi, S. (1968a): Optical determination of low- and high-temperature plagioclase. 1, Proc. Japan Acad., 44, 151-154.
- ⑧坪井誠太郎・水谷伸次郎・諏訪兼位・都築芳郎(1977)：斜長石光学図表。岩波書店、5-9。なお、温度変化型屈折率測定装置RIMSTMと測定方法は、PAT. 1803336, 1888831で特許登録および商標登録されている。

6. 総括

今回の調査によって縄文時代後期～弥生時代中期の遺構面が存在し、弥生時代中期後葉の土器が一定量存在するということが判明し、弥生時代後期初頭の土器が出土し、当該期の集落も継続していたことが判明し、弥生時代中期後葉から古墳時代中期までほぼ断絶がないことが分かった。また、弥生時代後期中葉に竪穴式住居跡の方形化が進行することも明かとなった。

古墳時代には中期前葉に竈の導入が図られ、初期須恵器・韓式系土器を所有しているなど、南丹波地域において最も先進的な集落であったことが分かった。

飛鳥時代以降中世までの遺物がA地区にも少量ながら広がっていることも明かとなった。

以上のように今回の調査によって諸畑遺跡の様相が徐々に明らかとなってきている。第5・6次調査の結果を総合すれば、諸畑遺跡がこの地域で果たした歴史的役割の解明も進むであろう。

なお、今回の調査で最も重要な成果となった古墳時代竈の導入過程について、南丹波の資料を以下にまとめておきたい。

諸畑遺跡で検出したSH01-aの石組み竈は南丹波地域にとどまらず、丹後・丹波で報告された竈の中では最古のものである。また、石組み構造の竈も類例が少なく、SH02の竈とともに貴重な事例である。そこで、南丹波地域の古墳時代竈の検出例を集成し、導入の過程や構造の変化を明らかにしたいと思う。

付表は、現在刊行されている報告書の全てに当たって集めた亀岡市、南丹市、旧京北町の船井郡・桑田郡の古墳時代中期～TK209併行の須恵器を出土した竪穴式住居跡に伴う竈の事例である。12遺跡159基の竪穴式住居跡で検出されている。

最古例は諸畑遺跡第4次SH01であるが、これに続くTK73～216併行期の竈の事例としては南丹市池上遺跡第13次SH351と亀岡市里遺跡竪穴式住居跡85の2例が挙げられる。両者とも住居跡の北西辺の中央に設置されている。いずれの竈も残存状況が悪く、住居の廃絶時に破却している可能性が高い。煙出しは住居の周壁から飛び出してはいない。この時期までの竈の分布は八木盆地内に限られ、南丹波地域でも竈の導入は諸畑遺跡を含む八木盆地内で始まる。

TK208併行期(古墳時代中期後葉)になると諸畑遺跡、里遺跡、杉北遺跡など八木盆地で竈の普及が進み、加えて亀岡盆地西部の鹿谷遺跡、船井郡・桑田郡の山間部である天若遺跡、東山遺跡などでも竈の導入が始まる。この時期の特徴として、住居の周壁からやや離れた位置に粘土を馬蹄形に盛って構築する事例が杉北遺跡等で見られる。煙出しや煙道をどのように構築したかは不明である。また、住居の床面を一旦土坑状に掘削することも諸畑遺跡、杉北遺跡で見られる。支脚は諸畑遺跡ではこの時期に土師器高杯から支脚石に転換する。これに対応して杉北遺跡でも支脚石が用いられる。里遺跡でも支脚石の抜き取り痕が報告されており、この時期に竈の導入が始まった天若遺跡では、この後支脚石を使用し続ける。一方鹿谷遺跡では土師器高杯が使用されており、遺跡ごとの地域性が見られる。

TK23～47併行期(古墳時代中期末葉)になると亀岡盆地の全域で竈の導入が進み、検出例も多くなる。池上遺跡と鹿谷遺跡での支脚は依然として土師器が主体であり、鹿谷遺跡で1例のみ支柱石が見られる。池上遺跡では焚口側に粘土で堤を築く構造が現れる。また、袖部が直線状を呈する事例が増え始める。これは次の段階で紹介する天若遺跡例のように竈が立方体もしくは直方体を呈するようになることに起因するのではないかと考えられる。煙出しが住居周壁を越えてのびる煙道がこの時期から出現するが、40cm前後のまでの短いものである。

MT15併行期(古墳時代後期前葉)は遺跡内での竈検出数の激増期であり、最早竈は普遍的な屋内施設となる。支脚が土器か石かではっきりとした遺跡差が現れており、池上遺跡では器種を増やしながらも土師器を用いており、鹿谷、天若の両遺跡では石に統一されている。残存状況が良好な天若遺跡SH9140では直方体の竈本体で焚口には堤があり、掛口は円形である。掛口の下部には支脚石が立っている。燃焼部の向かって左後方から周壁に接した天井部に向かってトンネル状に煙出しが掘られている。他に池上遺跡で袖部の粘土に骨材として粘板岩を入れているものがある。また、袖部前面に門柱石を用いたものがこの段階から天若遺跡を中心に再出現する。

TK10併行期(古墳時代後期中葉)には焚口に天井石を用いるものが再出現する。

TK43併行期(古墳時代後期後葉)には支脚に土器を用いるのは池上遺跡のみになる。池上遺跡では、土師器の高杯が入手困難となったこの時期には須恵器の高杯を支脚に用いている。天若遺跡では門柱石と天井石がやや普及する。煙道の長さが60～80cmのものが現れる。杉北遺跡に袖部に土器片を混入させたものがある。

TK209併行期(古墳時代後期末葉)の竪穴式住居跡の検出例が少ないため、はっきりしたことは分からないが、前段階の様相を受け継いでいる。煙道部が1m程度までのびるものが見られる。

竪穴式住居跡に伴う竈には排煙部である煙出し・煙道をどう処理するかが宿命的な課題として

付表 南丹波古墳時代竈集成

遺跡名	所在地	遺構名	竈の位置	門柱石	袖部	天井石	支柱石	支柱土器	時期
杉北遺跡第2次	亀岡市旭町	竪穴住居跡1 (SH 0201)	北壁からやや離れた中央				1		T K208~23
杉北遺跡第2次	亀岡市旭町	竪穴住居跡2 (SH 0202)	北壁からやや離れた中央				1		T K208~23
杉北遺跡第2次	亀岡市旭町	竪穴住居跡3 (SH 0203)	北壁からやや離れた中央				1		
杉北遺跡第2次	亀岡市旭町	竪穴住居跡4 (SH 0204)	北壁中央		土器片塗り込め			甕	TK43
杉北遺跡第2次	亀岡市旭町	竪穴住居跡5 (SH 0205)	北壁よりやや離れた中央						
杉北遺跡第2次	亀岡市旭町	竪穴住居跡6 (SH 0206)	北壁よりやや離れた中央		土器片塗り込め			高坏	TK10
杉北遺跡第7次	亀岡市旭町	SH01	南西辺よりやや離れた中央						後期
里遺跡第5次	亀岡市旭町杉・樋ノ口・里	竪穴式住居跡1	東辺中央						MT15
里遺跡第5次	亀岡市旭町杉・樋ノ口・里	竪穴式住居跡100	北辺中央						MT15
里遺跡第5次	亀岡市旭町杉・樋ノ口・里	竪穴式住居跡21	北東辺中央					抜き取り痕	T K47~MT15
里遺跡第5次	亀岡市旭町杉・樋ノ口・里	竪穴式住居跡22	北辺中央						T K47~MT15
里遺跡第5次	亀岡市旭町杉・樋ノ口・里	竪穴式住居跡23	北辺中央						T K47~MT15
里遺跡第5次	亀岡市旭町杉・樋ノ口・里	竪穴式住居跡4	北東辺中央						
里遺跡第5次	亀岡市旭町杉・樋ノ口・里	竪穴式住居跡56	東辺中央						MT15
里遺跡第5次	亀岡市旭町杉・樋ノ口・里	竪穴式住居跡68	北辺中央						T K47~MT15
里遺跡第5次	亀岡市旭町杉・樋ノ口・里	竪穴式住居跡69	北辺中央						T K47
里遺跡第5次	亀岡市旭町杉・樋ノ口・里	竪穴式住居跡7	北東辺中央						T K47~MT15
里遺跡第5次	亀岡市旭町杉・樋ノ口・里	竪穴式住居跡85	東辺中央						T K73~TK 216併行土師器
里遺跡第5次	亀岡市旭町杉・樋ノ口・里	竪穴式住居跡9	東辺中央						T K23
里遺跡第5次	亀岡市旭町杉・樋ノ口・里	竪穴式住居跡93	東辺中央						MT15
里遺跡第5次	亀岡市旭町杉・樋ノ口・里	竪穴式住居跡98	北辺中央						T K10
里遺跡第6次	亀岡市旭町杉・樋ノ口・里	竪穴式住居跡136	東辺中央				1		MT15
里遺跡第6次	亀岡市旭町杉・樋ノ口・里	竪穴式住居跡138	北辺中央						
里遺跡第6次	亀岡市旭町杉・樋ノ口・里	竪穴式住居跡193	北辺中央				1		T K10~T K43
里遺跡第6次	亀岡市旭町杉・樋ノ口・里	竪穴式住居跡197	北辺中央					抜き取り痕	T K208~T K23
里遺跡第6次	亀岡市旭町杉・樋ノ口・里	竪穴式住居跡198	北辺中央				1		T K43
里遺跡第6次	亀岡市旭町杉・樋ノ口・里	竪穴式住居跡221	北辺中央				1		
里遺跡第6次	亀岡市旭町杉・樋ノ口・里	竪穴式住居跡230	北辺中央					抜き取り痕	MT15~TK 209
里遺跡第6次	亀岡市旭町杉・樋ノ口・里	竪穴式住居跡240	北辺中央					抜き取り痕	
河原尻遺跡	亀岡市河原林町河原尻井尻・高町	竪穴式住居跡SH200	東辺中央						T K10
河原尻遺跡	亀岡市河原林町河原尻井尻・高町	竪穴式住居跡SH220	東辺中央						MT15
河原尻遺跡	亀岡市河原林町河原尻井尻・高町	竪穴式住居跡SH222	北西辺中央						T K10
河原尻遺跡	亀岡市河原林町河原尻井尻・高町	竪穴式住居跡SH628	北西辺中央						T K43
北金岐遺跡	亀岡市大井町北金岐	C-S B01	西辺中央						T K23~47
鹿谷遺跡第2次	亀岡市種田野町鹿谷	SH02	西辺中央						T K47
鹿谷遺跡第2次	亀岡市種田野町鹿谷	SH03	北西辺中央						
鹿谷遺跡第2次	亀岡市種田野町鹿谷	SH05	南西辺中央						

諸畑遺跡第4次発掘調査概要

鹿谷遺跡第2次	亀岡市稗田野町鹿谷	S H06	北西辺中央						T K 208以降
鹿谷遺跡第2次	亀岡市稗田野町鹿谷	S H08	北辺中央						T K 43
鹿谷遺跡第2次	亀岡市稗田野町鹿谷	S H15	北辺中央				1		MT 15
鹿谷遺跡第2次	亀岡市稗田野町鹿谷	S H21	北西辺中央					高坏	T K 208
鹿谷遺跡第3次	亀岡市稗田野町鹿谷	S H04	北西辺中央						T K 43
鹿谷遺跡第3次	亀岡市稗田野町鹿谷	S H06	西辺中央				1		T K 47
鹿谷遺跡第3次	亀岡市稗田野町鹿谷	S H07	北辺中央						T K 47~MT 15
鹿谷遺跡第3次	亀岡市稗田野町鹿谷	S H11	西辺中央						T K 23
鹿谷遺跡第3次	亀岡市稗田野町鹿谷	S H9201住居跡	北西辺中央						T K 208か
鹿谷遺跡第3次	亀岡市稗田野町鹿谷	S H9202住居跡	北辺中央						
鹿谷遺跡第3次	亀岡市稗田野町鹿谷	S H9203住居跡	北辺中央						
鹿谷遺跡第3次	亀岡市稗田野町鹿谷	S H9204住居跡	北辺中央					高坏	T K 23~47か
鹿谷遺跡第3次	亀岡市稗田野町鹿谷	S H9205住居跡	北辺中央						T K 47
鹿谷遺跡第3次	亀岡市稗田野町鹿谷	S H9209住居跡	北辺中央						T K 47
鹿谷遺跡第3次	亀岡市稗田野町鹿谷	S H9211住居跡	北辺中央					高坏	T K 43
鹿谷遺跡第3次	亀岡市稗田野町鹿谷	S H9226住居跡	北辺中央					高坏	T K 23
鹿谷遺跡第3次	亀岡市稗田野町鹿谷	S H9228住居跡	北西辺中央						T K 43か
鹿谷遺跡第3次	亀岡市稗田野町鹿谷	S H9229住居跡	西辺中央						T K 23か
鹿谷遺跡第3次	亀岡市稗田野町鹿谷	S H9230住居跡	北辺中央				1		T K 43
鹿谷遺跡第3次	亀岡市稗田野町鹿谷	S H9232住居跡	北西辺中央				1		T K 43~209
鹿谷遺跡第3次	亀岡市稗田野町鹿谷	S H9237住居跡	北辺中央						T K 47
鹿谷遺跡第3次	亀岡市稗田野町鹿谷	S H9238住居跡	南辺中央						T K 43~209か
鹿谷遺跡第3次	亀岡市稗田野町鹿谷	S H9239住居跡	北西辺中央						T K 43 (堂山2号窯か)
大瀬遺跡第4次	亀岡市保津町・河原林町	竪穴式住居跡 S H50	西辺中央						T K 23
余部遺跡第2次	亀岡市余部町新堂	竪穴式住居跡115	北東辺中央						後期?
余部遺跡第2次	亀岡市余部町新堂	竪穴式住居跡601	北東辺中央						中期後半?後期?
今林遺跡第1次	船井郡園部町内林今林	S H07	北東隅				1		MT 15~T K 10
今林遺跡第3次	船井郡園部町内林今林	竪穴式住居跡 S H05	北辺中央						T K 43
今林遺跡第3次	船井郡園部町内林今林	竪穴式住居跡 S H12	北辺中央か						T K 43
天若遺跡第2次	船井郡日吉町天若	竪穴式住居跡 S H9001	北辺中央						T K 10
天若遺跡第2次	船井郡日吉町天若	竪穴式住居跡 S H9003	西辺中央						T K 208~47
天若遺跡第2次	船井郡日吉町天若	竪穴式住居跡 S H9004	北辺中央						T K 23~47
天若遺跡第3次	船井郡日吉町天若	竪穴式住居跡 S H9102	南東隅						T K 209
天若遺跡第3次	船井郡日吉町天若	竪穴式住居跡 S H9106	北東辺中央	2			1		T K 217
天若遺跡第3次	船井郡日吉町天若	竪穴式住居跡 S H9111	北西辺中央	2			1		T K 43
天若遺跡第3次	船井郡日吉町天若	竪穴式住居跡 S H9112	東辺中央				1		MT 15
天若遺跡第3次	船井郡日吉町天若	竪穴式住居跡 S H9113	東辺中央				1		MT 15
天若遺跡第3次	船井郡日吉町天若	竪穴式住居跡 S H9114	西辺中央				1		MT 15?
天若遺跡第3次	船井郡日吉町天若	竪穴式住居跡 S H9115	北東辺中央				1		MT 15~T K 10
天若遺跡第3次	船井郡日吉町天若	竪穴式住居跡 S H9116	北西辺中央						T K 43~209
天若遺跡第3次	船井郡日吉町天若	竪穴式住居跡 S H9118	北東辺中央				1		MT 15~T K 43
天若遺跡第3次	船井郡日吉町天若	竪穴式住居跡 S H9119	北西辺中央						T K 23~47か
天若遺跡第3次	船井郡日吉町天若	竪穴式住居跡 S H9120	北西辺中央						T K 209か
天若遺跡第3次	船井郡日吉町天若	竪穴式住居跡 S H9121	北西辺中央						T K 23
天若遺跡第3次	船井郡日吉町天若	竪穴式住居跡 S H9122	北西辺からやや離れた中央						MT 15
天若遺跡第3次	船井郡日吉町天若	竪穴式住居跡 S H9126	北西辺中央						T K 43~209
天若遺跡第3次	船井郡日吉町天若	竪穴式住居跡 S H9127	西辺中央				1		T K 43~209
天若遺跡第3次	船井郡日吉町天若	竪穴式住居跡 S H9128	西辺からやや離れた中央				1		MT 15~T K 43
天若遺跡第3次	船井郡日吉町天若	竪穴式住居跡 S H9130	北西辺中央	2			1		T K 47~MT 15
天若遺跡第3次	船井郡日吉町天若	竪穴式住居跡 S H9140	北東辺中央				1		MT 15
天若遺跡第3次	船井郡日吉町天若	竪穴式住居跡 S H9141	北西辺中央	2			1	1	T K 43
天若遺跡第4次	船井郡日吉町天若	竪穴式住居跡 S H9201	南西辺中央						T K 43
天若遺跡第4次	船井郡日吉町天若	竪穴式住居跡 S H9202	北西辺中央				1		T K 10~43か
天若遺跡第4次	船井郡日吉町天若	竪穴式住居跡 S H9203	北西辺中央						T K 43

京都府遺跡調査概報 第119冊

天若遺跡第4次	船井郡日吉町天若	竪穴式住居跡S H9204	西辺中央	2		1 (数片に分かれる)	1		T K10~43か
天若遺跡第4次	船井郡日吉町天若	竪穴式住居跡S H9205	北辺中央	2		1	1		T K43
諸畑遺跡4次	船井郡八木町諸畑	S H01	北西辺中央	2	板状チャート2	板状チャート1		高坏	T G232
諸畑遺跡4次	船井郡八木町諸畑	S H02	北辺中央→西辺中央		板状チャート1		1		T K73~208
諸畑遺跡4次	船井郡八木町諸畑	S H05	北辺からやや離れた中央→南辺からやや離れた中央						T K73~208
池上遺跡第11次	船井郡八木町大字池上	S H01	西辺中央						後期
池上遺跡第12次	船井郡八木町大字池上	S H503	北辺中央						T K47
池上遺跡第12次	船井郡八木町大字池上	S H507	北辺中央						MT15以降
池上遺跡第13次	船井郡八木町大字池上	S H1	北辺中央						
池上遺跡第13次	船井郡八木町大字池上	S H153	北辺中央					須恵器高坏	T K43
池上遺跡第13次	船井郡八木町大字池上	S H164	北西辺中央					須恵器高坏	T K43
池上遺跡第13次	船井郡八木町大字池上	S H183	北辺中央						
池上遺跡第13次	船井郡八木町大字池上	S H291	北辺中央						
池上遺跡第13次	船井郡八木町大字池上	S H350	東辺中央						T K47~MT15
池上遺跡第13次	船井郡八木町大字池上	S H351	北西辺中央						T K73~208併行土師器
池上遺跡第15次	船井郡八木町大字池上	S H106	北辺中央						
池上遺跡第15次	船井郡八木町大字池上	S H732	北辺中央						後期
池上遺跡第15次	船井郡八木町大字池上	S H755	北辺中央						後期
池上遺跡第15次	船井郡八木町大字池上	S H904	西辺中央		骨材として粘板岩を使用				MT15~T K10
池上遺跡第18次	船井郡八木町大字池上	S H01	北辺中央						
池上遺跡第18次	船井郡八木町大字池上	S H03	北辺中央						
池上遺跡第3次	船井郡八木町大字池上	S H01	北辺中央						
池上遺跡第4次	船井郡八木町大字池上	S H A02	西辺中央					甕	MT15
池上遺跡第4次	船井郡八木町大字池上	S H A03	北辺中央					甕	MT15
池上遺跡第4次	船井郡八木町大字池上	S H A04	北辺中央						
池上遺跡第4次	船井郡八木町大字池上	S H A05	東辺中央						T K47
池上遺跡第4次	船井郡八木町大字池上	S H A06	北辺中央						MT15
池上遺跡第4次	船井郡八木町大字池上	S H A08	北辺中央						MT15
池上遺跡第4次	船井郡八木町大字池上	S H B01	西辺中央						T K10
池上遺跡第4次	船井郡八木町大字池上	S H B02	北辺中央						MT15
池上遺跡第4次	船井郡八木町大字池上	S H B03	東辺中央					高坏	MT15
池上遺跡第4次	船井郡八木町大字池上	S H B05	北辺中央						T K43~T K209
池上遺跡第4次	船井郡八木町大字池上	S H B06	東辺中央						
池上遺跡第4次	船井郡八木町大字池上	S H B07	北辺中央				1		
池上遺跡第4次	船井郡八木町大字池上	S H B08	北辺中央					甕	T K47
池上遺跡第4次	船井郡八木町大字池上	S H B11	南辺中央						MT15
池上遺跡第4次	船井郡八木町大字池上	S H B12	北辺中央						
池上遺跡第4次	船井郡八木町大字池上	S H B14	南辺						
池上遺跡第4次	船井郡八木町大字池上	S H B15	北辺中央						MT15
池上遺跡第4次	船井郡八木町大字池上	S H B19	北辺中央						MT15
池上遺跡第4次	船井郡八木町大字池上	S H B20	東辺中央						MT15
池上遺跡第4次	船井郡八木町大字池上	S H B21	北辺中央						T K10
池上遺跡第4次	船井郡八木町大字池上	S H C01	西辺中央						MT15
池上遺跡第4次	船井郡八木町大字池上	S H C04	北辺中央					直口壺	MT15
池上遺跡第4次	船井郡八木町大字池上	S H C06	西辺中央					直口壺	MT15
池上遺跡第4次	船井郡八木町大字池上	S H C07	北辺中央						T K47
池上遺跡第4次	船井郡八木町大字池上	S H C08	南辺中央					甕	T K10
池上遺跡第4次	船井郡八木町大字池上	S H C11	北辺中央						MT15
池上遺跡第4次	船井郡八木町大字池上	S H D04	北辺中央					高坏	T K47

池上遺跡第5次	船井郡八木町大字池上	S H104	西辺中央					甕	
池上遺跡第5次	船井郡八木町大字池上	S H107	北辺中央					土師器	T K43 (堂山2号窯か)
池上遺跡第5次	船井郡八木町大字池上	S H107	北辺中央					土師器	T K43 (堂山2号窯か)
池上遺跡第5次	船井郡八木町大字池上	S H274	東辺中央						後期
池上遺跡第5次	船井郡八木町大字池上	S H278	北辺中央						MT15~TK10
池上遺跡第5次	船井郡八木町大字池上	S H279	東辺中央						TK23
池上遺跡第5次	船井郡八木町大字池上	S H390	北辺中央						TK43~209
池上遺跡第5次	船井郡八木町大字池上	S H412	北辺中央						TK10
池上遺跡第5次	船井郡八木町大字池上	S H416	北辺中央				1		
池上遺跡第5次	船井郡八木町大字池上	S H417	北辺中央						TK209
池上遺跡第5次	船井郡八木町大字池上	S H509	西辺中央						MT15
池上遺跡第5次	船井郡八木町大字池上	S H90	北辺中央	2				甕	MT15
池上遺跡第8次	船井郡八木町大字池上	S H01	北辺中央						TK43
池上遺跡第8次	船井郡八木町大字池上	S H02	北辺中央				1		TK10
池上遺跡第8次	船井郡八木町大字池上	S H102	北辺からやや離れた中央					不明	
池上遺跡第8次	船井郡八木町大字池上	S H137	北東隅					直口壺	
東山遺跡第1次	北桑田郡京北町字周山	竪穴式住居跡 S H01	東隅						TK208
東山遺跡第2次	北桑田郡京北町字周山	竪穴式住居跡 S H21	西辺中央						TK208
東山遺跡第2次	北桑田郡京北町字周山	竪穴式住居跡 S H22	西辺中央						TK208以前

つきまとう。炉と違い、高温を得られる代わりに高温となる排煙部を設けなければならないが、竪穴式住居跡の周壁には、板壁や網代のようなものが掛けられている。また周壁付近には屋根から吹き下ろされた萱などの葺き材が露出している。何らかの処置を講じなければ粘土が赤変するほどの高温や火の粉がこうした可燃物に燃え移って火災となることは想像に難くない。実際竈を持つ竪穴式住居跡に焼失住居の例が少ないのはこうした失火が主要な原因の一つであろう。従ってすでに竈の研究で明らかにされているように、住居外に煙道を設け、段階的に排煙部を住居の外へ伸ばす傾向にあることは南丹波での事例でも跡づけることができた。^(注13)

集成を行った結果、竈の大多数が、住居の廃絶時に意図的に破壊されていることが分かった。特に古墳時代中期後葉まではその傾向が強く、竈の立体的な構造を知りうる事例がほとんど存在しない。中期末から後期にかけてようやく袖部の遺存例が増えてくる状況では、竈導入期の構造を詳しく知ることはできない。その中で諸畑遺跡の事例は希有な例と言える。

南丹波の古墳時代竈を集成したことによって、諸畑遺跡の竈が時期の面でも、構造の面でも抜きん出た存在であることが新ためて明らかとなった。古墳時代中期前葉に朝鮮半島から渡来した人々によって持ち込まれた技術を携えて来た人々が、まず八木盆地の北端に派遣されてきて、おそらく諸畑の人々は彼らを迎え入れられたのだろう。そしてまずは八木盆地に、そして亀岡盆地全体・山間部にまで竈を含む新しい技術を伝えていったと考えられる。一方で、早くに諸畑遺跡から竈の導入を受けた八木盆地、特に池上遺跡では、支脚に古墳時代後期の後葉に至るまで土器を用いるという地域性が墨守されることはこの遺跡の特徴と言えよう。

(福島孝行)

注1 谷口悌「町内遺跡発掘調査概要 野条・室橋・新庄・諸畑遺跡」(『八木町文化財調査報告書 第5集』八木町教育委員会) 1999

- 注2 松尾史子「諸畑遺跡」(『京都府埋蔵文化財調査報告書(平成16年度)』 京都府教育委員会) 2005
- 注3 福島孝行「諸畑遺跡第3次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第115冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2005
- 注4 調査参加者は以下のとおり(順不同) **調査補助員** 天池佐栄子・井上亮・中嶋直樹・山口由希子
整理員 荻野富紗子・中島恵美子・川村真由美 **作業員** 麻田あさの・麻田昇司・梅井ゆき子・岡崎ヨシコ・岡崎博信・國府恵利・出畑歩美・西垣久江・平井治英・松倉和美・松本孝子・松本敏子・松本安治
調査中に、(財)大阪市文化財協会の辻美紀氏、(財)大阪府文化財センターの合田幸美氏に古墳時代中期の土器、竈について御教示を賜った。記して感謝します。
- 注5 石守晃「復原住居を用いた焼失実験の成果について」(『研究紀要12』 (財)群馬県埋蔵文化財事業団) 1995、同「復原住居を用いた焼失実験 再び」(『研究紀要19』 (財)群馬県埋蔵文化財事業団) 2001
- 注6 小池寛「須恵器・椀に関する基礎研究」『京都府埋蔵文化財論集』第3集 ((財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1995
- 注7 A-6・7トレンチで遺構としたものは、遺物を含まないものの、すべて埋土に炭化物粒を含んでおり、人為的遺構であることは疑いない。しかし遺物がほとんど存在しないため、時期が限定できない。A-7トレンチで第2遺構面の上部を覆っていた包含層に僅かに弥生土器が含まれていたこと、京都府教委委員会の試掘調査で検出した柱穴に縄文時代後期の土器片が含まれていたことなどから、第2遺構面の遺構の時期は縄文時代後期から弥生時代中期のいずれかとしか言うことができない。
- 注8 前掲注6
- 注9 韓式系土器の一種かというのは辻美紀氏、合田幸美氏の御教示。また、両氏から積山洋氏がこの種の土器を製塩土器の一種としていることも伺った。積山氏の論考は以下のとおり。
積山洋「大阪湾沿岸の古墳時代土器製塩」『季刊考古学 別冊14 畿内の巨大古墳とその時代』(雄山閣) 2004
- 注10 辻美紀・李陽浩「長原遺跡発掘調査報告」IX ((財)大阪市文化財協会) 2002
- 注11 南丹波地域の土師器高杯の出土量は須恵器高杯の供給量と連動し、TK23型式以降激減する。一方暗褐色・灰色系から橙褐色系への転換はTG232型式併行のSH01-aとTG73型式併行のSH01-bとの間で、南丹市池上遺跡では韓式系土器を伴う12次SH522と韓式系土器を伴う13次SH351の間で起こっている。そのほかの南丹地域の事例でも須恵器を伴うものは橙褐色、伴わないものは暗褐色・灰色系であることが多い。従って橙褐色系への転換はTK73~216型式の間に進行し、TK208には完了したとみられる。従ってSH09の第1層出土遺物はTK208型式併行、第2層以下はTK73~216型式併行とみて大過ない。
- 注12 自然科学的分析は、株式会社京都フィッシュン・トラックに委託した。この資料は第3次調査で検出した弥生時代終末期の焼失住居跡SH03内で出土した土器と粘土塊を比較したものである。この分析によって住居内にしばしば残される粘土塊が土器の材料であることを証明する必要条件是整ったと思われる。また、火山ガラスの形態分類、火山ガラスの屈折率分類も行った。しかし、紙幅の都合で割愛せざるを得なかった。また、文章中・図表に省略した部分もあるため、報告者の意図を充分汲み取れていない部分もあると思われるが、御寛恕願う次第である。
- 注13 埋蔵文化財研究会編『第32回埋蔵文化財研究集会 古墳時代の竈を考える』1992
小田和利「北部九州の竈について」『文化財学論集』(文化財学論集刊行会) 1994

6. 長岡京跡右京第863次(7ANKSM-15地区)・ 開田遺跡・神足遺跡発掘調査概要

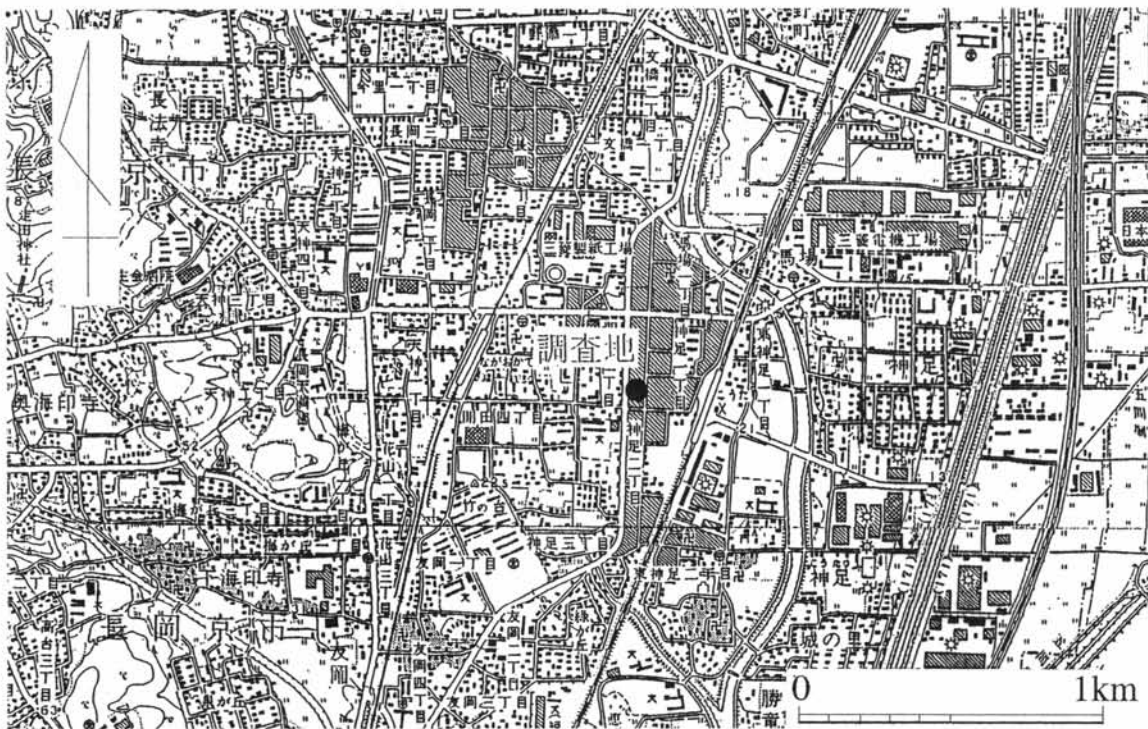
1. はじめに

今回の調査は、府道御陵山崎線街路整備促進事業に係わる事前調査として、京都府土木事務所の依頼を受けて実施した。調査対象地は、長岡京市開田2丁目に所在し、JR長岡京駅前通りと西国街道の交差点の北東に位置する。長岡京の条坊復原によると、右京六条一坊十四・十五町にあたり、六条条間小路が想定される場所である。今調査地の周辺では、JR長岡京駅前の再開発に伴い(財)長岡京市埋蔵文化財センターによる調査が大規模に行われており、長岡京の遺構やそれ以外の時代の様子がしだいに明らかになってきている。

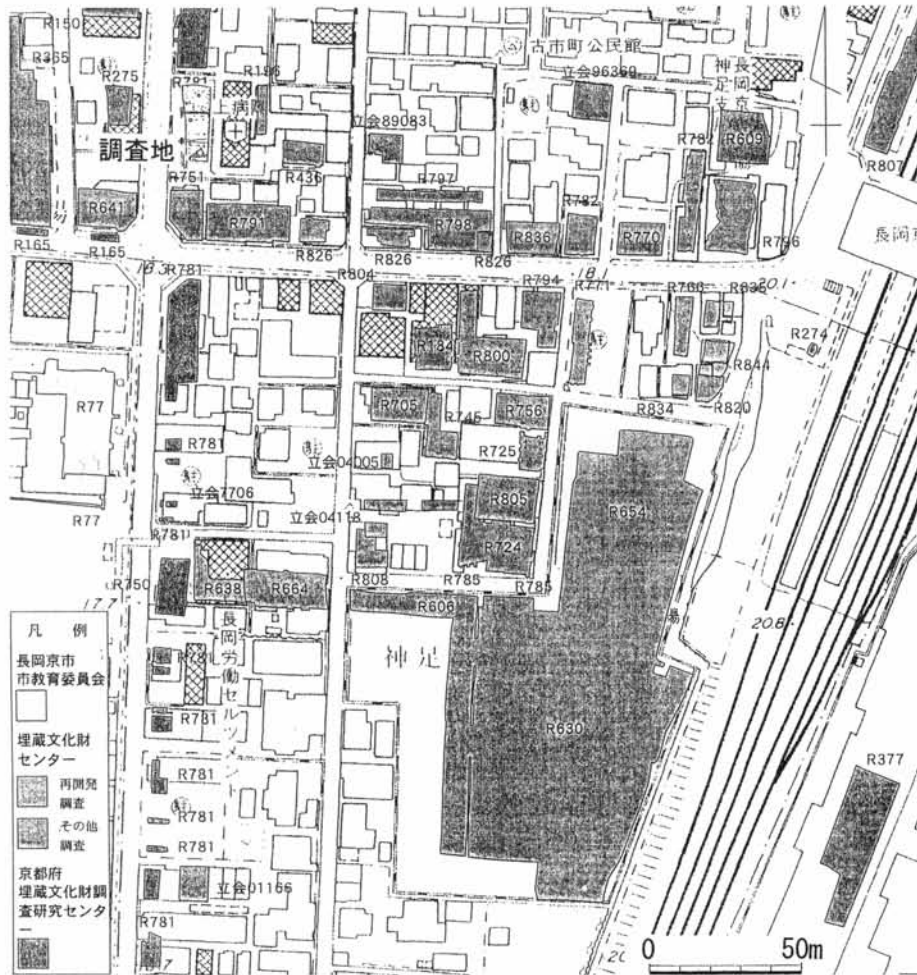
調査は、当調査研究センター調査第2課調査第3係長石井清司、同主任調査員戸原和人が担当した。調査面積は200㎡である。現地調査期間は、平成17年11月16日～12月22日までを要した。なお、本概要記載の国土座標に付いては、日本測地系を用いた。

調査にあたっては、京都府教育委員会・長岡京市教育委員会・(財)長岡京市埋蔵文化財センター・地元自治会のほか、近隣住民の方々の御協力・御指導を得た。

なお、調査に係わる経費は、全額、京都府土木建築部が負担した。



第80図 調査地位置図(国土地理院1/25,000京都西南部・淀)



第81図 周辺調査状況図(『長岡京市埋蔵文化財調査報告書』第45集より転載・加筆)

2. 調査の概要(第85図)

今回の調査の結果では、中世の遺構としては、土抗や柱穴などを検出したが、建物としてまとまるものはなかった。長岡京の遺構としては、六条条間小路の南北両側溝と、十四町内の大溝を検出した。

(1)中世

土抗 S K 86304 十四町宅地内大溝 S D 86303に接して北側で検出した。直径2.2m、深さ0.3mを測る。埋土の中からは、土師器皿、瓦器椀、瓦質の鍋などが出土した。

土抗 S K 86375 土抗 S K 86304の西側で検出した。直径0.9m、深さ0.3mを測る。埋土の中からは、土師器片・須恵器杯・砥石などが出土した。

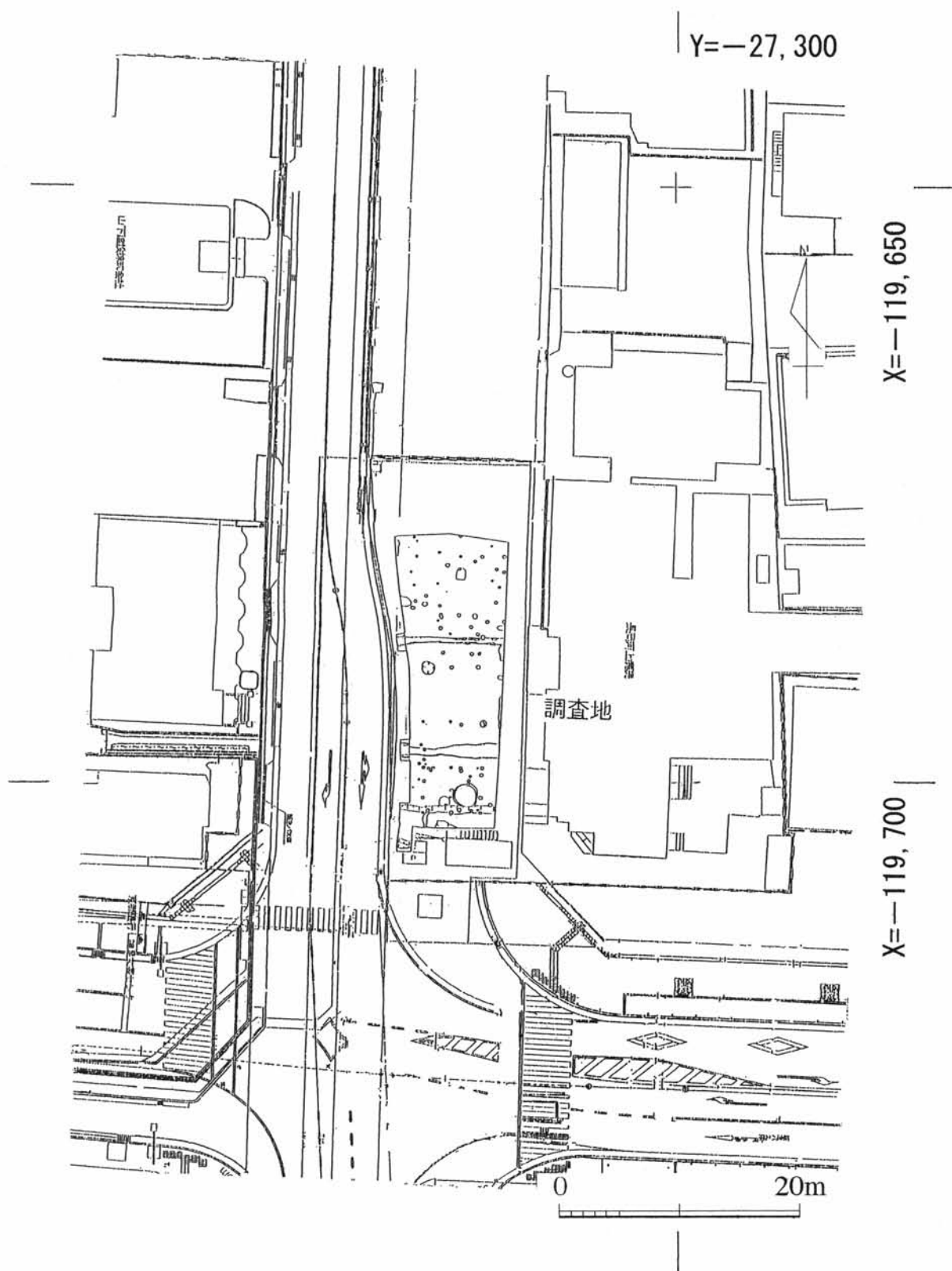
柱穴 P 86325 溝 S D 86301の北側で検出した。直径0.25m、深さ0.3mを測る。埋土の中からは、土師器杯が出土した。

柱穴 P 86335 溝 S D 86301の北側で検出した。直径0.3m、深さ0.2mを測る。埋土の中からは、土師器皿 2点が出土した。

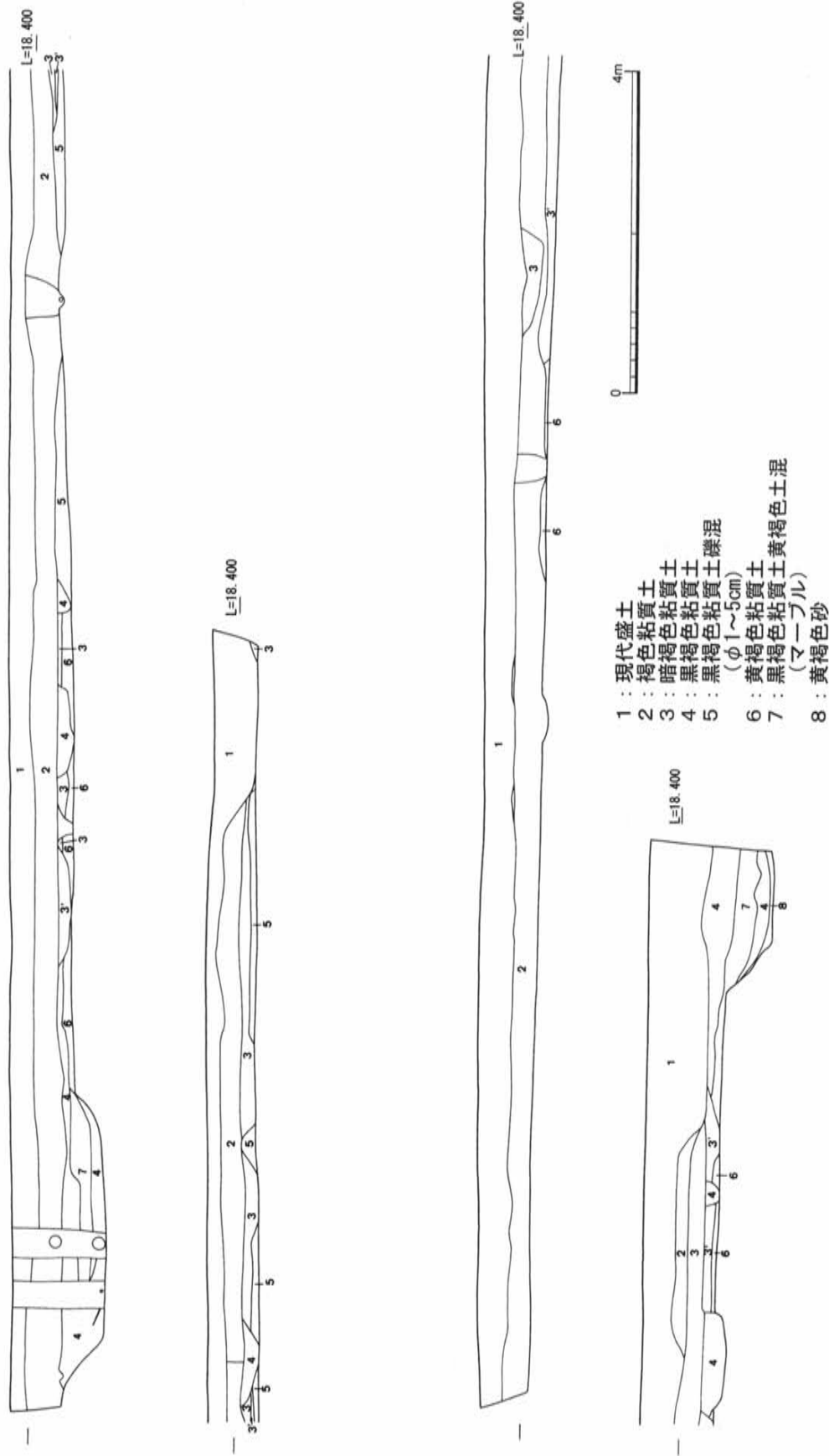
(2)長岡京期

六条条間小路北側溝 S D 86301 調査地の東端で溝の中心を示す国土座標の値(日本測地系)が

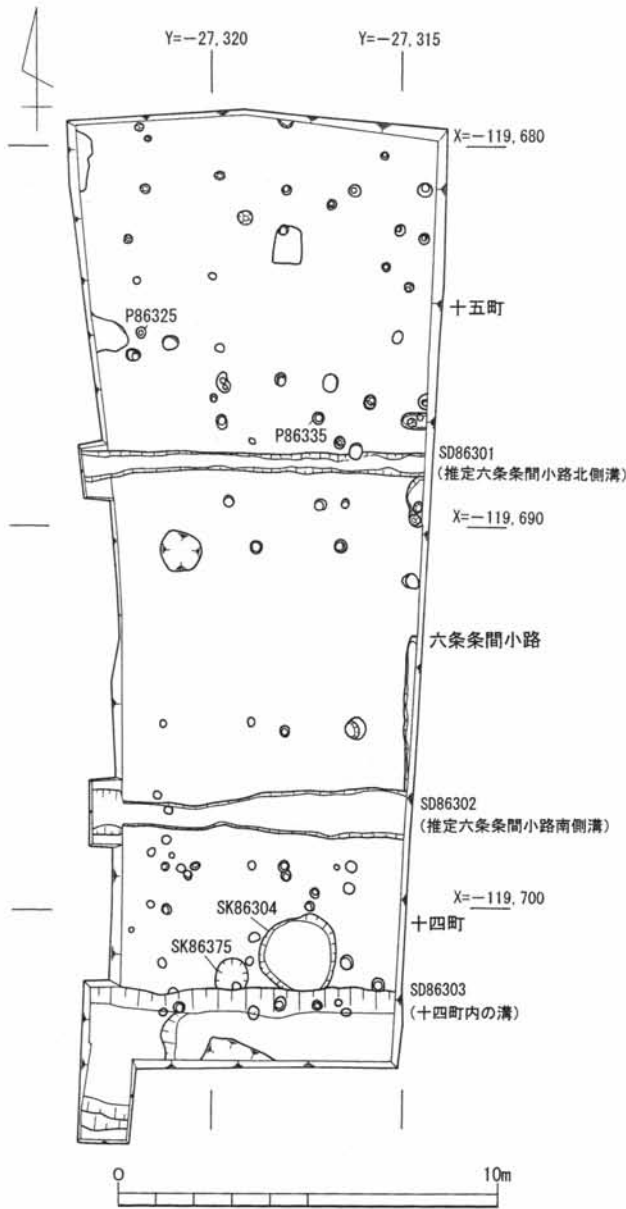
=-119,697.404である。調査地の中央部から西にかけては溝 S D86301同様、後世の削平を浮けていたため、溝もわずか数cmしか依存していなかったが、府道付近では遺存状態がよく、ここでも調査区を一部拡張して溝の検出につとめた。側溝を検出した標高は18.18mで、溝幅約1.2m、



第83図 調査地平面図



第84図 調査地断面図



第85図 検出遺構平面図

深さ約0.2mを測り、最終的に東西約8.3mにわたって検出した。埋土の中からは、比較的遺存状態の良い溝の東に集中して土器が出土しており、土師器皿・高杯・甕・羽釜、須恵器杯A・杯B・杯蓋・壺、軒平瓦、平瓦、製塩土器、土馬などが出土した。

十四町宅地内大溝 S D 86303 調査地の南端部で検出した。調査地の西端で溝の中心を示す座標値が $Y=-27,322.792$ で $X=-119,704.000$ である。この南には隣接する建物の防火水槽や給水管、排水管が埋設されており、調査地の西端および南への調査可能な範囲にトレンチを拡張して溝の検出につとめた。調査地の西端で検出した溝の標高は18.16mで、幅約3.8m、深さ約0.7mを測る。最終的に8.1mにわたり調査した。今回検出した溝の特徴としては、溝底が3段に掘りくぼめられていることがあげられる。西端では標高17.46mを測り、中央部分で標高17.35m、東の端で検出した遺構面の標高18.16m、溝底の標高17.2mを測り、溝の深さ0.96mとなる。約10cmずつ東に向かって掘り下げられていることが明らかになった。

埋土中からは、溝の東に集中して土器が出土しており、土師器皿・杯B・甕、黑色土器(a類)、須恵器皿・杯B・杯蓋・壺・鉢、平瓦、製塩土器、土馬などがある。

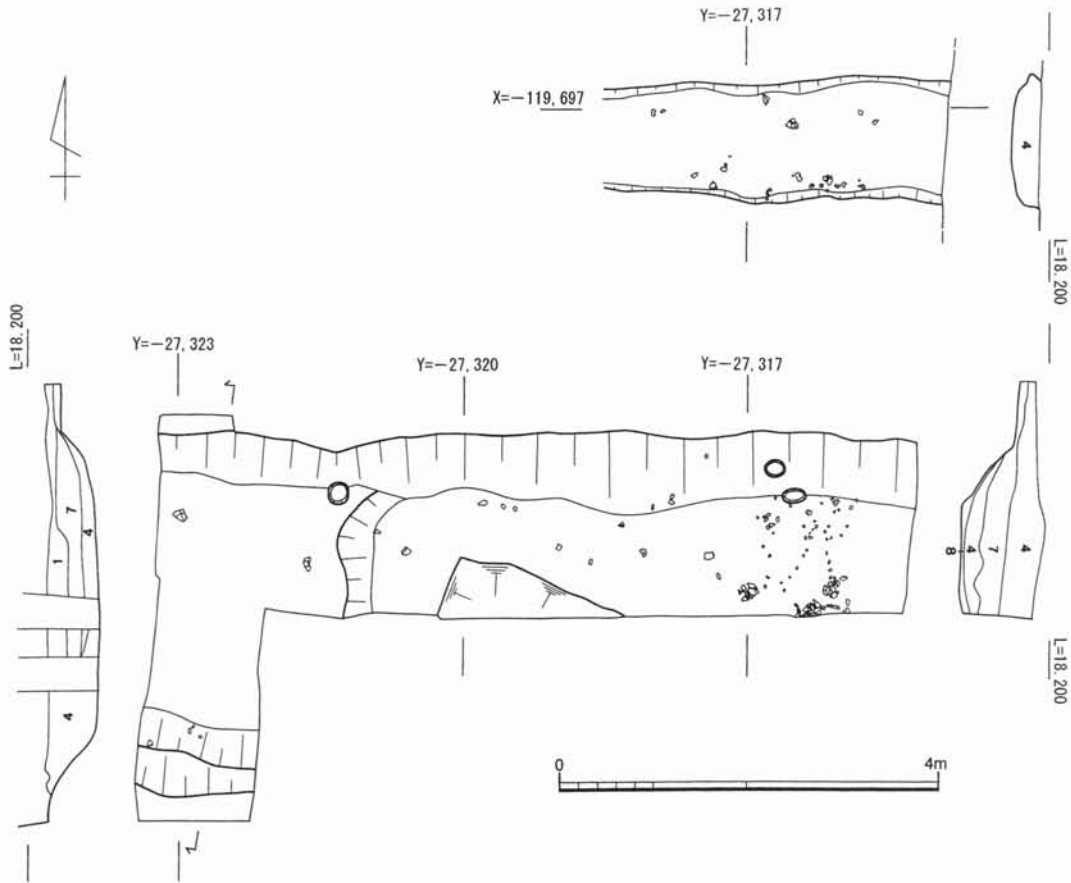
3. 出土遺物(第87図)

1) 溝 S D 86301出土遺物

土師器皿・製塩土器・平瓦などが出土しているが、いずれも小片のため図化しうるものはない。右京第609次調査でも、南側溝に比べ北側溝に出土遺物が少ない調査結果がある。

2) 溝 S D 86303出土遺物

須恵器杯B・杯蓋・皿・壺・鉢、土師器皿・杯B・甕、黑色土器(a類)、平瓦、製塩土器、土馬などが出土している。1は須恵器杯蓋の宝珠つまみ部である。3の須恵器杯蓋は、口径14.8cm、

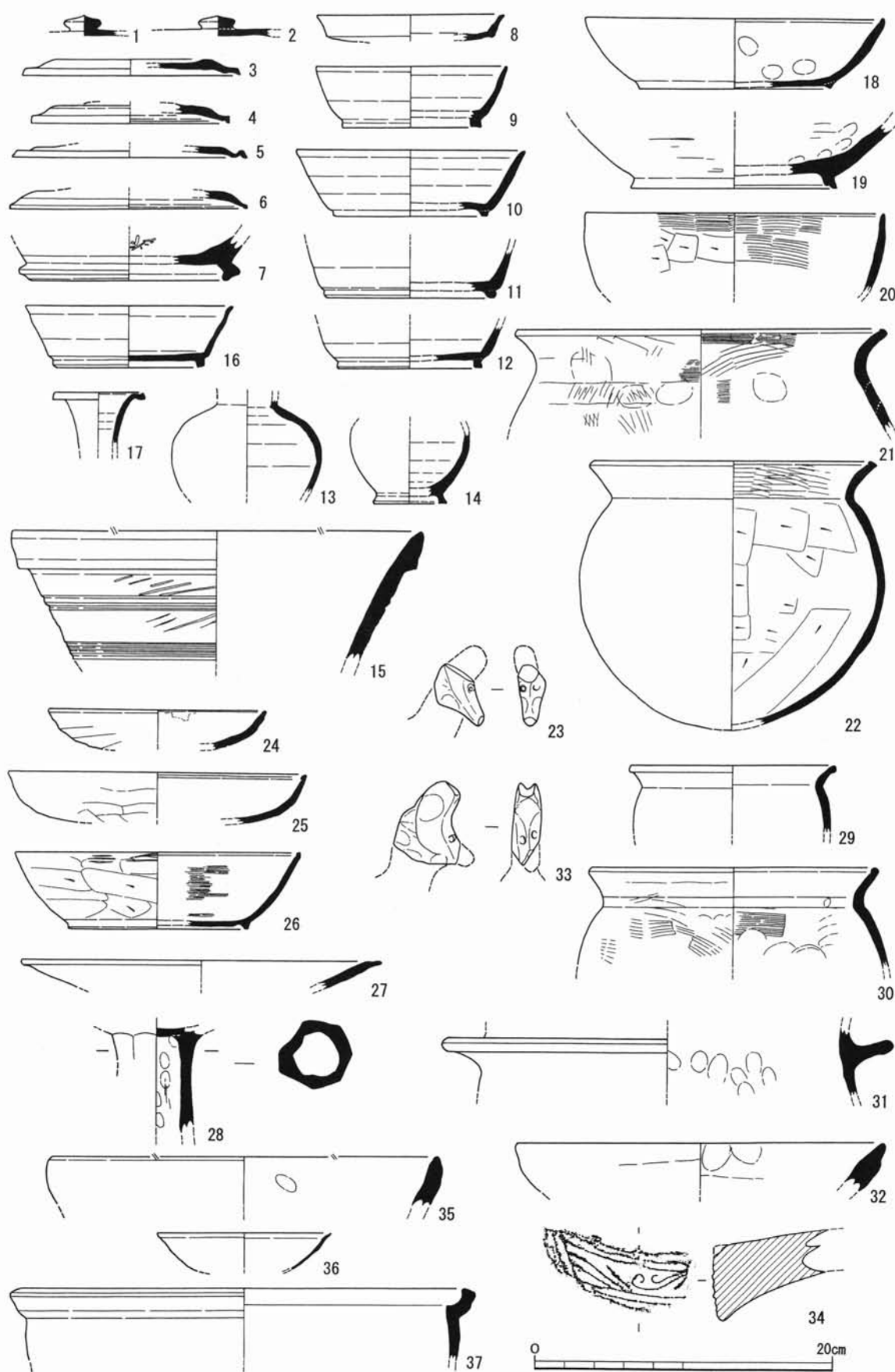


第86図 遺物出土状況図

残存高1.0cmを測る。4は口径13.4cm、残存高1.4cmを測る。5は口径16cm、残存高0.8cmを測る。6は須恵器杯蓋で、口径16cm、残存高1.3cmを測る。7は壺の底部で、底部径13.4cm、残存高3.2cmを測る。8は須恵器皿である。口径12.8cm、器高1.7cmを測る。9の須恵器杯Bは、口径13cm、器高4.1cmを測る。10は、口径15.6cm、器高5.5cmを測る。11は底径11.4cm、残存高3.4cmを測る。12は底部径11.6cm、残存高2.8cmを測る。壺(13)は頸部の立ち上がりから球形の体部下半までが出土した。腹径10.1cm、残存高6.3cmを測る。壺(14)は球形の体部から高台までの下半部が出土した。底部径5cm、残存高4.9cmを測る。15は須恵器鉢である。口径27.5cm、残存高8.5cmを測る。土師器杯B(18)は口径20.4cm、器高4.65cmを測る。19は須恵器壺の底部で、底部径14.0cm、残存高4.5cmを測る。20は黒色土器(a類)である。口径20.2cm、残存高5.5cmを測る。外面の下半ケズリ調整で、口縁付近はヘラミガキを施しており、内面にはていねいなヘラミガキを施している。土師器甕(21)は口径25.2cm、残存高7cmを測る。内外面ともハケメ調整を施している。土師器甕(22)は口径18.6cm、器高18.2cmを測り、ほぼ完形品である。体部の内面はヘラ削り調整を施し、口縁部の内面と外面にはハケメ調整を施している。土馬は、23の頭部1点と脚1点出土している。35は製塩土器である。口径26cm、残存高3.5cmを測る。手練りの成形で、口縁端部は指ナデによりつまみ上げている。このほかに布目の平瓦片が出土している。

3) 溝S D 86302出土遺物

須恵器杯A・杯B・杯蓋・壺、土師器皿・杯・高杯・甕・羽釜、軒平瓦、平瓦、製塩土器、土



第87図 出土遺物実測図

馬などが出土した。出土状況は、西半部には少なく、溝の東半部に集中して出土している。2は須恵器杯蓋の宝珠つまみ部である。16の須恵器杯Bは、口径14cm、器高4.1cmを測る。17は須恵器壺の口縁から頸部にかけての破片である。口径6cm、残存高3.7cmを測る。24は土師器杯Aで、口径14.8cm、器高2.7cmを測る。外面はケズリ調整で、口縁付近は磨きを施している。内面はナデ調整を施している。口縁部内面にススが付着しており、灯明に使用された可能性がある。25は土師器皿である。口径20cm、器高3.4cmを測る。外面はケズリ調整で、口縁付近は磨きを施しており、内面はナデ調整を施している。26は土師器杯Bで、口径19.2cm、器高5.2cmを測る。外面はケズリ調整で、口縁付近は磨きを施しており、内面はナデ調整を施している。27は土師器高杯の杯部である。口径24.4cm、残存高1.9cmを測る。28は高杯の脚部である。脚の最大径5.2cm、残存高7cmを測る。脚柱は不整形な7角形に面取りされている。29の土師器甕は、口径13.8cm、残存高4.5cmを測る。甕(30)は口径18.8cm、残存高6.7cmを測る。内外面ともハケメ調整を施している。31は土師器の羽釜である。羽部の直径30.4cmを測る。32は製塩土器である。口径24.7cm、残存高3.3cmを測る。手練りの成形で、口縁端部は指ナデによりつまみ上げている。33の土馬は頭部のみ出土である。34の軒平瓦は、瓦頭の高さ5.2cm、残存幅12.2cm、残存長7.6cmを測る。小片であるが平常宮式の6681B型式と考えられる。

4) 土坑S K 86304出土遺物

図示できたものは土師器の杯と瓦質の鍋だけである。36は土師器杯で、口径11.8cm、残存高2.6cmを測る。37は瓦質の鍋で、口径29.8cm、器高4.7cmを測る。

4. まとめ

今回の調査結果をまとめると以下のとおりである。

(1) 長岡京の条坊復原では、右京六条一坊十四・十五町と六条条間小路が想定されていたが、調査の結果、当初の想定通り六条条間小路の両側溝と十四町内の大溝を、それぞれ検出することができた。

(2) 十五町の調査では、条坊関連遺構として、(財)長岡京市埋蔵文化財センターの右京第275次調査によって西一坊大路の東側溝の一部が検出されている。町内の遺構としては、当調査研究センターの右京第781次調査によって2間×3間の南北棟の掘立柱建物跡と2間×1間以上の東西棟の掘立柱建物跡とが検出されており、(財)長岡京市埋蔵文化財センターの右京第196次調査によって井戸跡が検出されており、その規模は明らかでないものの当地が宅地として土地利用されていた事が明らかとなっている。

(3) 十四町の調査では、条坊関連遺構として、右京第77次調査と、同第165次調査によって西一坊大路の東西側溝が検出されている。また、立会調査89083では、六条条間小路南側溝が検出されている。町内の遺構としては、今回調査の十四町内の北側の大溝と、右京第77・165次調査の西大溝の一部が検出されているが、建物跡や井戸などの施設は20か所以上の調査地点がありながら全く検出されていない。このような状況は、南の十三町でも同様である。

北側の大溝は、東の十一町で、右京第609次調査と、同第782次調査によってこの溝の一部が検出されているが、攪乱などによりこの溝の規模、中心座標を決定するには至っていなかった。十四町内では、今回の調査で初めての検出した溝 S D 86303は、わずかな面積ではあったが溝の両肩を検出する事ができたため、その規模と中心座標を決定することができた。

(4) 十四町の大溝の検出は、東側の十一・十二町が J R 軌道内にある事から東側の大溝については、全く検出されていないものの、南の大溝が十二町での右京第630次調査および、十三町での右京第630次調査および立会調査01166によって検出されていることから、大路を超える宅地割りが基本的になされないと考えれば、右京六条一坊十一～十四町の四町四方が、大溝によって一区画にされ、土地利用されていたと考えられる。

(戸原和人)

調査参加者 黒慶子・木村悟・木村涼子・杉江貴宏・前川敬子・馬場さやか・久米政代・内藤チエ・長谷川マチ子

参考文献

- ①藤井整「長岡京跡右京第750次・神足遺跡調査概要」(『京都府遺跡調査概報 第107冊』(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2003
- ②松井忠春・高野陽子「長岡京跡右京第781次・神足遺跡調査概要」(『京都府遺跡調査概報第112冊』(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2004
- ③山本輝雄・木村泰彦「長岡京跡右京第77次調査概要」(『長岡京市埋蔵文化財報告書』第9冊 長岡京市教育委員会) 1982
- ④山口博・三好博喜「長岡京跡右京第165次調査概要」(『京都府遺跡調査概報 第15冊』(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1985
- ⑤木村泰彦「右京第196次調査略報」(『長岡京市埋蔵文化財センター年報』昭和60年度 (財)長岡京市埋蔵文化財センター) 1987
- ⑥原秀樹「右京第275次調査概報」(『長岡京市埋蔵文化財センター年報』昭和62年度 (財)長岡京市埋蔵文化財センター) 1989
- ⑦千喜良淳「第89083次立会調査」(『長岡京市埋蔵文化財センター年報』平成元年度 (財)長岡京市埋蔵文化財センター) 1991
- ⑧中島皆夫「右京第609次調査略報」(『長岡京市埋蔵文化財センター年報』平成10年度 (財)長岡京市埋蔵文化財センター) 2000
- ⑨岩崎誠・木村泰彦・山本輝雄「長岡京跡右京第630次調査概報」(『長岡京市埋蔵文化財報告書』第26集 (財)長岡京市埋蔵文化財センター) 2002
- ⑩岩崎誠「第01166次立会調査」(『長岡京市埋蔵文化財センター年報』平成10年度 (財)長岡京市埋蔵文化財センター) 2003
- ⑪岩崎誠「長岡京跡右京第782次調査概報」(『長岡京市埋蔵文化財報告書』第39集 (財)長岡京市埋蔵文化財センター) 2004
- ⑫中島皆夫「長岡京跡右京第844次調査概報」(『長岡京市埋蔵文化財報告書』第45集 (財)長岡京市埋蔵文化財センター) 2005

7. 史跡名勝笠置山発掘調査概要

1. はじめに

今回の発掘調査は、笠置町の依頼を受けて、史跡名勝指定地内の遺構・遺物の内容を確認することを目的として、当調査研究センターが実施した。

調査地は、京都府相楽郡笠置町大字笠置小字水晶谷・神宮山地内で、調査面積は500m²、調査期間は、平成17年10月17日～平成18年1月20日である。

調査は、当調査研究センター調査第2課調査第1係長小池寛、同係次席総括調査員伊野近富、調査第2係調査員村田和弘が担当した。平成17年12月6日に調査委員会が開かれ、調査成果の確認と、その後の調査についての方針が決定された。12月23日に現地説明会を実施し、平成18年1月20日に埋め戻しを終了し、調査を終えた。

調査に当たっては、文化庁・京都府教育委員会・笠置町から数多くの御指導、御助言を得た。また、現地作業では、同志社大学助教授鋤柄俊夫氏、宗教法人笠置寺前住職小林慶範氏、地元南部区の方々の御理解と御支援をいただいた。

なお、今回の発掘調査に係る経費は、全額、笠置町が負担した。

2. 歴史的環境

笠置山の歴史は、考古学的には笠置寺の境内から出土した弥生時代の石剣にはじまる。また、六角堂の発掘調査^(註1)により、中世の堂宇の構造が明らかになっている。

文献学的には、『今昔物語』や『枕草子』をはじめ、貴族の日記にも笠置のことは書かれている。それは、修験道の聖地として書かれた場合が多い。鎌倉時代初期には興福寺学僧貞慶(解脱上人)が隠遁し、伽藍が整えられたという。その後、東大寺の末寺となっている。笠置寺が有名になったのは元弘の変(1331年)である。元弘元年8月27日に鎌倉幕府の転覆を企てていた後醍醐天皇は、この計画が発覚したので、笠置寺に行幸し、本堂を行在所とした。その後、9月26日に鎌倉方の大軍が笠置を攻めたが、籠城軍は奮闘し、持ちこたえた。しかし、28日になって城の北側の絶壁をよじ登った鎌倉軍のため、籠城軍は総崩れとなり、後醍醐天皇は笠置を後にした。このとき、堂宇は



第88図 調査地位置図(国土地理院1/50,000奈良)

炎上したという。その後、本堂は永徳3(1381)年再建されたものの、応永5(1398)年に焼失したという。

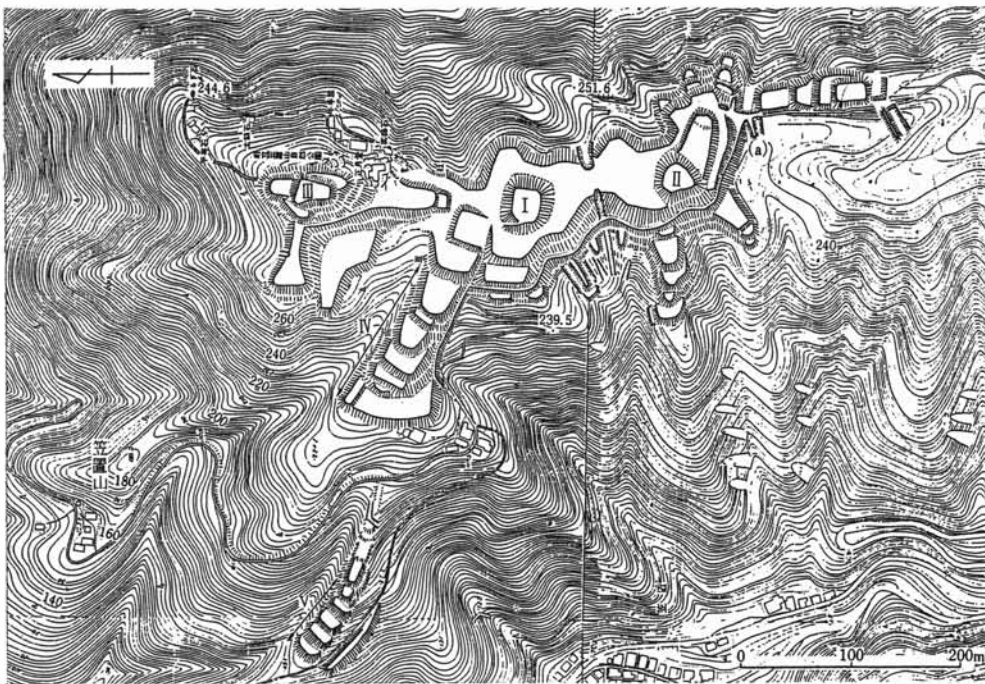
戦国時代、笠置の地は南が大和の柳生に通じ、北は木津川に面することから軍事上の要衝であった。そのため、山城守護細川晴元のもと、守護代には木沢長政が補され、山城として使用されたい。『多聞院日記』天文10(1541)年1月26日条には、伊賀衆が攻め込んできて、戦となり、若干の建物が焼かれたことが記されている。この時期の笠置城の縄張りについては、中井均氏の^(注2)研究がある。

3. 調査概要

笠置山の山中にある東海自然歩道沿いに15か所のトレンチを設定して試掘調査を実施した。

第1トレンチ 調査地南端の丘陵平坦地に設定した。削平のため遺構はほとんどない。瓦が出土したので、近隣に奈良～平安時代の建物があった可能性がある。出土遺物は、奈良～平安時代の瓦(凹面布目、凸面縄タタキ)。平安時代後期のものと鎌倉時代後期の瓦器椀、鎌倉時代後期から戦国時代の土師器皿がある。

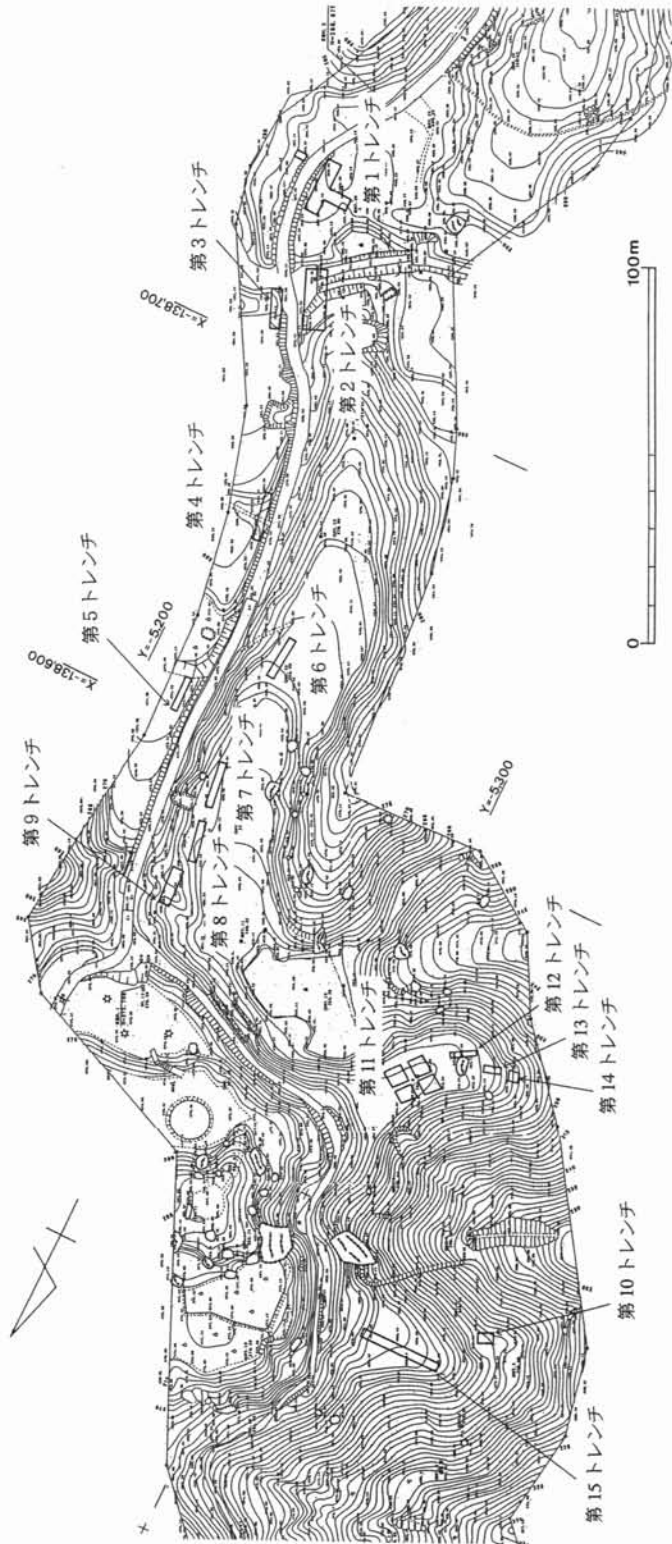
第2トレンチ 調査地南部の丘陵上に設定した。笠置城に伴う土塁と空堀が遺存した地点にある。土塁と空堀は幅100mの丘陵を遮断するように築かれている。そこから北側に丘陵は二股に分かれている。ここが、南の防御ラインになる。調査の結果、土塁の輪郭は土塁の頂部および南側傾斜面については現代の削平、および盛土により地形は改変されているが、断ち割りの土層観察によれば、地山は徐々に上がっており、東海自然歩道西端まで及んでいた。北側に下部が地山、上部が盛土の土塁が張り出している。空堀も現代の削平、および盛土により地形は改変されているが、おそらく、東海自然歩道手前で終息するらしい。出土遺物は少量である。土塁北側で戦国



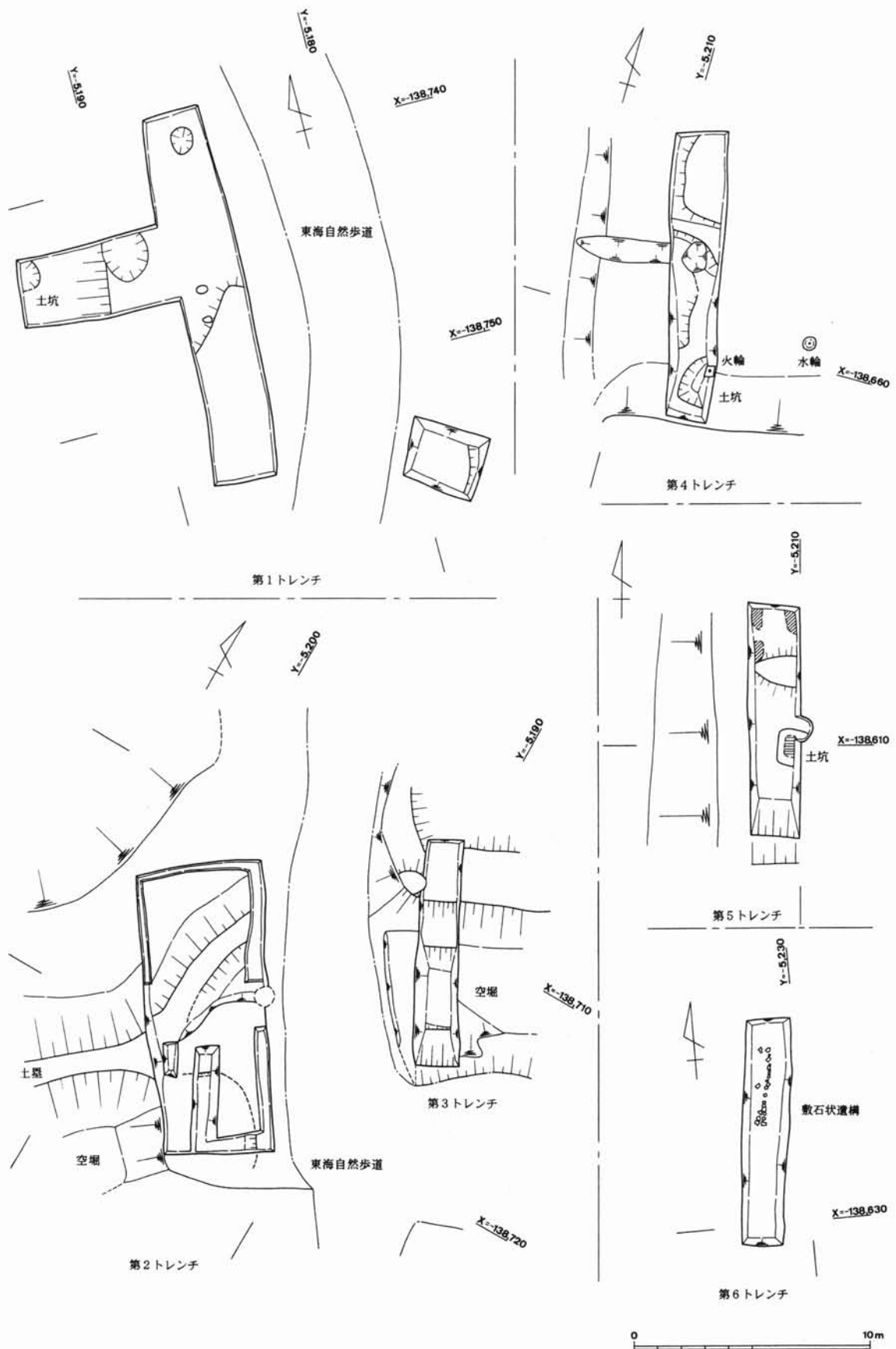
第89図 笠置城縄張り図(注2文献)

時代の古瀬戸平椀が出土した。同時期の土師器皿も出土した。

第3トレンチ 第2トレンチとは東海自然歩道を隔てたところにある土塁や、空堀地点に空けたトレンチである。現状の空堀部分は東海自然歩道より約1m低い。調査の結果、現状の表土より1.6m下で堀の底を確認した。底は花崗岩の岩盤である。堀底の幅は約2.5mで、上辺は更に南方に広がる。堀は西方で終息するもようである。一時期機能した後、堀は半分ほど埋め立てられた後、長期間あったようで黒褐色土層(腐植土混じり)が上部にあった。その後、半分の幅で掘り直されている。推定土塁部分は地表下40cmで地山となる。表土下の土は軟弱で、土塁の盛土になるかどうかは不明である。土塁の南側は地山を急角度に削り、そのまま、古い段階の堀に続く。堀底から鎌倉時代後期の土師器皿、鉄製品1点、上部から戦国時代の土師器皿が出土した。推定土塁の盛



第90図 トレンチ配置図



第91図 第1～6トレンチ平面図

土から同時期の土師器皿が出土した。

第4トレンチ 東海自然歩道東側の丘陵頂部平坦面に設定した。建物跡が予想される平坦地である。第3トレンチ推定土塁部分を最高所として尾根は北側に傾斜している。階段状にカットし平坦面を造成している。トレンチ南端の斜面上部で土師器皿が多数出土した。一段上の平坦地から崩落したものである。その直下の穴で五輪塔の一部(火輪)確認した。トレンチより、5m離れたところでこの火輪に組み合う五輪塔の一部(水輪)が地上面に露出している。近隣に墓地在形成されたと考えられる。また、多数の遺物は、生活場所であったことも示している。平坦地の西端の旧地形は西側に下がっているが、盛土して平坦面を造成している。この平坦面で、土坑を確認した。ここで、完形品を含む鎌倉時代後期～南北朝期の土師器皿が出土した。そのほかの箇所、土師器釜と一辺60cmの五輪塔の一部(火輪)が出土した。

第5トレンチ 第4トレンチの2つ北側にある平坦地にトレンチを設定した。トレンチ南端の斜面上部で土師器皿が多数出土した。一段上の平坦地から崩落したものであろうか。平安時代後期から鎌倉時代後期の土師器皿や、同時期の青磁大皿(稜花)が出土した。

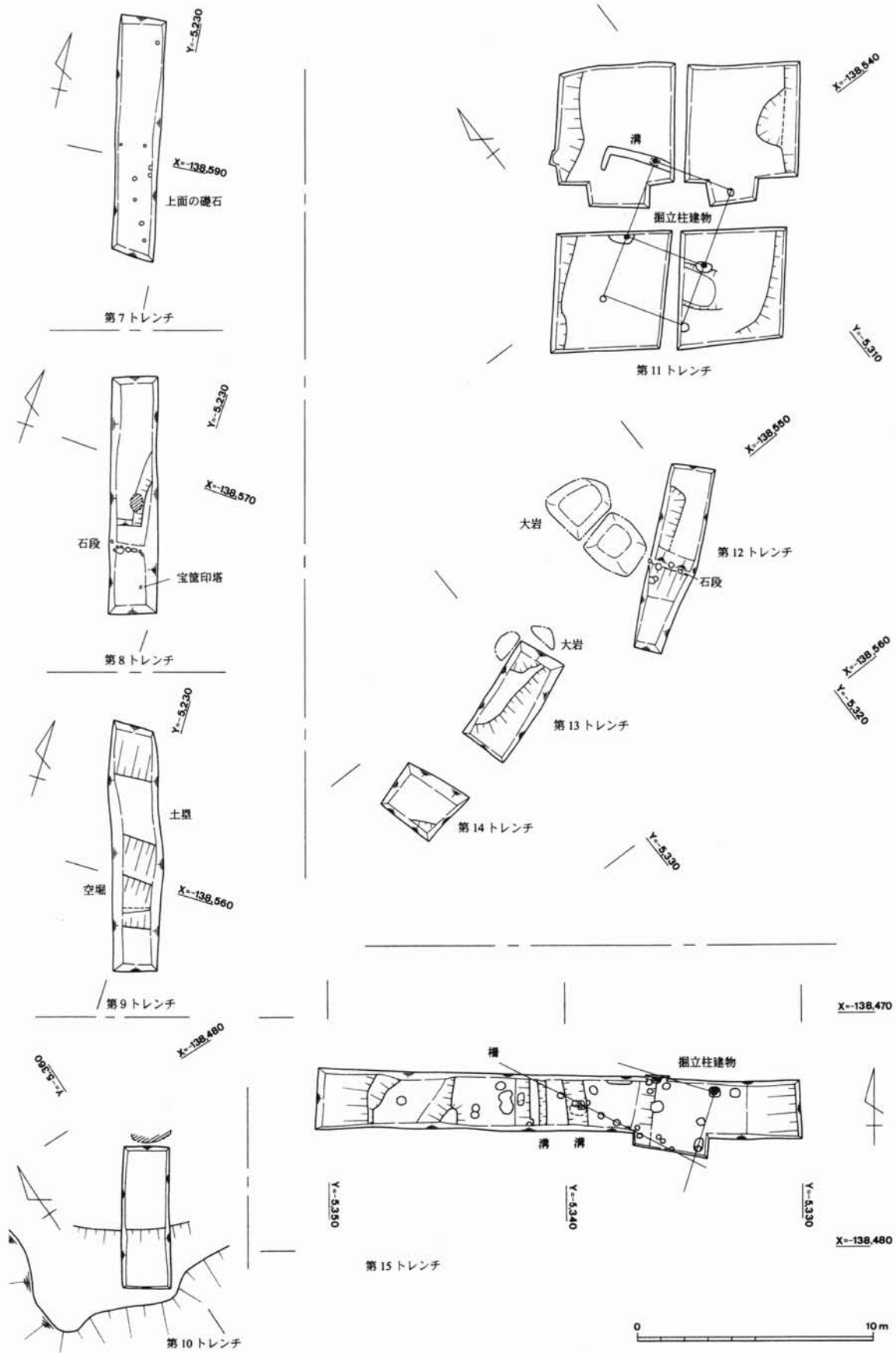
第6トレンチ 東海自然歩道の西側にある南北方向の谷部のトレンチである。谷部のもっとも南部に設定した。表土下30cmまでは暗褐色土。それより下は淡褐色土である。表土下1mでも地山確認できず。その途中の面で炭を含む焼土を確認する。北半では、南北方向に並ぶ敷石状遺構を確認した。この面から鎌倉時代後期～南北朝期の土師器皿が出土した。平安時代末期～鎌倉時代初期の須恵器鉢(東播磨系)が出土した。

第7トレンチ 第6トレンチの北側に設定したトレンチである。表土下30cmまでは暗褐色土。それより下は淡褐色土で、この土層中で平石を数点検出したが、これは建物に伴う礎板状のものと思われる。南部は表土下70cmほど炭を含む焼け土を確認する。下は焼土面で、かなり焼け締まっている。焼土面では、鎌倉時代後期～南北朝期の土師器皿、砥石、硯、常滑甕など各種の遺物が出土した。

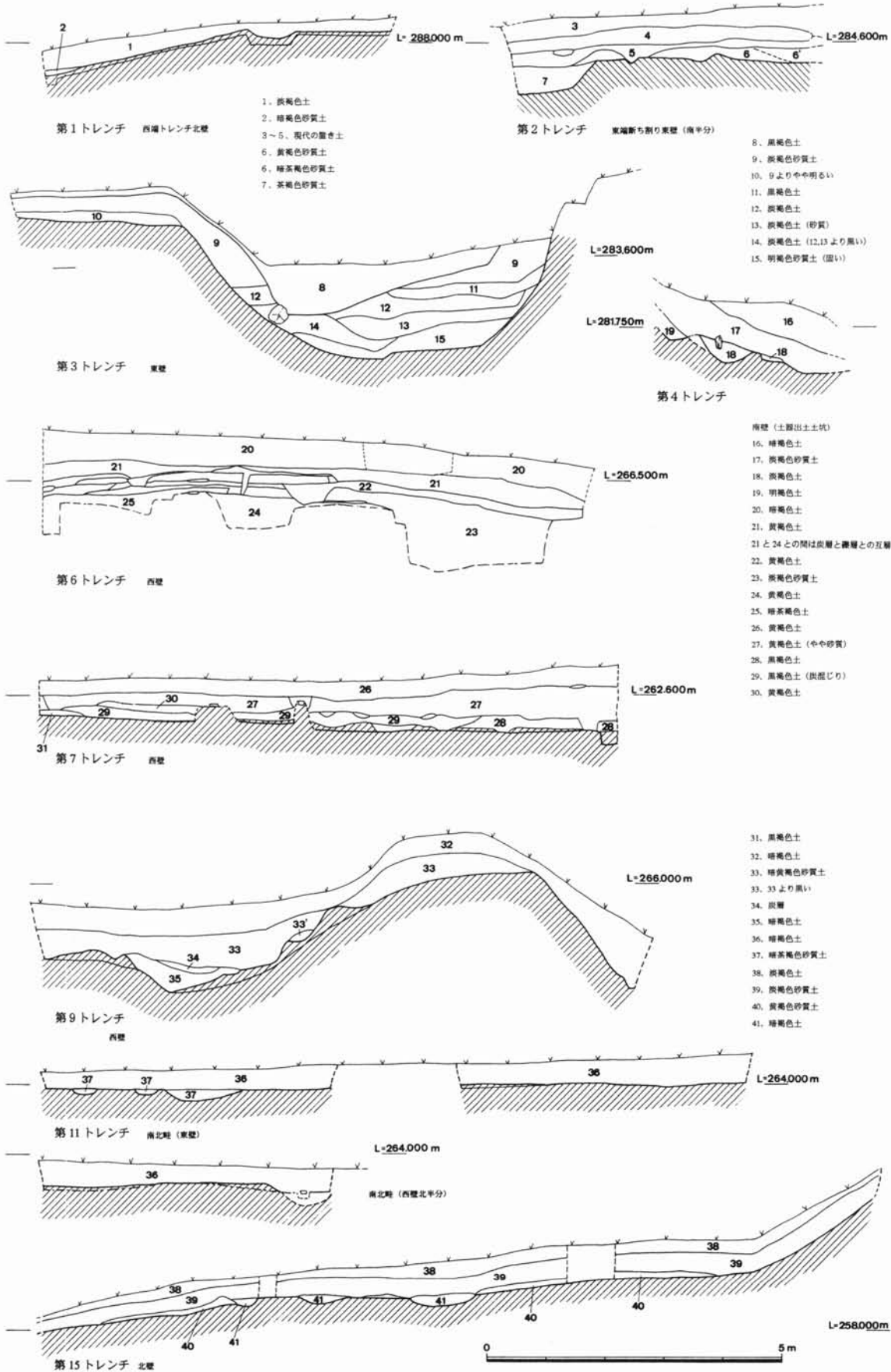
第8トレンチ 第7トレンチの北側に設定したトレンチである。南部は地表下20cmで遺構面を確認した。石垣を施し、一段高く整地している。ここで、宝篋印塔の一部が出土した。墓地に伴うものと思われる。北部は地表下40～60cmで地山を確認した。凸凹状で土取りなどの穴と思われる。平安時代末期～鎌倉時代初期の須恵器鉢(東播磨系)や、信楽摺鉢、土師器皿が出土した。

第9トレンチ 調査地中央部に設定した。第8トレンチの北側に設定したトレンチである。六角堂へ向かう道の屈折部のやや下方にある土塁と空堀地点である。土塁は上部40cmが盛土で、それより下は地山である。北側斜面は急傾斜で、頂部から2.5mで底となる。南側の現状は幅5mほどの平坦面となっているが、調査の結果、平坦地は後世の造成であることが判った。かつては土塁の急斜面があり幅3mの堀があった。堀は深さ1m以上である。下層で焼土層を確認した。出土遺物は少量である。

第10トレンチ 調査地北端にある第15トレンチの下方に設定したトレンチである。現状は緩傾斜面で、遺構は検出されなかった。遺物は土師器皿、青磁片が少量出土した。



第92図 第7～15トレンチ平面図



第93図 各トレンチ土層断面図

第11トレンチ 笠置寺のある丘陵から延びる幅広の尾根に設定したトレンチである。地表下30～40cmで地山を確認した。30cmほどまでは江戸時代の遺物を含み、この頃以降に現状の地形が形成されたと考えられる。下層では、鎌倉時代後期～戦国時代の遺物を確認した。トレンチ中央で建物跡を確認した。地山直上に建設している。ほぼ南北方向に長い1間×2間の建物跡である。南北3.1m。東西3.4m、2.9mに柱穴。径40cmの掘形に20cmほどの礎石を据えている。1か所の掘形から鎌倉時代後期～南北朝期の土師器皿が出土した。ほぼ同じ位置で建て替えがあったらしく、柱穴は重複している。建物跡がある周辺は鎌倉時代後期に造成され、平坦面としたらしい。建物跡の北西部で「L」字状に屈折した溝を確認した。溝が埋没した後に、建物の北東隅の柱を据えていることから、溝は古い段階の建物に伴う雨落ち溝と考えられる。このトレンチでは、鎌倉時代後期～戦国時代の土師器皿、古瀬戸皿・卸目皿、信楽摺鉢、鎌倉時代後期の瓦器椀、室町時代の瓦器摺鉢、鉄釘が出土した。

第12トレンチ 第11トレンチのある平坦面の西端から一段下方の平坦面に設定した。横には大岩がある。第11トレンチ側は、旧地形の傾斜面を盛土して平坦面としている。下段は70cm盛土して平坦面としている。土師器皿が出土した。

第13トレンチ 第12トレンチのある平坦面に設定した。70cm程盛土して平坦面としている。下層で完形に近い鎌倉時代後期～南北朝期の土師器皿、瓦器椀が出土した。

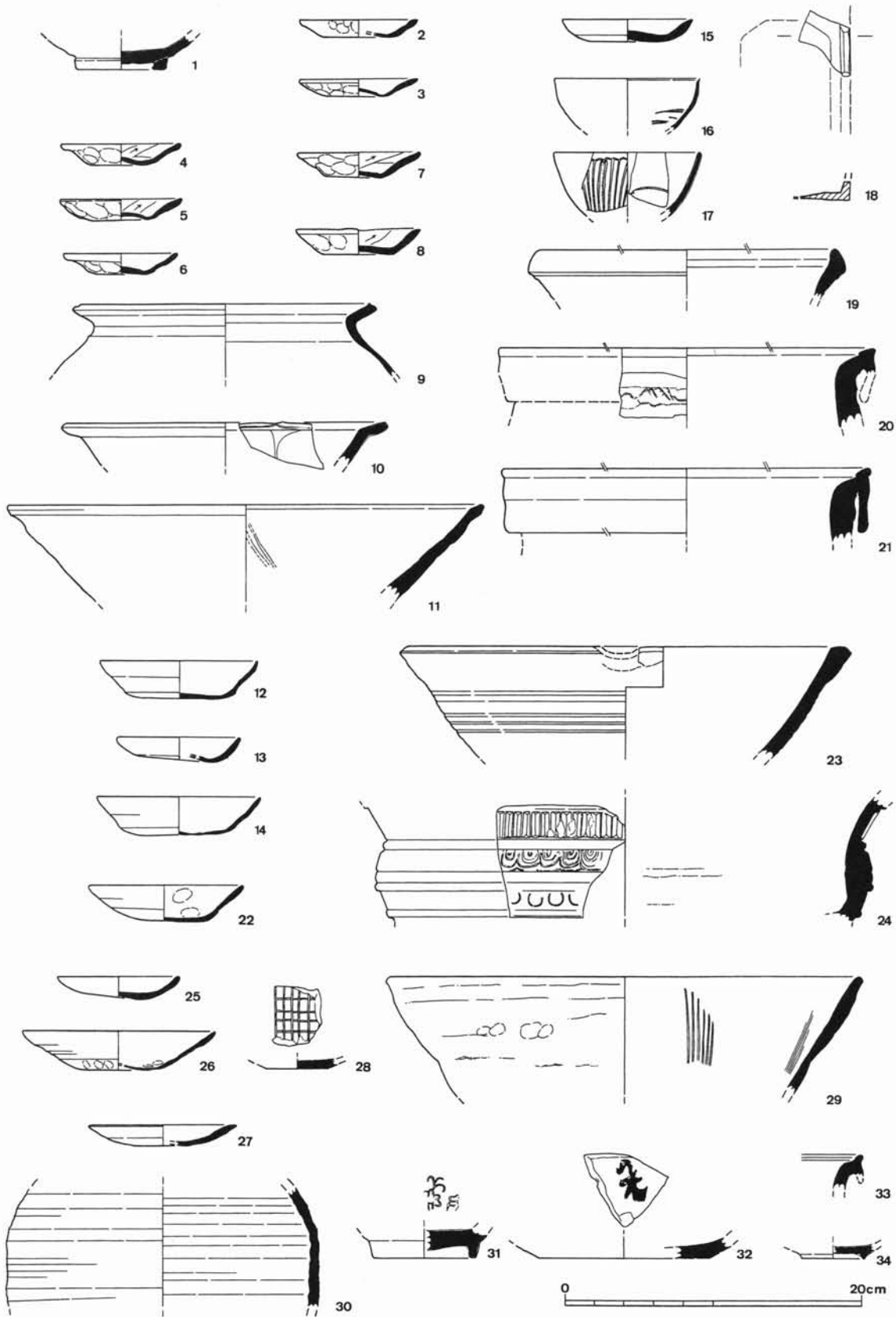
第14トレンチ 第13トレンチの下方にある平坦面に設定した。自然地形である。

第15トレンチ 第11トレンチの北側にあるやや幅狭い尾根に設定した。笠置寺のある主丘陵から延びた尾根は、まず、急斜面となっている。続いて緩斜面になったところにトレンチを設定した。現状緩斜面の尾根では、表土下40～60cmで地山を確認した。上層から出土した遺物により第11トレンチと同様に現状の地形は、江戸時代以降に形成されたことが判明した。旧地形は、地山を階段状に成形して平坦地を造成していた。鎌倉時代後期頃の土師器皿が平坦面直上に堆積していた。トレンチ東部で柱穴3か所を確認した。東西方向に並ぶ。柱間2.5m、径40cmの掘形に20cmほどの平石をそれぞれ据える。ほぼ同じ位置で建て替えがあったらしく、柱穴は重複している。時期は不明である。建物と重複して柵が検出された。層序によれば柵が古い。建物が廃絶した後、戦国時代末期に掘削しているが、江戸時代初期には埋没している。ここから唐津椀が出土した。このトレンチから平安時代中期の須恵器壺、鎌倉時代中期の常滑壺、銭貨(宋銭)、鎌倉時代後期～江戸時代初期の土師器皿。室町時代の青磁椀、砥石が出土した。

4. 出土遺物

今回の発掘調査で出土した遺物は多岐にわたる。土師器、須恵器、青磁、白磁、瓦器、常滑、信楽、砥石、硯、銭貨などがある。

1は古瀬戸椀である。第2トレンチ土壘北側の平坦面から出土した。2・3は土師器皿である。第3トレンチ堀の底近くで出土した。4～8は土師器皿である。第4トレンチの南部で集中して出土した。9は土師器羽釜である(大和型)。10は中国竜泉窯の稜花青磁鉢である。11は信楽摺鉢



第94図 出土遺物実測図

である。第5トレンチ包含層から出土した。12～14は土師器皿である。これらは洛外産の模倣型で、鎌倉時代後期～南北朝期である。第6トレンチ包含層から出土。15は土師器皿、16は瓦器椀、17は中国竜泉窯の青磁椀、18は硯、19は東播磨須恵器鉢、20・21は常滑甕である。15・16・18・19～21は焼土層から出土した。ほとんどは鎌倉時代後期～南北朝期である。これらは第7トレンチから出土した。22は土師器皿である。23は信楽片口鉢である。24は瓦器火舎である。これらは第8トレンチの包含層から出土した。25・26は土師器皿である。25は建物建設時の整地で埋められた溝から出土した。鎌倉時代後期である。26は包含層から出土した。いずれも洛外産の模倣型である。28は古瀬戸卸目皿である。29は瓦器播鉢である。いずれも第11トレンチの出土である。27は土師器皿である。胎土は緻密で色調は明褐色であり、今回出土した土師器皿の中では異質である。戦国時代である。30は中国製の壺と思われる。須恵器のような焼き上がりで、胎土は緻密で高温で焼き締められている。31は中国竜泉窯の青磁椀である。見込みに花文を施す。32は古瀬戸鉢の底部である。見込みに墨痕がある。33は常滑甕である。鎌倉時代後期である。34は古瀬戸皿である。これらは第15トレンチの包含層から出土した。35は第1トレンチから出土した布目瓦である。36は第11トレンチから出土した土犬である。豊臣期の各地の城郭跡で出土するもので、この遺物も同時期と考えられる。

5. まとめ

今回の調査地の南部では、土塁と空堀を確認し、城の施設であることを確認した。これらの施設の時期は2時期あり、出土遺物が少なく断定はできないが、鎌倉時代後期～南北朝期と戦国時代の所産と考えられる。

調査地中央部の調査成果では、東海自然歩道より東側の平坦地には中世の墓地と建物跡が存在したことが想定できる。同西側の谷部は地山面で焼土が認められ、火災があったことが判明した。出土遺物は、鎌倉時代後期～南北朝期のものが多数を占める。第8トレンチで宝篋印塔が出土したことから、周辺には中世に墓地であった可能性がある。第9トレンチでは土塁と空堀が検出され、城の施設であることを確認した。詳細な時期は不明であるが、調査地南部の土塁と空堀を一对のものとするれば、鎌倉時代後期～南北朝期と戦国時代の2時期と考えられる。

調査地北西部では、やや広い尾根上に建物があったことが判明した。主丘陵には六角堂などの笠置寺の施設があり、今回確認された建物跡も寺に関連する可能性がある。

以上、山岳寺院である笠置寺に関連する施設が発見されたことは、山岳寺院の構造を考えられる上で貴重な資料となった。また、城に伴う土塁や空堀の存在も、城として機能した笠置山の歴史を知る上で貴重な資料となった。

(伊野近富)

注1 『史跡及び名勝笠置山保存管理計画策定報告書』 笠置町教育委員会 1985

注2 中井均「笠置城」(『城』第113号) 関西城郭研究会 1982

参考文献 小林義亮『笠置寺激動の1300年』 文芸社 2002

圖 版

図版第1 宮津城跡第12次



(1) 1 トレンチ配置図(東から)



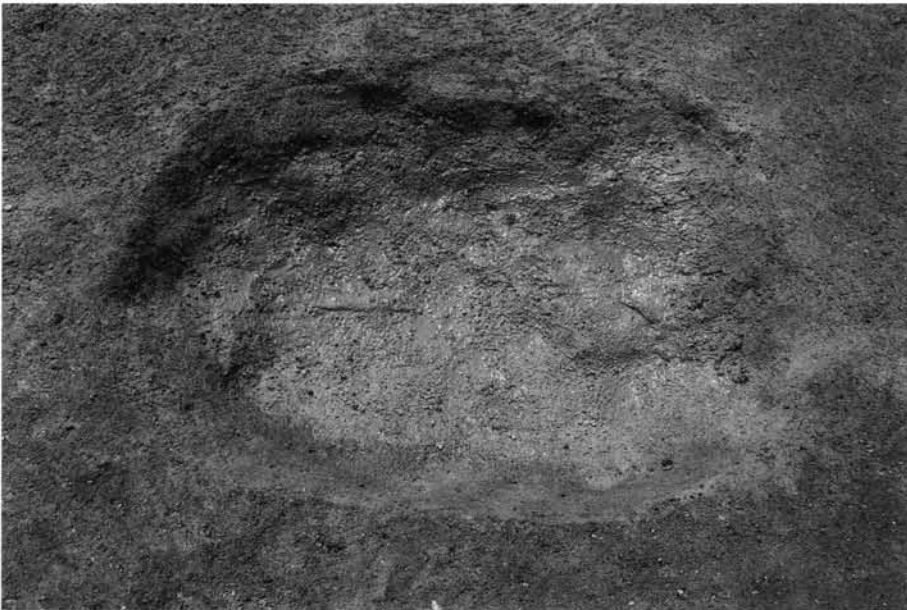
(2) 1 トレンチ全景(南から)



(3) 1 トレンチ南壁断面(北から)



(1) 1 トレンチ北部遺物出土状況
(東から)



(2) 1 トレンチ土坑S K01(東から)



(3) 1 トレンチ東壁断面(西から)

図版第3 宮津城跡第12次



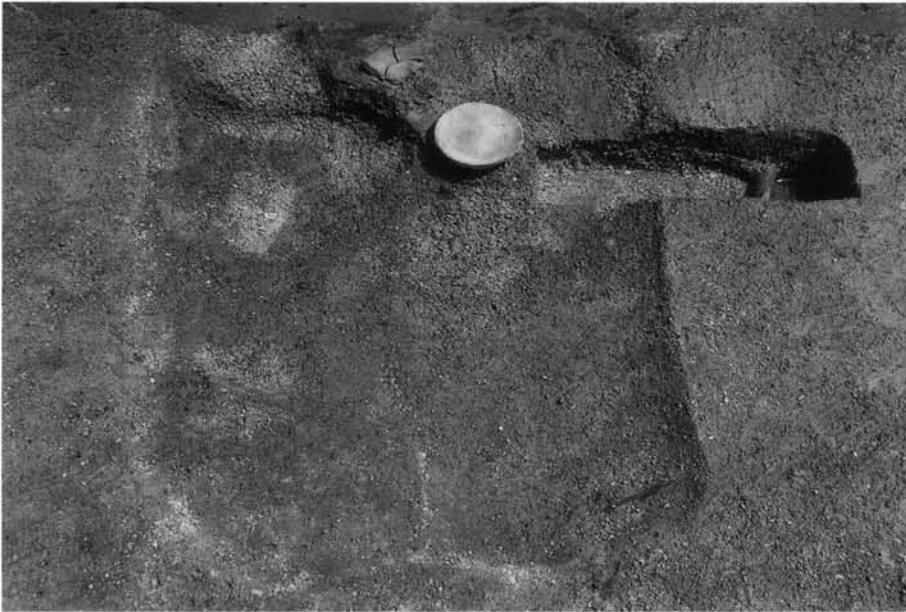
(1) 1・2トレンチ近景(南東から)



(2) 2トレンチ全景(南から)



(3) 2トレンチ土坑S K03検出状況(南から)



(1) 2 トレンチ土坑 S K03(南から)



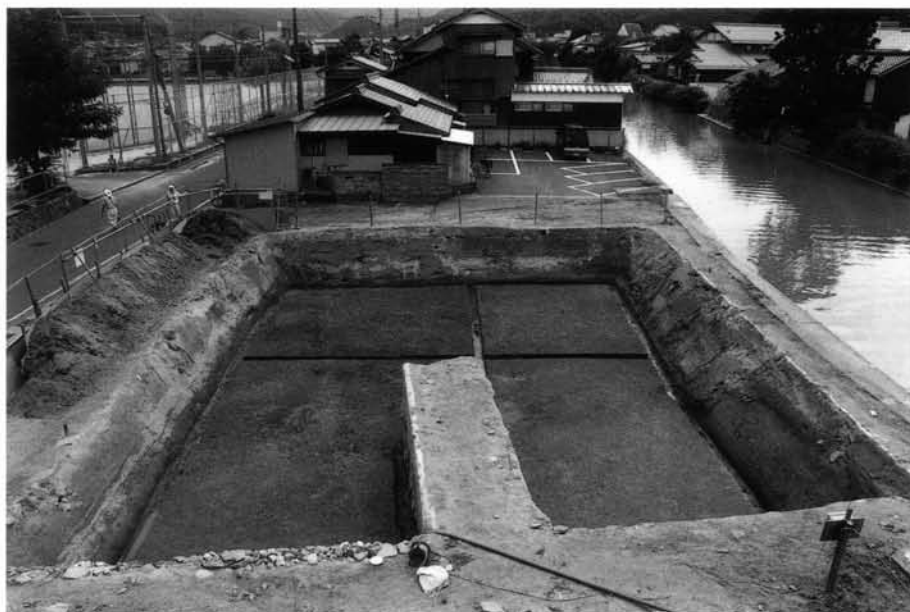
(2) 2 トレンチ北壁断面(南から)



(3) 2 トレンチ西壁断面(東から)



(1) 3 トレンチ調査前(南から)

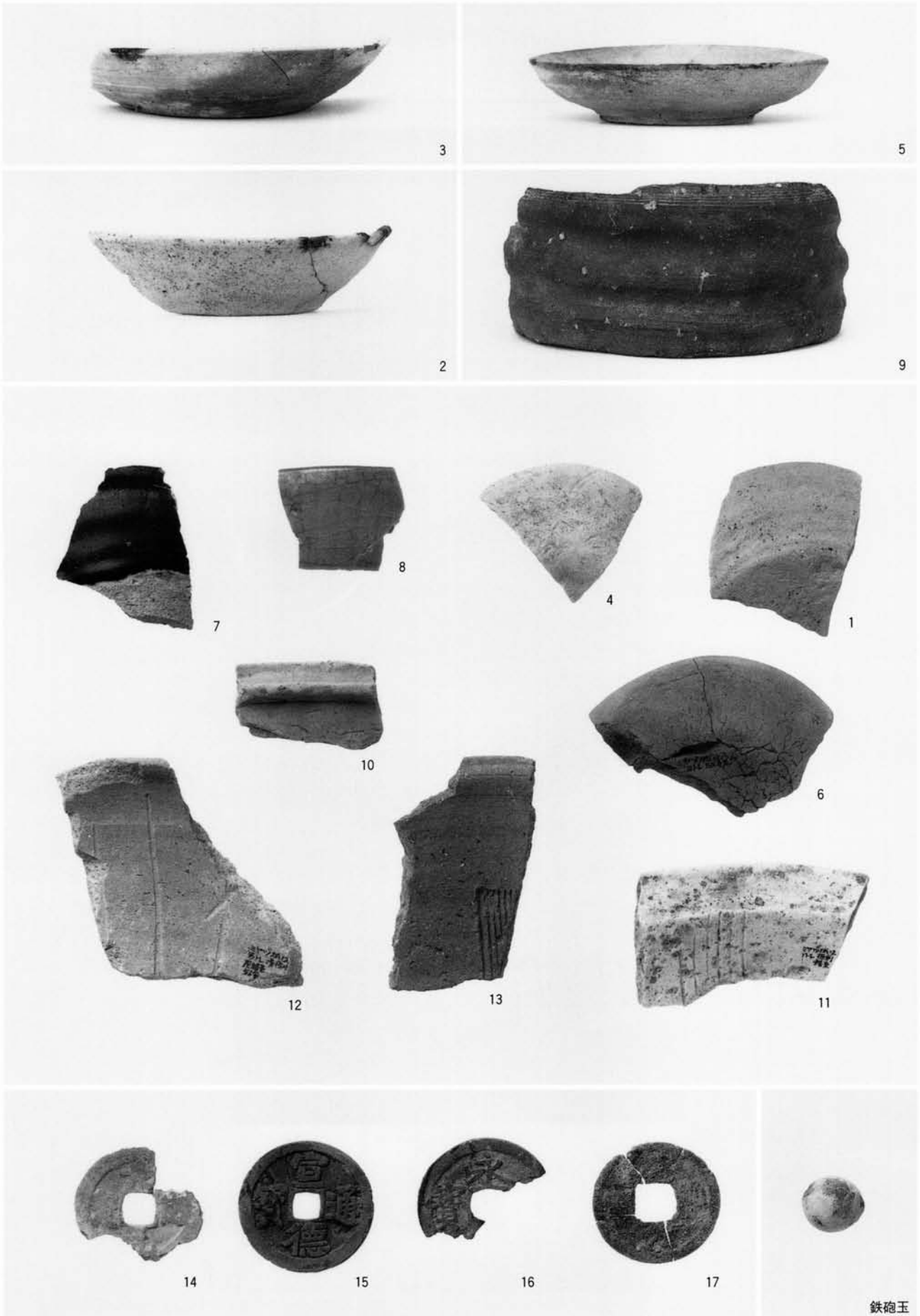


(2) 3 トレンチ全景(北から)



(3) 3 トレンチ東壁断面(西から)

図版第6 宮津城跡第12次



出土遺物

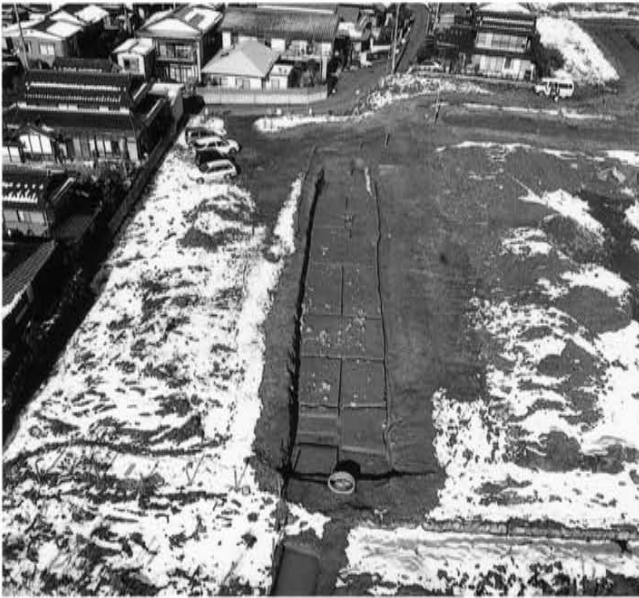
鉄砲玉



(1)調査地遠景(南東から)



(2)調査地全景(右が北)



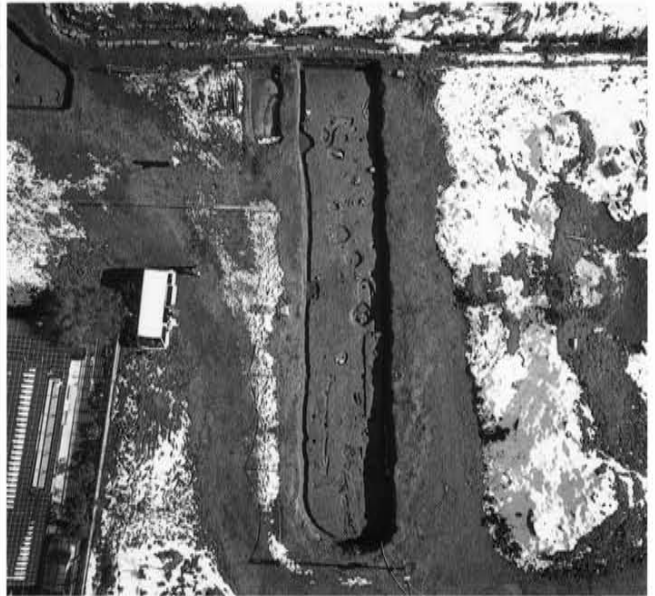
(1)第1トレンチ全景(南から)



(2)第1トレンチ全景(上が南)



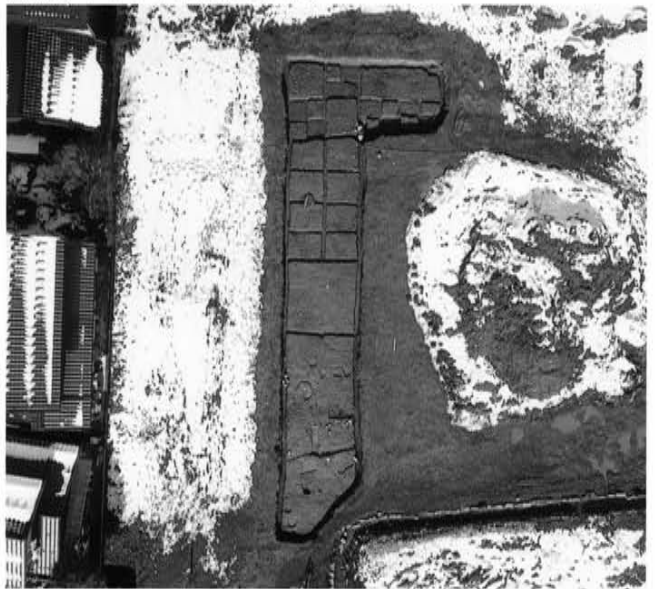
(3)第2トレンチ全景(東から)



(4)第2トレンチ全景(上が東)



(5)第3トレンチ全景(南から)



(6)第3トレンチ全景(上が北)



(1)第1トレンチ遺構検出状況
(南東から)



(2)第1トレンチ遺構検出状況
(北から)



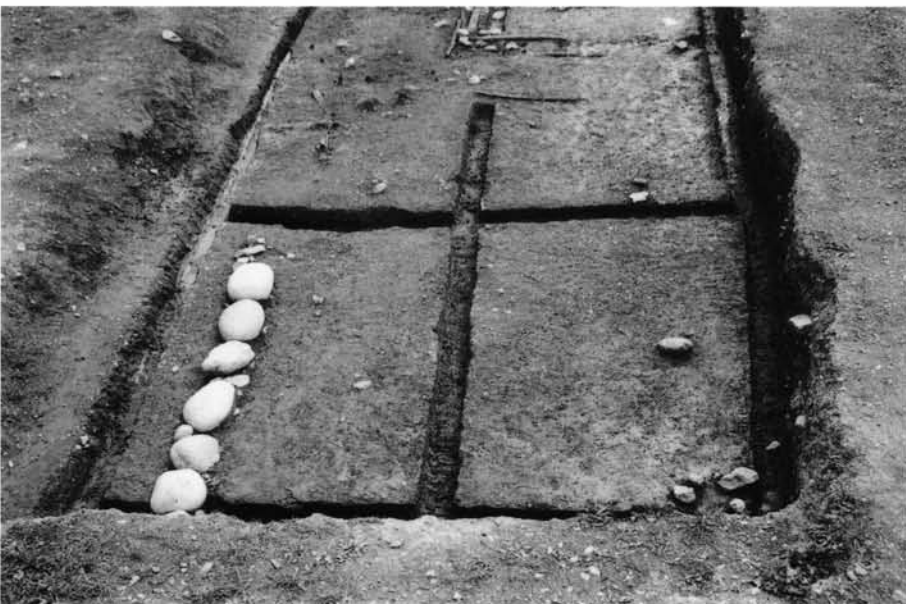
(3)第1トレンチ遺構検出状況
(南東から)



(1)第1トレンチS D03木組遺構
検出状況(南東から)



(2)第1トレンチS D03木組遺構
検出状況(東から)



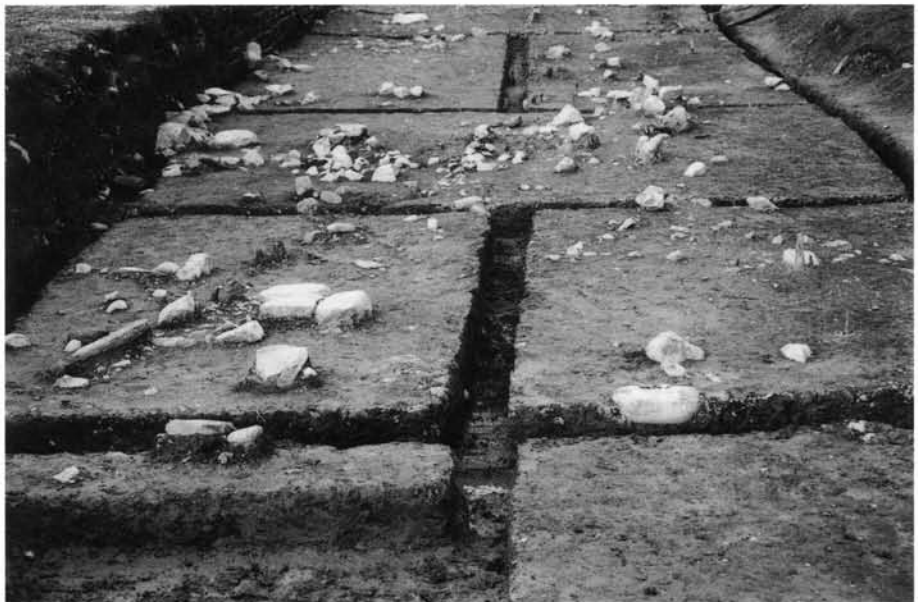
(3)第1トレンチ石組遺構S X01
検出状況(北から)



(1)第1トレンチ石組遺構S X02
検出状況(北東から)



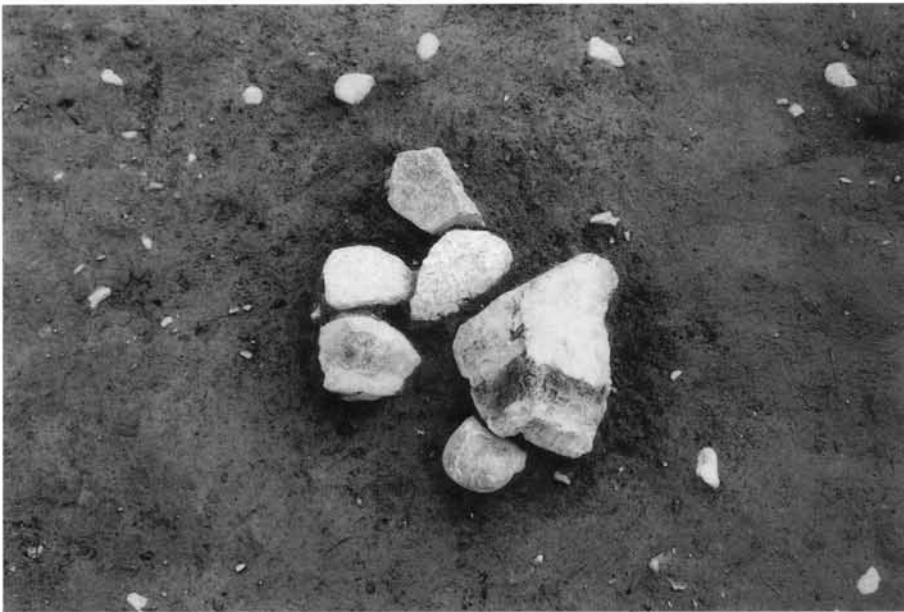
(2)第1トレンチ石組遺構S X02
と周辺遺構検出状況(東から)



(3)第1トレンチ石組遺構S X02
と周辺遺構検出状況(南から)



(1)第1トレンチ礎石検出状況1
(上が西)



(2)第1トレンチ礎石検出状況2
(上が東)



(3)第1トレンチ礎石検出状況3
(上が西)



(1)第2 トレンチ全景(西から)



(2)第2 トレンチ全景(東から)



(3)第2 トレンチ調査風景
(北西から)



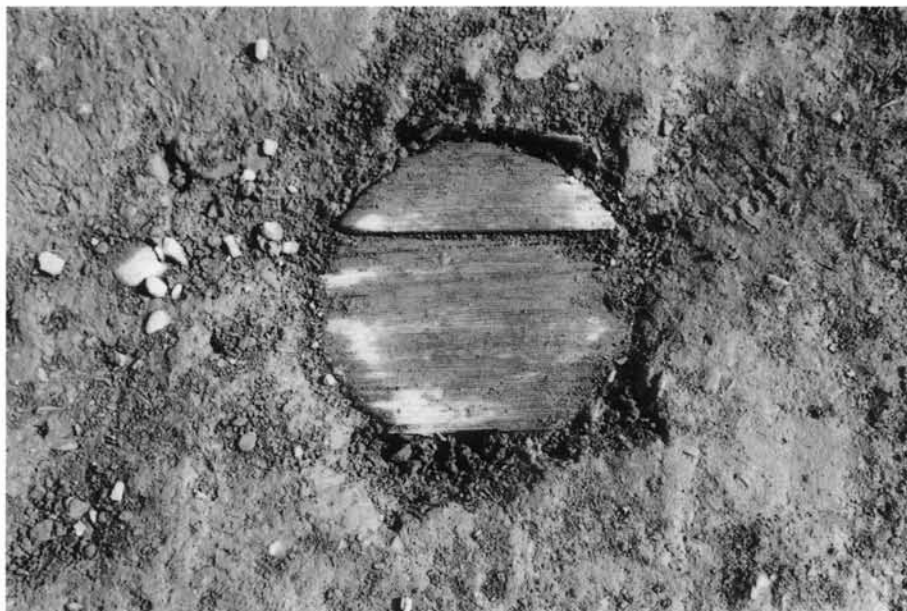
(1)第2トレンチ石組遺構S X13
検出状況(北東から)



(2)第2トレンチ溝S D04検出状況
(東から)



(3)第2トレンチ礎石検出状況
(西から)



(1)第2トレンチ桶底板検出状況
(上が北)



(2)第2トレンチ土坑S K09
(南西から)



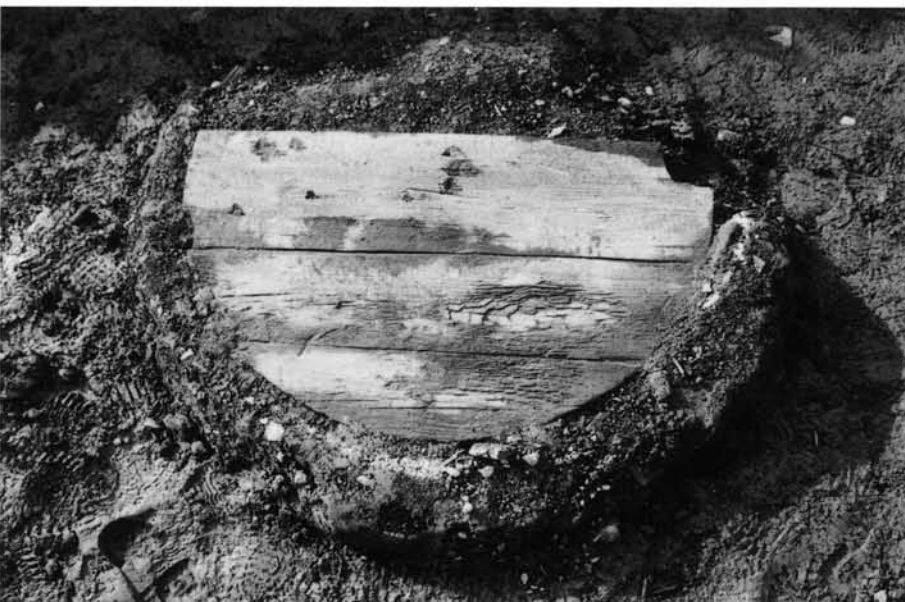
(3)第2トレンチ礎石検出状況
(上が東)



(1)第3 トレンチ全景(南から)



(2)第3 トレンチ全景(北から)

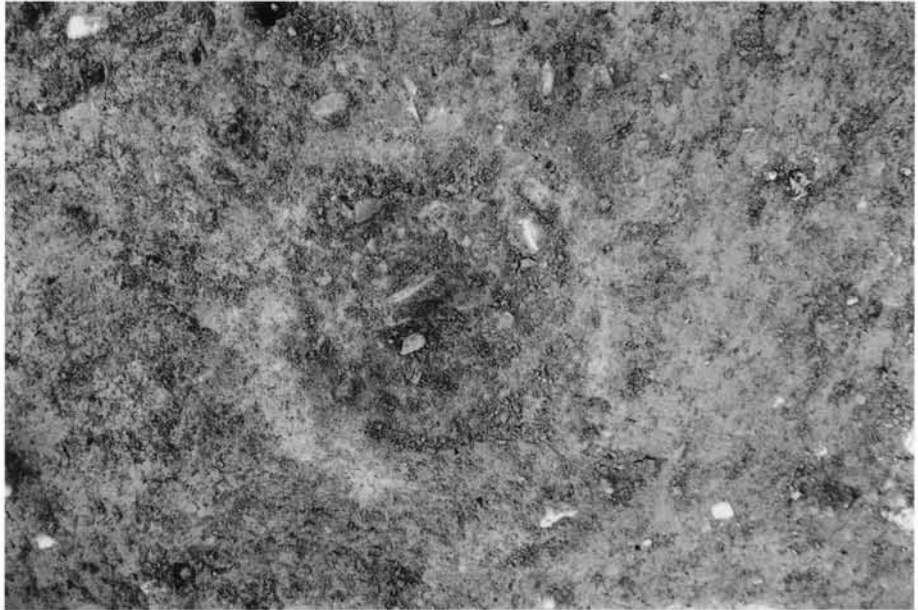


(3)第3 トレンチ土坑S K09桶底板
検出状況(上が西)

(1)第3トレンチ杭検出状況
(南東から)



(2)第3トレンチ土坑S K05
検出状況(上が北)



(3)第3トレンチ西壁断面(東から)





(1)第1トレンチ掘削風景(西から)



(2)第3トレンチ掘削風景(西から)



(3)遺物整理風景



73



56



9



30



21



18



58



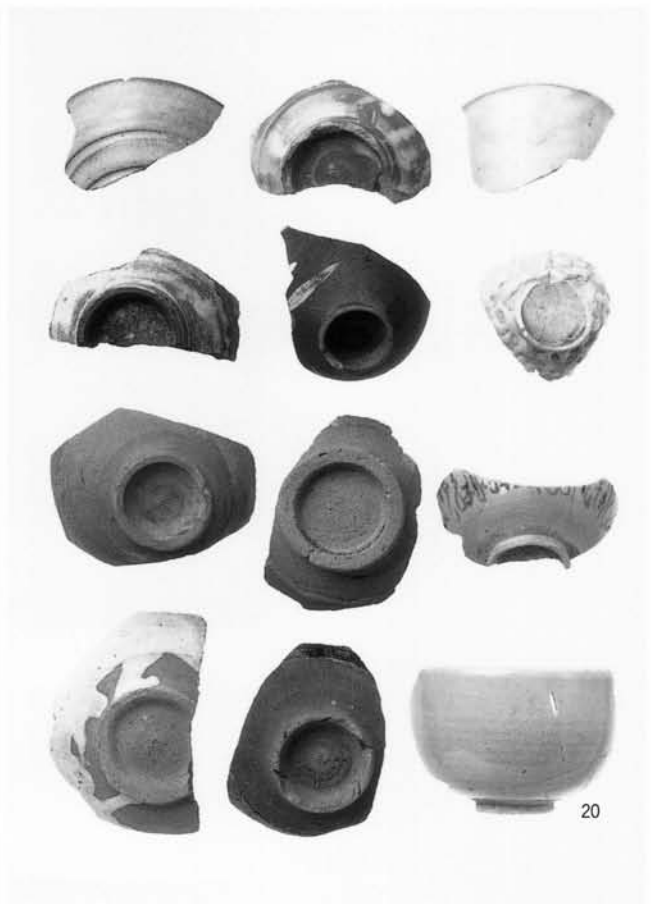
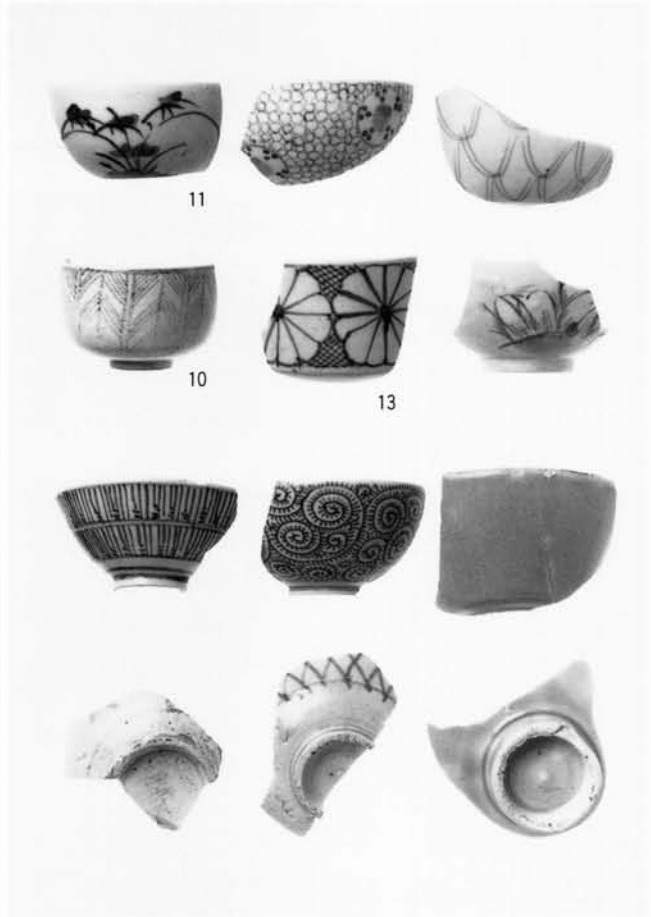
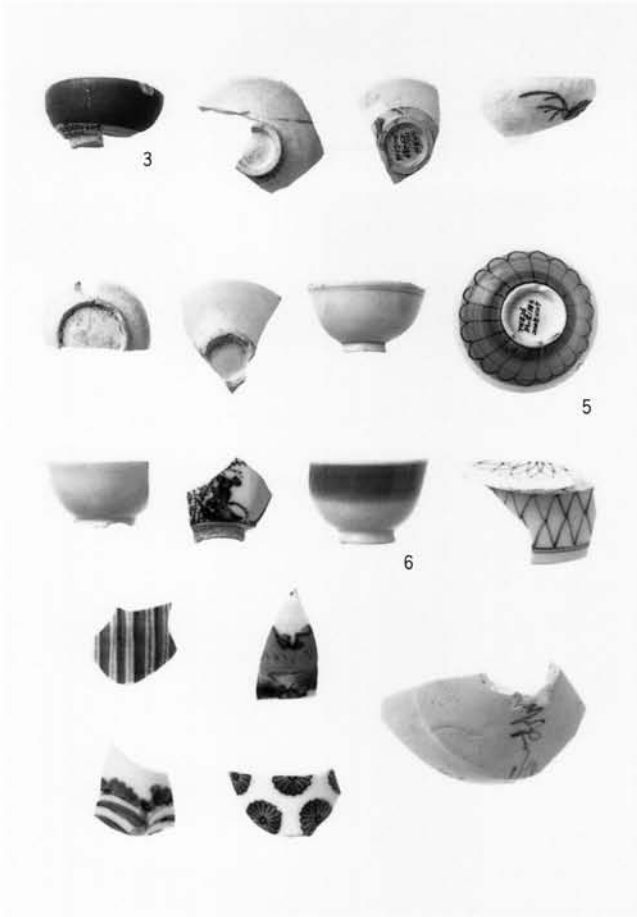
55

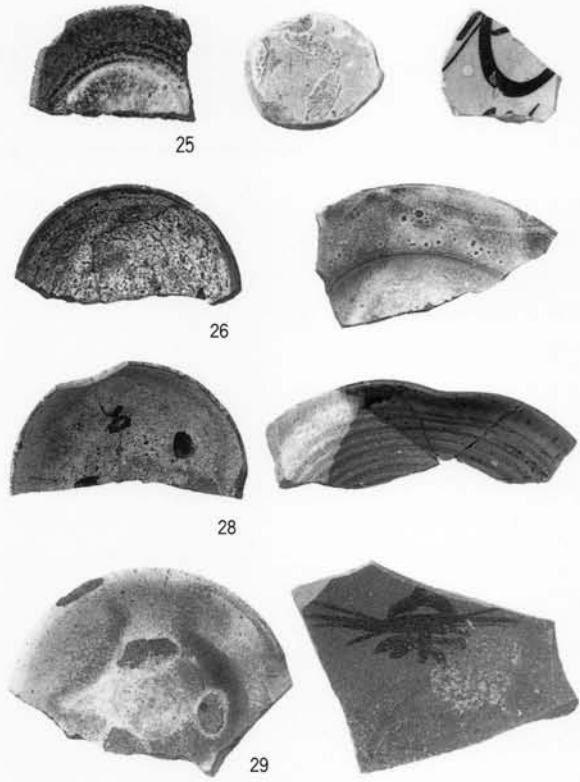
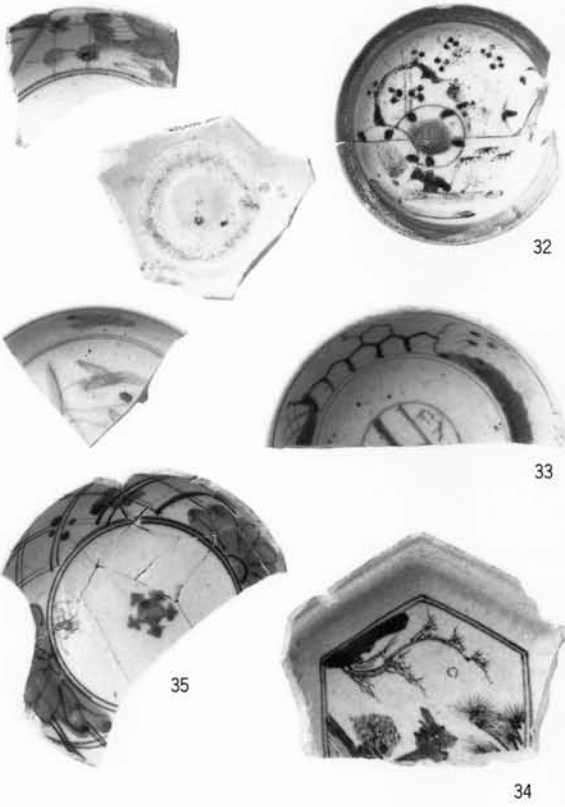


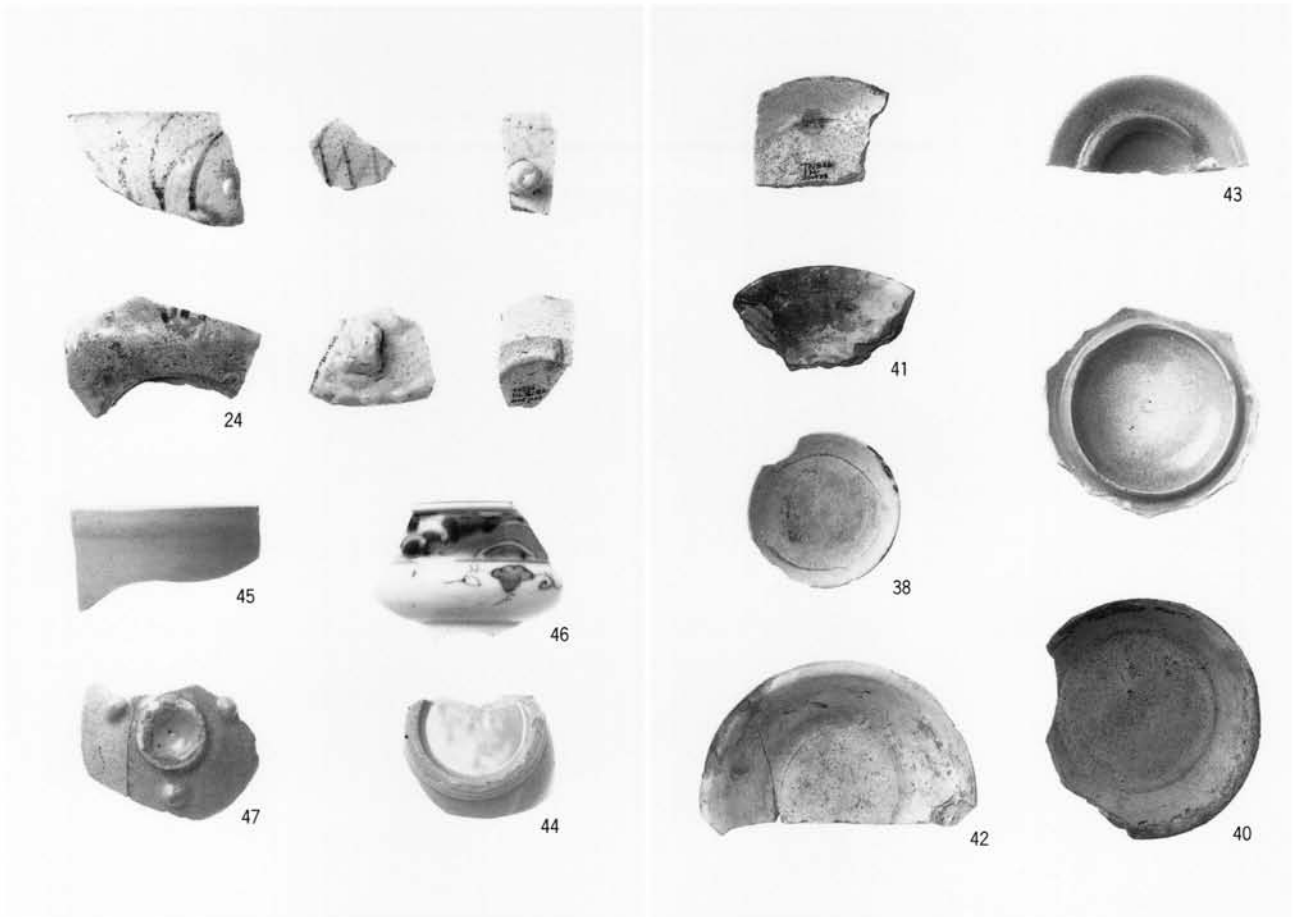
19



23

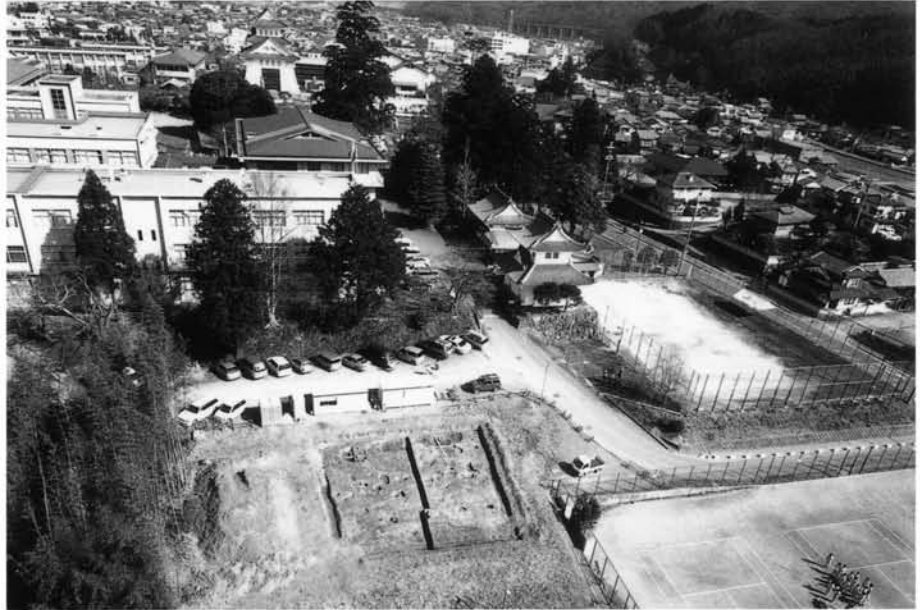








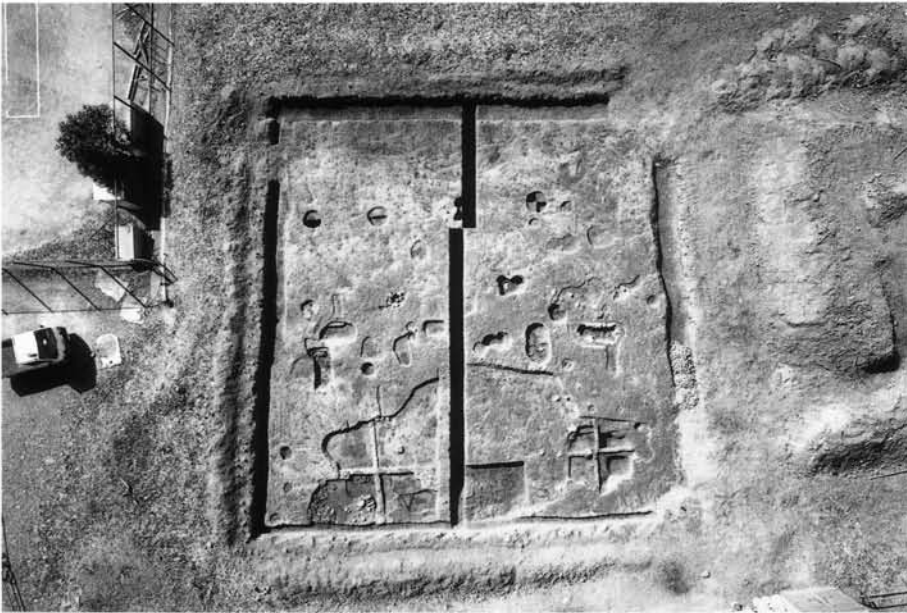
(1)園部城現存建物(南から)



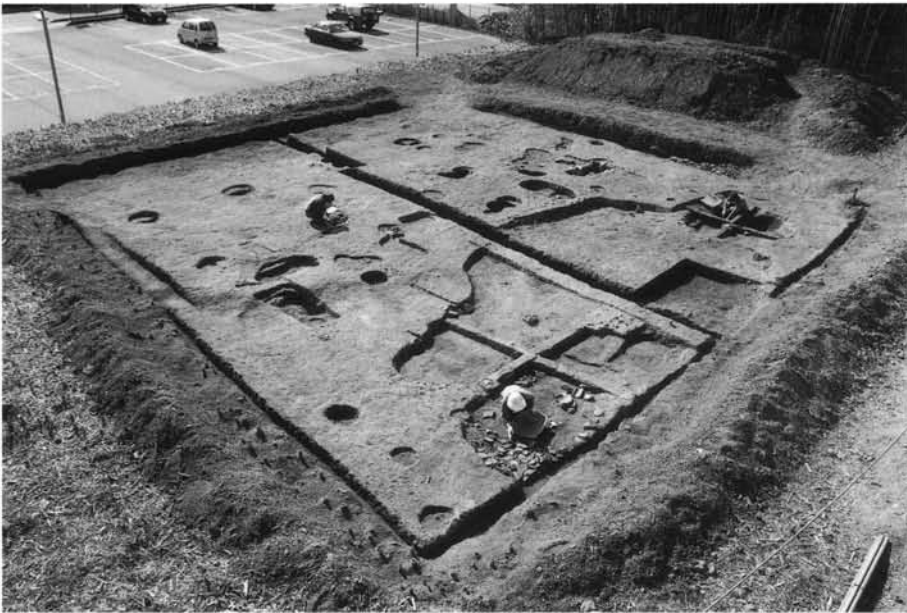
(2)第5次調査トレンチ(南から)



(3)第5次調査(北東から)



(1)第5次調査トレンチ全景
(上が南)



(2)第5次調査トレンチ全景
(北東から)



(3)土坑S K 501(北から)



(1)土坑 S K517遺物出土状況
(東から)



(2)土坑 S K512(西から)



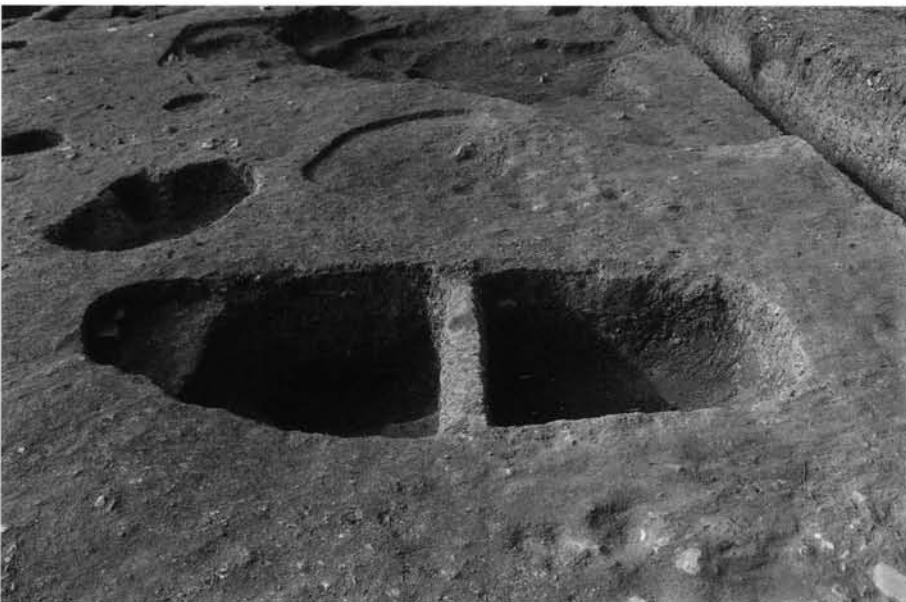
(3)第6次調査トレンチ全景
(北東から)



(1)第6次調査トレンチ全景
(上が北)



(2)土坑 S K601(東から)



(3)土坑 S K602(東から)



(1)土坑 S K605(東から)



(2)土坑 S K612遺物出土状況
(北から)



(3)第7次調査トレンチ全景
(南から)



(1)第7次調査全景(上が北)



(2)土坑状遺構 S X701石組
(東から)



(3)土坑状遺構 S X701(東から)



(1)土坑状遺構 S X 701(北から)



(2)土坑状遺構 S X 702(北から)



(3)土坑 S K 734(南から)



(1)第7次調査深堀トレンチ
(南から)



66



61



94



96

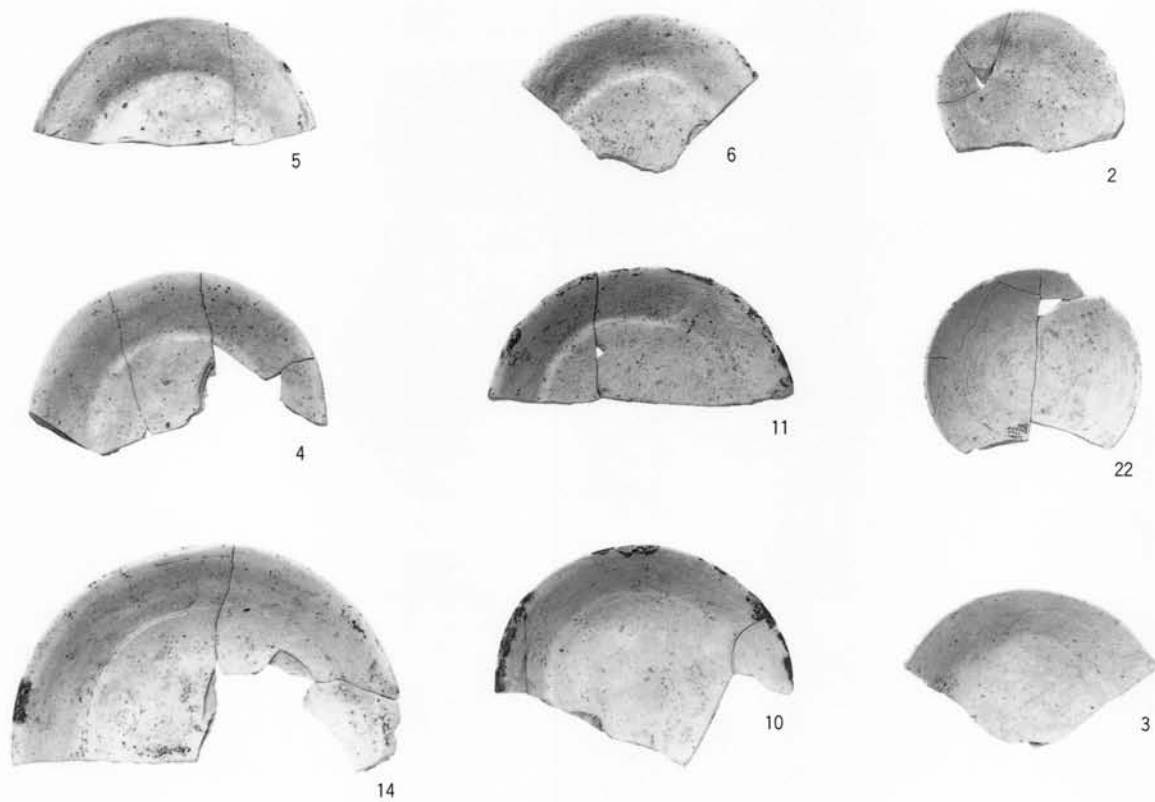


54

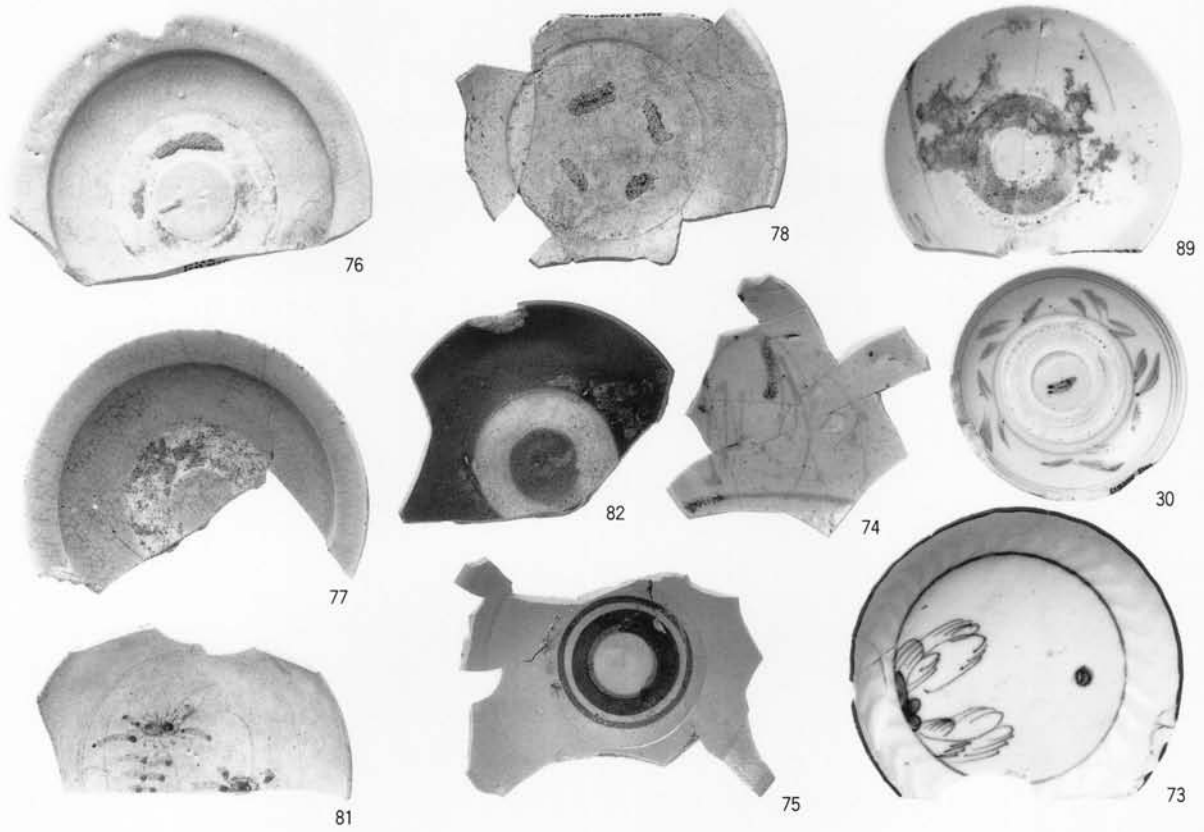
(2)第6次調査出土遺物



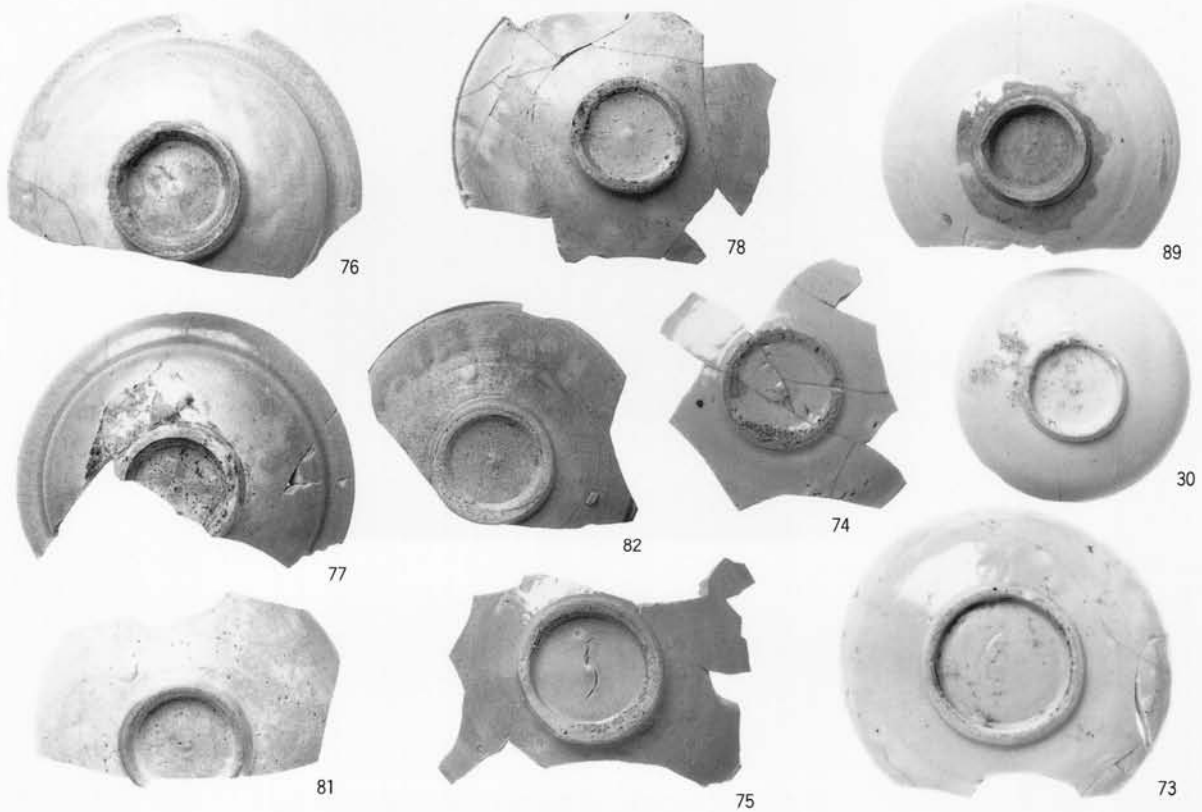
(1)第5次調査出土遺物



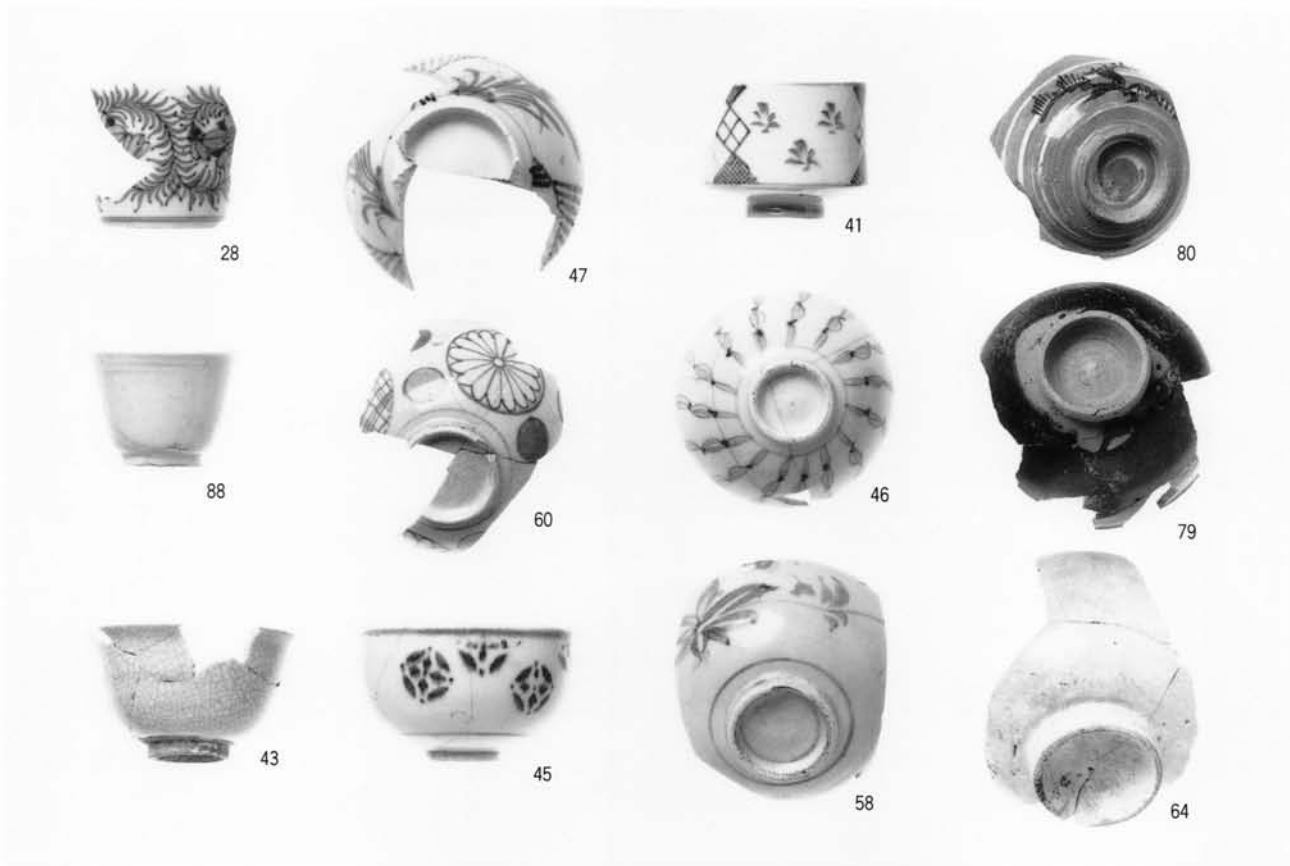
(2)第5次調査出土土師皿



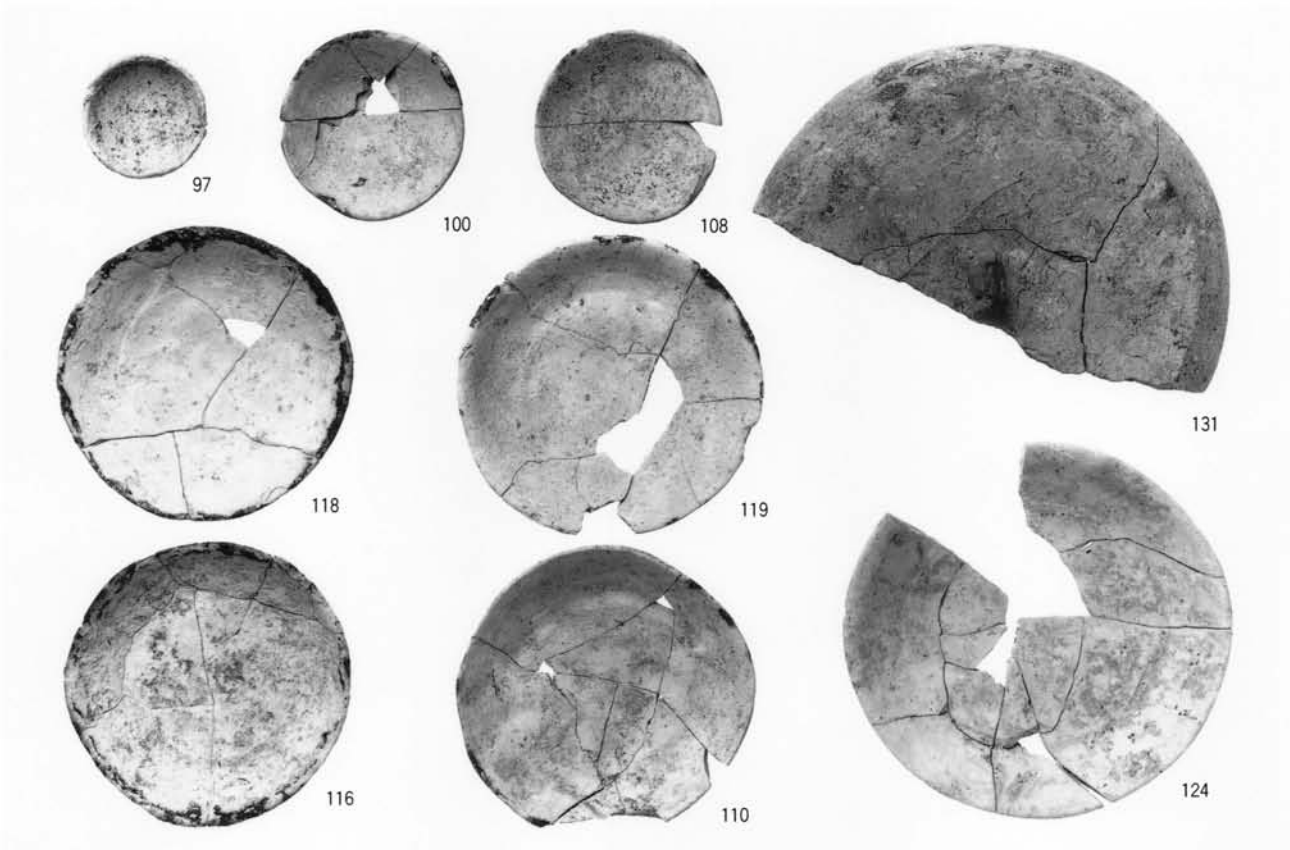
(1)第6次調査出土陶磁器(1)(上面)



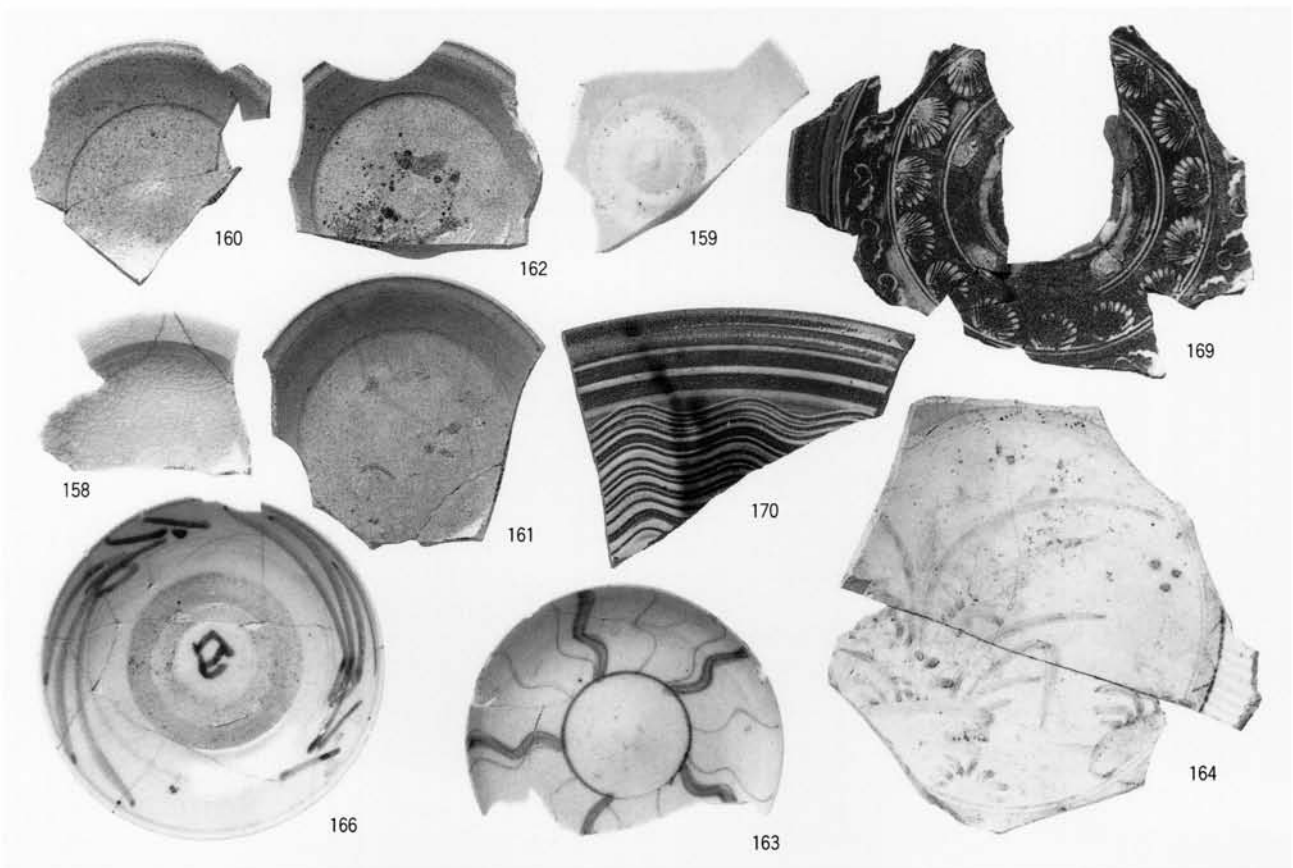
(2)第6次調査出土陶磁器(2)(下面)



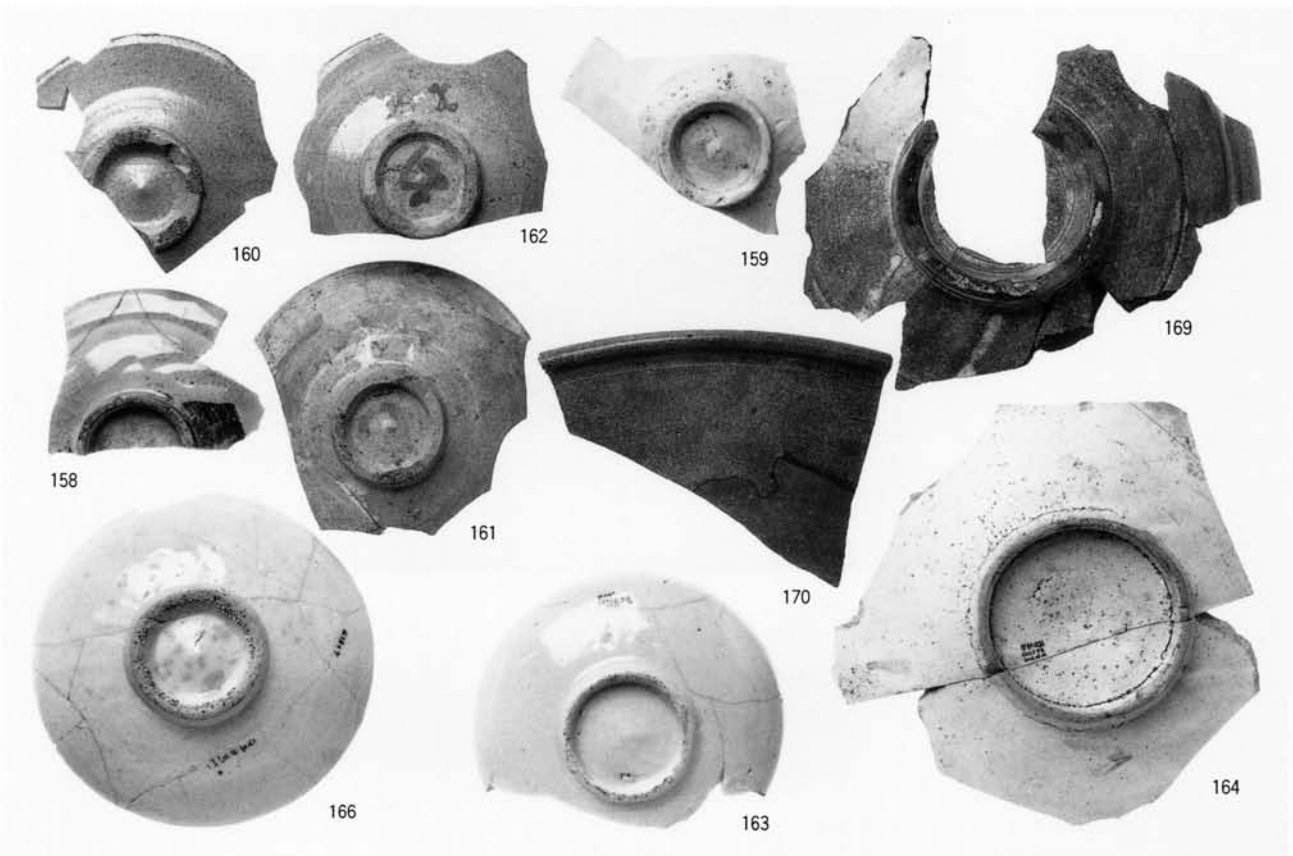
(1)第6次調査出土陶磁器(3)



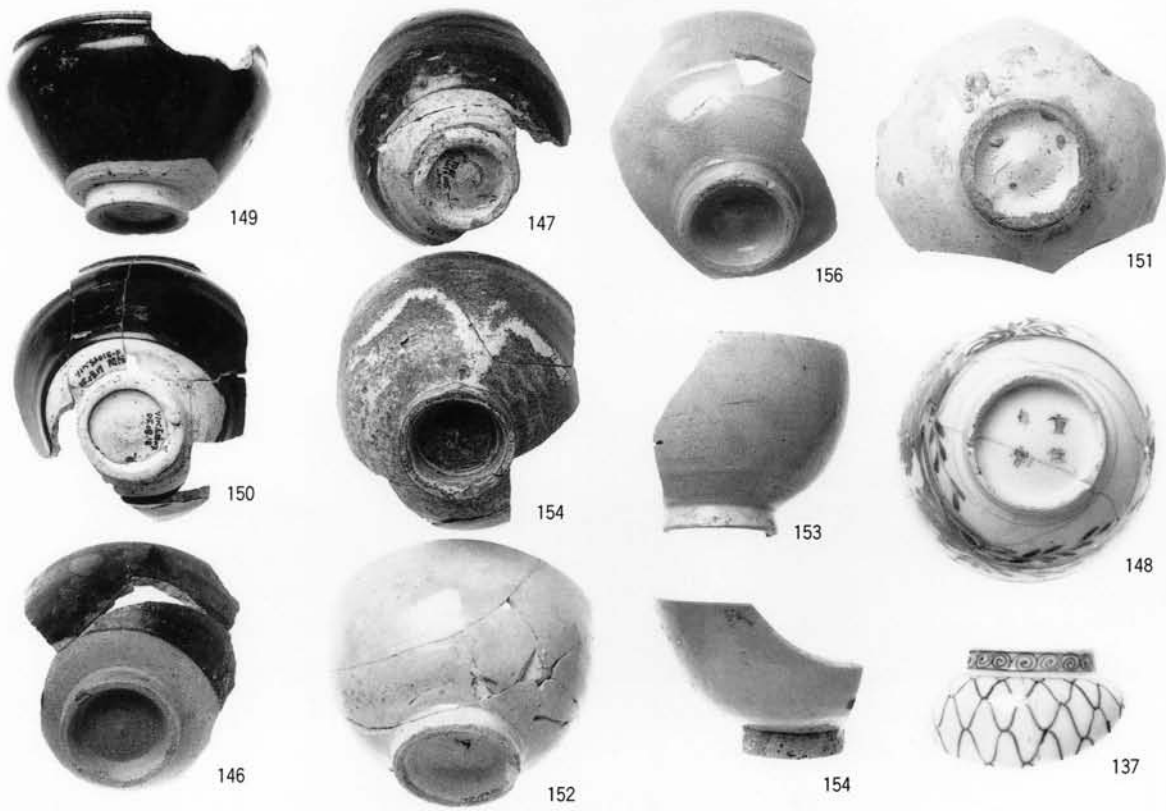
(2)土坑状遺構 S X 701出土土師皿



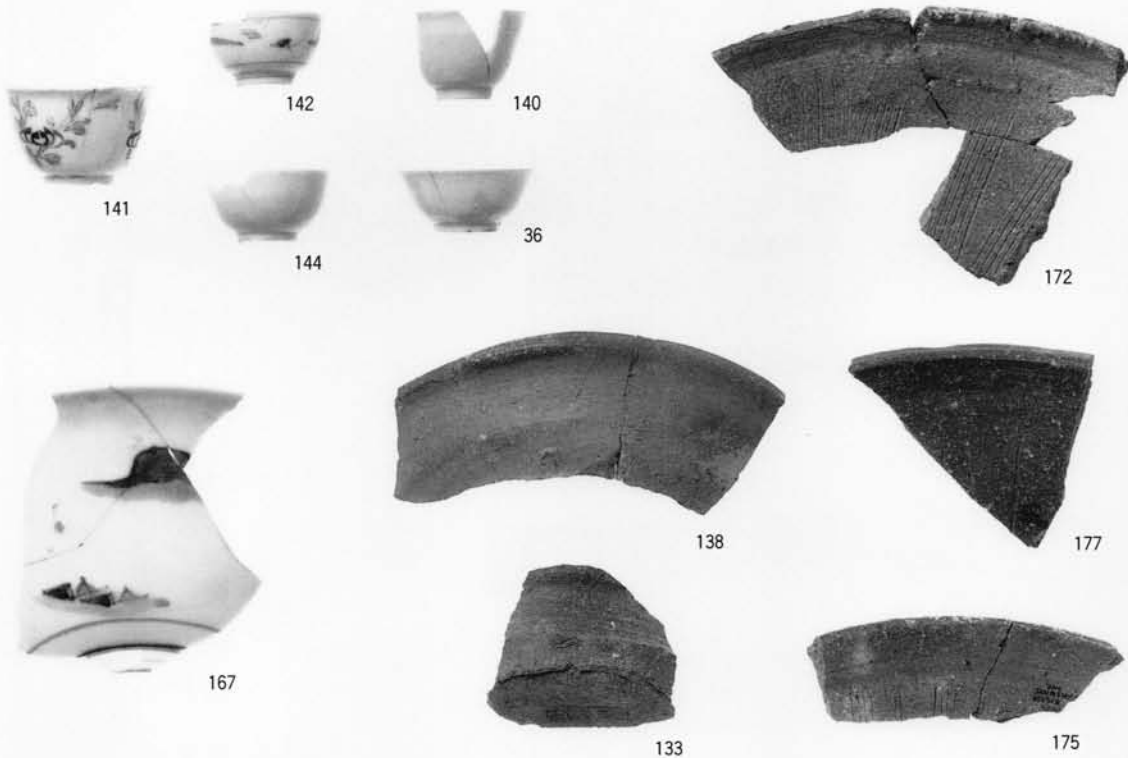
(1)土坑状遺構 S X 701出土陶磁器(1)(上面)



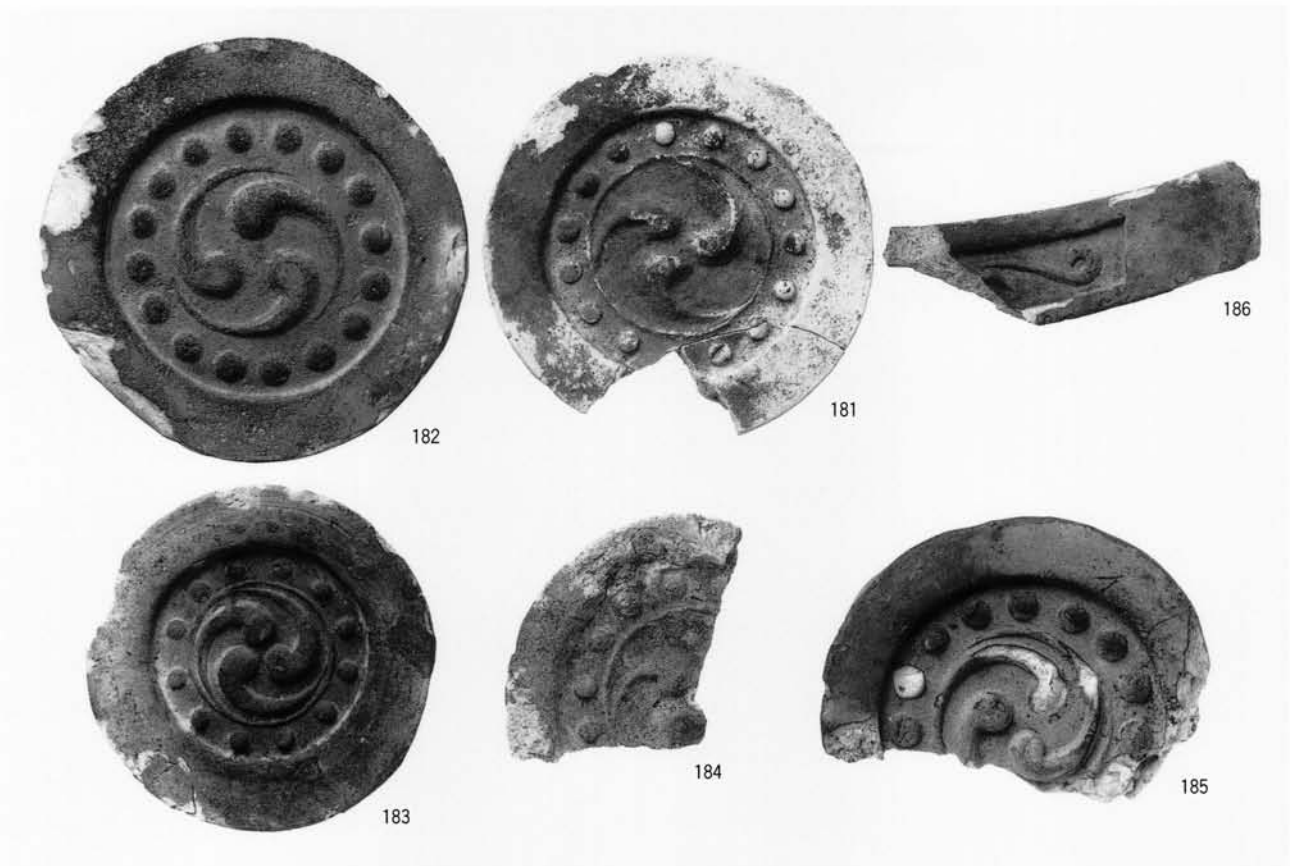
(2)土坑状遺構 S X 701出土陶磁器(2)(下面)



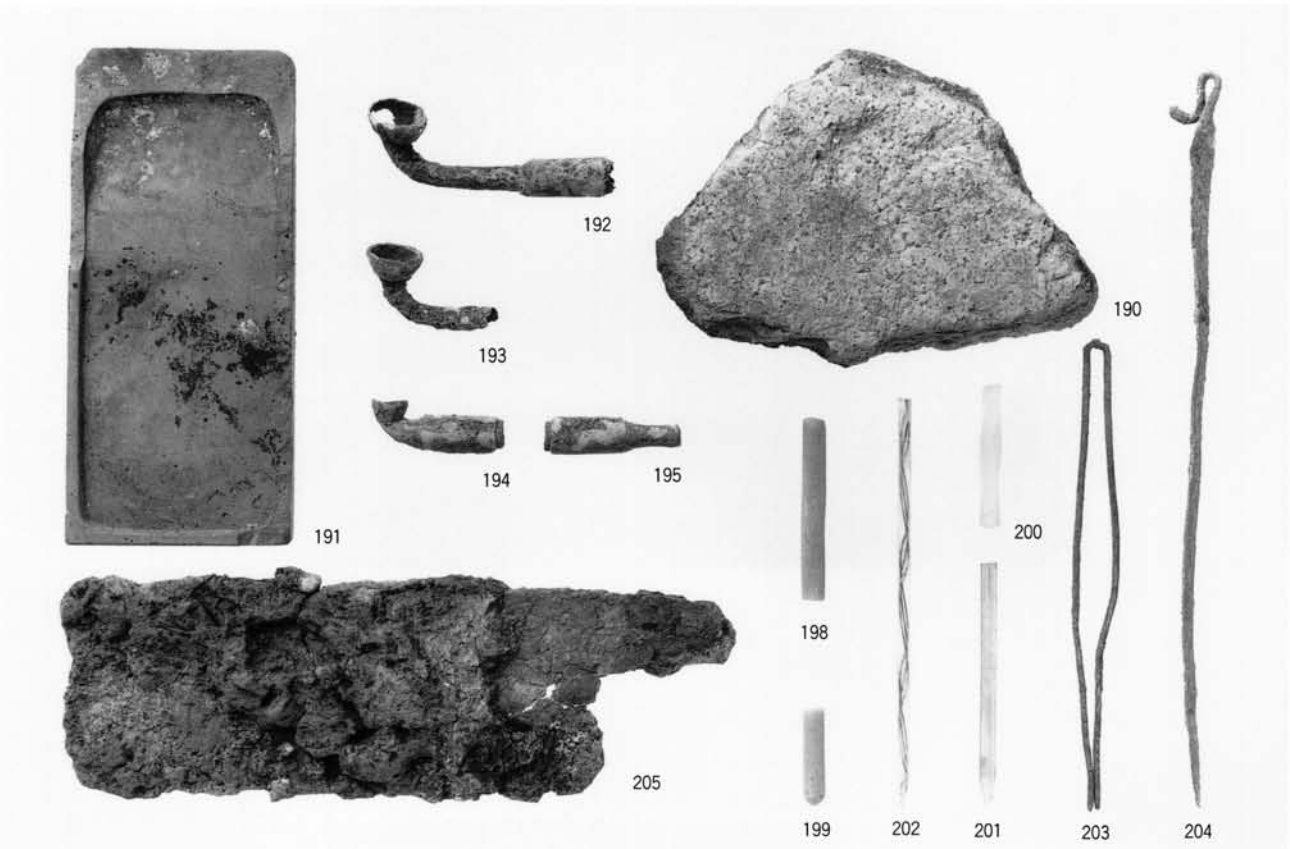
(1)土坑状遺構 S X 701出土陶磁器(3)



(2)第6・7次調査出土陶磁器



(1)土坑状遺構 S X 701出土瓦



(2)第5～7次調査出土遺物



(1)調査トレンチ遠景(南から)



(2)調査トレンチ全景(北西から)



(1)調査トレンチ断面(西から)



(2)調査トレンチ(南東から)



(1)調査トレンチ(北西から)



(2)掘立柱建物跡S B03全景(南東から)



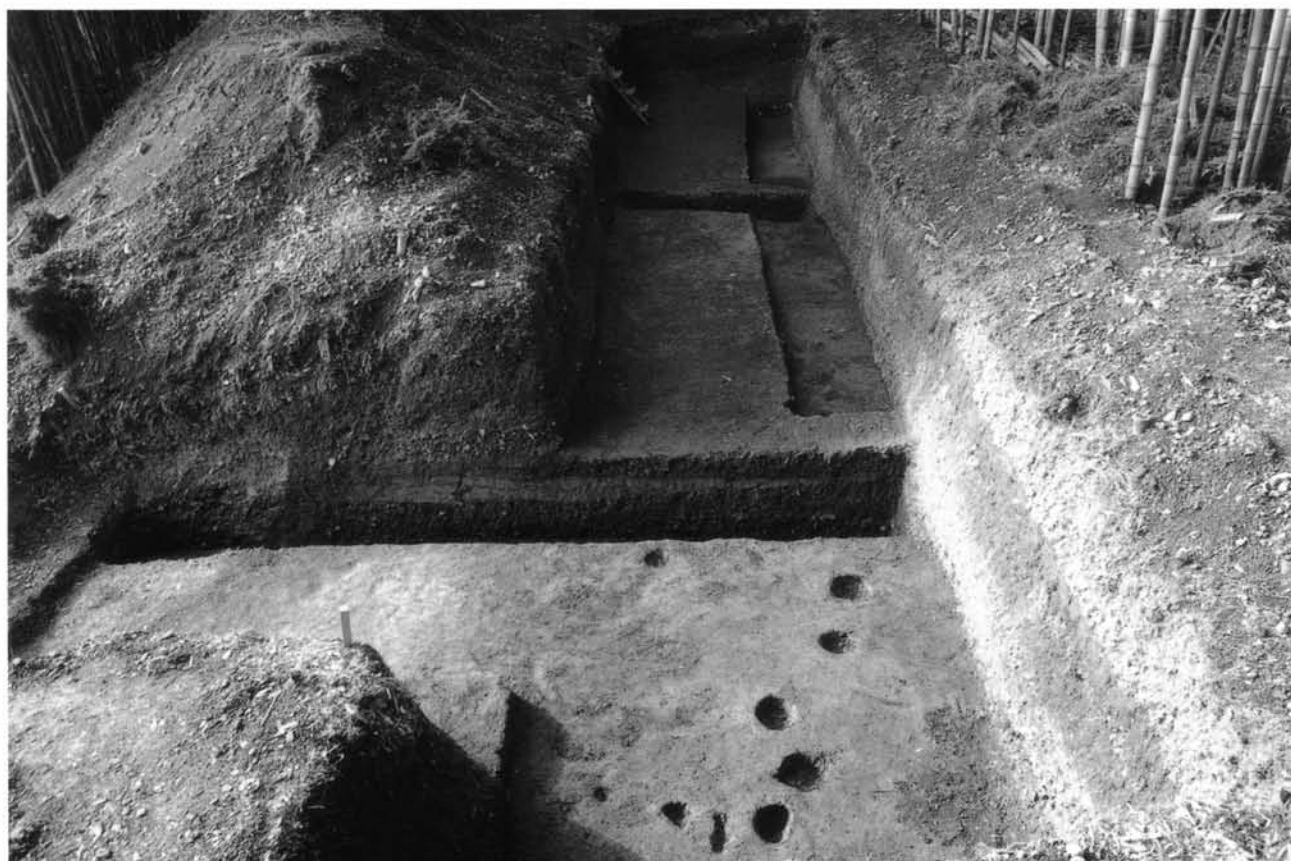
(1)溝状遺構 S X01(南東から)



(2)溝状遺構 S X01断面(南西から)



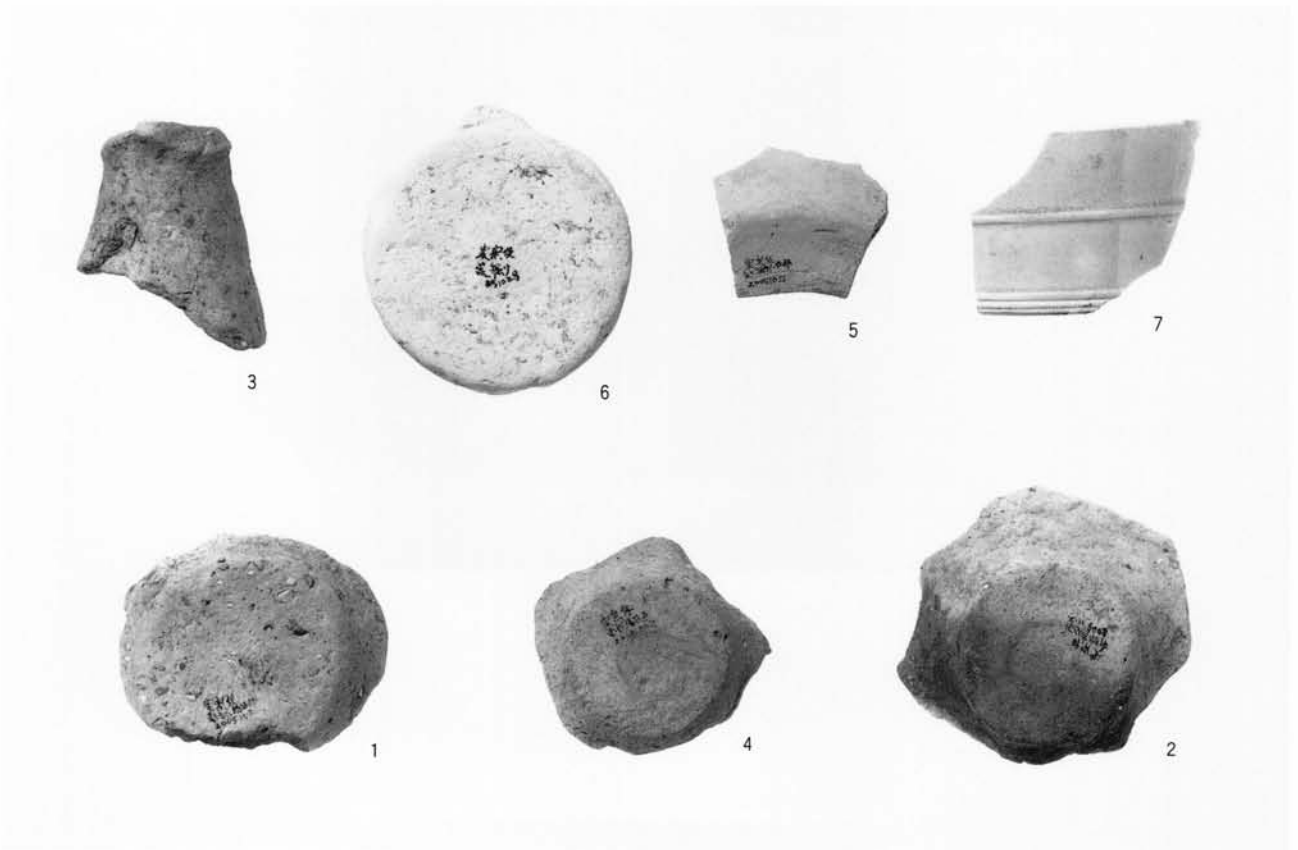
(1)試掘調査地(西から)



(2)試掘トレンチ(東から)



(1)発掘調査風景(南から)



(2)出土遺物



(1) 諸畑遺跡空中写真(北から)



(2) 諸畑遺跡空中写真(東から)



(3) A-6 トレンチ全景(東から)



(1) 竪穴式住居跡 S H01-a
炭化材出土状況(南東から)



(2) 高杯内焼土出土状況(東から)



(3) 初期須恵器出土状況(北東から)



(1) 竪穴式住居跡 S H01-a
土器8 出土状況(北から)



(2) 竪穴式住居跡 S H01-a
完掘状況(南東から)



(3) 竪穴式住居跡 S H01-a
竈の子痕跡(南東から)



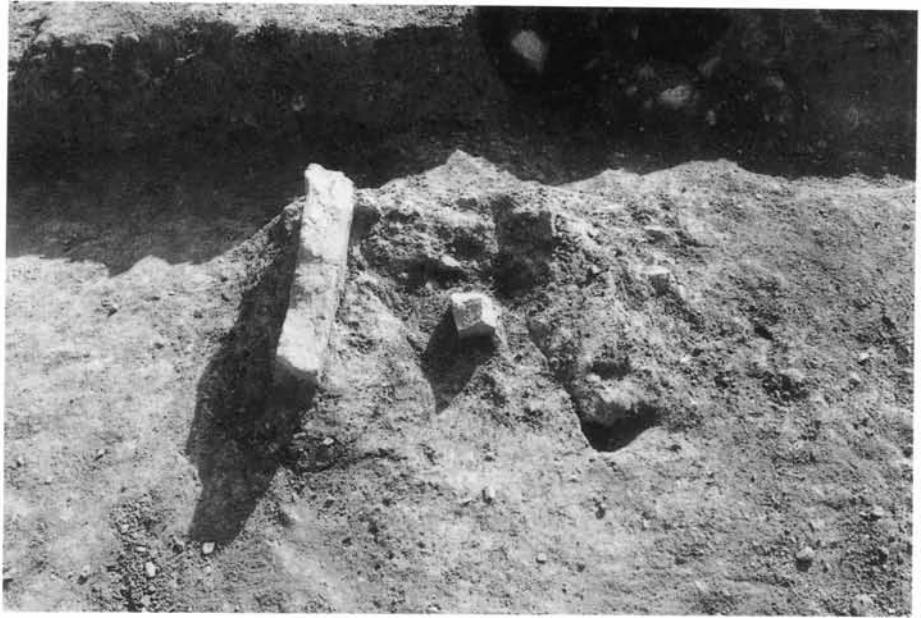
(1) 竈穴式住居跡 S H01-a
竈(南東から)



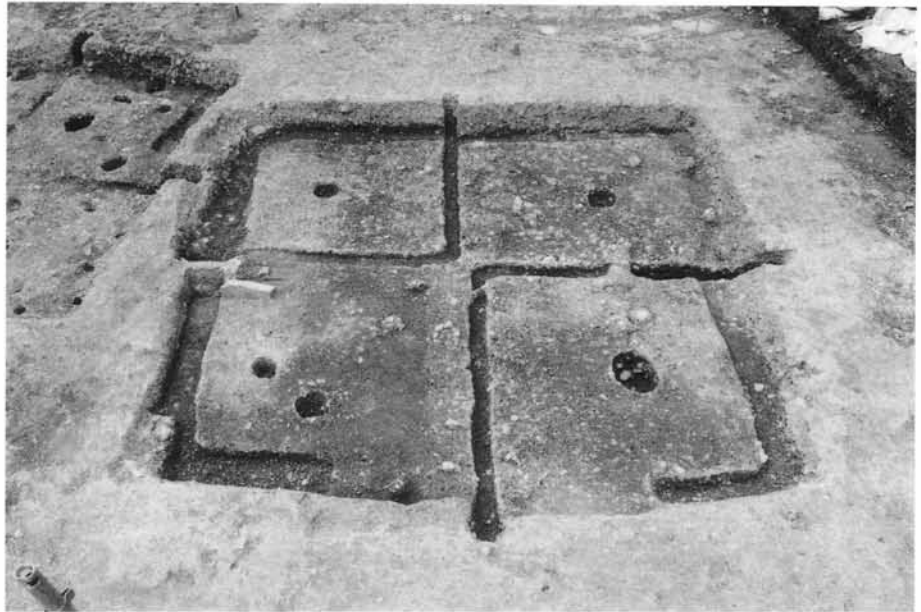
(2) 竈穴式住居跡 S H01-b
初期須恵器出土状況(東から)



(3) 竈穴式住居跡 S H02-a
完掘状況(北東から)



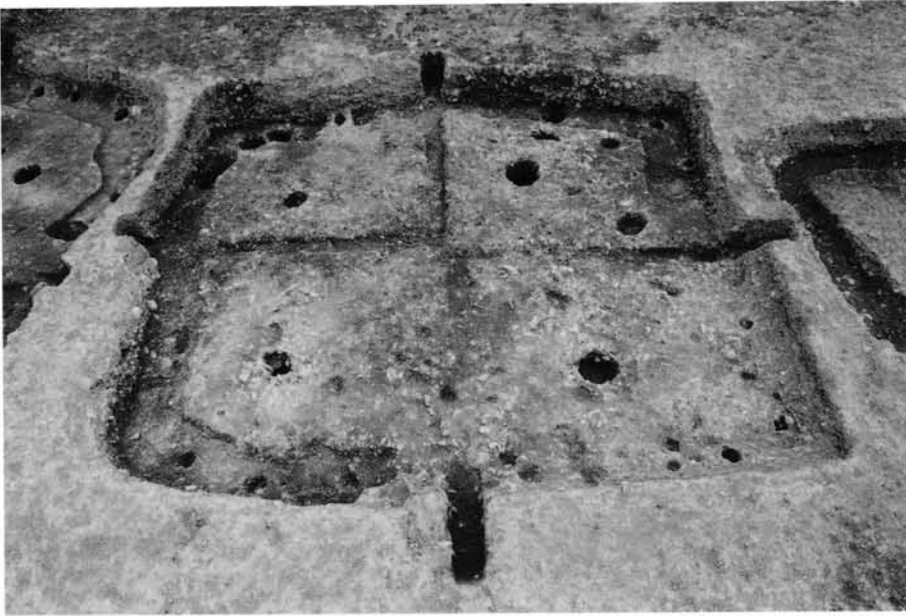
(1) 竪穴式住居跡 S H02-a
竈(東から)



(2) 竪穴式住居跡 S H02-b
完掘状況(東から)



(3) 竪穴式住居跡 S H02-b
勾玉出土状況(南から)



(1) 竪穴式住居跡 S H03 完掘状況
(南から)



(2) 竪穴式住居跡 S H04 完掘状況
(西から)



(3) A-7 トレンチ全景(東から)



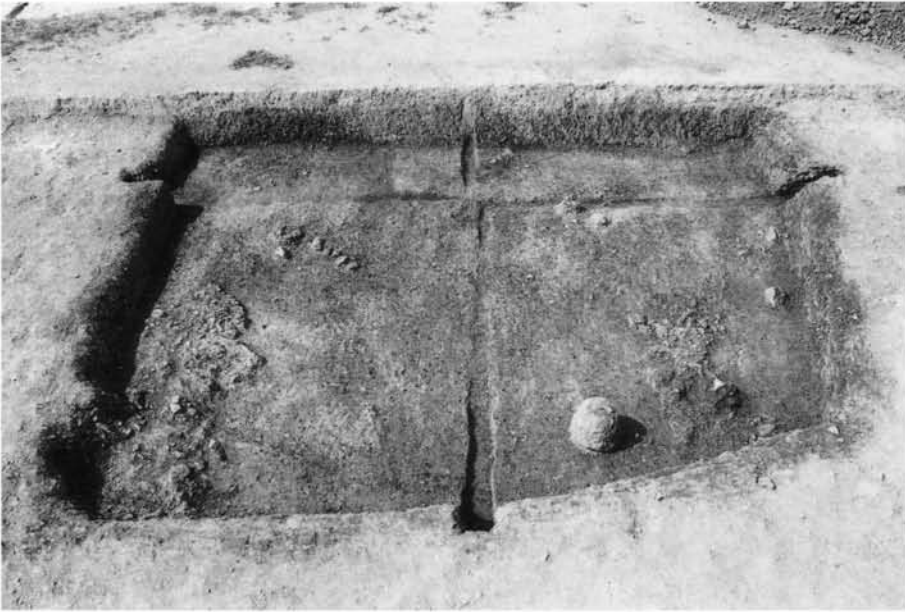
(1) 竪穴式住居跡 S H05-a・
S H06完掘状況(西から)



(2) 竪穴式住居跡 S H05-a
鈍鉋使出土状況(南から)



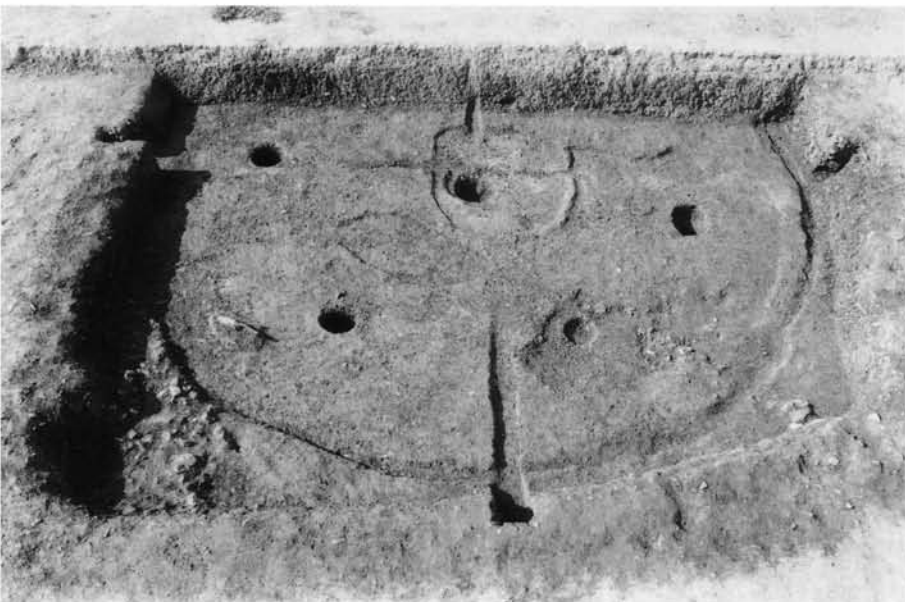
(3) 竪穴式住居跡 S H05-b
板状チャート出土状況(西から)



(1) 竪穴式住居跡 S H07- b
完掘状況(南から)



(2) 竪穴式住居跡 S H07- b
弥生土器出土状況(南から)



(3) 竪穴式住居跡 S H07- b
完掘状況(南から)



(1) 堅穴式住居跡 S H08
完掘状況(北から)



(2) 堅穴式住居跡 S H09-b
遺物出土状況(北西から)



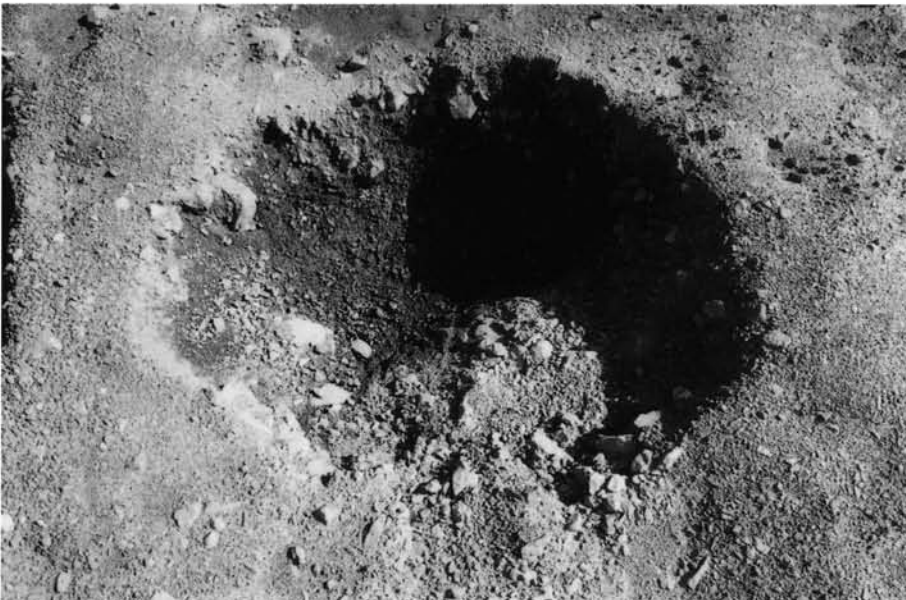
(3) 堅穴式住居跡 S H09-a・b
完掘状況(北東から)



(1) 竪穴式住居跡 S H01-b
南半遺物出土状況(南東から)



(2) 土坑 S K08完掘状況(北から)



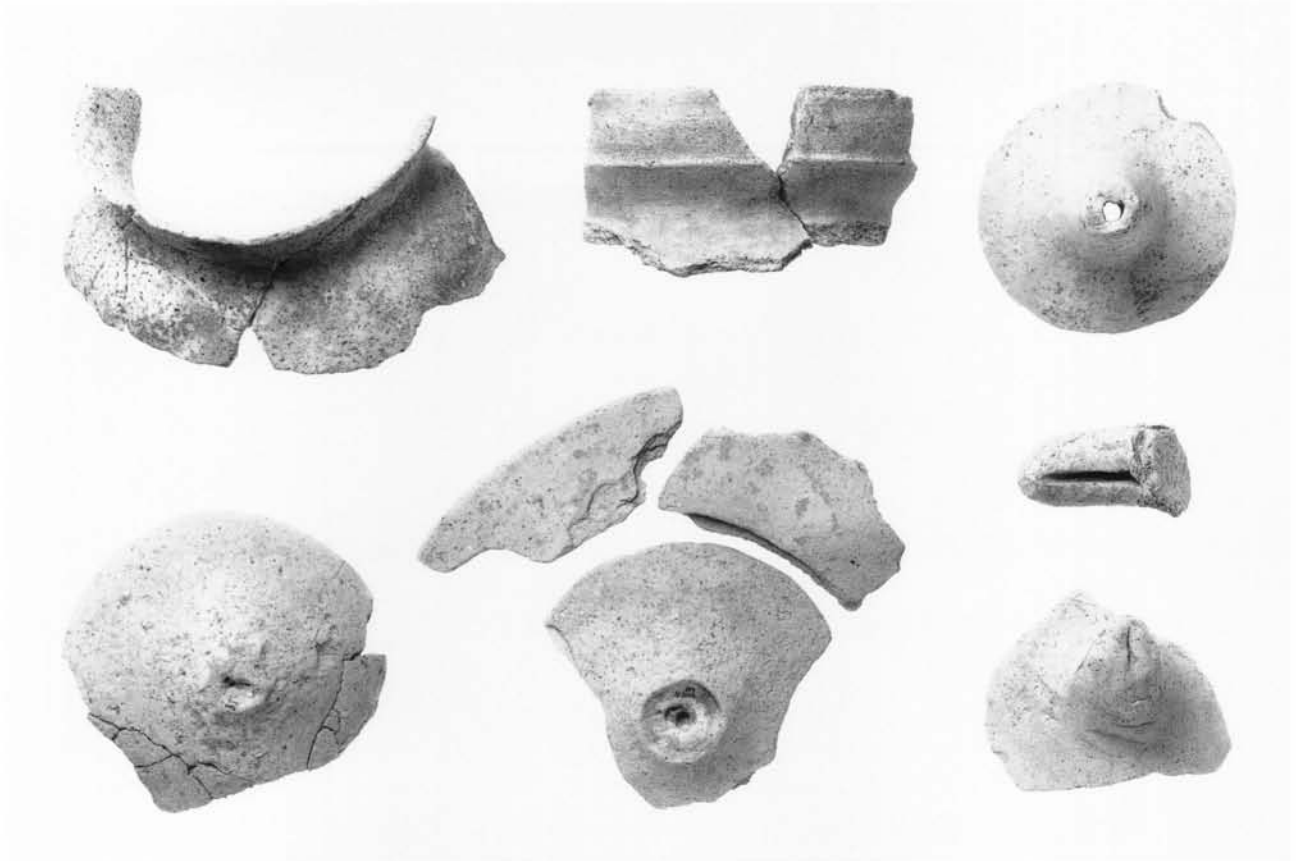
(3) 坑 S K09完掘状況(北から)



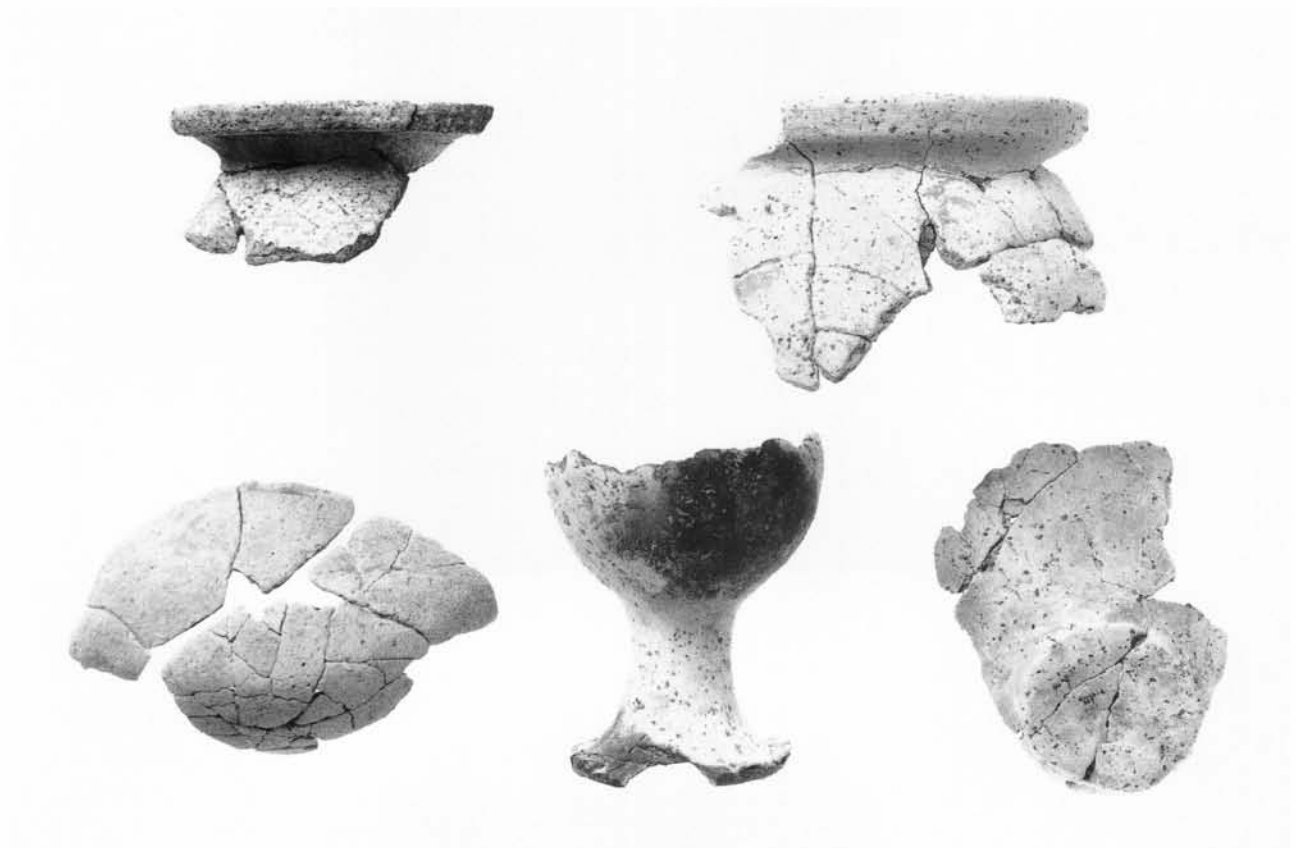
(1) 竖穴式住居跡 S H01-a 出土土器



(2) 竖穴式住居跡 S H02 出土土器



(1) 竪穴式住居跡 S H05 - a 出土土器



(2) 竪穴式住居跡 S H07 - b 出土土器



(1) 竪穴式住居跡SH09：2・3層出土土器



(2) 竪穴式住居跡SH09：1層出土土器



13



83



15



88



89



84



47



86



81



1



16



6



7



4



2



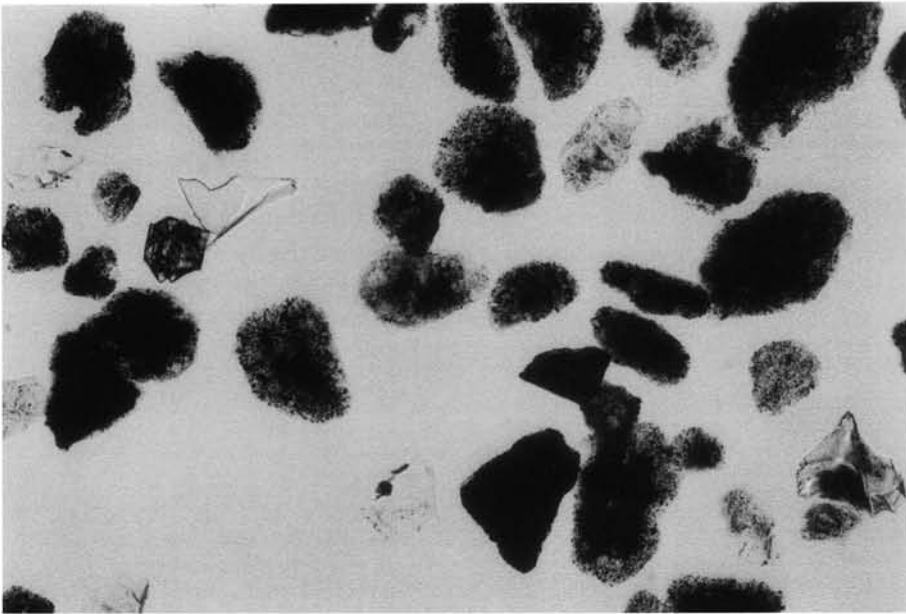
8



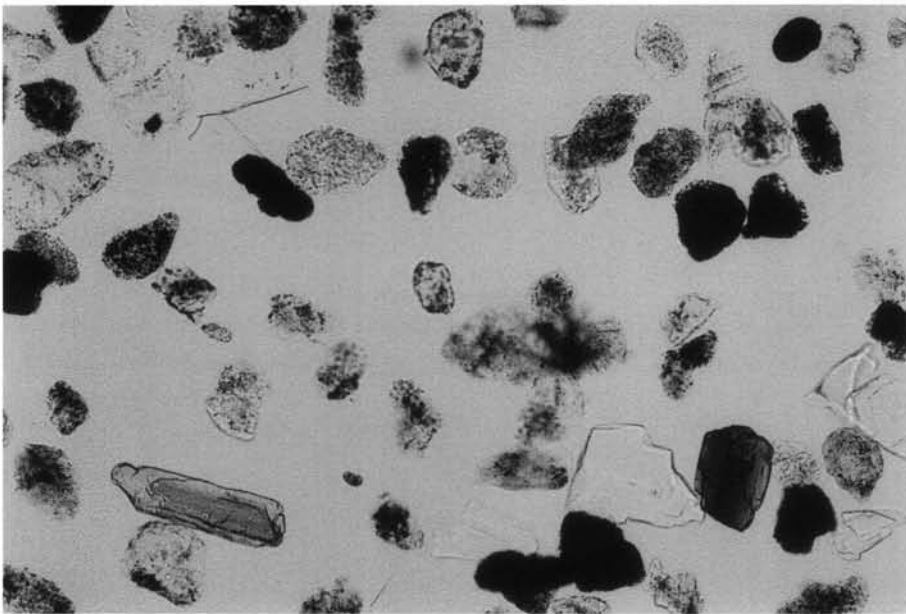
14



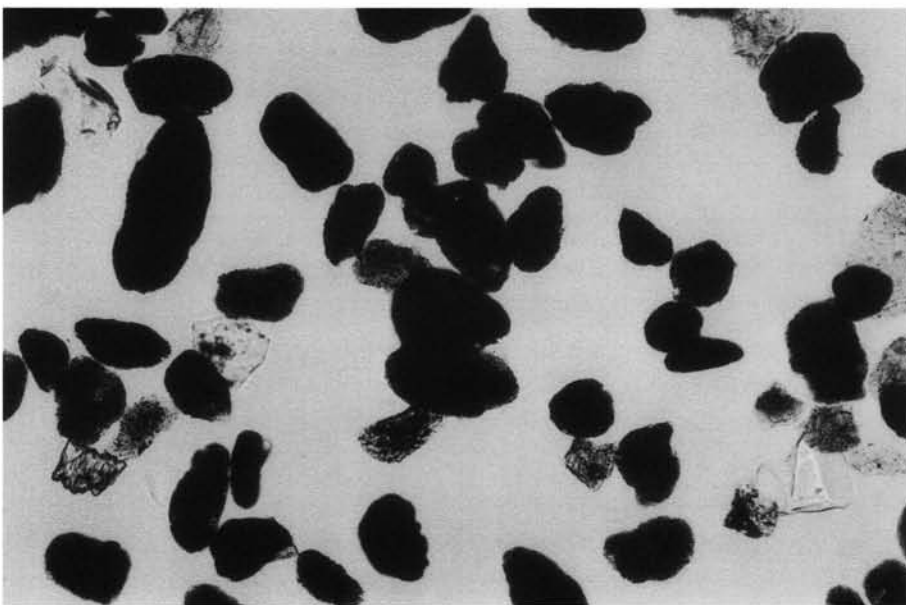
9



(1)第3次S H03 ap08、310
顕微鏡写真(open nicol)



(2)第3次S H03粘土塊、315
顕微鏡写真(open nicol)



(3)第3次S H03粘土塊、315、
650℃ 1時間焼成資料
顕微鏡写真(open nicol)



(1)フェンス工事(北から)



(2)重機掘削(南から)



(3)重機掘削(南から)



(1)調査地全景(東から)



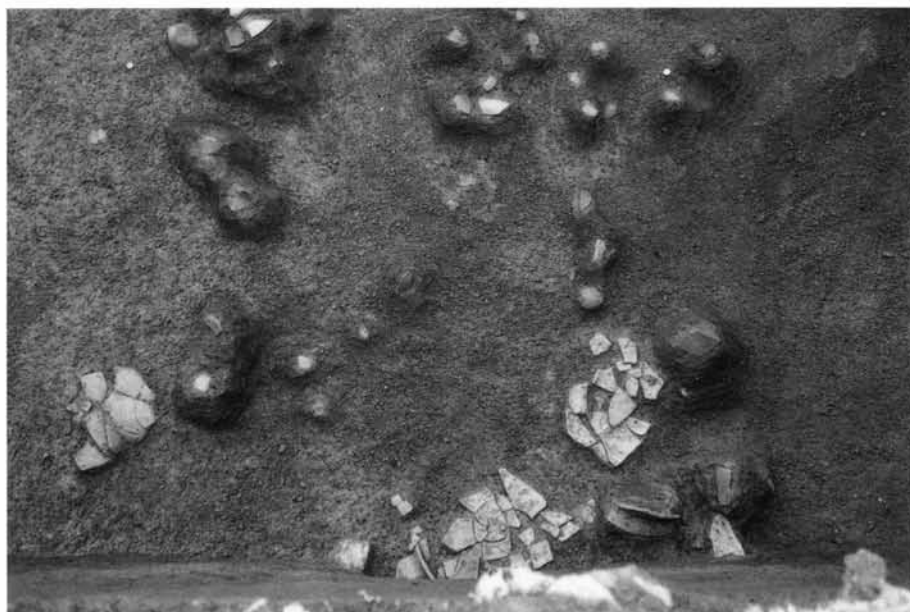
(2)調査地全景(南から)



(3)調査地全景(南から)



(1)溝 S D86303出土状況(西から)



(2)溝 S D86303出土状況(上が北)



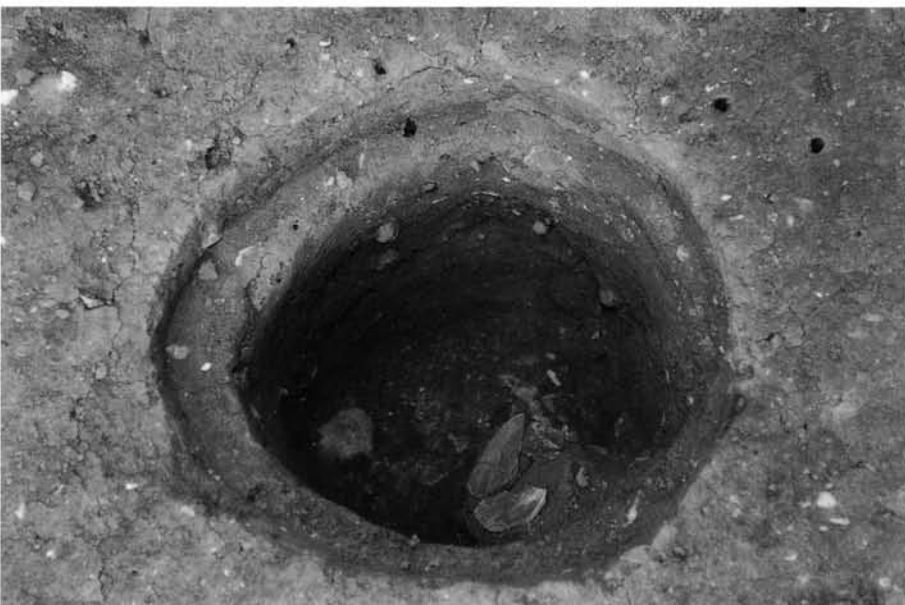
(3)溝 S D86303出土状況(上が北)



(1)調査地全景(北から)



(2)P 86325(南から)



(3)P 86335(南から)



(1)溝 S D86302東半(東から)



(2)溝 S D86302西拡張区(東から)



(3)溝 S D86302西拡張区(東から)



(1)溝 S D86301西拡張区(東から)



(2)溝 S D86301西拡張区(東から)



(3)溝 S D86302東半(西から)



(1)調査地全景(南から)



(2)溝 S D86303(西から)



(3)溝 S D86303出土状況(西から)



(1)溝 S D86303西拡張区(北から)



(2)溝 S D86303西拡張区(西から)



(3)溝 S D86303西拡張区(東から)



(1)溝 S D86303西拡張区(西から)



10



16

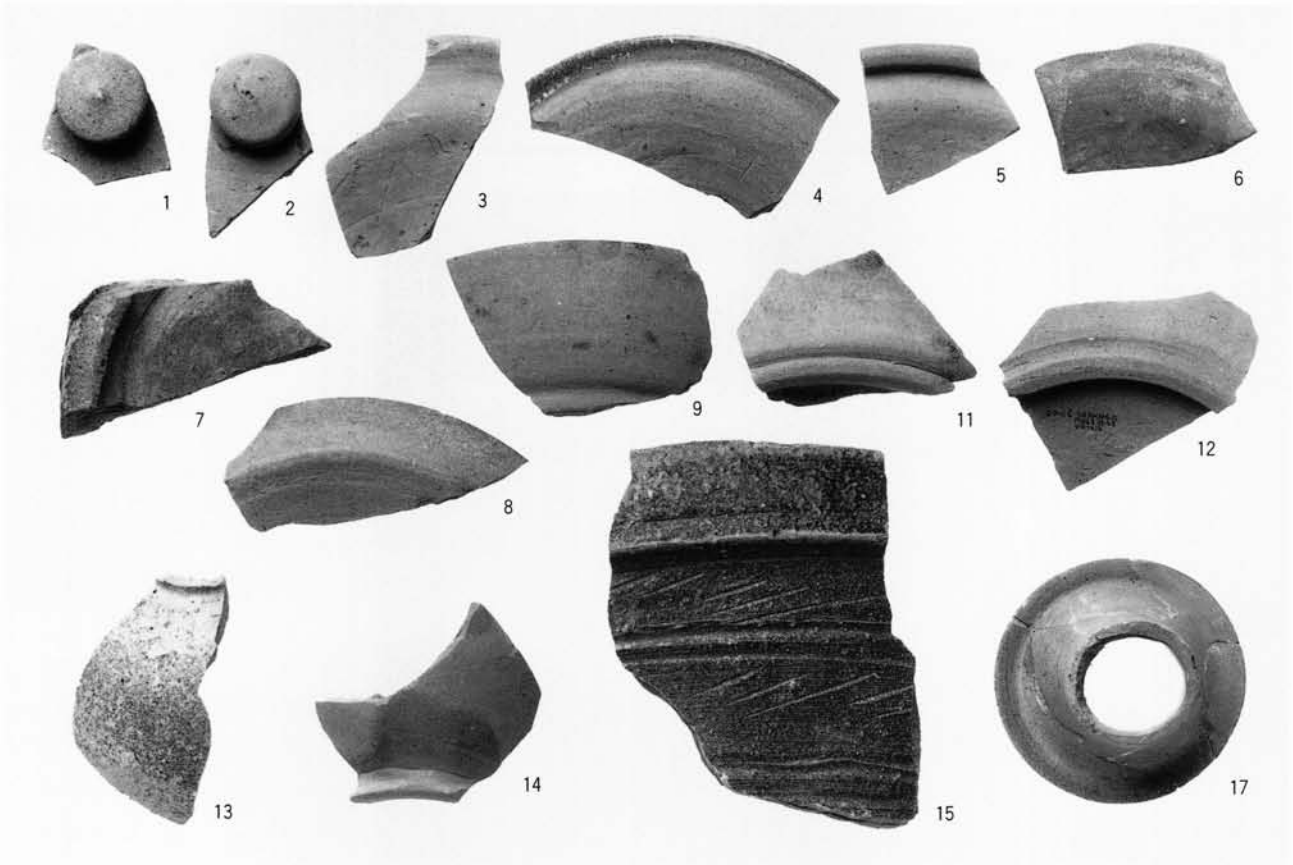


34

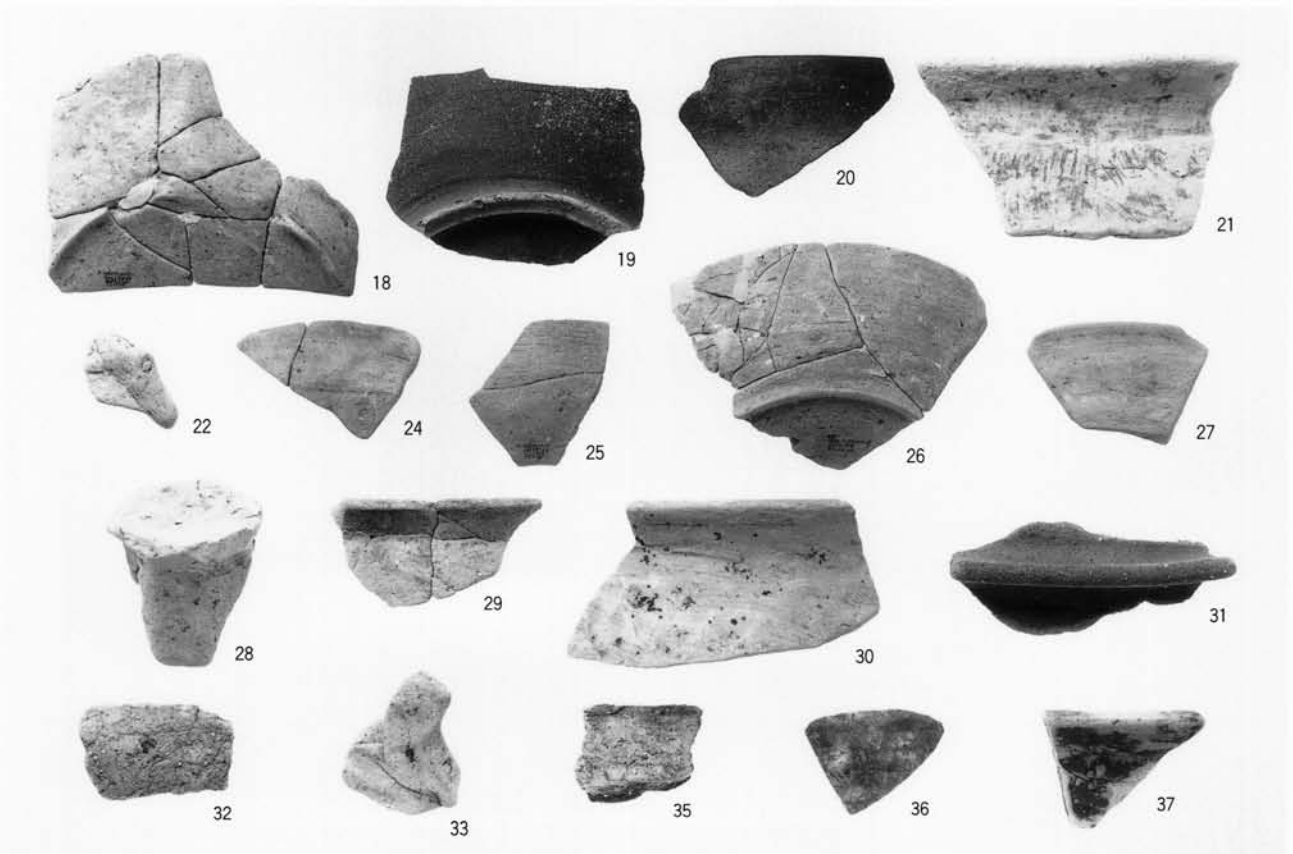


22

(2)出土遺物(1)



(1)出土遺物(2)



(2)出土遺物(3)



(1)調査地遠景(南から)



(2)第1トレンチ全景(北から)



(3)第2・3トレンチ全景(上が北)



(1)第2・3トレンチ全景(東から)



(2)第2トレンチ土塁(北から)



(3)第2トレンチ断ち割り
(南西から)



(1)第3トレンチ調査前風景
(南東から)



(2)第3トレンチ掘土層断面
(南西から)



(3)第3トレンチ掘完掘状況(南東から)



(1)第4トレンチ完掘状況(南から)



(2)第4トレンチ五輪塔(火輪)出土状況(南から)



(3)第4トレンチ東隣五輪塔(水輪)(北から)



(4)第4トレンチ土師器皿出土状況(東から)



(5)第5トレンチ完掘状況(北から)



(6)第5トレンチ集石土坑(西から)



(7)第6トレンチ焼土層(北から)



(8)第6トレンチ敷石状遺構(北東から)



(1)第6 トレンチ全景(東から)



(2)第7 トレンチ全景(南から)



(3)第7 トレンチ土層断面(東から)



(1)第8トレンチ宝篋印塔出土状況
(西から)



(2)第9トレンチ土塁検出状況
(南東から)



(3)第9トレンチ空堀検出状況
(北東から)

(1)第11トレンチ完掘状況
(北東から)

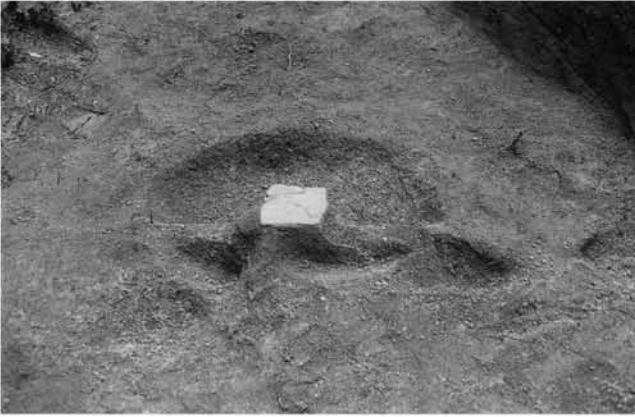


(2)第11トレンチ全景(北東から)



(3)第11トレンチ全景(西から)





(1)第11トレンチ建物柱穴検出状況(南西から)



(2)第11トレンチ溝検出状況(北東から)



(3)第10トレンチ完掘状況(西から)



(4)第12トレンチ西部完掘状況(東から)



(5)第12トレンチ東部完掘状況(北東から)



(6)第13トレンチ完掘状況(東から)



(7)第13トレンチ東部完掘状況(西から)



(8)第14トレンチ完掘状況(北から)

(1)第15トレンチ完掘状況
(東から)

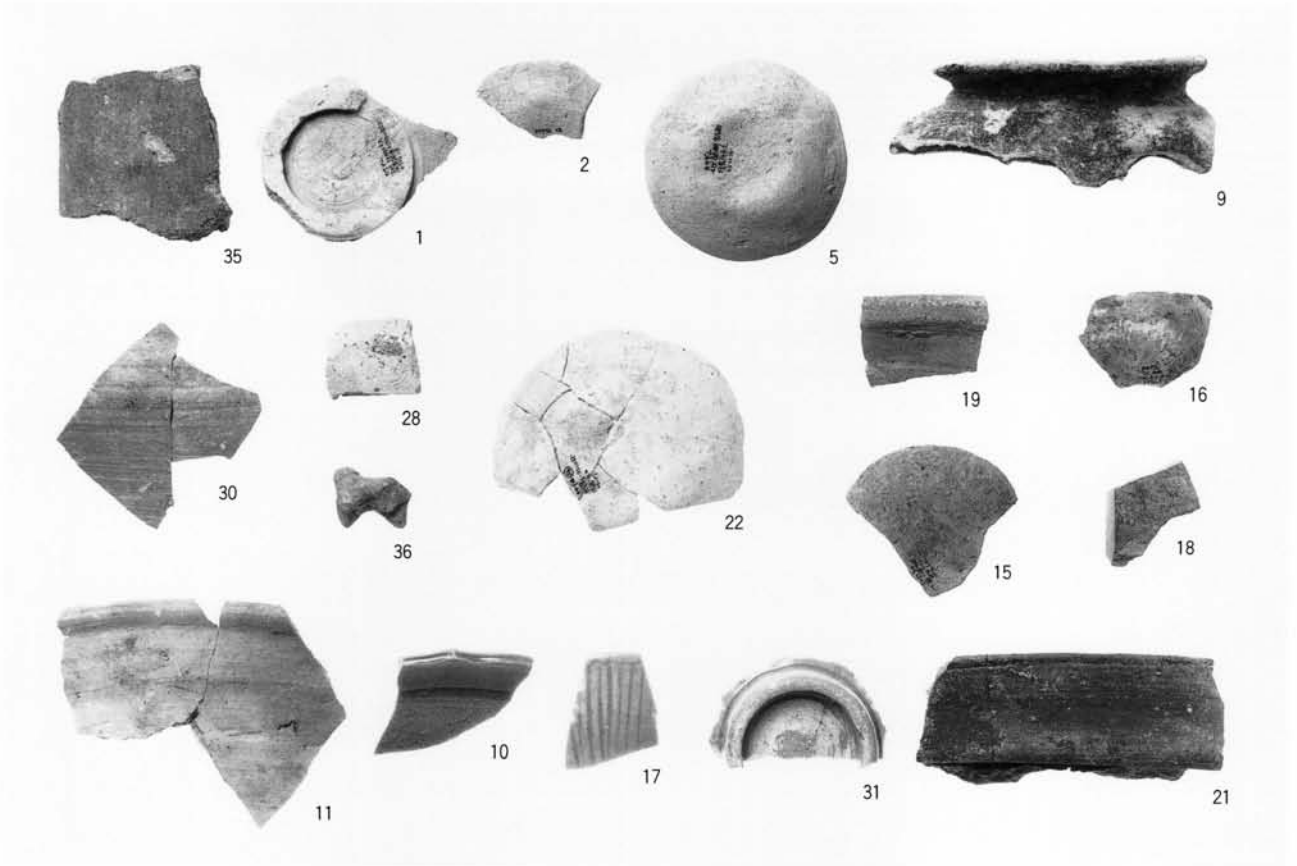


(2)第15トレンチ柱穴検出状況
(南から)

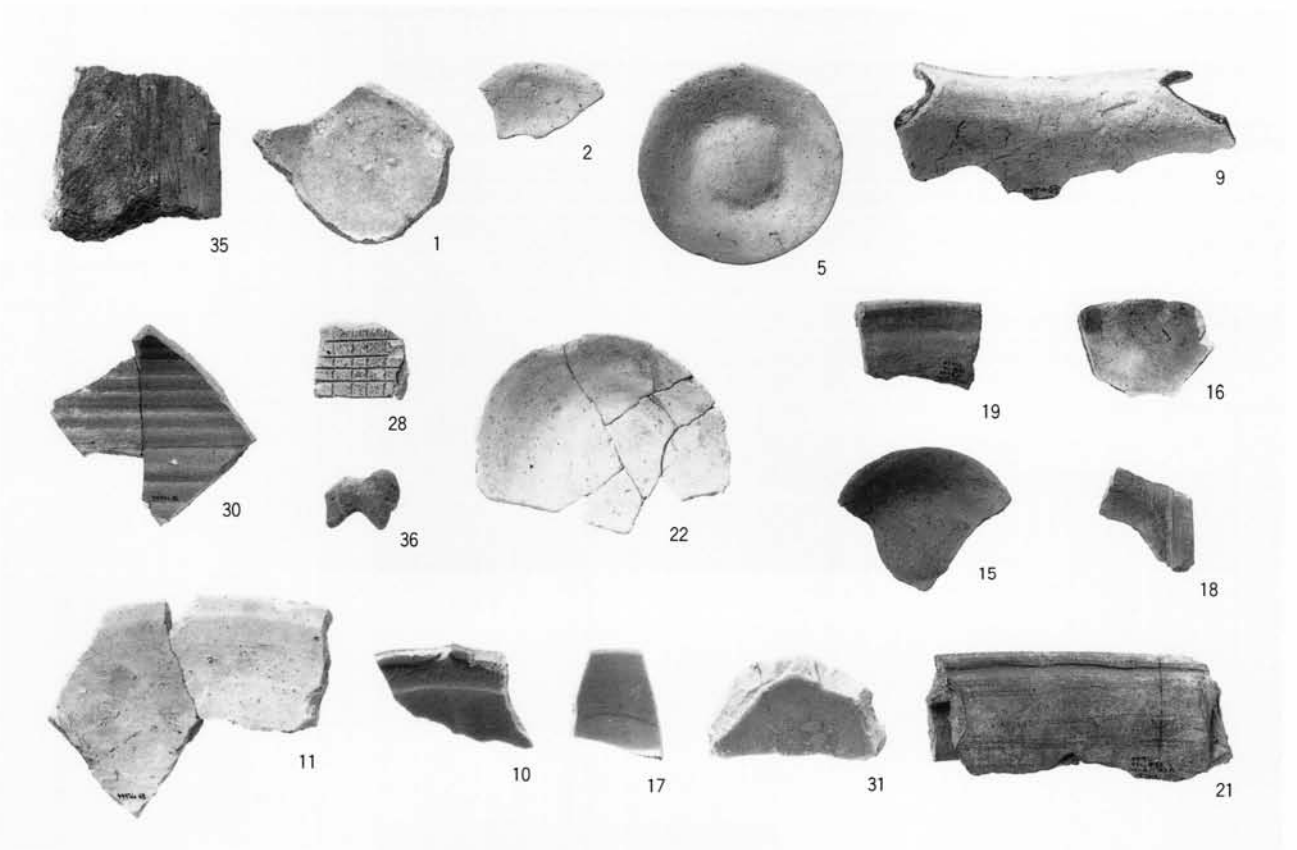


(3)第15トレンチ全景(南から)





(1)出土遺物(外面)



(2)出土遺物(内面)

報告書抄録

ふりがな								
書名								
副書名								
巻次								
シリーズ名	京都府遺跡調査概報							
シリーズ番号	第119冊							
編著者名								
編集機関	(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター							
所在地	〒617-0002 京都府向日市寺戸町南垣内40-3			Tel		075(933)3877		
発行年月日	西暦 2006 年			3 月		30 日		
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	° ' "	° ' "		m ²	
みやづじょうあ とだいにじゅうに じ	きょうとふみ やづしあざつ るが・ばばさ き							
宮津城跡第12次	京都府宮津市 字鶴賀・馬場 先	26205	57	35° 32' 00"	135° 11' 42"	20050705 ～ 20050830	480	河川改修
たなべじょうあ とだいにじゅうろ くじ	きょうとふま いづるしみな みたなべあざ おもてまち							
田辺城跡第26次	京都府舞鶴市 南田辺字表町	26202	94	35° 26' 36"	135° 19' 56"	20050912 ～ 20051222	600	宅地開発
そのべじょうあ とだいにじゅうろ く・ななじ	きょうとふな たんしその べじょうこざ くら							
園部城跡第5・ 6・7次	京都府南丹市 園部町小桜	(26401)		35° 06' 15"	135° 28' 12"	20040121 ～ 20040225 20041013 ～ 20041129 20050627 ～ 20050827	280 320 280	運動場建設
あぜちいせきだ いななじ	きょうとふか めおかしほづ ちようでいほ か							
案察使遺跡第7 次	京都府亀岡市 保津町出井ほ か	26206	41	35° 01' 50"	135° 35' 14"	20051018 ～ 20051125 20060119 ～ 20060206	400 60	道路建設
もろはたいせき だいにじ	きょうとふな たんしやぎ ちようもろは たまつもと							
諸畑遺跡第4次	京都府南丹市 八木町諸畑松 本	(26402)		35° 06' 02"	135° 32' 11"	20050513 ～ 20050905	750	農業基盤 整備

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
なおかきょう あとうきょうだ いはっぴやくろ くじゅうさん じ・かいでんい せき・こうたり いせき 長岡京跡右京第 863次・開田遺 跡・神足遺跡	きょうとふな がおかきょう しかいでんに ちょうめ 京都府長岡京 市開田2丁目	26209	35・48・ 91	34° 55' 25"	135° 41' 53"	20051116 ～ 20051222	200	道路建設
しせきめいしよ うかさぎやま 史跡名勝笠置山	きょうとふそ うらくぐんか さぎちょうか さぎあざすい しょうだに・ じんぐうやま ほか 京都府相楽郡 笠置町笠置字 水晶谷・神宮 山ほか	26364	1・3	34° 45' 03"	135° 56' 34"	20051017 ～ 20060120	500	史跡名勝地 内確認調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
宮津城跡第12次	城跡	近世	土坑	土師器・陶磁器・ 銭貨	顕著な遺構 なし。
田辺城跡第26次	城跡	近世	礎石建物跡・道路跡・上水道 施設・石組遺構・流路・土 坑・杭列	陶磁器・鉄器・鉛 玉・基石・泥面 子・銭貨	田辺城下の 屋敷に伴う 江戸時代の 生活雑器で ある陶器類 が多数出 土。
園部城跡第5・ 6・7次	城跡	近世	土坑	土師器・陶磁器・ 青磁・瓦・石製 品・金属器・ガラ ス製品・銭貨	17～19世紀 頃の園部城 跡に伴う陶 磁器類の検 出。
案察使遺跡第7 次	集落	弥生 中世	溝 掘立柱建物跡	弥生土器	顕著な遺 構・遺物な し。
諸畑遺跡第4次	集落	弥生 古墳 奈良 鎌倉	竪穴式住居跡 竪穴式住居跡・土坑	弥生土器・石器 土師器・須恵器・ 勾玉・鉄器 須恵器 土師器・瓦器・青 磁	丹後・丹波 地域では最 古となる古 墳時代中期 の石組み竈 を検出。
長岡京跡右京第 863次・開田遺 跡・神足遺跡	都城 集落	平安 中世	条坊道路側溝 柱穴・土坑	土師器・須恵器・ 瓦・軒瓦・土馬 土師器・瓦器・瓦 質土器	長岡京跡六 条条間小路 両側溝およ び右京六条 一坊十四町 宅地内の大 溝を検出。
史跡名勝笠置山	寺院跡・城跡	中世	建物跡・溝・土塁・空堀	土師器・須恵器・ 瓦器・瓦質土器・ 青磁・銭貨・鉄 器・硯・砥石	鎌倉時代後 期～戦国時 代の笠置 寺・笠置城 に伴う遺 構・遺物の 検出。

備考：北緯・東経の値は世界測地系に基づく。

京都府遺跡調査概報 第119冊

平成18年3月30日

発行 (財)京都府埋蔵文化財調査研究
センター

〒617-0002 向日市寺戸町南垣内40番の3
Tel (075)933-3877(代) Fax (075)922-1189
<http://www.kyotofu-maibun.or.jp>

印刷 三星商事印刷株式会社

〒604-0093 京都市中京区新町通竹屋町下ル
Tel (075)256-0961(代) Fax (075)231-7141